

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第3集

九州大学筑紫キャンパス遺跡群
(御供田遺跡)

総括報告書 1

— 縄文・弥生時代編 —



2020

九州大学埋蔵文化財調査室

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第3集

九州大学筑紫キャンパス遺跡群
(御供田遺跡)

総括報告書 1

－ 縄文・弥生時代編 －



2020

九州大学埋蔵文化財調査室

表紙について

表紙は、九州大学のシンボルカラーであるワインカラーに、九州大学馬出キャンパスや箱崎キャンパスの調査で出土した食器に施されていた「九」をあしらって図案化したものである。

(デザイン担当：石井若香菜)

序 文

九州大学では春日原キャンパス（現、筑紫キャンパス）の施設整備による埋蔵文化財調査を実施するために、1978年に春日原地区埋蔵文化財調査室を設置し、1名の助手を配置して埋蔵文化財調査を実施してきた。この間、56次に渡る発掘調査を実施し、1998年までに5冊の発掘報告書を刊行してきた。2000年には春日原地区埋蔵文化財調査室は全学のキャンパスを対象とする九州大学埋蔵文化財調査室になったが、春日原地区キャンパスの施設整備が終了したところから、助手の退職を以て2007年に一時閉鎖となった。その後、1名の学術研究員を雇用し、春日原地区埋蔵文化財調査の未整理資料の整理を実施してきた。この間、2009年には九州大学総合研究博物館と共同で公開展示「奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—」を九州国立博物館で開催し、春日原キャンパスの弥生時代から古代の歴史的な意義を振り返った。春日原キャンパスは戦後間もない米軍基地建設に際し、遺跡が破壊されてきたといわれていたが、再整理の結果で様々な考古学的知見を得ることができた。そして、春日原キャンパスでは様々な遺構や遺物からなる遺跡群が存在することが分かり、これを九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）として命名することにした。

2015年には九州大学総合移転事業の一環として箱崎キャンパスの売却予定地の埋蔵文化財調査が必要となり、助手2名を配置し、九州大学埋蔵文化財調査室を再整備して、箱崎キャンパスでの埋蔵文化財調査を実施することとした。この機にあたって、春日原キャンパス遺跡群の埋蔵文化財調査事業の終了が必要となった。このため、整理調査の特別予算を2016年度から2020年度までの5年間獲得し、総括報告書を作成して、この事業を終了することとした。御供田遺跡の発掘調査では縄文時代から古代・中世に至るまで豊富な遺構・遺物が発見されており、大部の報告書となることから、2分冊として発行することとした。この度の報告書は、縄文・弥生時代の遺構・遺物に限り、『九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書1—縄文・弥生時代編—』として発刊することとした。石川健学術研究員1名では九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）全体をまとめるにはあまりに豊富な量であることから、九州大学埋蔵文化財調査室運営委員にもお手伝いいただき、その専門分野から執筆をお願いした。執筆をいただいた九州大学埋蔵文化財調査室運営委員の方々に感謝するとともに、安浦寛人理事・副学長を初めとする九州大学埋蔵文化財調査委員会の方々のご支援に感謝申し上げる。また、事務を担当していただいた九州大学統合移転推進本部にも深甚の謝意を表したい。

1978年の九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室設置以来約40年が経ち、ここに『九州大学埋蔵文化財調査室報告 第3集』として九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書の第1分冊が発行されることに感慨深いものを感じる。

令和元（2019）年12月28日

九州大学埋蔵文化財調査室長
宮本 一夫

例 言

1. 本書は1979年11月から1998年9月まで九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室が実施した九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）における埋蔵文化財発掘調査の縄文時代から弥生時代にかけての総括報告書である。
2. 発掘調査は九州大学春日原地区埋蔵文化財調査委員会のもと九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室が実施した。
3. 本総括報告書の作成にあたり、出土遺物の再整理をおこなった。参加者は以下のとおりである。青山伸枝、石木晴香、石丸千恵、犬山真弓、岩谷幸恵、瓜阪文太、遠藤望、岡本真理奈、尾座本洋子、小名真理子、坂口由美子、白川城子、菅田泰子、高崎浩子、富田文代、富田麗子、西田めぐみ、野田勝彦、濱古賀美和、前浦弘毅、前原吉信、前田典美、丸野明奈、毛利瑞穂、山口弥生、吉田雄紀、安部菜月、柿添康平、崎村怜奈、岡師沙也佳、田川聖実、林彩美、樋高実希、松倉重紀、松永祐里乃 また、雨天の際などは箱崎キャンパスの発掘調査作業員の方々にも整理業務に参加していただいた。
4. 出土遺物の実測は、石木晴香、尾座本洋子、遠藤望、濱古賀美和、石川健が行った。遺物図面の製図は菅田泰子、尾座本が担当し、一部、株式会社パスコに業務委託した。また、遺構図の製図は株式会社パスコに業務委託し、一部、石川が行った。遺物写真は「奴国の南」作成時に撮影したものに、野田、石川で一部を新たに撮影した。
5. 本書に使用した2万5千分の1地形図は、国土交通省国土地理院が発行した『福岡南部』、『太宰府』、『不入道』である。
6. 巻末に掲載した出土遺物観察表における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修（1967）『新版標準土色帖』を使用した。
7. 本書で使用する遺構記号は、以下の通りである。
SD：溝、SK：土坑、SB：住居跡、SX：その他
なお、遺構番号については、西健一郎によって刊行された報告書（『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』第1冊～第3冊）との対応関係を把握できるよう、一部の例外をのぞき調査時の番号をそのまま踏襲した。
8. 本書Ⅰ～Ⅲは石川が執筆した。Ⅳ、Ⅴは著名論文とし、Ⅳ-1を足立達朗・田尻義之・中野伸彦・小山内康人（九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・九州大学比較社会文化研究院）、Ⅳ章-2を岩永省三（九州大学総合研究博物館）、Ⅴ章-2-(1)～(4)をそれぞれ、石川、田尻義之、森貴教（新潟大学）、宮本一夫（九州大学埋蔵文化財調査室長）が執筆した。Ⅵは石川が執筆した。
9. 本書に掲載した調査記録および出土遺物はすべて、九州大学埋蔵文化財調査室が収蔵保管する。今後、教育研究の場で積極的に活用されることが期待される。
10. 本書の編集は石川が行い、宮本が監修した。

目次

序文

例言

I はじめに

1. 発掘調査および報告以降の経緯 1
2. 整理と報告の方針 1

II 九州大学筑紫キャンパス遺跡群と周辺の遺跡

1. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群と御供田遺跡 5
2. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群周辺の地形 6
3. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群周辺の遺跡 6

III 調査の結果

1. 縄文時代の遺構と遺物 11
 - (1) 縄文時代の遺構と出土遺物の概要 11
 - (2) 8B区の縄文時代の遺構と遺物 11
 - (3) 10B区の縄文時代の遺構と遺物 23
 - (4) 8C・9D区出土の縄文時代の遺物 26
 - (5) 12N区およびSX303出土の縄文時代の遺物 27
2. 弥生時代の遺構と遺物 29
 - (1) 調査の概要 29
 - (2) エリアI 29
 竪穴住居跡、土坑、甕棺墓
 - (3) エリアII 105
 竪穴住居跡、土坑
 - (4) エリアIV 122
 竪穴住居跡、土坑
 - (5) エリアI-IV その他の遺構出土遺物 129

IV 理化学的分析の結果

1. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群から出土した弥生時代石斧資料の地球科学的分析
 足立達朗・田尻義了・中野伸彦・小山内康人 141
2. 青銅製鋤先の分析結果
 岩永省三 148

V 考 察	
1. 筑紫キャンパス遺跡群より出土した縄文土器の位置づけ	153
2. 弥生時代の北部九州と筑紫キャンパス遺跡群	157
(1) 弥生時代の遺構の時期と集落の構造	石川 健 157
(2) 青銅器生産と筑紫キャンパス遺跡群	田尻義了 165
(3) 磨製石器からみた弥生時代の筑紫キャンパス遺跡群—石庖丁・石戈を中心に—	森 貴教 170
(4) 弥生時代の鉄器と筑紫キャンパス遺跡群	宮本一夫 180
VI 調査の成果と課題	183
遺物観察表	185

図 版

報告書抄録

I はじめに

1. 発掘調査および報告以降の経緯

現九州大学筑紫キャンパスは、1972（昭和47）年6月に米軍春日原基地跡地が米軍によって返還された土地の一部である。その後1977（昭和52）年に筑紫地区用地を取得したが、この筑紫地区は弥生時代の「奴国」の中心地と考えられる須玖岡本遺跡に極めて近く、また米軍基地当時から当地区および周辺で多くの遺物が表採されていたことなどから、埋蔵文化財への対応が必要と判断された。そのため、九州大学では、1978（昭和53）年に学内に九州大学春日原地区¹¹埋蔵文化財調査委員会を設置し、その下に九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室を組織し、用地内の埋蔵文化財の対応にあたることになった。

このような経緯のもと1978年11月に第1次発掘調査が開始され、本格的活動が始まる。その後、1998（平成10）年度まで調査が継続され、計56次にわたる試掘および発掘調査がおこなわれた（表1）。これらの調査により、数多くの貴重な遺構・遺物が出土した。なかでも特筆すべきものとしては、古代官道跡と推定される版築状盛土遺構の検出や、木製の須恵器製作道具の出土などがあげられる。また、墨書土器、硯や木簡なども出土し、加えて個体数こそ限られるもののへら書き須恵器や「白玉帯」丸軋なども出土している。さらに、1998年度調査では巴形銅器鋳型が出土していたが、その後の調査により製品との対応が明らかにされた点なども重要な成果としてあげられよう（田尻、2009）。

1978年以降の発掘調査成果は1992年から1998年にかけて報告された（西編、1992-1998、以下旧報告とする）。しかしながら、1995（平成7）年度および1998年度調査については未報告であった。また、既報告の調査で出土した資料についても整理が未だ十分ではない部分があった。

一方、九州大学の移転の過程で調査室の収蔵施設も箱崎キャンパス内で移転する必要が生じた。そのため、2007（平成19）年度より学術研究員を1名配置し、このような移転業務に加え、出土資料の再整理作業にあたることになった。その成果の一部は2008（平成20）年度に九州国立博物館で開催された九州大学総合研究博物館公開展示・九州国立博物館トピック展において広く周知された（岩永・田尻編、2009）。その後も、資料の再洗浄等の作業が継続されたが、学内の諸事情により2016（平成28）年度から5年間で筑紫キャンパス出土遺物の再整理および報告書作成業務をすべて完了することが必要となった。そのため、学術研究員および学生アルバイトに加えパート職員を大幅に増員し、2020年度までに再整理作業の成果を盛り込んだ報告書を刊行する運びとなった。まず、2019年度に縄文時代と弥生時代に関する総括報告書を刊行し、事業最終年度の2020年度には古墳時代以降の整理作業に基づく報告書を刊行する予定となった。

2. 整理と報告の方針

上記のような経緯により2016年度以降は特別な予算措置を受けることができたため、5年間で報告書を刊行すべく、年次計画を立てそれに従い作業を進めた。最初の2年間で洗浄・接合作業を行い、

表1 これまでの調査歴

調査年度	調査回数	調査種別	調査名称	調査対象地区	調査期間
昭和53年度	第1次調査	試掘調査	生産科学研究所・多目的運動場	6-8/L-N	781127-790223
	第2次調査	発掘調査	生産科学研究所	6・7/L-N	790129-790406
昭和54年度	第3次調査	試掘調査	上水・廃水処理施設	6・7/G・H・9・10/B	790427-790727
	第4次調査	試掘調査	総合理工学研究所棟	8・9/K-N	790809-790905
	第5次調査	発掘調査	共同溝・上水・廃水施設	8・9/B-E	790912-800223
	第6次調査	発掘調査	配電室	7・8/B	800209
	第7次調査	発掘調査	共同溝	8/E・F	800416-800805
昭和55年度	第8次調査	試掘調査	健康科学センター	8・9/P・Q	800421-800607
	第9次調査	発掘調査	共同溝・上水施設	6-8/G・H	800524-810131
	第10次調査	試掘調査	8B区包舎層	8B	800620-800718
	第11次調査	発掘調査	廃水処理施設排水管理施設	9/C	810128-810203
	第12次調査	試掘調査	応用力学研究所	9・10/B・C	810130-810203
	昭和56年度	第13次調査	試掘調査	東幹線排水路・道路	2-10/J-P
第14次調査		発掘調査	流量計ボックス	8B	810408-810411
第15次調査		発掘調査	東幹線排水路・受電施設	4-7/M-O	810413-810731
第16次調査		発掘調査	東幹線排水路・受電施設	1-3/I-K	810819-810930
第17次調査		発掘調査	廃水処理施設排水管理施設	8・9/B	810829-810905
第18次調査		立会調査	応用力学研究所給水管・井戸工事	9・10/E-G	810909-811028
第19次調査		試掘調査	多目的運動場南東丘陵	6・7/S	810914
第20次調査		試掘調査	応用力学研究所研究棟・共通棟	9・10/C-G	810914-810921
第21次調査		試掘調査	8B区包舎層	8B	811015-811020
第22次調査		発掘調査	応用力学研究所研究棟	8-10/D-F	811019-820320
第23次調査		発掘調査	東幹線排水路排水管理施設	5・6/N	811020-811114
第24次調査		試掘調査	健康科学センター東側テニスコート	6・7/P・Q	811214-811215
第25次調査	発掘調査	東幹線排水路補正調査	2/I-J	811215-811223	
昭和57年度	第26次調査	発掘調査	応用力学研究所実験棟	8-10/C-H	820412-821006
	第27次調査	試掘調査	トライラム実験棟	12-14/G-J	820628-820704
	第28次調査	試掘調査	多目的運動場南側	5-10/Q-R	820705-820709
	第29次調査	発掘調査	トライラム実験棟	12-14/G-J	821005-830205
	第30次調査	試掘調査	多目的運動場南側	8-10/U-V	830122-830205
	昭和58年度	第31次調査	発掘調査	中央分析センター	11/0-Q
第32次調査		発掘調査	トライラム実験棟道路・駐車場	11/I・J	830404-830425
第33次調査		発掘調査	応用力学研究所実験棟・道路	11/B-H	830404-830831
第34次調査		発掘調査	管理棟北側道路	8-10/G・H	830610-830625
第35次調査		発掘調査	応用力学研究所春日高校隣接道路	7・8/B-G	830824-840126
第36次調査		発掘調査	中央分析センター南排水管理施設	11/0-Q	831012-831015
第37次調査		発掘調査	8B区包舎層	8B	831024-840305
第38次調査		試掘調査	上水処理施設機テニスコート	3-5/G・H	831101-840321
第39次調査		試掘調査	トライラム棟南側	12・13/J-Q	831109-831206
第40次調査		発掘調査	トライラム棟南側共同溝	11・12/K-N	831219-840529
第41次調査		発掘調査	九州電力ケーブル埋設	2/I-K	840225-840727
第42次調査		発掘調査	多目的運動場南側丘陵	7S	840323-840518
昭和59年度	第43次調査	発掘調査	トライラム棟南側共同溝	11・12/K-N	840509-840523
	第44次調査	発掘調査	厚生施設北側ケーブル埋設	6・7/H-I	840706-840727
	第45次調査	発掘調査	高エネルギー物質科学棟	12-14/J-L	840725-850212
昭和60年度	第46次調査	発掘調査	新エネルギーシステム工学棟	12-14/L-N	850415-851019
	第47次調査	発掘調査	応用力学研究所校門・扉	8-10/B	851021-860128
昭和62年度	第48次調査	試掘調査	トライラム電源棟	14・15/H-J	870323-870324
昭和63年度	第49次調査	立会調査	留学生会館	福岡地区	880413-880415
	第50次調査	発掘調査	トライラム電源棟	14・15/H-J	880620-890213
	第51次調査	発掘調査	トライラム電源棟補正調査	15I	880821-880904
平成元年度	第52次調査	試掘調査	トライラム電源棟隣壁	14-16/G	890918-890927
	第53次調査	発掘調査	トライラム電源棟隣壁	14-16/G	891030-891226
平成5年度	第54次調査	発掘調査	深海機器運動実験水櫃稼取り付け道路 並びに排水管理施設	5・6/G-I	930406-930630
	第55次調査	試掘調査	旧米庫道路改良工事	2-7/I-K	940106
平成7年度	調査回数不詳	発掘調査	不詳	1・2/H-J	
平成10年度	第56次調査	発掘調査	地球大気動機燃焼レーシジョン装置設置	3・4/I	9809

3年目以降は年度前半まで接合作業を継続し、並行して資料の図化・トレースを進め、順次報告書の作成を行った。

また、2016年度以降は短期間で総括報告書刊行を行うため整理方針をより絞り込んで作業を行う必要があった。まず、本遺跡群から出土した住居跡や土坑などの主要遺構をピックアップし、そこから出土した資料を集中的に再整理した。結果的に、出土遺物量が膨大な溝や旧河川などは整理作業から除外せざるをえなかった。ただし、本報告考察部分で取り扱う資料には、このような溝や旧河川から出土したものが少なくない。そのため、考察に関連する石器や青銅器などはこれらの遺構からの出土資料であっても報告対象とした。

一方で、整理作業を進める中でキャンパス内調査地を旧地形との関係から4エリアに区分して整理報告することにした(図1)。これは、調査対象地が非常に広範に及ぶ点に加え、縄文時代や弥生時代の遺構・遺物の出土した範囲がキャンパス内全域に漫然と広がるわけではなく、旧地形にある程度制約された形で分布している可能性を考慮したためである。また、古墳時代以降においても旧来の微地形が少なからず遺跡形成に影響を及ぼしていることが想定された。このような理由から、キャンパス内の調査範囲をエリアIからエリアIVまで区分した(図1)。九州大学筑紫キャンパスは後述のように牛頭山から北へ向かって派生する丘陵の最北端部に位置し、西側から北西側にかけて牛頭川が流れる。このような立地において、キャンパス用地の北西部分は微高地があったものの全体的に丘陵から一段標高が低くなっており、丘陵裾部との境界には旧河川が流れていた。このような丘陵先端部の標高の低い部分をエリアIとした。一方、このエリアIの東南側は丘陵が東側、現JR大野城駅の方へ延びており、丘陵の間に細い谷が入る。この丘陵の北東部に相当すると考えられる部分をエリアIIとした。エリアIIの南側も谷によって隔てられた丘陵が東および南東に延び、その南側であるキャンパス南部分の範囲には大きな谷が形成されていたものと考えられる。このような敷地内の南東部分をエリアIIIとし、キャンパス南西部、丘陵の標高がより高くなる部分をエリアIVとした。以下ではこの4エリアごとに報告を進める。

以上のような方針で再整理を行ったが、紙幅の都合で整理時の体制等詳細については割愛せざるをえない。しかし、担当事務局の統合移転推進課の皆様には常に作業を効率的に進めることができるように各方面でご尽力いただきました。また、埋蔵文化財調査委員会および埋蔵文化財運営委員会双方の委員の先生方からは作業を進めるうえで多大のご助力を頂戴しました。記して深謝申し上げます。

注

1. 春日原地区は当時のキャンパス名の仮称で、その後この地区の正式名称は筑紫地区と変更することになる。ただし、現在でも従前の春日原地区あるいは春日キャンパスなどの名称で呼ぶ場合もあるが、同じ地区を示している(岩永・田尻編2009)。

文献

- 岩永省三・田尻義了編2009「九州大学総合研究博物館 平成20年度公開展示・九州国立博物館 トピック展示 奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—」九州大学総合研究博物館 福岡
- 田尻義了2009「【特論】九州大学筑紫地区出土土形銅器鋳型と香川県森広天神遺跡出土土形銅器」(岩永省三・田尻義了編)「九州大学総合研究博物館 平成20年度公開展示・九州国立博物館 トピック展示 奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—」九州大学総合研究博物館 福岡、56-63頁
- 西條一郎編1992「九州大学埋蔵文化財調査報告(第1冊)」九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡
- 西條一郎編1993「九州大学埋蔵文化財調査報告(第2冊)」九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡
- 西條一郎編1994「九州大学埋蔵文化財調査報告(第3冊)」九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡
- 西條一郎編1995「九州大学埋蔵文化財調査報告(第4冊 図版編)」九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡
- 西條一郎編1998「九州大学埋蔵文化財調査報告(第5冊 図版編)」九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡

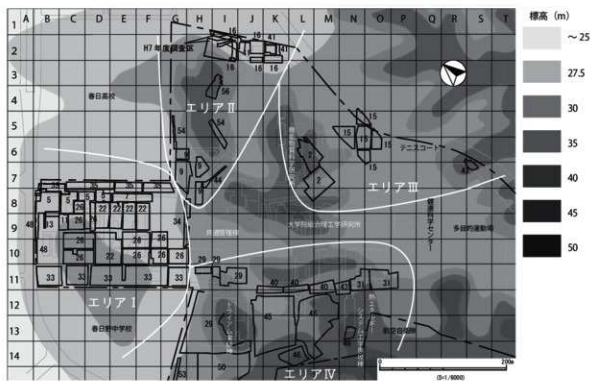
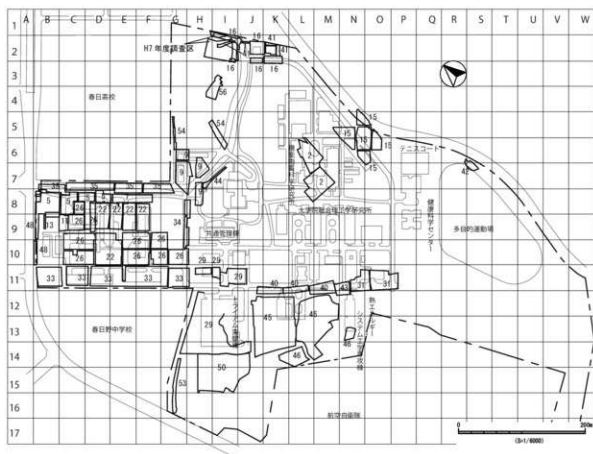


図1 九州大学筑紫キャンパス遺跡群内の調査区および旧地形
(調査区内の数字は調査次数を示す)

II 九州大学筑紫キャンパス遺跡群と周辺の遺跡

1.九州大学筑紫キャンパス遺跡群と御供田遺跡

九州大学筑紫キャンパス遺跡群は、福岡平野の東南部に位置している。現在の行政区分では、大野城市および春日市にまたがって位置する。両市ともにキャンパス隣接地の調査を行っているが、いずれも春日市の小字名による御供田遺跡という遺跡名称を用いている。この御供田遺跡は、春日市内の春日御供田区画整理事業に伴い、1978、1979年に福岡県教育委員会によって発掘調査（井上編、1980）されたことによって知られるようになった遺跡である（舟山編、2017）。遺跡の範囲は大野城市と春日市にまたがりかなり広く、大野城市側、春日市側でそれぞれ調査が積み重ねられている（図2）。その結果、現在では縄文時代以降、平安時代から鎌倉時代までの複合遺跡であることが分かっている（舟山編、2017）。

九州大学筑紫キャンパスはこの御供田遺跡の範囲のかなりの部分を占めていることがわかる（図

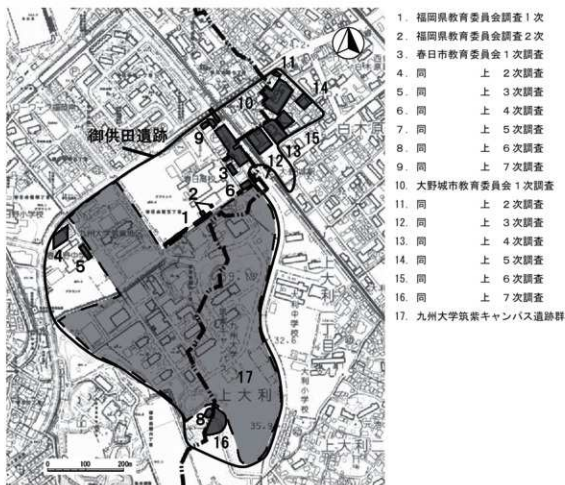


図2 九州大学筑紫キャンパス遺跡群と御供田遺跡 (S=1/10000、舟山編2017より一部改変)

2)。上記の福岡県教育委員会による調査と前後して大学敷地内の発掘調査も行われたが、そこでは九州大学筑紫地区遺跡群という遺跡名称が用いられ、その後長らく使用されてきた。一方、春日市による標記では九州大学・御供田遺跡という名称も使用されている。このように遺跡名称は統一されていないが、九大筑紫キャンパスに所在する遺跡については、隣接地の御供田遺跡と一体のものとしてとらえる必要がある¹⁾。

このような視点から改めて筑紫キャンパス遺跡群の位置をみると、御供田遺跡は春日市側の牛頭山から連なる丘陵先端部および段丘部と大野城市側の平野部とによって構成されているものといえる(徳本他編, 2015)。筑紫キャンパス遺跡群はその内おもに丘陵部と段丘上に位置していることになろう(図1・2)。

2. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群周辺の地形

遺跡北側に位置する福岡平野は、南西に背振山塊、東に三郡山塊によって限られており、北は博多湾に面する。平野中央部には東に御笠川、西に那珂川がほぼ南北に流れ、沖積地を形成している。背振山塊は、背振山(1,055m)を主峰とし、その北に油山(569m)と片繩山(293m)、北東側は牛頭山と天拝山、東に基山が派生している。このうち牛頭山山麓を源流とする牛頭川が遺跡の西側を南から北へ流れており、遺跡周辺で流れをやや東寄りにかえるが、遺跡はこの牛頭山から北へ延びる丘陵先端部の東岸に位置する。

また、この遺跡周辺の特筆すべき地理的環境としては、北側に福岡平野が広がる一方で、上記三郡山塊と脊振山塊に挟まれた二日市地峡帯があげられる。そのため、略東西から迫る山塊の間に現在も主要な交通路が集中している。このような特徴的な地理的環境は当遺跡の性格を少なからず規定する要因の一つといえるであろう。

3. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群周辺の遺跡

以下、本総括報告書の対象時期である縄文時代から弥生時代までの周辺の遺跡を中心に概観する。

旧石器時代には、福岡平野周辺の山麓や丘陵部に主に遺跡が分布するがその数はかならずしも多くはない。本遺跡周辺では牛頭山の北麓の出口遺跡などがナイフ形石器文化期の遺跡としてあげられる。出口遺跡ではAT降灰直後の特徴的なサスカイト製剥片尖頭器が出土している(下村編, 1989)。細石刃文化期には乙金山山麓に釜蓋原遺跡があり、ナイフ形石器・台形石器・細石刃などが出土している(向編, 1988)。そのほかにも松葉園遺跡(石木編, 2003)などがある。春日丘陵上では門田遺跡(井上編, 1977)があげられるであろう。

縄文時代も丘陵上に遺跡が分布する。縄文時代の前半期では、草創期と前期の土器が門田遺跡で出土している(井上編, 1977)。また、乙金山山麓では釜蓋原遺跡で早期の土器と石鏃が出土している(向編, 1988)。牛頭川左岸の石勾遺跡G地点では落とし穴状遺構が調査されている(舟山編, 1997)。後期から晩期には柏田遺跡で後期の竪穴住居6基が調査されており、晩期黒川式土器も溝から出土している(小池編, 1977)。一方、塚原遺跡群(徳本編, 1995)や日ノ浦遺跡群(徳本編, 1994)などの牛頭山からのびる丘陵上の遺跡でも後期になると竪穴住居などが調査されており、集落が形成されていたものと考えられる。

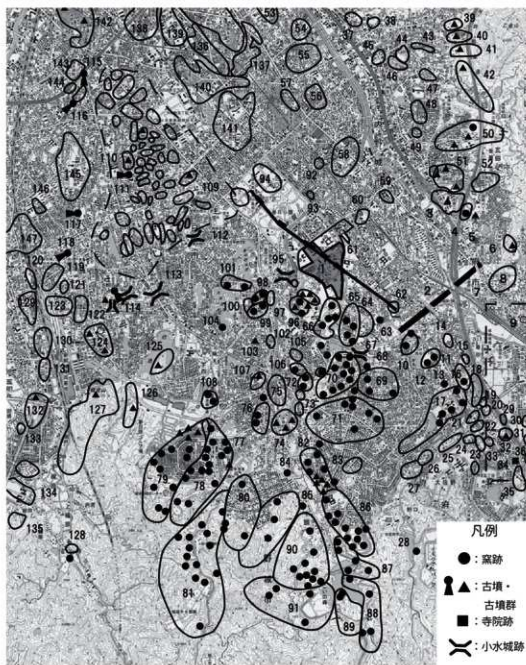


図3 周辺の遺跡 (S=1/50000)

- | | | | |
|--------------------------|------------|-----------|-----------|
| 1 九州大学筑紫キャンパス遺跡群 (御供田遺跡) | 2 水城跡 | 3 成原形古墳群 | 4 裏ノ田遺跡 |
| 5 裏ノ田古墳 | 6 陣の尾遺跡群 | 7 国分松本道跡 | 8 筑前国分尼寺 |
| 9 松倉瓦窯跡 | 10 神ノ前窯跡群 | 11 専田窯跡 | 12 篠振遺跡 |
| 13 長浦窯跡 | 14 原口遺跡 | 15 久部利遺跡 | 16 日焼遺跡群 |
| 17 宮ノ本遺跡群 | 18 前田遺跡 | 19 川上久保遺跡 | 20 懸川遺跡 |
| 21 フケ遺跡 | 22 尾崎遺跡 | 23 脇道遺跡 | 24 殿城戸遺跡 |
| 25 京ノ尾遺跡 | 26 カヤノ遺跡 | 27 長ヶ坪遺跡 | 28 野口遺跡 |
| 29 井ノ尻遺跡 | 30 杉塚大坪遺跡 | 31 刺塚遺跡 | 32 壇安神社古墳 |
| 33 和久堂城跡 | 34 杉塚庵寺 | 35 脇田遺跡 | 36 唐人塚遺跡 |
| 37 塚口遺跡 | 38 御陵前ノ縁遺跡 | 39 善一田古墳群 | 40 王城山古墳群 |
| 41 古野古墳群 | 42 原口古墳群 | 43 松葉園遺跡 | 44 森園遺跡 |
| 45 ヒケシマ遺跡 | 46 中ノ寺尾遺跡 | 47 薬師の森遺跡 | 48 銀山遺跡 |
| 49 原門遺跡 | 50 雄子ヶ尾遺跡 | 51 釜蓋原古墳群 | 52 釜蓋原遺跡 |
| 53 仲島遺跡 | 54 川原田遺跡 | 55 御笠の森遺跡 | 56 村下遺跡 |
| 57 髷原遺跡 | 58 石勺遺跡 | 59 原ノ畑遺跡 | 60 後原遺跡 |
| 61 御供田遺跡 | 62 谷川遺跡 | 63 出口遺跡 | 64 上園遺跡 |
| 65 本堂遺跡群 | 66 梅頭遺跡群 | 67 上大利水城跡 | 68 谷蟹窯跡 |
| 69 大浦窯跡群 | 70 平野遺跡群 | 71 平田窯跡群 | 72 華無尾遺跡群 |
| 73 屏風田遺跡 | 74 塚原遺跡群 | 75 日ノ浦遺跡群 | |

76 畑ヶ坂遺跡群	77 月ノ浦1号窟跡	78 小田浦遺跡群	79 後田遺跡群	80 大谷窟跡群	81 石坂窟跡群
82 東浦窟跡	83 中通遺跡群	84 城ノ山窟跡群	85 原窟跡・原浦窟跡群	86 ハセムシ窟跡群	
87 道ノ下窟跡群	88 長者原窟跡群	89 笹原窟跡群	90 井手窟跡群	91 足洗川窟跡群	92 駿河遺跡
93 原ノ口遺跡	94 立石遺跡	95 春日水城跡	96 春日平田北遺跡	97 惣利北遺跡	
98 惣利遺跡	99 惣利東遺跡	100 惣利西遺跡	101 惣利窟跡群	102 円入遺跡	103 惣利古墳
104 大牟田窟跡	105 春日平田遺跡群		106 春日平田西遺跡		107 塚原古墳群
108 浦ノ原窟跡群	109 須玖遺跡群	110 赤井手遺跡	111 竹々木古墳	112 小倉水城跡	113 大土居水城跡
114 天神山水城跡	115 御陵遺跡群	116 野藤1号墳	117 下白水大塚古墳		118 日拝塚古墳
119 辻田遺跡	120 柏田遺跡	121 上白水西遺跡	122 天神の本遺跡	123 門田遺跡	
124 ウトグチ遺跡群		125 白水池古墳群	126 西浦古墳群	127 観音山古墳群	
128 地別当遺跡群・窟跡群	129 中原・ヒナタ遺跡群			130 中原・塔ノ元遺跡群	
131 カイ子遺跡群	132 エゲ古墳・カクチガ浦古墳群	133 炭焼古墳群	134 平蔵遺跡群		
135 梶原ハル遺跡群	136 麦野 B 遺跡	137 麦野 C 遺跡	138 笹原遺跡群	139 三筑遺跡	
140 南八幡遺跡群	141 朝陽原遺跡群	142 井尻 B1号墳	143 寺島遺跡	144 笹坂遺跡	145 弥水原遺跡群
146 弥水遺跡群	147 警勢塚 B 遺跡				

弥生時代になると春日丘陵上に前期の墓地としては伯丈社遺跡（柳田編，2003）がみられ、一の谷遺跡 B 地点（宮小路編，1968）で集落跡が確認されているが、大規模な集落の形成は中期になって確認されるようになる（春日市史編さん委員会編，1995）。中期以降になると須玖岡本遺跡群において、須玖五反田遺跡・須玖永田遺跡 B 地点をはじめとする甕棺墓が春日丘陵各所に形成され、集落も多数形成されるようになる（春日市史編さん委員会，1995）。また、中期後葉には大谷遺跡（佐土原編，1979）や岡本遺跡（春日市史編さん委員会編，1995）から滑石片岩製鋳型が出土し、須玖坂本遺跡（春日市教育委員会，1994）・須玖永田遺跡（丸山・平田編，1987）などからも青銅器鋳型が出土しており、青銅器生産が活発に行われていたことがわかる（春日市史編さん委員会編，1995）。また、須玖五反田遺跡ではガラス勾玉鋳型・埴塼などガラス製品の製造関連遺物が出土している（吉田編，1994，1995）。さらに、中期末には赤井出遺跡（丸山編，1980）や仁王手遺跡などで小鍛冶の遺構や鉄器未成品が出土しており、弥生時代中期末には鉄器生産も行われていたと考えられている（春日市史編さん委員会編，1995）。

一方、大野城市域をみると、御笠川中流域東岸で御陵前ノ椽遺跡（向編，1997）や塚口遺跡（松浦編，2002）で前期の墓地が形成される。また、乙金丘陵では中・寺尾遺跡で前期から中期の甕棺墓や土壙墓などが調査されている（馬田編，1977）。この遺跡の北側の森園遺跡では中期中葉から後葉の住居跡が19基検出されている（向編，1988，1999）。御笠川中流域の左岸では仲島遺跡で中期から後期の住居跡や溝などが調査されており、中国「新」代の貨布の他に青銅製鋳先など多くの青銅製品が出土している（舟山編，1983）。御笠川と牛頸川が合流する付近に位置する石勾遺跡では中期の住居跡と、中期後葉から後期の甕棺墓、土壙墓、木棺墓や石棺墓などからなる墓地が調査されている（舟山編，1997；石木編，1996；向・丸尾編，1998）。この石勾遺跡の西側、牛頸川の左岸には瑞穂遺跡があり甕棺墓他が調査されており墓地が形成されている。

註

1. このような認識のもと本総括報告書の遺跡名称は九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）とした。遺跡名称の問題については、大野城市ふるさと文化財課の舟山良一氏および石木秀啓氏に多くのご教示をいただいた。記して深謝申し上げます。

文献

- 舟山良一編1983『仲島遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第10集 大野城市教育委員会 福岡
- 舟山良一編1989『仲島遺跡Ⅶ』大野城市文化財調査報告書第27集 大野城市教育委員会 福岡
- 舟山良一編1997『石勾遺跡Ⅱ G地点の調査』大野城市文化財調査報告書第50集 大野城市教育委員会 福岡
- 舟山良一編2017『御供田遺跡4 第2次・第1次調査補足調査』大野城市文化財調査報告書 150 大野城市教育委員会 福岡
- 井上裕弘編1977『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告（春日市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査）』第3集 福岡県教育委員会 福岡
- 井上裕弘編1979『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告（春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区の調査）』第11集 福岡県教育委員会 福岡
- 井上裕弘編1980『春日御供田区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書第56集 福岡県教育委員会 福岡
- 石本秀啓編1996『石勾遺跡Ⅰ H地点の調査』大野城市文化財調査報告書第47集 大野城市教育委員会 福岡
- 石本秀啓編2003『松葉園遺跡』大野城市文化財調査報告書第59集 大野城市教育委員会 福岡
- 春日市教育委員会1993『春日市埋蔵文化財年報1 平成4年度』春日市教育委員会 福岡
- 春日市教育委員会編1994『須玖岡本遺跡』吉川弘文館 東京
- 春日市史編さん委員会編1995『春日市史 上巻』春日市 福岡
- 小池史哲編1977『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告（春日市・柏田遺跡の調査）』第4集 福岡県教育委員会 福岡
- 川村博編2015『御供田遺跡2 第7次調査』大野城市文化財調査報告書126 大野城市教育委員会 福岡
- 京都帝国大学文学部考古学研究室1930『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告11 京都大学 京都
- 馬田弘珍編1977『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書第1集 大野城市教育委員会 福岡
- 丸山康晴編1980『赤井手遺跡 福岡県春日市大字小倉所在遺跡の調査』春日市文化財調査報告書第6集 春日市教育委員会 福岡
- 丸山康晴編1980『須玖・岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第7集 春日市教育委員会 福岡
- 丸山康晴・平田定幸編1987『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告書第18集 春日市教育委員会 福岡
- 松浦智編2002『塚口遺跡』大野城市文化財調査報告書第58集 大野城市教育委員会 福岡
- 宮小路賀宏編1968『一の谷遺跡』春日町文化財調査報告書第2集 春日町教育委員会 福岡
- 向直也編1988『釜蓋原遺跡』大野城市文化財調査報告書第25集 大野城市教育委員会 福岡
- 向直也編1988『森園遺跡Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第26集 大野城市教育委員会 福岡
- 向直也編1997『御陵前ノ椽遺跡』大野城市文化財調査報告書第48集 大野城市教育委員会 福岡
- 向直也・丸尾博恵編1998『石勾遺跡Ⅲ A・B・C・E・I地点の調査』大野城市文化財調査報告書第52集 大野城市教育委員会 福岡
- 向直也1999『森園遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第55集 大野城市教育委員会 福岡
- 中村浩・舟山良一編1991『御供田遺跡 福岡県大野城市白木原所在遺跡調査報告』大野城市文化財調査報告書32 大野城市教育委員会 福岡
- 大野城市史編さん委員会2005『大野城市史 上巻』大野城市 福岡
- 大野城市教育委員会『瑞穂遺跡（第7・8次調査）大野城市歴史資料展示室 解説シート 考古 No.60』
- 佐土原逸男編1979『大谷遺跡 福岡県春日市大字小倉所在遺跡の調査概報』春日市文化財調査報告書第5集 春日市教育委員会 福岡
- 重藤輝行編2005『御供田遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第205集 福岡県教育委員会 福岡
- 下村精一編1989『出口遺跡』大野城市文化財調査報告書第28集 大野城市教育委員会 福岡
- 徳本洋一編1994『牛頭ノ浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第42集 大野城市教育委員会 福岡
- 徳本洋一編1995『牛頭塚原遺跡群』大野城市文化財調査報告書第44集 大野城市教育委員会 福岡
- 徳本洋一・山中リュウ・松尾祥子編2015『御供田遺跡3』大野城市文化財調査報告書132 大野城市教育委員会 福岡
- 柳田康雄編2003『伯耆社遺跡』春日市文化財調査報告書第35集 春日市教育委員会 福岡
- 吉田佳広編1994『須玖五反田遺跡』春日市文化財調査報告書第22集 春日市教育委員会 福岡
- 吉田佳広編1995『須玖五反田遺跡2』春日市文化財調査報告書第24集 春日市教育委員会 福岡

Ⅲ 調査の結果

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と出土遺物の概要（図4・5）

縄文時代の遺構・遺物は、筑紫地区遺跡群調査地内でもごく限られた範囲から出土する傾向にある。まずはそのおおよその傾向を概観した上で、調査時に縄文時代に帰属すると認定された遺構及び包含層から出土した遺物の報告を行う。

縄文時代の遺構・遺物は、調査範囲内では大きく二箇所に出土するエリアに限られるものと判断できる。一箇所は、現在の筑紫キャンパス正門から応用力学研究所などがあるキャンパス北西部の一角で、主に8B区とその周辺の8C区、9D区、そしてやや西に離れるが10B区である（図4）。このうち本遺跡群の調査によって出土した縄文土器の大半は8B区で出土している。もう一箇所は、キャンパスの中央部西側の12N区（図1）で、わずか1点ながら縄文土器が出土している。また、今回の整理作業の過程で旧河川であるSX303からも鐘崎式土器一点を確認しているが、この資料については層位や出土グリッドなど詳細な情報が不明であるため参考資料として提示するに止める。

縄文土器が出土した遺構について整理すると、縄文時代の溝状遺構SD001が8B区で検出されている。また、10B区でも同様に溝状遺構SD003が検出されている。これらに加え、8B区では縄文時代の包含層から遺物が出土している。この包含層については複数年度の調査にまたがって遺物が出土しておりその性格が判然としない部分も多い。そのため、以下で当該包含層出土遺物の報告を行い、その性格については考察で改めて検討する。

その他には、弥生時代や古墳時代あるいは古代の遺構からも縄文土器が若干量出土している。そのうちの代表的な遺構としては、後述する弥生時代の遺構であるSK101と、古墳時代以降の溝であるSD108を挙げることができる。ただし、これら後世の遺構に混入した遺物は概して小片でかつ風化も著しく、また上記の縄文時代の包含層や溝状遺構などから出土した遺物とほぼ同様の様相である。そのためこれら後世の遺構から出土した縄文時代の資料については一部を除き本報告では省略した。以下、縄文時代の遺構と判断された溝状遺構と包含層から出土した遺物について調査区ごとに報告する。

(2) 8B区の縄文時代の遺構と遺物

SD001（図5、旧報告SD701、702）

8B区で検出された、2つの溝状遺構として調査された遺構⁽¹⁾から縄文土器が出土している。この溝は調査範囲内北側で略南東—北西方向に検出されている（図5）。これら2つの溝状遺構は相互に重なっており、上位の溝は、最大幅が1.76m、長さ2.75m、深さ20～46cmが調査区内で把握されている。一方、その下位で検出された溝状遺構は、最大幅が1.8m、長さは2.75m、深さ25～58cmが残存している。また、南東側、SK101の南から南西にかけての部分でこの下位の遺構の続きと想定されている溝状遺構SD002（図4）が検出されている。

これらの遺構は、溝底部がややずれており、全体的に上位遺構の底面がより東側に位置している（図5）。が、流路の軸は略揃っていることから、本来一つの溝の上層部と下層部に相当する可能性が

ある。なお、両溝とも層位的な情報が記録されていない。一方、双方の遺構から出土したものと推定される遺物は特に別遺構として区分されておらず、単に上層と下層に分けて取り上げられている。そのため、現状では二つの遺構として弁別することができない。このような理由により、本遺構については一括してSD001とし、出土遺物についても上層と下層・最下層に区分して報告する。

出土遺物 (図6)

本溝状遺構の最下層および下層から出土した遺物は1、2、4である。5の出土層位は不明である。1は鉢形土器の口縁部片である。口縁部が内屈しており、口縁部外面の文様帯をなす。口縁部文様帯には、磨消縄文が施されている。波状口縁を呈しており、波頂部に刺突が認められる。2は鉢形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部に浅い沈線が1条施されている。内外面とも研磨調整である。3は精製の鉢形土器あるいは浅鉢形土器の口縁部である。残存する口縁部カラー上半に2条の浅い凹線文が施される。

4から9は浅鉢形土器である。4は有文の浅鉢形土器で、口縁部から胴部最大径部までが短く、胴部最大径部分に2条の沈線が施される。5は内外面が研磨されており、胴部と頸部の境の幅の狭い文様帯に沈線が3本施される。6も胴部最大径部で屈曲し外湾する頸部が立ち上がる。胴部屈曲部に凹線が1条施文される。7は浅鉢形土器口縁部片で、胴部から外傾する頸部を経て口縁部に至る。口縁部は幅の狭い口縁部文様帯カラーを持ち浅い沈線が1条施文される。8も7と同様の器形の浅鉢形土器で、胴部から外傾する頸部を経て口縁部に至る。口縁部は口縁部文様帯が委縮した玉縁状の口縁部を呈する。9は精製の浅鉢形土器で、底部から胴部最大径部で屈曲する。内外面とも横方向の研磨が施される。胴部最大径は32.2cmに復元できる。

10は深鉢形土器の底部である。外面はケズリの後ナデで仕上げる。底径は11.0cmに復元される。11も深鉢形土器の底部である。底径は12.8cmに復元できる。

8B区包含層出土遺物 (図7-12)

8B区では上記溝状遺構に加え、1983年度調査および1985年度調査で縄文時代包含層から遺物が出土している。まず1985年度調査、つづいて1983年度調査の包含層から出土した遺物について概観する。

①1985年度調査8B区包含層・下層出土遺物 (図7・8)

12から14は鉢形土器である。12は口縁部片で、外傾する頸部から口縁部が屈曲する。口縁部文様帯には3条の沈線が施文される。波頂部が欠損するが波状口縁を呈する。13は屈曲して直立する口縁部文様帯に沈線が1条施される。口縁部の屈曲部下に凹点文状のくぼみがある。14も同様に外傾する頸部から口縁部文様帯が屈曲する鉢形土器である。口縁部文様帯に2条の沈線が施文されており、内外面とも研磨である。

15と16は口縁部が内傾する浅鉢形土器である。15は浅鉢形土器の口縁部である。外傾する頸部から口縁部が屈曲する。口縁部には2条の凹線が施文される。内外面とも研磨である。16は浅鉢形土器の口縁部である。胴部から内側に屈曲する口縁部にいたる。口縁部文様帯には磨消縄文が施され、沈線文間に波状沈線が一部施文されている。17は口縁部に沈線文が施された浅鉢形土器である。口縁部文様帯部分が屈曲せず、胴部からそのまま立ち上がる器形を呈する。口縁部外面に4条の沈線、内面に3条の沈線が施される。また、一部欠損しており不明瞭ではあるが、本来波状口縁を呈しており波頂部を押圧している。

18から20は胴部最大径部で屈曲し頸部が外傾して立ち上がる浅鉢形土器である。18は素口縁を呈する。胴部には幅の委縮した文様帯に沈線が2条施される。口径は33.0cmに復元できる。19は胴部最大

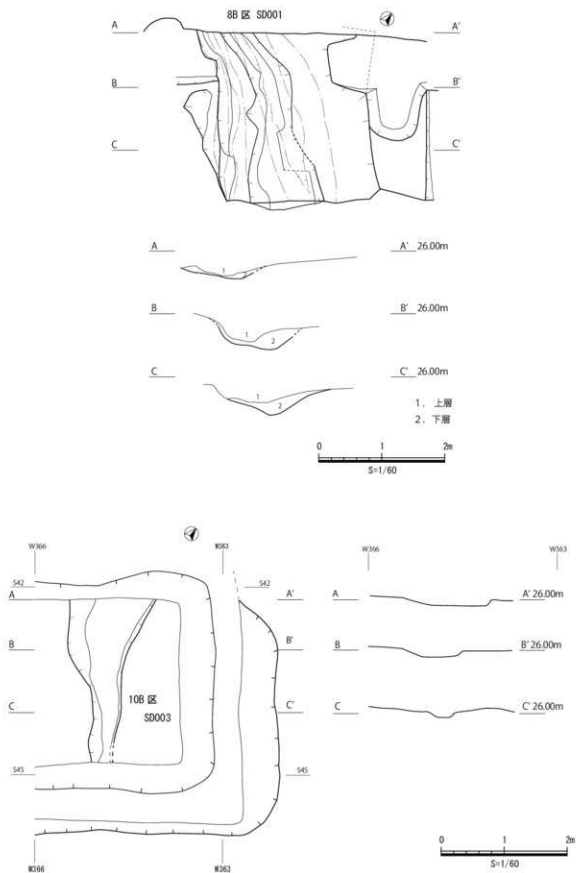


図5 縄文時代の遺構

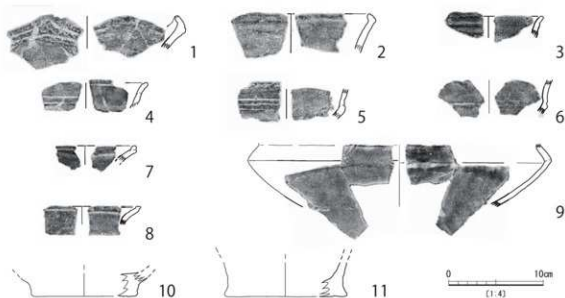


図6 SD001出土遺物

径部が内屈し、幅の狭い胴部文様帯に沈線が2条施文される。内外面とも研磨調整である。20は頸部から胴部の屈曲は明確ではなく、頸部と胴部の境に2条の沈線が施文される。内外面とも研磨である。

21は皿状の器形をした浅鉢形土器である。通常の間縁部が屈曲して立ち上がる浅鉢形土器の間縁部文様帯が欠落した器形といえる。内外面とも研磨調整で、間縁部内面に凹線文が施される。小片のため口径の復元は行っていないが、約24~26cmほどと推定される。22は浅鉢形土器である。頸部からやや外湾して間縁部に至る。間縁部内面に沈線文が1条施されている。内外面とも研磨である。

23と24は胴部屈曲部から湾曲する頸部が立ち上がる浅鉢形土器である。23は外湾気味の頸部から玉縁状の間縁部にいたる。間縁部外面と内面に1条の沈線がそれぞれ施される。また、頸部と胴部の境界に1条の沈線が施文されている。口径は38.6cmに復元できる。24は、湾曲した頸部から玉縁状の間縁部にいたる。平縁間縁で、間縁部外面と頸部外面中央に沈線をそれぞれ1条施す。また、間縁部内面にも浅沈線を1条施している。内外面共に丁寧な研磨を施す。上層と下層出土土器片が接合している。

25は鉢形土器の胴部片である。外面は丁寧なナデが施され、内面は調整具による擦過痕が認められる。26は深鉢形土器の頸部片である。外面は横方向の研磨を施し、内面はケズリの後ナデないしは粗い研磨を施している。残存部位の上端付近に2条の沈線を施す。

27から30は無文の鉢形土器および深鉢形土器である。27は鉢形土器の間縁部から頸部にかけての破片である。胴部からやや外湾気味に間縁部へと至る。外面上半部に貝殻条痕が認められる。28は深鉢形土器の間縁部である。内外面とも貝殻条痕が施される。29は胴部からやや外湾気味に立ち上がる頸部を経てそのまま間縁部にいたる鉢ないしは深鉢形土器である。内外面とも条痕の後粗いナデが施されている。補修孔が認められる。30は鉢形土器である。外面には貝殻条痕、内面にはケズリの痕跡が認められる。

31から36は底部片である。31は器面の風化が著しく調整は不明であるが、かろうじてケズリの痕跡

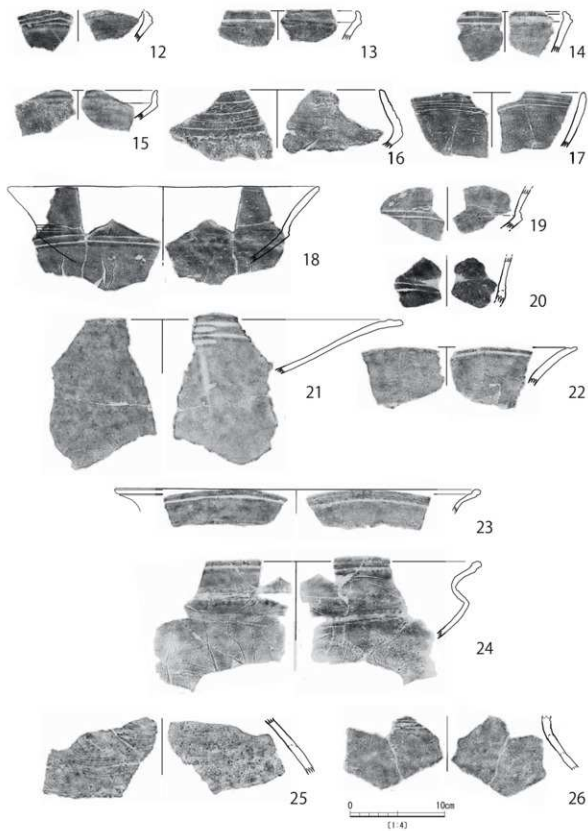


図7 8B区縄文包舎層・下層出土遺物（85年度調査）1

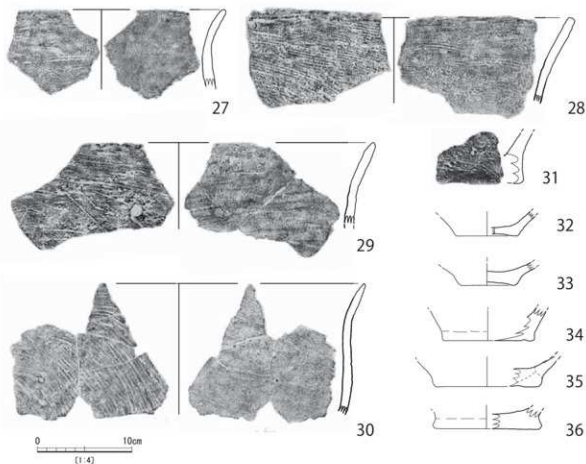


図8 8B区縄文包含層・下層出土遺物（85年度調査）2

が残る。底面はほぼ欠損するが、残存部分から底部がかなり厚いと推測される。32は内外面とも研磨で、底面は若干上げ底状になっている。底径は6.4cmである。33は内外面とも研磨が施されている。底面は上げ底状になっており、研磨が施される。底径は6.0cmである。34は内外面ともケズリの後ナデている。底径は、9.6cmに復元できる。35は内外面とも指押さえの痕が残るが、そのほかについては器面の風化が激しく不明である。底径は11.4cmに復元できる。36は外面はケズリの後ナデである。底面が厚く平底で、やや外に張り出し気味で底面に至る。底径は11.5cmである。

②1985年度調査8B区包含層・上層出土遺物（図9）

37から42は無文の半精製ないしは粗製の深鉢形土器である。37は口縁部から頸部の破片である。外面は横方向の条痕調整の後ナデ、内面はケズリの後ナデで仕上げる。口径は35.8cmに復元できる。38は、胴部最大径からやや外湾する頸部が立ち上がりそのまま口縁部にいたる。内面はケズリの後ナデが施される。外面は器面の風化が著しく調整不明である。頸部の中位に補修孔が認められる。39は胴部最大径でやや内傾し直立気味の頸部がつく深鉢形土器である。内外面とも無文で、粗いケズリの後、ヨコ方向のナデが施される。成形・整形が粗く器面内面に粘土接合痕が明瞭にみられる。40は深鉢形土器の頸部下半から胴部にかけての破片である。残存部全面にわたり内面は指押さえによる成形がなされ、その後貝殻条痕、ナデが施されている。外面はケズリである。成形・整形が粗いため、1.5～2.0cm幅の粘土紐の単位が比較的明瞭である。41は外湾しつつ直立する頸部からそのまま口縁部にい

たる器形を呈す。外面はケズリを行い、頸部下半には粘土接合部を指で強くナデで接合した痕跡が残る。内面は横方向のケズリの後ナデで器面を平滑に仕上げる。42は胴部から口縁部にやや内湾気味に立ち上がる器形を呈する。口縁部にはりボン状突起がつく。外面はケズリ、内面はケズリの後丁寧にナデている。この土器は1983年度調査時の縄文包含層から出土した土器片と接合する。

43から48は鉢形土器あるいは深鉢形土器の底部である。43の底面はやや上げ底気味を呈する。器面外面はケズリの後ナデがなされている。底面は丁寧なナデで器面が平滑に仕上げられている。底径は8.0cmに復元できる。44は平底を呈する。底径は10.2cmに復元できる。45は底面の器壁が厚く平底である。底径は11.2cmに復元できる。46の底径は12.0cmに復元できる。外面はケズリの後ナデ、底面もナデが施されている。内面は指押さえの痕跡がみられる。47は器壁、底面の器厚は比較的厚く平底をなす。48は胴部からいったんすぼまった後底面に向かって屈曲し、やや底面が張り出した形態をなす。内外面ともナデによる仕上げで、底面は比較的丁寧なナデで平滑に仕上げられている。底径は9.6cmに復元できる。

③1983年度調査8B区包含層・上層出土遺物（図10-12）

1983年度調査によって出土した包含層出土遺物には以下で報告する上層出土資料に加え下層出土のものも含まれる。しかし、いずれも小片で時期比定の可能なものはなかったため、以下では上層出土遺物のみを報告する。

49から51は胴部からそのまま口縁部文様帯に至る器形の浅鉢形土器である。49は口縁部片である。口縁部屈曲部はほぼ直立する。口縁部文様帯カラーの幅は狭く2条の沈線が施文される。50も有文の浅鉢形土器の口縁部で、口縁部文様帯には凹線の形骸化した浅い文様が施される。51も口縁部で、口縁部文様帯は直立する。口縁部文様帯には沈線が施文される。

52から59は胴部最大径部で屈曲し幅の狭い文様帯をつけ、そこから頸部が外傾して立ちあがる器形の浅鉢形土器ないしは鉢形土器である。52は頸部屈曲部から口縁部の破片である。口縁部内面に沈線が1条、また、胴部文様帯には沈線2条が施されその間に細線文が施文される。53も屈曲する胴部最大径部から外傾する頸部がつき、そのまま口縁部にいたる。胴部屈曲部直上の幅の狭い文様帯に沈線文を施し沈線間に細線文を施文する。54も同様の器形をするが、やや器高が高くなる可能性がある。口縁部内面に沈線が1条、また胴部文様帯にも沈線文が施される。55は口縁部内面に沈線が1条施文される。胴部文様帯には浅い凹線が2条施され、下位の凹線内に細線文が施文される。

56は浅鉢形土器の胴部である。胴部文様帯に細線羽状文が施される。57は有文浅鉢ないしは鉢形土器の胴部片である。胴部最大径の上位に沈線文が施される。58は浅鉢形土器で、胴部文様帯には凹線文が2条施文されたのちに、凹点文が2か所上下に施される。59は浅鉢形土器胴部で、胴部文様帯に凹線文が施される。60は鉢形土器の胴部片である。胴部最大径部で破損している。内外面とも丁寧な横方向の研磨が施される。

61は胴部最大径部からやや外湾気味の短い頸部がつき、そのまま口縁部にいたる。胴部最大径部の直上、および口縁部内面には沈線文が施される。

62から70は胴部最大径部で屈曲し、湾曲あるいは外湾する頸部をへて口縁部文様帯にいたる器形を呈する浅鉢形土器である。62は胴部最大径部から内傾する短い頸部にやや外傾気味の口縁部カラーがつく。口縁部文様帯には凹線文、胴部文様帯には沈線が施される。63は外湾気味の頸部から屈曲した口縁部がつく。口縁部文様帯の幅は狭いが、沈線が2条施される。内外面とも研磨である。64は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部文様帯には浅い凹線が1条施文される。65はやや湾曲気味

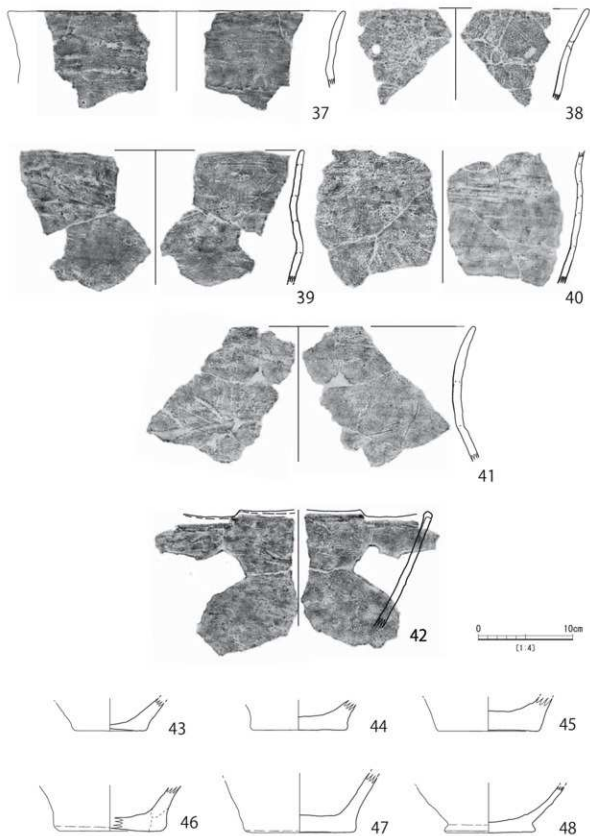


図9 8B区縄文包含層・上層出土遺物(85年度調査)

に外傾する頸部に玉縁状の口縁部がつく。口縁部外面に沈線が1条施文される。内外面とも研磨される。66は外湾して立ち上がる頸部に玉縁状の口縁部がつく。口縁部外面および内面の双方に沈線文が施される。67は胴部屈曲部から外湾する短い頸部をへてそのまま口縁部にいたる。口縁部内面に沈線が1条施文される。内外面とも研磨である。精良な胎土を使用している。68は屈曲する胴部最大径部から短く湾曲する頸部をへてそのまま口縁部にいたる。口縁部内面に浅い沈線が1条施文される。69は外湾する頸部からそのまま口縁部にいたる。口唇部及び口縁部内面に浅い沈線が1条施される。70は丸みを持つ胴部から短い頸部が外反して立ち上がりそのまま口縁部にいたる。口縁部内面に浅い沈線が1条施文される。精良な胎土を使用している。

71は器種の特定が困難であるが、ボール状の器形を呈するものと推測される。胴部下半には突帯が1条つく。器面は黒色で丁寧な研磨が施されている。72、73は頸部がほぼ直立ないしは若干外傾する。頸部から口縁部までの破片であるため器種の特定が難しいが、鉢形土器あるいは注口土器の可能性が高い。72は直立する頸部がそのまま口縁部に至る形態である。口縁部文様帯に沈線が2条施文される。内外面とも研磨である。73は、直線的な頸部がやや外傾気味に立ち上がり、短く内側に屈曲する口縁部文様帯がつく。口縁部には沈線2条が施文される。内外面とも研磨である。口径は15.8cmに復元できる。

74から85、88、は口縁部文様帯のカラーを持つ鉢形土器である。74は外傾する頸部に屈曲する口縁部がつく。口縁部文様帯には磨消縄文が施文される。また波状口縁を呈するが波頂部には幅1.5cmほどの凹点が施される。75は直立する口縁部文様帯がつく。小片のため不明瞭であるが波状口縁を呈する。口縁部文様帯に磨消縄文が施される。76は口縁部文様帯カラーの作出が不明確であるが、沈線が1条施される。77は口縁部端部が欠損するが内側に屈曲する口縁部がつく可能性が高い。内外面は研磨されており、口縁部文様帯に磨消縄文が施される。78は頸部が外傾して立ち上がりそのまま口縁部にいたる。口縁は波状を呈し、口縁部端部は頂部に凹点を施し、その周囲に凹線を施文する。口径は29.0cmに復元される。79は外傾する頸部に口縁部がつく。口縁部文様帯には沈線が1条巡り、沈線の下位に刺突文がみられる。80は外傾する頸部に内屈する口縁部がつく。口縁部文様帯には磨消縄文が施文される。内外面とも研磨である。81はやや湾曲する頸部に、直立する口縁部文様帯カラーがつく。端部は外側に短く屈曲する。口縁部外面には凹線が2条施文される。82は口縁部文様帯に凹線状の浅い凹みがみられる。83は口縁部片である。口縁部は波状を呈し、波頂部に凹点を施す。波頂部から下垂する粘土紐を貼り付け、その両側に沈線の区画と磨消縄文を施す。84は外傾する頸部に内屈する口縁部を持つ。口縁部文様帯は無文である。85はやや外湾する頸部に内面に屈曲する口縁部がつく。口縁部文様帯には沈線が施文される。88は胴部最大径部から外湾する頸部が立ち上がり、屈曲する口縁部にいたる。口縁部文様帯には凹線が2条施文され、胴部最大径部直上にも凹線が1条施される。口縁部は波状をなす。遺存する口縁部が小さいため判然としないが、通常4つの波頂部に比べ波頂部の間隔が狭いため、4つの波頂部の間にも頂部をなす部分があるものと想定できる。86と87は鉢形土器の胴部片である。86は胴部最大径部が緩く屈曲し外傾する頸部がつく。横方向のケズリの後粗い研磨が施される。87は胴部最大径部で丸みを持った屈曲部を形成し、やや湾曲した頸部が内傾して立ち上がる。外面は粗い研磨を施すが、下地調整のケズリないしは貝殻条痕がわずかに残存する。

89から101は口縁部文様帯カラーのつかない鉢形土器あるいは深鉢形土器である。施文はほとんど行われず、あっても口縁部内面に沈線が施される程度である。89は深鉢形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。胴部最大径から直線的な頸部が内傾して立ち上がりそのまま口縁部にいたる。内外

III 調査の結果

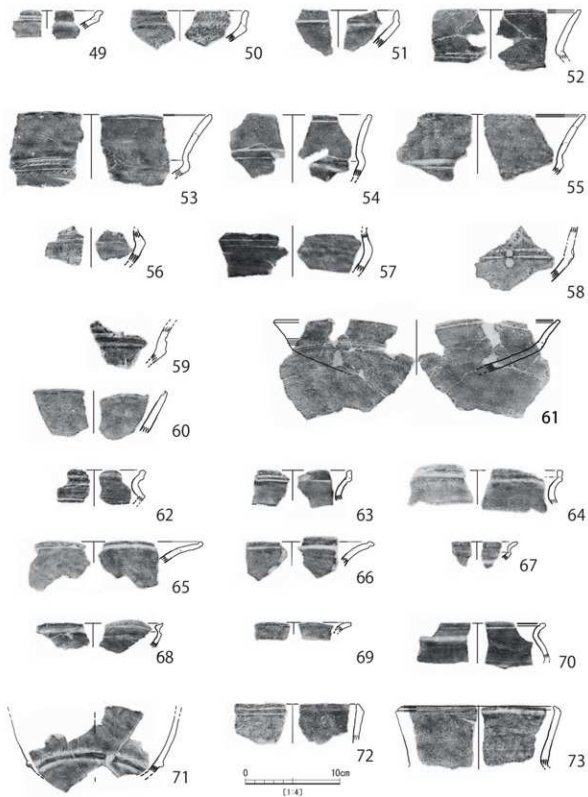


図10 8B区縄文包含層・上層出土遺物（83年度調査）1

面ともケズリの後ナデで仕上げる。90は頸部が外傾して立ち上がりそのまま口縁部に至る。無文で粘土の継ぎ目による器面の凹凸が明瞭である。内外面共に研磨で仕上げる。91は鉢形土器である。外傾頸部からそのまま口縁にいたる。口縁部内面に沈線文が巡る。92と96はやや作りが粗い。ケズリの後内外面共に粗いナデで仕上げる。93は器面の風化が著しいが、粗い作りで内外面ともに貝殻条痕の後ナデでいる。94は外面を貝殻条痕、内面はケズリ後ナデを施す。95も無文で、粘土の継ぎ目が明瞭である。内面は研磨であるが外面はナデ仕上げである。97は胴部からやや湾曲する頸部が立ち上がりそのまま口縁にいたる。内面は比較的丁寧なケズリの後ナデが施されるが、外面は粗いケズリの後ナデが施される。内面器壁にところどころ粘土接合痕が観察される。98は外傾する直線的頸部からそのまま口縁部にいたる。内外面とも貝殻条痕の後ナデがなされているが、内面の方が丁寧な仕上げである。99は粘土の継ぎ目が明瞭で、内外面共ケズリの後粗いナデである。100は直線的に口縁部まで立ち上がる器形を呈する。外面は粗い条痕で内面はケズリの後ナデである。101は胴部からやや外湾気味の頸部が立ち上がりそのまま口縁部にいたる。内外面ともケズリの後ナデが施されるが、外面のケズリがやや粗い。

102から114は底部である。102と103は上げ底で、それ以外は平底である。106と109、112、114は底部が外に張り出す。底径は、102が5.7cm、103が6.4cm、104は6.4cm、106が6.2cm、107は9.3cmに復元できる。108は10.4cm、109は9.6cm、110は10.1cm、111が10.2cm、112が8.8cm、113は11.7cm、114は11.8cmに復元される。

(3) 10B 区の縄文時代の遺構と遺物

SD003 (図5)

1985年度に調査された10B 区からは、8B 区に次ぎ縄文土器がまとまって出土した。調査区の北東端で縄文期の溝 SD003が検出されており、この遺構と包含層から縄文土器が出土している。

SD003は10B 区の北西端に設定された北東—南西に細長い調査区の北端で検出された溝状遺構である(図4・5)。調査区が細長いため、遺構のごく一部が調査されたのみで全容は不明である。遺構の主軸は略南東—北西方向で、調査区を横断するような形で検出されている。

調査された範囲では遺構の長さは2.6m、幅は0.4—1.4mで、南東部側の半分が幅狭になっている(図5)。残存する溝の深さは最もよく残っている部分で50cmである。

出土遺物 (図13: 122, 126, 128)

この溝状遺構から出土したものと確定できる資料は限られる。122、126、128が本遺構から出土した資料のうち実測が可能であったものである。122は浅鉢形土器である。外傾する胴部からそのまま口縁部にいたる。口縁部内面に沈線が1条施される。126は鉢形と考えられる。頸部から外傾して口縁部にいたる。外面はナデで、内面は研磨である。128は底部で、わずかに上げ底になる。底径は6.5cmである。

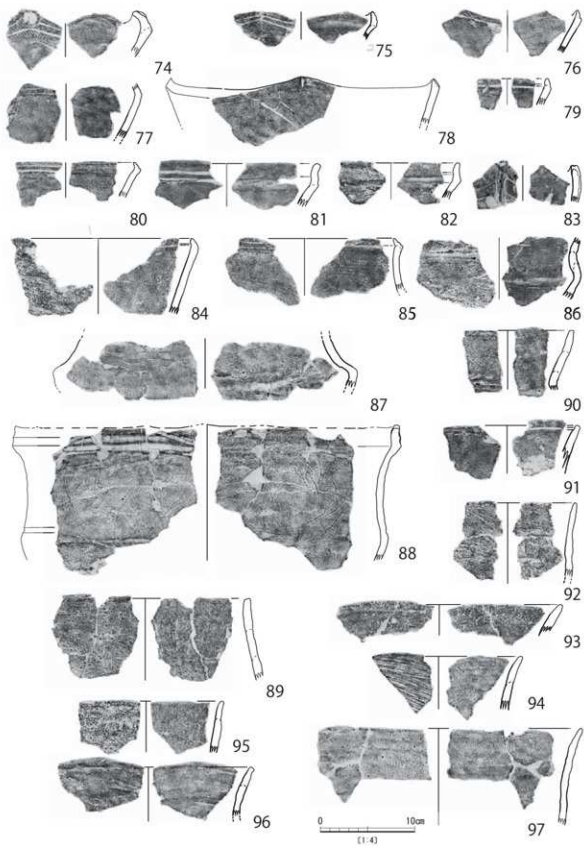


図11 8B区縄文包含層・上層出土遺物（83年度調査）2

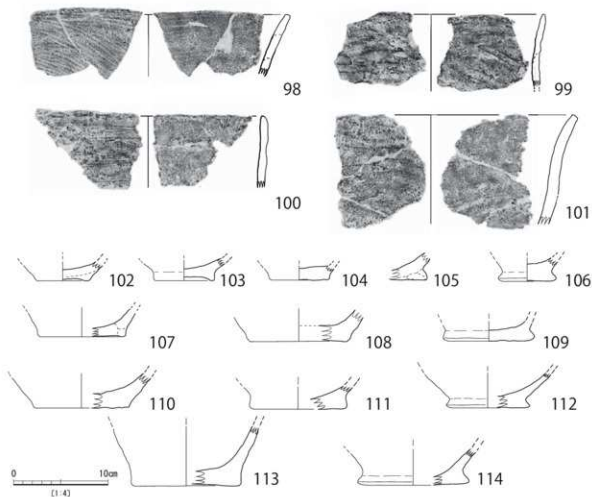


図12 8B区縄文包含層・上層出土遺物（83年度調査）3

10B区包含層出土土器（図13）

115と118は胴部からそのまま口縁部文様帯に至る形態の浅鉢形土器である。115はボール状の胴部から内傾する口縁部文様帯に至る。幅の広い口縁部文様帯の上下両端に沈線文を施す。内外面ともに研磨が施される。116は口縁部に狭い文様帯が作出されるが、無文である。117は胴部からそのまま口縁部文様帯カラーに至る。口縁部文様帯の端部をわずかに外屈させる。カラー部分に凹線文を2条施し、その間に細線文を施文する。118は口縁部文様帯端部が外側に屈曲し、凹線文が施される。119は口縁部片であるが小片のため器種は不明である。やや幅の狭い口縁部文様帯に浅い沈線文2条が施される。120と121は胴部最大径部で屈曲し、幅狭の胴部文様帯から外傾頭部がつく浅鉢形土器である。120は胴部屈曲部に凹線がみられる。121は胴部文様帯から頭部がやや外傾気味に立ち上がる。幅の狭い胴部文様帯に沈線文を施す。123は胴部最大径部から外湾直立する頭部がつき、幅狭の口縁部文様帯カラーを付す器形の浅鉢形土器である。口縁部文様帯および胴部最大径部の直上に浅い沈線を廻らす。

124は鉢形土器である。外傾する頭部にやや内側に屈曲する口縁部文様帯がつく。口縁部文様帯には浅い沈線文が施される。125は鉢形土器であろう。胴部最大径部が下半にきており、頭部がやや外

III 調査の結果

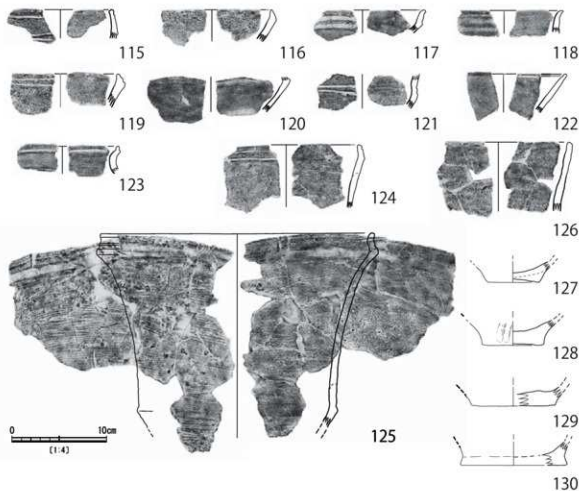


図13 10B区 SD002, 縄文包含層・上層出土遺物 (85年度調査)

傾気味に湾曲しながら立ち上がる。口縁部文様帯は内屈し端部を外に屈曲させる。口縁部文様帯には凹線文が2条施される。頸部から胴部にかけては内外面共に貝殻条痕の後粗いナデで仕上げられる。口径は29.0cm、胴部最大径は21.2cmに復元できる。

127から130は鉢形土器あるいは深鉢形土器の底部である。127は底部がわずかに上げ底を呈する。130は底部が外に若干張り出す。底径は127が5.5cm、129は8.9cm、130は11.3cmに復元できる。

(4) 8C・9D区出土の縄文時代の遺物

SD108 (図4)

SD108は古墳時代から古代にかけての溝で、本報告の報告対象ではないが、7B-8C-9D区にかけて略南北方向に流れる溝である。溝の詳細については古墳時代以降の報告の際に述べるが、その堆積土中から縄文土器がややまとまって出土している。先述の通り8B区あるいは10B区でまとまった量の縄文土器が出土しており、旧地形との関係で縄文土器が8B区以外の範囲にどの程度広がるのかを確認するためもあり、以下で縄文土器の報告のみ行うことにする。この溝のうち、とくに8C区・9D区から多くの縄文土器が出土している。

出土遺物 (図14)

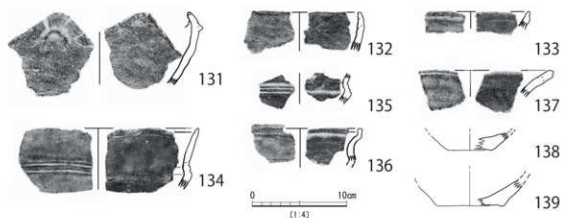


図14 8C・9D区SD108出土遺物

131はボール状の器形を呈する浅鉢ないしは、頸部から口縁部にかけて内湾する鉢形土器と推定される。口縁部は波状を呈し、波頂部の下には半円形の粘土紐を貼り付ける。内外面ともに研磨が施される。132はボール状の器形を呈する鉢形土器の口縁部と推定されるが、詳細は不明である。横方向の粗いケズリの後ナデで仕上げる。粘土接合部が明瞭で、作りが粗い。133は浅鉢ないしは鉢形土器の口縁部片である。口縁部に幅の狭い文様帯が作出され、浅い沈線が施文される。

134から137は器形にヴァリエーションがみられるが、いずれも浅鉢形土器である。134は胴部最大径部から上部にやや内傾する胴部文様帯がつき、頸部と胴部の屈曲部から外傾する頸部が立ち上がる。胴部文様帯には凹線文が施される。また、口縁部内面に沈線が1条めぐる。135も胴部屈曲部から幅狭の胴部文様帯を経て頸部が外傾気味に立ち上がる器形を呈する。胴部文様帯には沈線が3条施される。内外面共に丁寧な研磨を施す。136は胴部最大径部から外湾直立する頸部が立ち上がり、直立する口縁部カラーを付す。口縁文様帯カラーには凹線文が施される。137は外傾する頸部からそのまま口縁に至る。口唇部に沈線が施される。

138と139は底部である。いずれもわずかに上げ底になっている。底径は138が4.8cm、139が7.3cmに復元できる。

(5) 12N区およびSX303出土の縄文時代の遺物 (図15)

冒頭で述べた通り、これまで報告してきた8B区や10B区とは異なる調査区からも縄文土器が出土している。出土地区の明瞭な遺物としては、12N区から出土した鐘崎式土器が挙げられる。当該調査区からの出土はわずかに1点のみであるが、これまで述べた縄文土器には鐘崎式期の土器群は含まれていない。また、詳細な出土調査区は不明であるが、12N区から北に200mほどの丘陵の落ちぎわを流れる旧河川 (SX303) からも一点同時期の土器が出土しているので参考資料としてあけておく。

140は12N区の包含層から出土している。口縁部から胴部下半部までの破片で、口縁部は強く外反し、頸部は短い。把手に対応する口唇部に粘土紐貼り付けにより高文をなし、その両側に外面に向かって「コ」字形粘土紐を張り付ける。さらにその両側に沈線を施し、刻み目を配す。外面は幅の狭い縄文帯による文様と入組高文を施す。

141は旧河川SX303から出土しているが、詳細な調査区やグリッドなどは不明である。140と同様

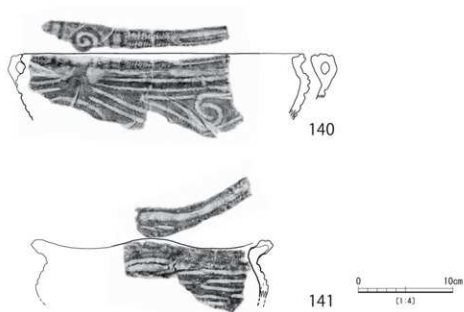


図15 12N区およびSX303出土遺物

に頸部が短く、口縁部が強く外反する。口縁はゆるい波状を呈し、波頂部に相当する部分に斜行するやや幅広の沈線が2条と口唇部を全周する凹線状の浅いくぼみが見られる。胴部は横走沈線が施文され、長楕円モチーフが展開される。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 調査の概要

以下で弥生時代の主要な遺構および遺構出土遺物について報告するが、I章で述べたように、キャンパス内の調査範囲が非常に広いことから、旧地形を参考に調査された範囲を4エリアに区分した。このエリア区分に沿って、住居跡、土坑、甕棺墓の順に報告する。弥生時代の主だった遺構は、キャンパス内の最も北西側のエリアI、キャンパス東側のエリアII、キャンパス西側のエリアIVに分布する。

エリアI内(図4)では、エリア内の北東部から東部にかけてと西部および南西部に比較的多くの遺構が分布し、土坑のほかに住居跡も分布している。また、エリア内西側に甕棺墓が2基検出されている。さらにエリア内中央部からも土坑を中心として遺構が検出されている。エリア内の北東部から東部にかけて検出された主たる遺構は、主に5次(S54年度)調査8B・C区、7次(S55年度)調査8E区、35次(S58年度)調査7C・D区で住居跡3軒、土坑13基などが調査された。エリア内の西部から西南部にかけての範囲は26次(S57年度)調査9・10/C・D区、9・10/E・F区、および33次(S58年度)調査11B-F区で、主たる遺構として住居跡7軒、土坑14基、甕棺墓2基が調査された。また、エリア内中央部では26次調査範囲8・9/C・D区で土坑が6基調査されている。

エリアII(図116)では域内の東部、キャンパスの敷地境界近くではほぼ弥生時代の遺構はみられない。一方、エリアIに近接する9次(S55年度)調査範囲を中心とするエリア西側の範囲である6・7/G・H区に主たる遺構が分布している。9次調査区内では、多くの土坑、ピット、住居跡が調査されているが、主たる遺構は調査範囲の東側と西側に分布しており、東側では住居跡が4軒、西側では住居跡1軒と土坑1基が調査されている。また、この9次調査区の北東側の54次調査区北部でも弥生時代の住居跡が3軒調査されている。

エリアIV(図142)では域内の北部に弥生時代の主要遺構が分布している。とくに29次(S57年度)調査区のキャンパス敷地境界付近、12H、13Hの範囲で、住居跡1軒、土坑5基が調査されている。

以下これらの主たる遺構を取り上げ報告するが、主にエリアIにおいて今回取り上げることでできた遺構以外、とくに溝状遺構(SD316)あるいは旧河川と考えられる遺構(SX303)からも本遺跡群の特徴を知るうえで重要な遺物が多く出土している。さらに、エリアIIでは、1998年度の56次調査で巴形鋳型が出土している。そのため、これらの重要な遺物についても最後に報告する。

(2) エリアI(図4)

住居跡

7C区SB501(図16)

7C区南西部に位置する。南西方向にSB502、SK508、西側にSK105などが位置する。平面は隅丸方形を呈しており、遺構の東側は米軍期の溝によって切られており遺存しない。北西-南東方向で幅3.8mをはかり、北東-南西方向で最大2.56m残存する。遺構の深さは床面で16cmである。

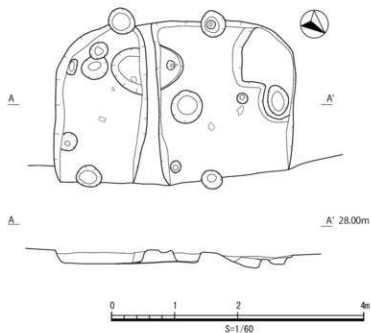


図16 7C区 SB501

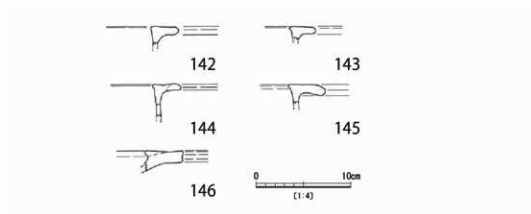


図17 SB501出土遺物1

出土遺物（図17）

142から145は甕形土器の口縁部片である。142は逆「L」字形の口縁部、143、144は鋤形の水平な口縁部で内面の突出は顕著ではない。146は壺ないしは高坏の口縁部である。

7D区 SB502（図18）

7D区北西部に位置する。北7.5mのところにはSB501が位置する。平面は隅丸長方形を呈すると推

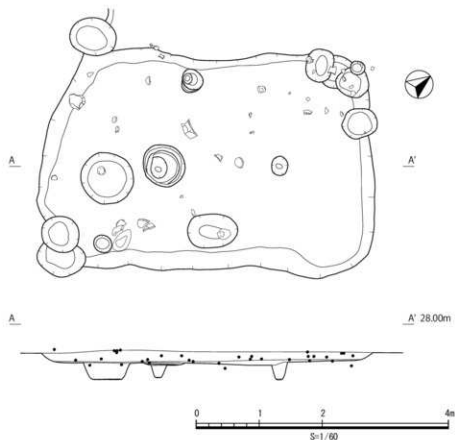


図18 7D区 SB502

測されるが、遺構の隅に土坑が重複しているため正確な形状は不明である。北東-南西方向で5.24m、北西-南東方向で幅3.44mをはかる。床面は、複数の土坑が検出されているが、その他の部分はほぼ平坦で、深さは16~22cmである。

出土遺物 (図19・20)

147から155は甕形土器である。147から153は鋤形の水平な口縁である。152は口縁部下に突帯が廻る。154は口縁部がゆるく立ち上がる。156、157、158は甕の底部である。158は丸底を呈する。

159は高坏で鋤形の口縁部である。160は短頸壺で外面丹塗り、161は小形壺である。162から166は壺形土器の頸部あるいは胴部片である。167、168、169、170は壺形土器の底部で167と169は外面丹塗りである。171は蓋である。172は小形の浅い椀で、173は脚付きの小形椀である。174と175は器台である。

176は不明土製品である。表面に面取りがみられ、丹が塗彩されている。177から185は石器である。177、178、179、180はすべて凹基式の石鎌であるが、178は基部の挟りが浅い。179と180は挟りが深く脚部を形成する。181は石匙、182と183は石庖丁である。184は磨石で、一部叩打痕が残る。185は砥石で4面に砥面が認められる。

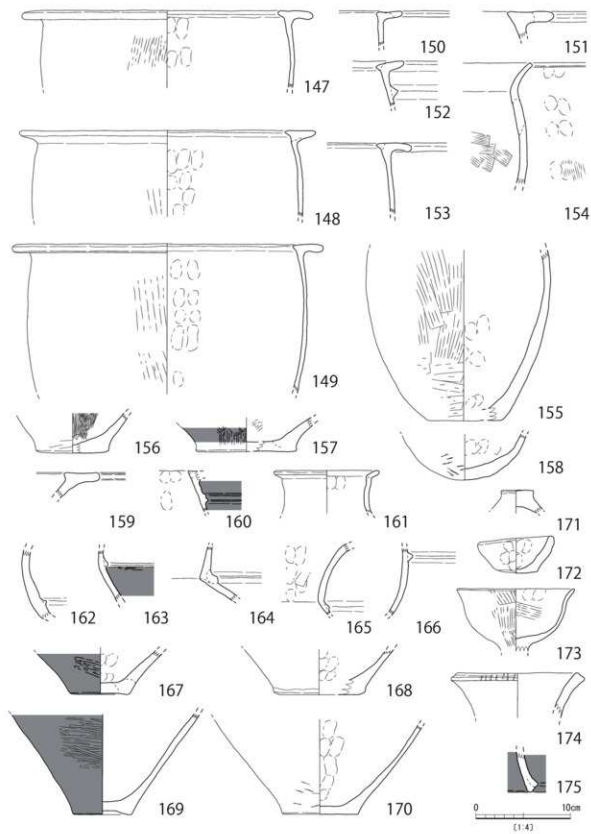


図19 SB502出土遺物 1

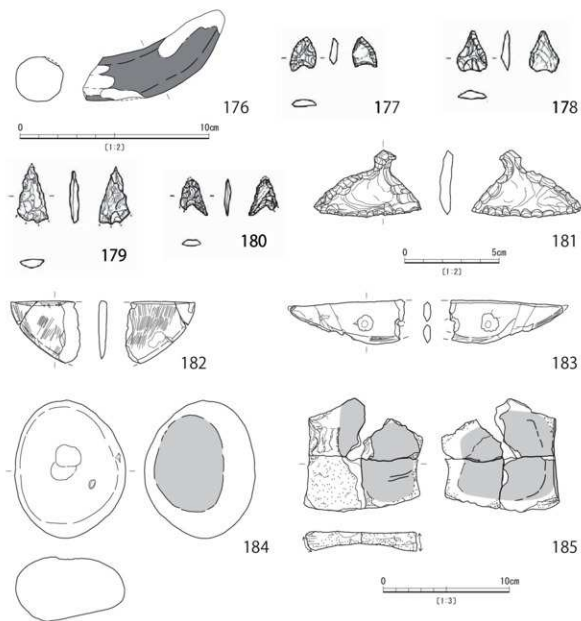


図20 SB502出土遺物2 (176-181 : S=1/2, 182-185 : S=1/3)

8E区SB201 (図21)

8E区のはほぼ中央に位置する。周辺には北にSK201、SK202が位置する。平面は略方形を呈する。北東-南西方向で1.3m、北西-南東方向に1.5mをはかる。床面はほぼ平らであるが、遺構の南東側で若干すり鉢状の面をなす。深さは最も深く6cmである。

出土遺物 (図22)

図化可能な資料は甕形土器に限られる。186、187、188は口縁部で、187は口縁部が逆「く」字形に立ち上がる。188は口径26.0cmに復元可能で、口縁下に突帯が1条廻る。189と190は甕形土器の底部である。191は壺の底部で、底径5.7cmに復元可能である。

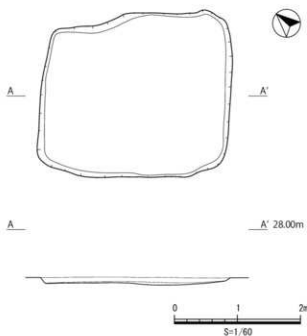


図21 8E区 SB201

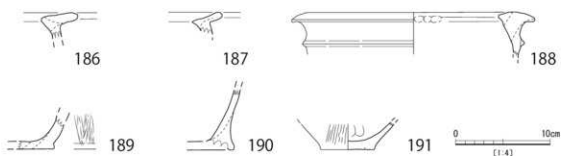


図22 SB201出土遺物

10E区 SB407 (図23)

10E区南西側、SB408から北西4.2mに位置する。円形のプランを呈すると推定されるが、攪乱のため北西部のみ残存する。本来の径は約3.2mと推定される。深さは16cmである。

出土遺物 (図24-26)

192から210は甕形土器である。口縁部は逆「L」字形に屈曲し水平な口縁部をなすもの、やや立ち上がるものが認められる。200や205などは鋤形の口縁であるが内面の突出は顕著ではない。207は胴部片で突帯が1条廻る。208から210は甕の底部で、厚く上げ底になる。

211から232も甕形土器である。211は鋤形口縁で水平な口縁をなす。口縁下に突帯が1条認められる。212から232は底部で、212から227は上げ底の厚い底部である。233は蓋である。234、235は支脚

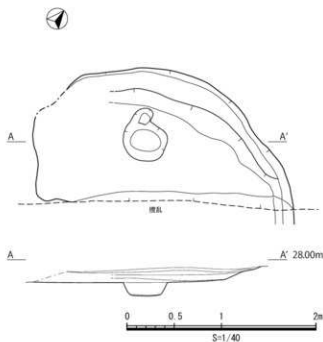


図23 10E区 SB407

である。

236から242は壺形土器である。236は広口壺で口径27.0cmに復元できる。237は頸部で突帯が1条認められる。238、239、240は胴部である。241と242は壺形土器底部で、241は底径10.0cmに復元可能である。243は断面三角形の口縁を呈する甕棺である。胴部上半部、口縁部下位に突帯が1条つく。口径は、45.4cmに復元できる。

10F区 SB408 (図27)

10F区北西側で10E区との境界近くに位置する。北西約4.2mのところ SB407が位置する。遺構の北西側は攪乱のため残存しない。南東側壁面から攪乱までが約2.4m、南西壁-北東壁2.4mである。床は中央がややくぼむすり鉢状を呈する。深さは最大で22cmである。

出土遺物 (図28)

244と245は甕形土器の口縁部である。244は屈曲した短い口縁をなす。245は断面三角形の口縁部がつく。246は器台の脚部である。

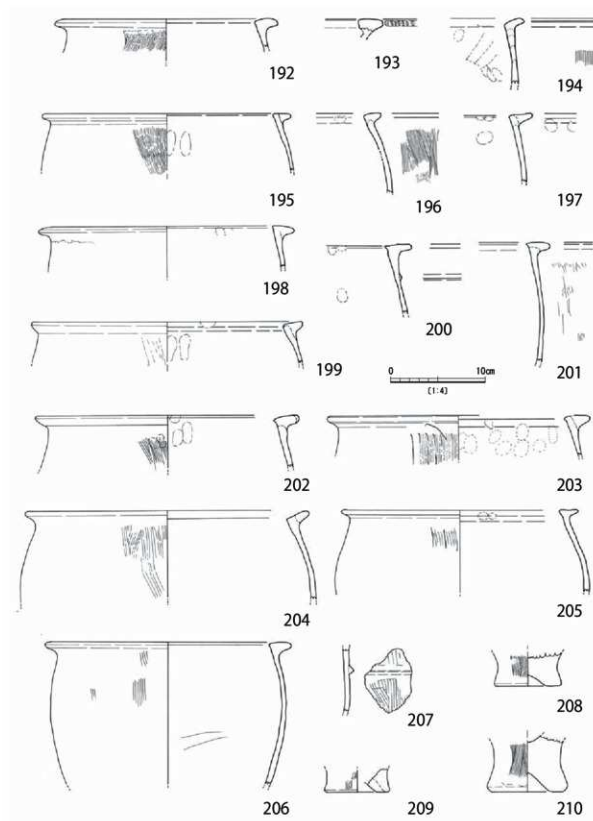


図24 SB407出土遺物1

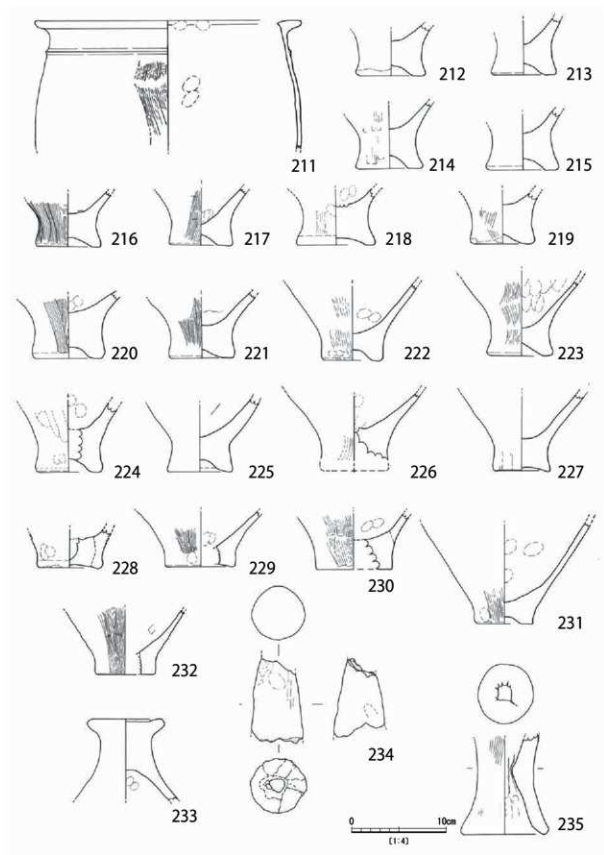


図25 SB407出土遺物2

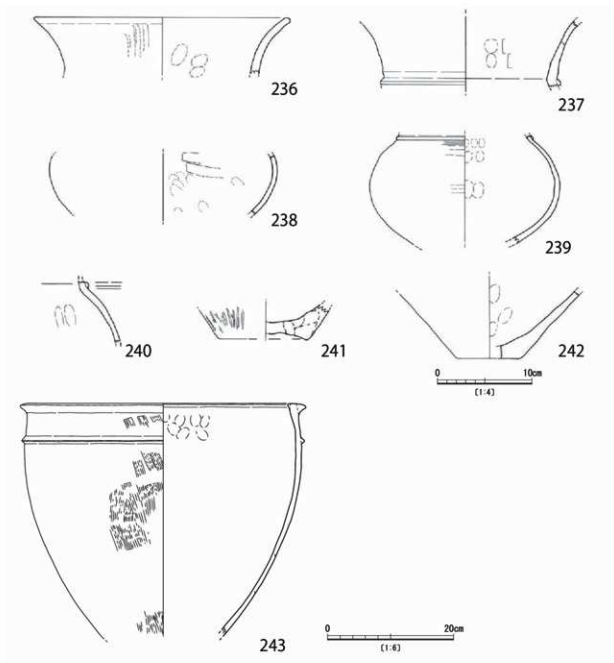


図26 SB407出土遺物3 (236-242 : S=1/4, 243 : S=1/6)

11F区SB506 (図29)

11F区西側に位置する。周辺には西側にSB503、SB504、SB505が位置し、南東側にはSB507、SB508、SB509が位置する。遺構の平面は隅丸長方形を呈するが、北東隅は米軍キャンプの頃の溝に切られる。東西方向長軸3.72m、南北軸は2.54mである。床面はほぼ平らで深さは最大で14cmである。出土遺物 (図30)

247と248は甕形土器で口縁部が逆「L」字形に屈曲しやや立ち上がる。247は口径26.6cmに復元できる。249は壺形土器の胴部片で「M」字形突帯が廻る。250は甕形土器の底部で、底径8.4cmである。

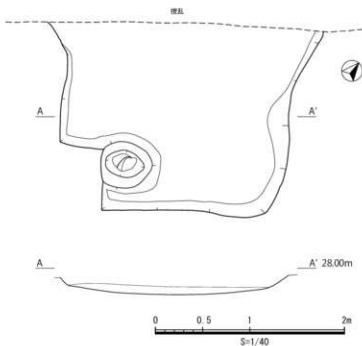


図27 10F区SB408



図28 SB408出土遺物

11F区SB507 (図31)

11F区中央部に位置する。南西側にSB508が隣接する。平面形は隅丸長方形を呈するが、南東隅は別の遺構によって切られる。北西-南東方向の長軸は3.26m、南西-北東方向の短軸は1.94mである。床面はほぼ平らで、深さは18cmである。

出土遺物 (図32)

251から253は甕形土器の口縁部である。251と252は「く」字形に屈曲する。254は小形の壺形土器口縁部である。255は壺形土器で鐮形の口縁部外面に刻み目が施される。256は壺形土器底部で、底径10.0cmに復元可能である。257は器台脚部で、底径9.0cmに復元できる。258は輝緑凝灰岩製の石廬丁片である。表面の研磨痕が明瞭である。

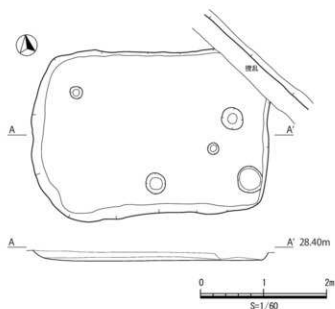


図29 11F区 SB506

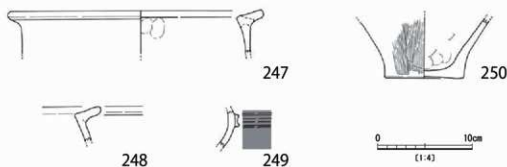


図30 SB506出土遺物

11F区 SB508 (図33)

11F区中央部、SB507の南西側に位置する。平面は北西端部が鋭角に突き出た変則的な形態をしている。北西-南東方向で最大3.6m、北東-南西方向で最大2.14mをはかる。床面はほぼ平らで、深さは22~24cmである。

出土遺物 (図34)

259と260は甕形土器の口縁部で、259は内面に明確な稜をなし屈曲する口縁部である。260は口縁部がゆるく屈曲し端部が丸みを持つ。261と262は甕形土器の底部片で、261は上げ底状の底面をなす。

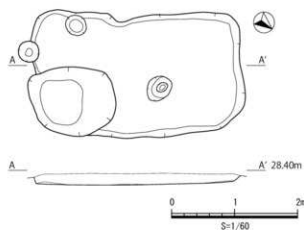


図31 11F区 SB507

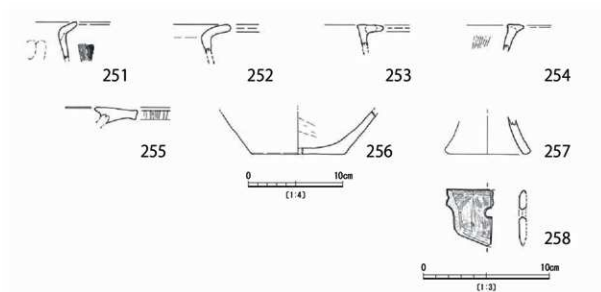


図32 SB507出土遺物 (251-257 : S=1/4, 258 : S=1/3)

11F区 SB509 (図35)

11F区中央部、SB508の南側に隣接して位置する。平面は隅丸方形ないしは長方形を呈すると推定されるが、遺構の南東部は調査区外で未調査である。北西-南東方向の長軸で最大2.66m、北東-南西方向で2.5mをはかる。床面はほぼ平らで、深さは22cmである。

出土遺物 (図35)

263は甕形土器で鋤形の水平な口縁部をなす。口径は26.7cmに復元できる。264は甕形土器底部で外面にハケメがわずかに残る。底径8.0cmに復元できる。

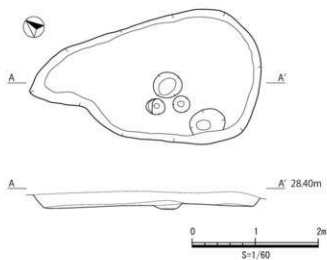


図33 11F区 SB508



図34 SB508出土遺物

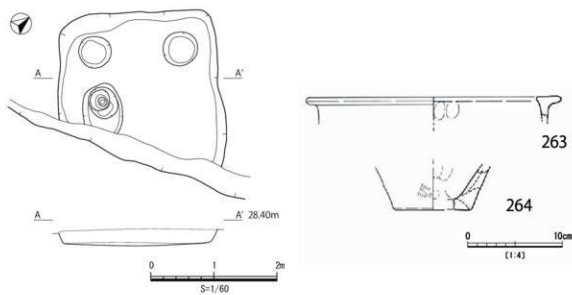


図35 11F区 SB509と出土遺物

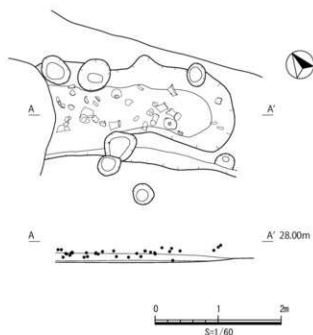


図36 7D区 SK508

土坑

7D区 SK508 (図36)

7D区北西部に位置し、西側をSB502に切られる。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向の遺構層において複数の土坑が重複している。最大幅は1.48m、長軸方向で2.84m 残存する。床面はほぼ平坦で、深さは14cmである。

出土遺物 (図37)

265から271は甕形土器である。265と266は鋤形の口縁でほぼ水平ないしはやや内側に傾く口縁をなす。267も水平な口縁を呈する。268は甕形土器で、口縁部が緩く外反し端部が丸みを帯びる。269から271は底部である。

272から274は壺形土器である。272は素口縁の壺形土器で、外面および内面口縁部から頸部中位までが丹塗りである。273と274は壺形土器の底部である。275から277は高坏である。275は杯部で、鋤形口縁の口縁端部がやや下垂する。口径は24.0cmに復元できる。276と277は高坏脚部で、276は外面丹塗りである。

278と279は器台である。280は土製紡錘車で、ほぼ半分が残存する。281は輝緑凝灰岩製石庖丁の破片である。282は磨製石剣の切先で、残存長は5.3cmである。

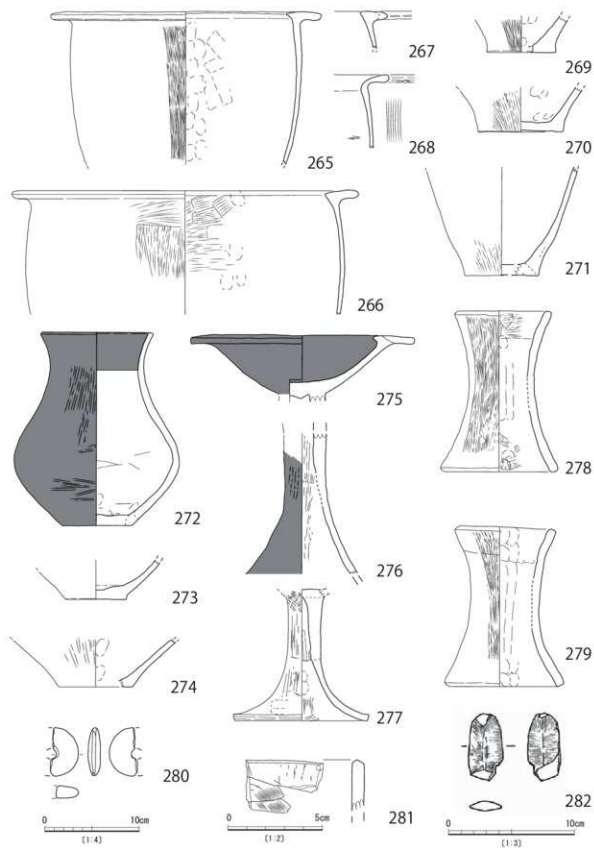


図37 SK508出土遺物 (265-280 : S=1/4, 281 : S=1/2, 282 : S=1/3)

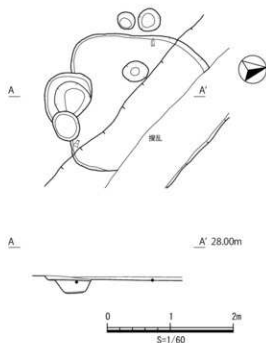


図38 7D区 SK509

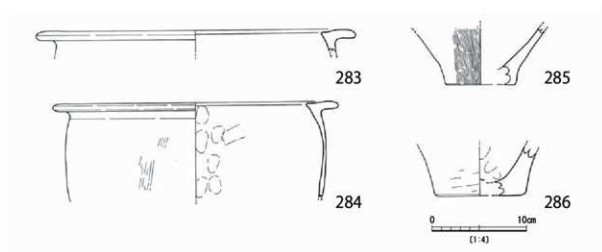


図39 SK509出土遺物

7D区 SK509 (図38)

7D区の中央部西側に位置する。北4.8mのところりにSK508が位置し、南10mにSK510が位置する。略南北方向で2.2m残存し、東西方向で2.16mをはかる。土坑の南西肩部を複数の土坑に切られ、北東部は米軍期の溝によって切られている。床面はほぼ平坦で深さは4cmほどである。

出土遺物 (図39)

283と284は甕形土器で口縁部は鋤形をなす。口径は283が33.4cm、284が30.0cmに復元できる。285と286は甕形土器の底部で、底径は7.4cmと9.4cmに復元できる。

Ⅲ 調査の結果

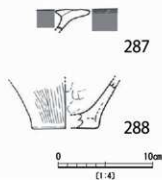
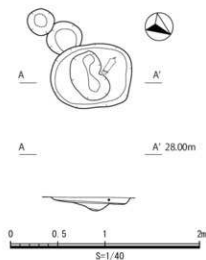


図40 7D区 SK510と出土遺物

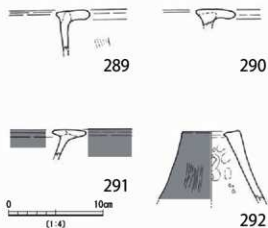
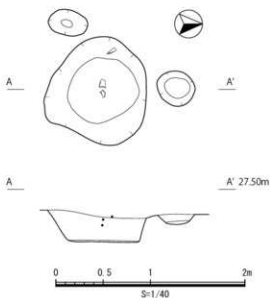


図41 7D区 SK511と出土遺物

7D区 SK510 (図40)

7D区の南西部に位置する。北にSK509、南6.75mにSK511が位置する。平面形は土坑南東部が円弧を描き、北西部は隅丸方形を呈する。北西-南東方向で84cm、北東-南西軸で幅68cmをはかる。土坑中央部が不定形にくぼんでいる。そのほかの部分は床面がほぼ平坦である。深さは6cmで、中央のくぼんだ部分は深さ14cmである。

出土遺物 (図40)

287は高坏の口縁部で鐏形を呈する。288は甕形土器の底部で底径は7.2cmに復元できる。

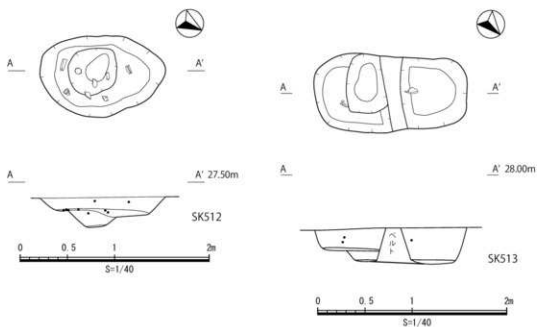


図42 7D区 SK512, SK513

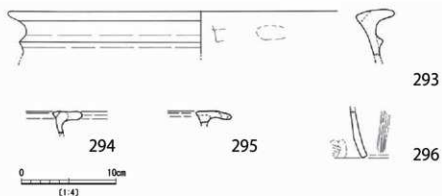


図43 SK512出土遺物

7D区 SK511 (図41)

7D区南部、7E区との境界近くに位置する。すぐ西側にSK512が位置する。平面はやや不正形の円形を呈する。径は最大で1.14mである。床面はほぼ平坦で、深さ25cmから32cmである。

出土遺物 (図41)

289と290は鋤形口縁の甕形土器である。291は壺形土器、292は高坏ないしは脚付椀などの脚部であろう。

7D区 SK512 (図42)

7D区の南部で、SK511の75cmほど西側に位置する。平面は北西-南東方向に長い長楕円形を呈す

III 調査の結果

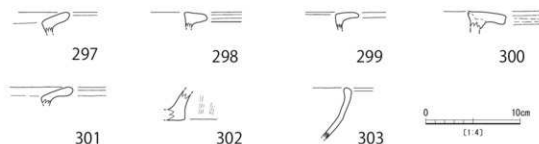


図44 SK513出土遺物

る。長軸方向で1.32m、短軸方向で最大幅86cmである。土坑中央部が深くなっている。深さは中央部の深い部分で32cm、その他の1段高い部分で13~20cmである。

出土遺物 (図43)

293、294、295は甕形土器で鋤形の水平な口縁をなす。293は口縁下に突帯が1条廻る。口径は40.0cmに復元できる。296は器台脚部片である。

7D区SK513 (図42)

7D区南部に位置し、SK512の西側1.2mのところにある。平面は隅丸長方形を呈する。南東-北西方向で1.6m、北東-南西方向で幅82cmである。土坑北側は深さ36~38cmほどで、南側は若干浅く22cmほどの深さである。

出土遺物 (図44)

297から302は甕形土器である。297は逆「L」字形の口縁部で内側に傾く。300は鋤形の水平な口縁で端部がやや下垂する。301は「く」字形に緩く屈曲する口縁で端部が丸みを帯びる。302は底部片で外面にハケメがわずかに残る。303は鉢形の土器で、口縁端部がやや肥厚する。

8B区SK101 (図45・46)

8B区の中央から西側にかけて位置する大形の土坑である。南に縄文時代の可能性がある流路跡(SD002)が隣接し、東側には8C区から本遺構をよけるように蛇行する溝状の遺構が位置する。この土坑は1979(昭和54)年度の5次調査に一度調査されているが、その後1985(昭和60)年度に行われた47次調査の際に再度発掘されている。その際、1979年度時の調査範囲より北西側、8A区-8B区の境界側まで調査が行われた。その結果、本土坑の規模も若干広がった。

平面は残存部でやや不正な半円形プランを呈しているが、北西側は擾乱により消失しており、本来のプランは不明である。残存する遺構の規模は、北西-東南軸は最大9.45mで、土坑北西側中央部の半円形に張り出した部分からは南東方向に7.8mが残存する。北東-南西方向では最大長13.8mをはかる。土坑床面は比較的平坦であるが、土坑中央部や北東側でやや凹凸がみられる。

また、上述のとおり本遺構を取り囲むように北東-南東-南西に溝状の遺構が認められるが、南西方向の溝状遺構の底面レベルに対し本土坑の床面はレベル的に若干高い(図45)。一方、北東から南東側の溝状遺構の底面は概して本遺構床面よりやや高い傾向がうかがえる。

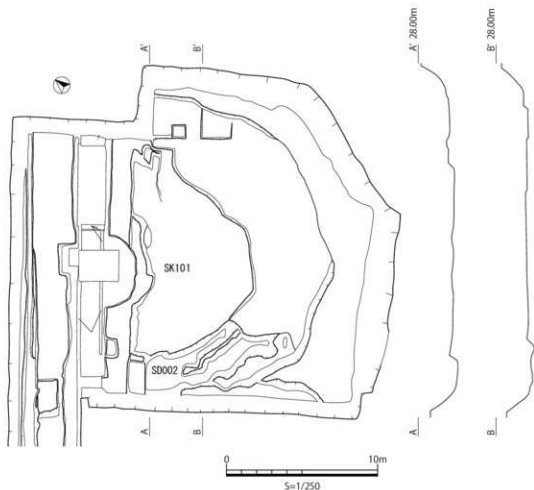


図45 8B区 SK101と周辺の遺構

出土遺物は両年度の調査によって多量に出土しているが、1979年度5次調査時の記録からは遺物の出土位置を判断することが困難であり、一部のグリッドで分層がなされているもののその区分がどの程度遺構全体で行えているのかも不明であった。一方、1985年度調査では土坑の最下層出土遺物がその他の上層部分から出土した遺物と弁別可能であった。そのため、以下の遺物の報告では1985年度調査で土坑最下層から出土した遺物と、それ以外の上層遺物ならびに5次調査出土遺物を区分して報告する。

出土遺物

(A) 最下層出土遺物 (図47-50)

304は蓋である。口縁部近くに焼成前穿孔がみられる。305から313は短頸壺である。305は口縁部が短く外反する。306から309は口縁が短く外側に張り出し、逆「L」字形を呈する。306と309は外面が丹塗りである。310と311は口縁が長く伸びる。312は口縁部が「く」字形に屈曲し、口径23.0cmに復元できる。311と312は焼成前穿孔が口縁部にみられる。313は壺形土器の底部で、底径は11.2cmに復元できる。

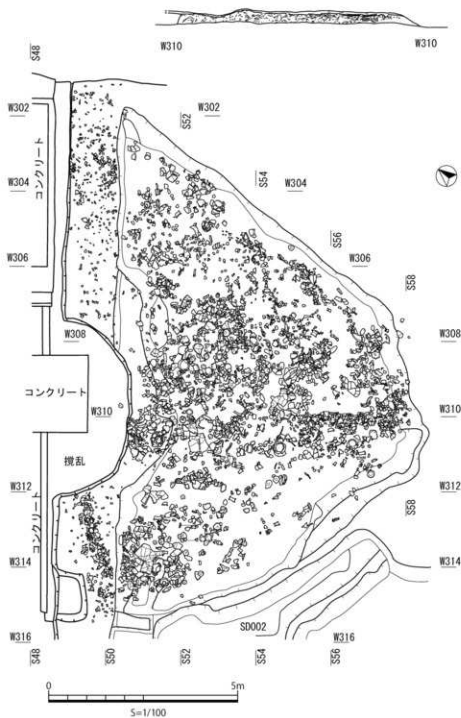


図46 8B区SK101と遺物出土状況

314から316は椀形の土器である。314は底部からボール状にそのまま口縁部に至る。315は口縁端部が内外面に短く張り出す。316は胴部がやや広がり気味にたちあがり、口縁部は鋤形を呈する。

317は樽形の小型甕で、口縁部は逆「L」字形をしており、胴部に断面三角形の突帯がつく。318から321は小形の壺形土器である。318は鋤形の口縁で内面の突出が短くつく。319も逆「L」字形の鋤

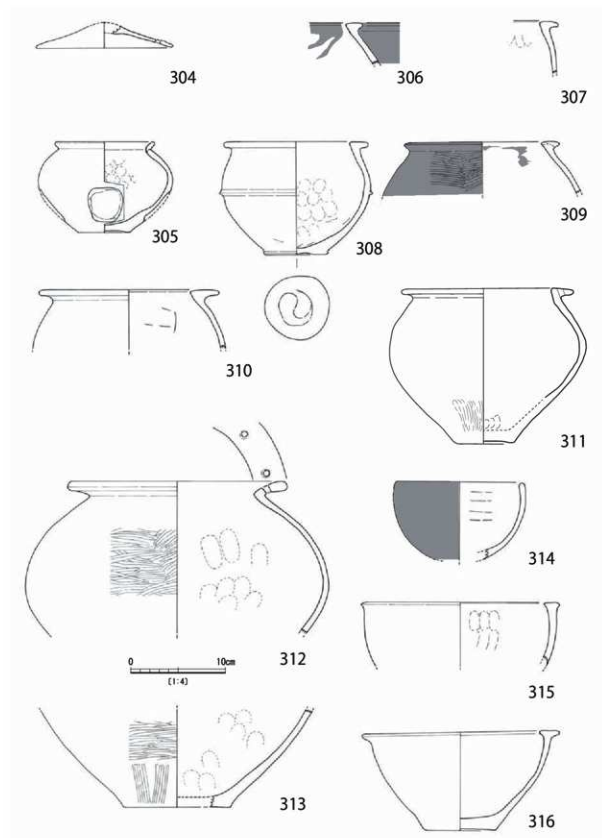


図47 SK101最下層出土遺物1

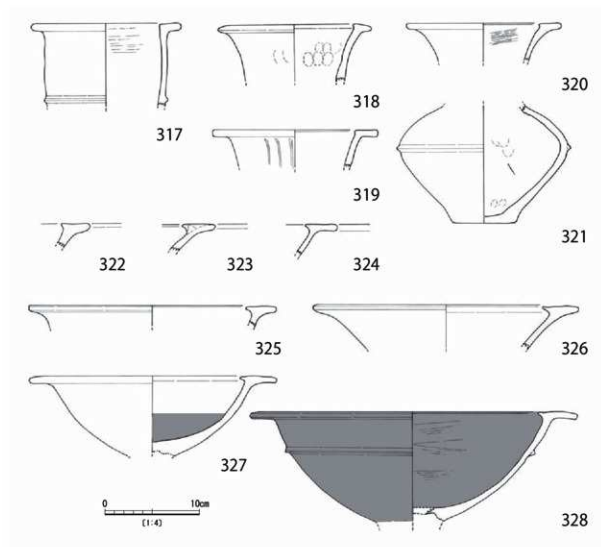


図48 SK101最下層出土遺物2

形口縁で口縁がやや伸びる。頸部に暗文が施される。320は鋤形口縁である。321は胴部最大径部に断面三角形の突帯がつく。底径は6.7cmである。322から328は高坏である。322、323、324は口縁部の小片で鋤形口縁を呈する。325から328も鋤形口縁であるが、327、328は口縁が伸びる。328は口径34.4cmに復元でき、坏部口縁下位に突帯がつく。

329から336は広口壺で、329から332と335は鋤形口縁である。いずれも内面の突出は明確であるが、口縁はさほど伸びない。また、330と332は頸部に突帯がつく。329、331、333は胴部に1条突帯がつき、334と335は胴部に2条突帯がつく。336は素口縁の広口壺で、頸部4か所に暗文が施されている。

337から340は甕形土器である。337は口縁部が逆「L」字形で口縁部がやや肥厚する。338は鋤形口縁で口縁がやや伸びる。口径32.4cmに復元できる。339は口縁がやや伸びるとともに下垂する。底部に焼成後穿孔が施される。340は口径43.0cm、器高59.3cmに復元できる大形の甕で、鋤形口縁を呈し口縁部下位に突帯が2条つく。

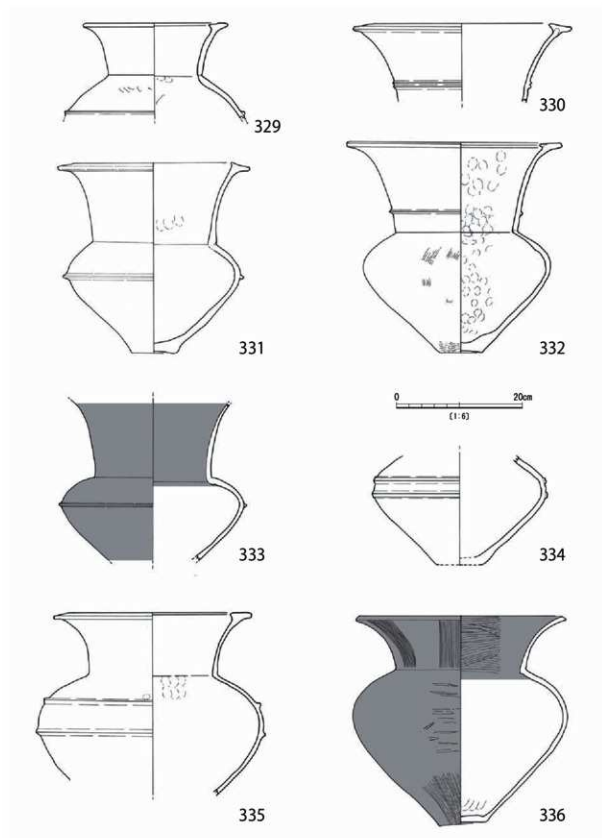


図49 SK101 Ⅱ下層出土遺物3

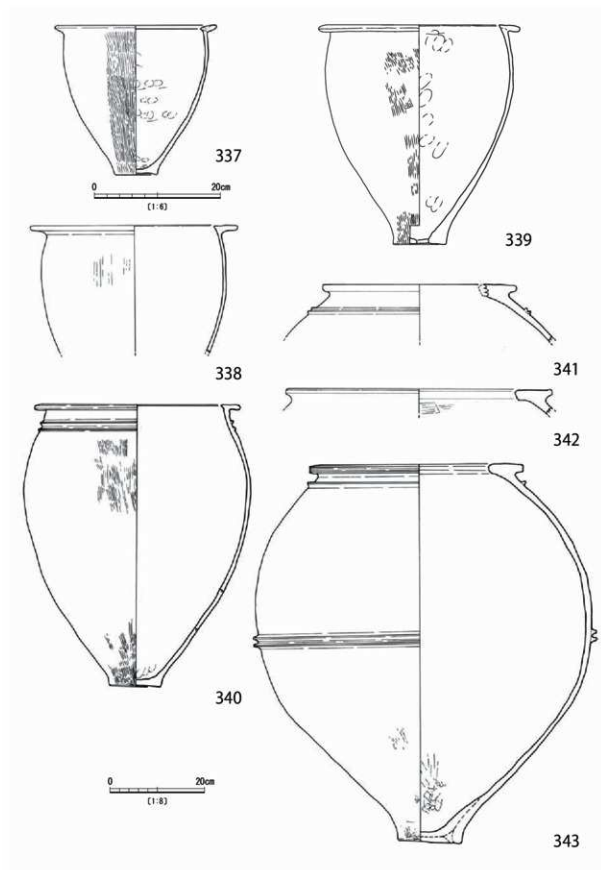


図50 SK101最下層出土遺物4 (337-339 : S=1/6, 340-343 : S=1/8)

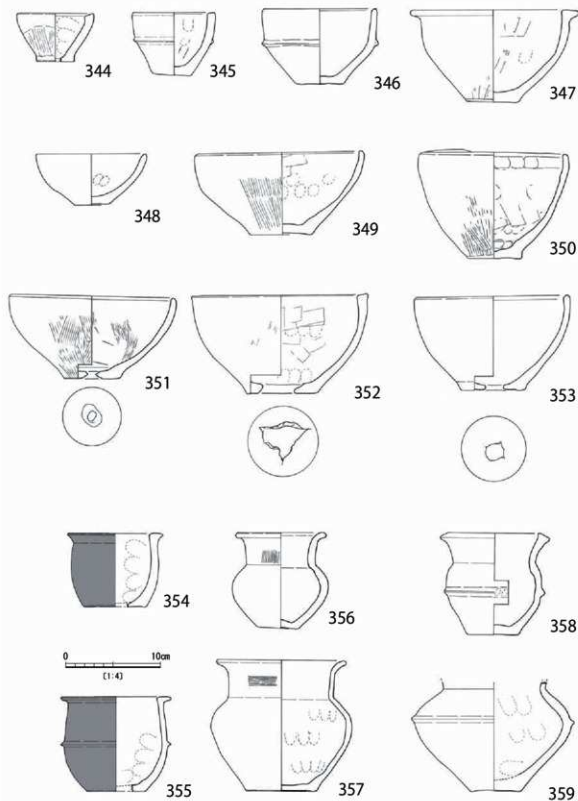


図51 SK101出土遺物1

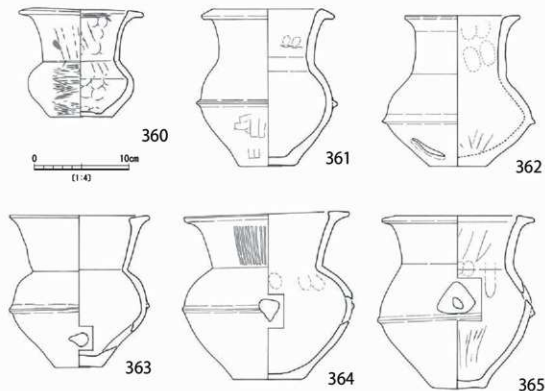


図52 SK101出土遺物2

341から343は甕柄である。いずれも口縁部下位ですぼまる樽形の器形である。341は口縁下に断面「M」字形突帯がつく。342は口縁が内面に大きく突出する。口径は41.2cmに復元できる。343は口縁部が内面に大きく張り出し、口縁下と胴部最大径部に突帯がつく。胴部最大径部から底部に向かって大きくすぼまる。口径は45.0cmに復元可能で、器高80.3cmである。

(B) その他の層位出土遺物 (図51-66)

344から353は椀形土器である。344は小形であるが器壁が厚い。345と346は胴部最大径部に微小な突帯がつく。347は逆「L」字形の短い口縁を呈する。348から353は丸みを持つ胴部から素口縁に至る器形を呈する。351、352と353には焼成後穿孔がみられ、351は内面から、352は外面から打撃が加えられている。354と355は小形の樽形甕と類似した器形である。355は逆「L」字形の口縁で、胴部に突帯がつく。

356から365は小形壺で、356、357、358はいずれも素口縁で、358と359には胴部に突帯がつく。360から365は口縁部が鋤形ないしは逆「L」字形を呈する小形壺で、360以外は胴部に突帯がつく。また、363は胴部下半、364、365は胴部最大径部近辺に焼成後の穿孔ないしは打ち欠きがみられる。

366は広口壺で胴部最大径部に突帯がつき、外面および内面頸部および胴部上端部が丹塗りである。367は袋状口縁壺で外面は丹塗りで、胴部に打ち欠きがなされている。368は蓋で、焼成前穿孔がみられる。外面は丹塗りである。369から373は短頸壺である。口縁部はいずれも逆「L」字形ないしは「く」字形を呈する。また、369以外は外面および口縁部内面が丹塗りである。

374から400までは、一部を除き鋤形の口縁を呈する広口壺である。374、375、376、377、378、379、

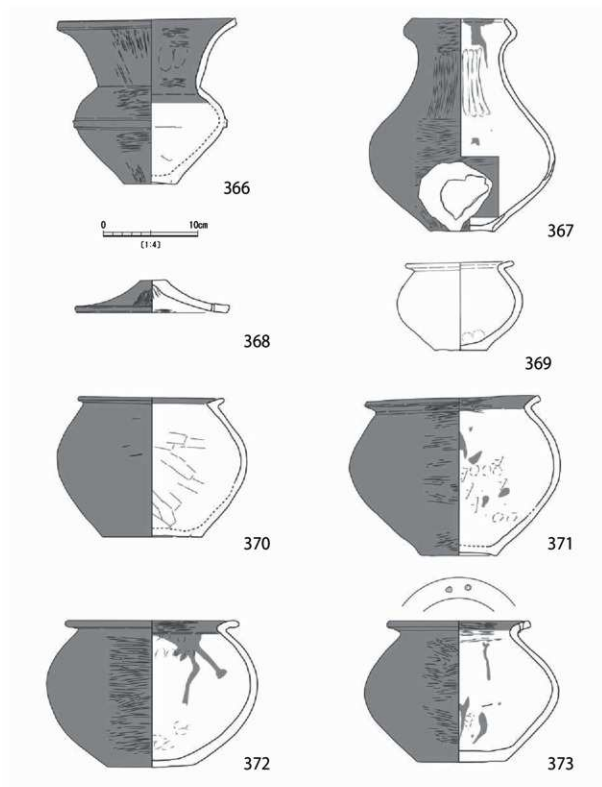


図53 SK101出土遺物3

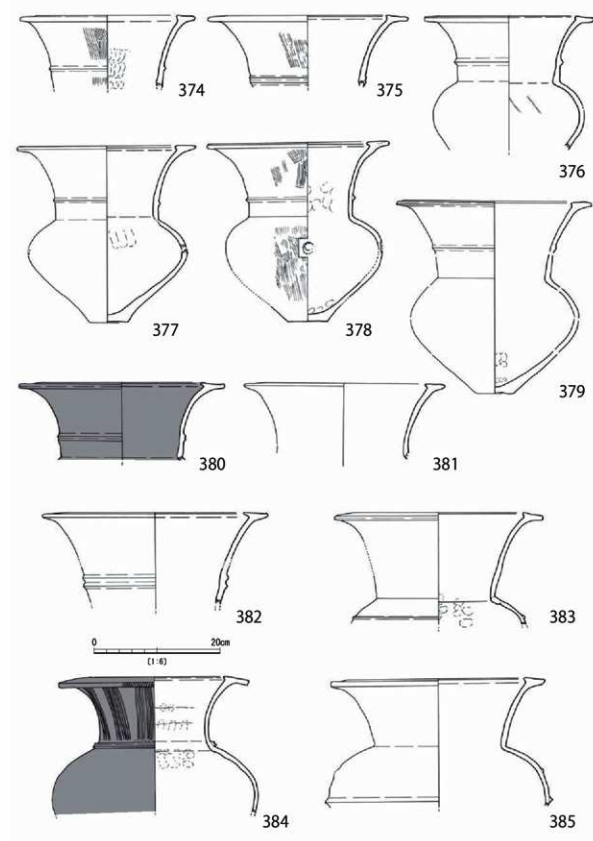


図54 SK101出土遺物4

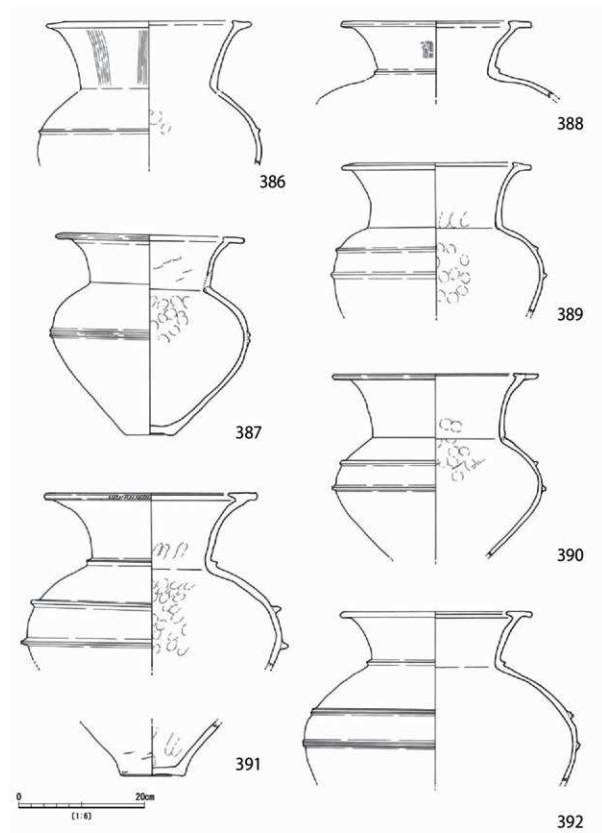


図55 SK101出土遺物5

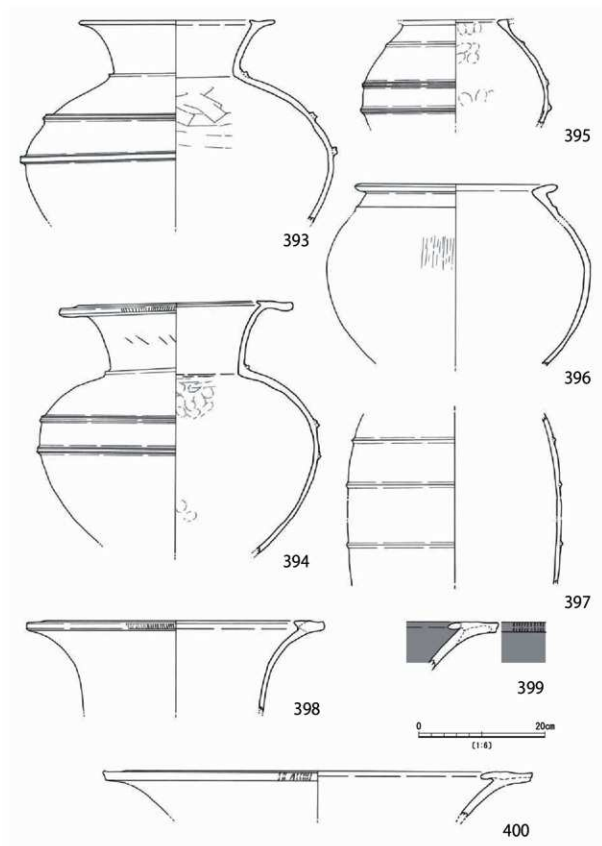


図56 SK101出土遺物6

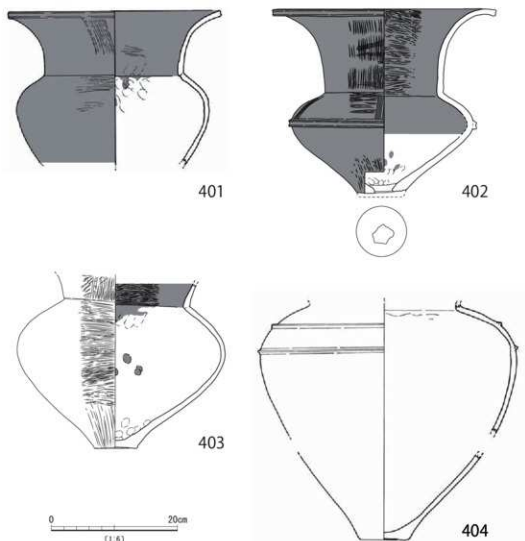


図57 SK101出土遺物7

380、382などには頭部に1条ないしは2条の突帯がつく。384は頭部と胴部の境に突帯がつき、頭部に暗文が施される。386、387、389、390、391、392、393、394は胴部に1条ないしは2条の突帯がつく。また、これらのうち391、392、393、394などは胴部の張りがやや強く、より扁平な器形になると推定される。395は無頭の壺で胴部に3条の突帯がつく。396は口径が32.4cmの大形の短頸壺で、口縁下位に微細な突帯がつく。397は全体の器形は不明であるが、あまり胴の張らず口縁部に向かってやや胴部がすはまる器形である。突帯が残存部位で3条認められる。398と400は口径がそれぞれ47.7cm、69.0cmに復元でき、他の広口壺に比べサイズが一回り大きな壺といえる。399も400と同様の大型の壺の口縁であろう。いずれも鋤形口縁である。399と400は口縁が伸び、双方とも口縁端部に刻み目が施される。

401と402は素口縁広口壺である。402は外面および内面の胴部最大径部付近まで丹塗りである。また、丹の付いた指で器面を触った痕跡として胴部内面下半に顔料が付着している。底部には焼成後の

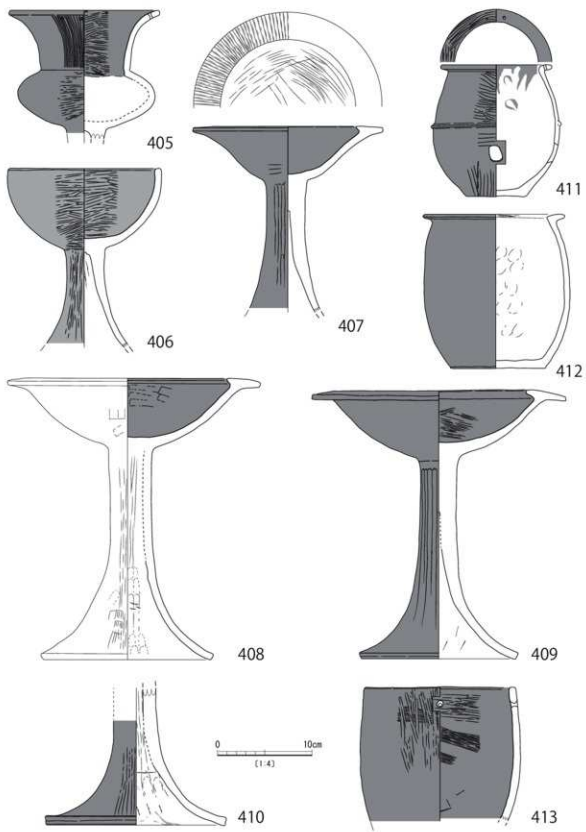


図58 SK101出土遺物8

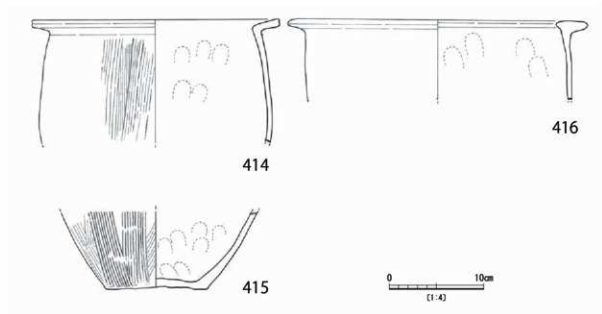


図59 SK101出土遺物9

穿孔が施されている。403は壺の頸部から底部で、頸部内面に丹塗りがなされている。また、胴部には402同様に顔料のついた指で器面を触った痕跡として顔料が付着している。404は壺の胴部である。胴部上半に突帯が2条つく。

405は脚付広口壺で、丁寧な研磨が施され、口縁部近くに焼成前穿孔が2つセットで施されている。406は椀形高坏で、外面と碗内部が丹塗りである。407から410は高坏である。407は406と同様に外面と坏部内面に丹が施される。また、口縁部上面に暗文が施されている。411と412は樽形甕で、双方とも外面が丹塗りである。411は口縁部に焼成前穿孔が2つ施されており、胴部下半には焼成後の穿孔が行われている。413は素口縁の樽形甕といえるような器形である。口縁部下位に焼成前穿孔がなされ、内外面とも丹塗りである。

414、415と416は甕形土器である。414は「く」字形の口縁を呈し、416は鋤形口縁である。415は甕の底部で414と同一個体と推定される。

417から424は器台である。425から436は筒形器台である。425、426、427は銚部分の破片、428、429、430は脚部片である。428、429、430は透かしがあり、429は三角形の透かしである。431、432、433、434、435、436などは外面丹塗りであるが、434は銚の下部には丹が塗られていない。また、432に端的にみられるが、筒部分内面は器面の凹凸がほかの部分に比べ顕著である。

437から439は瓢形土器である。438や439などは内面あるいは内外両面に丹の痕跡がみられる。

440から443は樽形の器形を呈し、口縁部下位に銚上の大きな突帯がつく甕形土器である。外面調整はいずれもハケメである。口径は440と441がそれぞれ23.2cm、21.7cmに復元でき、442はやや大きく口径27.4cmに復元できる。

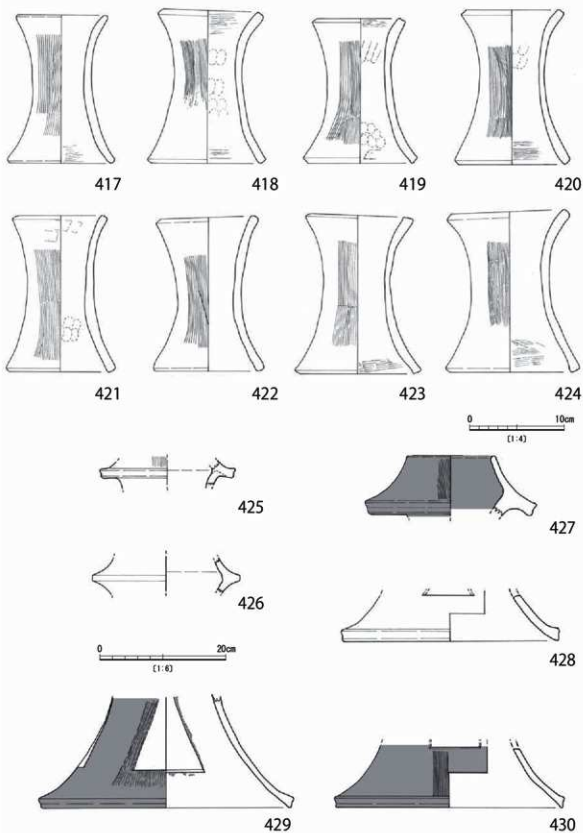


図60 SK101出土遺物10 (417-424 : S=1/4, 425-430 : S=1/6)

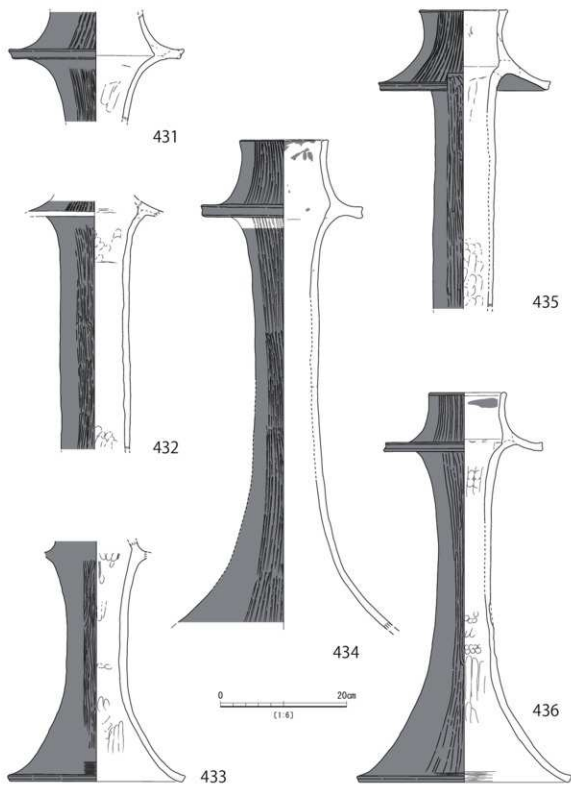


図61 SK101出土遺物11

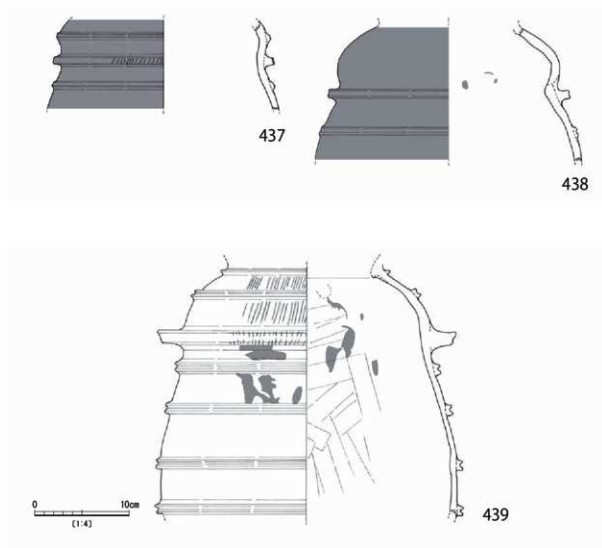


図62 SK101出土遺物12

444から462は甕棺である。444から449は口縁部片で、444と445は内側への突出はさほどもないが、その他の446、447、448、449は内面に大きく張り出す口縁である。450から452は内側へ大きく口縁が張り出しT字形の口縁を呈する。451と452には口縁下位に微細な突帯が1条あるいは2条つく。453、454、455、456、457、458、459は口縁部で強くすぼまる器形を呈する。460、461は「く」字形口縁を呈し、口縁下位に突帯を付す。

463は瓢箪形土器で、外面丹塗りである。464は台付壺である。胴部が扁平に張る。465は支脚で、非常に作りが粗い。466と467は土製紡錘車で、466は径3.3cm、467は径6.6cmである。468は土製勾玉で、残存長4.0cmである。469は土製の投弾で全長4.65cm、最大径2.55cmである。470と471は磨製石剣で、470は輝緑凝灰岩製、471は粘板岩製である。472は粘板岩製と考えられる柱状片刃石斧で残存長7.7cmである。473は鋳造鉄器片である。最大長2.5cm、最大幅4.6cm、最大厚0.9cm、重量は7.3gである。

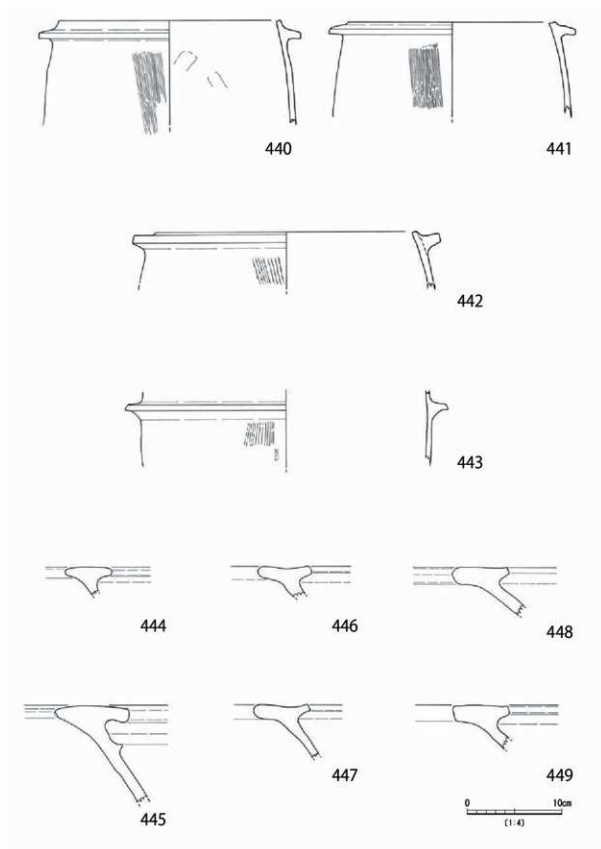


図63 SK101出土遺物13

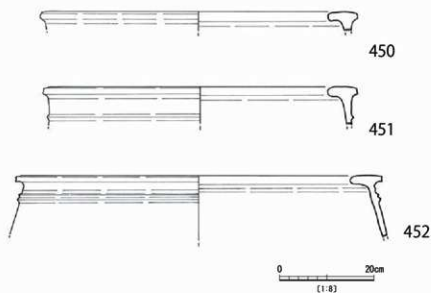


図64 SK101出土遺物14

8C区 SK103 (図67)

8C区の中央部東側、SK104の北東約5mに位置する。平面は遺構の北東側のみが記録されており、南西側については不明である。北東側残存部は不正円形を呈し、北側がやや張り出したような形態である。北西-南東方向の最も残りの良い部分で1.74m、南東-北西方向で1.38mをはかる。床面は北東側の張り出し部からややきつい傾斜で最深部に至り、南東方向に緩やかにレベルが高くなる。断面の土層断面から北東部の張り出し部分の土坑を切る形で南側の土坑が掘り込まれているものと判断できる。当初の土坑の深さは82cm、その後形成された土坑は断面を見る限り最も深くて64cmが残存している。

出土遺物 (図68)

474、475、476は甕形土器である。474は口縁部片で、断面鋤形の水平な口縁部がつくが、内面の突出は弱い。口径は24.0cmに復元できる。475は断面鋤形で口縁端部がやや下垂する口縁部を呈し、口縁部下には1条の突帯が廻る。口径は30.0cmに復元できる。476は甕形土器底部で、底径は6.8cmである。

477は短頸壺の口縁部で、口径は14.0cmに復元できる。479、480は壺形土器の底部である。479は器表面の風化が著しく調整は不明であるが、内面に指頭圧痕が認められる。底径は8.4cmである。480の外面には丹が施される。478は高坏の坏部である。口縁は断面鋤形で、水平な口縁部を呈する。器表面の風化のため顔料が大部分剥離しているが、内外面ともに丹が部分的に残存している。口径は25.6cmに復元できる。

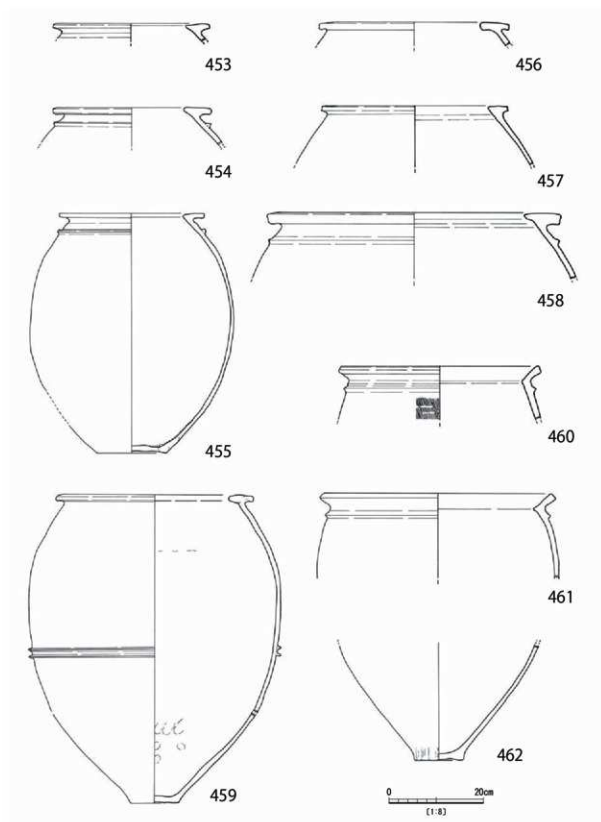


図65 SK101出土遺物15

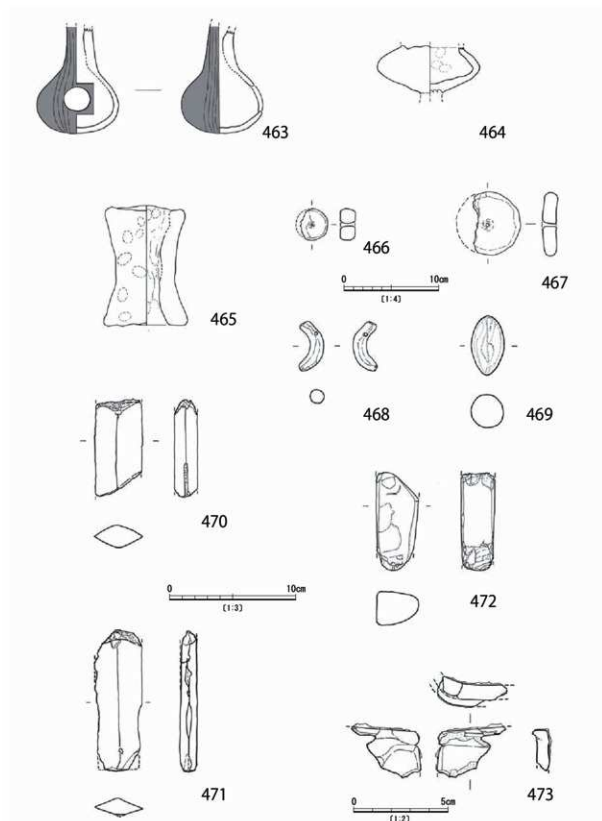


図66 SK101出土遺物16 (463-469 : S=1/4, 470-472 : S=1/3, 473 : S=1/2)

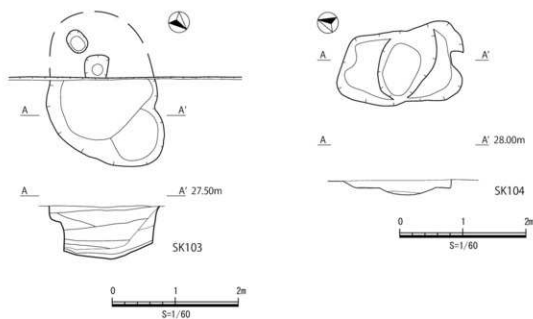


図67 8C区 SK103, SK104

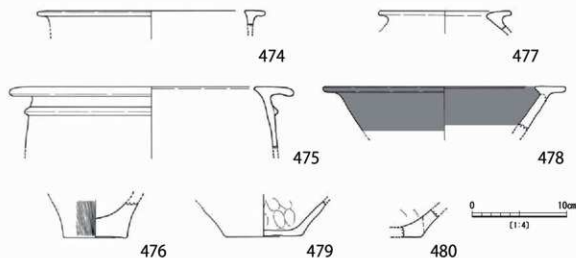


図68 SK103出土遺物

8C区SK104 (図67)

8C区中央部、SK103の南西約5mに位置する。不正な方形プランを呈し、土坑中央部には浅く略楕円形を呈する掘り込みがみられる。略南北方向の長軸で最大1.82m、略東西方向の最大幅は1.26mである。中央の楕円形に深くなった部分は東西方向で最大1.22m、南北方向で84cmである。床面は中央部の一段深い部分はすり鉢状の形態をなし、そのほかの部分はほぼ平らである。深さは中央の楕円形部分で最大24cm、そのほかの部分は12~14cmである。

Ⅲ 調査の結果

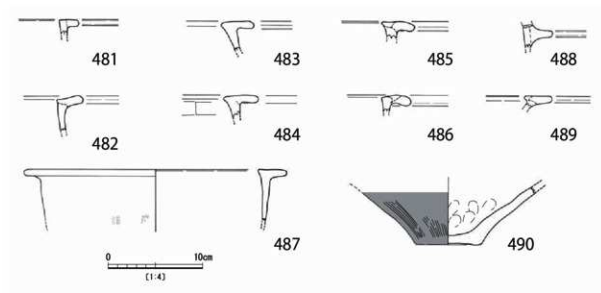


図69 SK104出土遺物

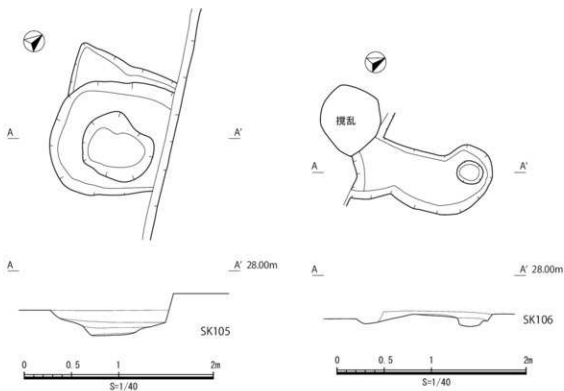


図70 8C区 SK105, SK106

出土遺物 (図69)

481から486は甕形土器の口縁部である。482はやや内側に傾く口縁である。487は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。水平な鋤形の口縁部がつく。口径は27.6cmに復元できる。

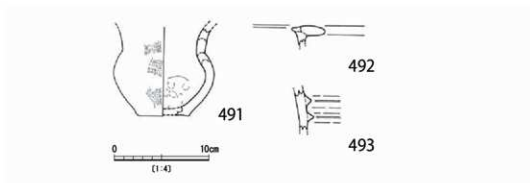


図71 SK105出土遺物

488は口縁部を欠損するが、小形の甕形土器胴部片で突帯が廻る。489は高坏ないしは壺の口縁部であるが、小片のため器種の特定はできない。490は壺形土器の底部である。外面は丹塗りで縦方向に研磨する。内面には丹は施されていないが点的に散った顔料が付着する。底径は6.8cmである。

8C区SK105（図70）

8C区東側、SK103の東約10mに位置する。平面は隅丸方形を呈すると考えられるが、北東側は未調査区のため不明である。本遺構の北西側に別の遺構が重複している。また、本遺構の中央部には不正形の一段深くなった部分がある。土坑規模は長軸で1.18m、短軸で幅1.0～1.18mである。床面は中央部の一段深い部分で24～26cm、そのほかの部分では最大18cmである。一段低い部分は比較的平らな床面であるが、そのほかの部分は中央の土坑に向かって緩やかに傾斜する。

出土遺物（図71）

491は小形の壺形土器で、口縁部を欠損する。外面調整はハケメの後ナデで、内面は指押さえて成形した後ナデている。底径は5.1cmに復元できる。492は甕形土器で、動形の水平な口縁部である。493は壺形土器胴部片で突帯が2条廻る。

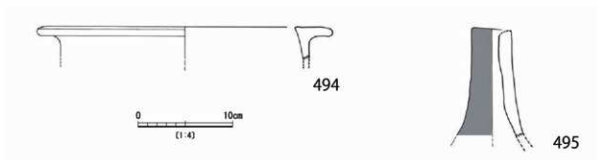


図72 SK106出土遺物

Ⅲ 調査の結果

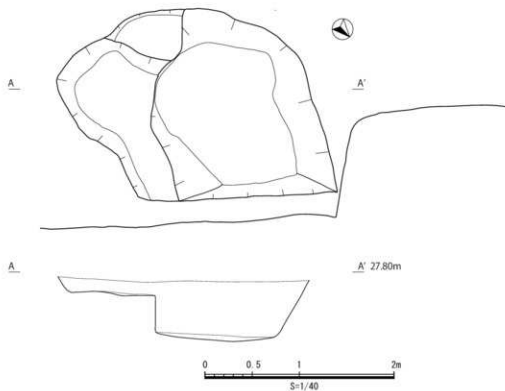


図73 8D区 SK107

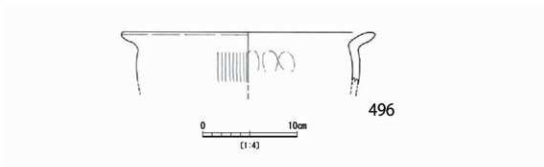


図74 SK107出土遺物

8C区SK106 (図70)

8C区東側、SK105の南約3.5mに位置する。平面は北東側に円形のやや張り出した部分をもつ不正形を呈する。また、土坑の北東部に円形のビット状の深い部分があり、遺構南部は南に向かって緩やかに傾斜している。土坑規模は北東-南西方向の長軸で1.42m、北西-南東方向で62cmである。床面は北東部のビット状の部分で一段深くなっており、別遺構が重複している可能性がある。深さは14cm。それ以外の南西側の部分は攪乱のため最深部については不明であるが5~10cmほどと推定される。出土遺物 (図72)

494は菱形土器の口縁部である。断面鋤形の水平な口縁部で口縁端部は丸みをもつ。口径は31.0cm

に復元できる。495は高坏脚部である。外面は本来丹塗りだが、器面の風化により大部分が剥落している。内面には絞り痕がみられる。残存高は11.4cmである。

8D区SK107（図73）

8D区西側に位置し、SK405の東18m、SK104の南約21mに位置する。平面形及び断面から複数の遺構が重複しているものと考えられる。北側の不正長楕円形を呈する部分が最も深く、南東側の不正方形の部分がより浅い床面をなす。さらに、南側の一段高い円弧を描く部分が最も浅い。北東側の長楕円形部分は長軸2.1m、短軸1.68m、床面はほぼ平らで深さ72cmである。南東側の不正方形の部分は長軸で1.96m、短軸1mをはかる。床面は北西側で一部やや深くなる部分がある。深さは最大で24cmである。

出土遺物（図74）

図化できた資料は1点のみである。496は甕形土器である。口縁部は立ち上がり、口縁端部が丸みを持つ。胴部外面には粗いハケメの後ナデが施され、口縁部と胴部の屈曲部下には指頭圧痕が残る。口径は26.6cmに復元できる。

8E区SK201（図75）

8E区の北部、SB201の北11.3mのところに位置する。北東側にはSK202が本遺構と一部重複して位置する。平面は不正形の隅丸方形を呈する。北西側と南東側に円形あるいは細長の長楕円形を呈する別遺構と判断される掘り込みがみられる。略方形部分は北西-南東方向で1.16m、北東-南西方向で74cmである。断面図からは遺構南西側に遺構肩から緩やかに傾斜する一段高い部分があるが、そのほかの部分はほぼ平らである。一段

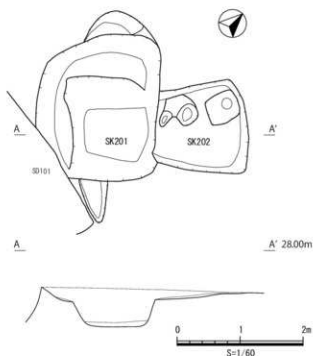


図75 8E区SK201, SK202

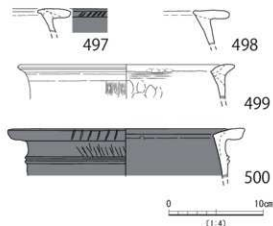


図76 SK201出土遺物

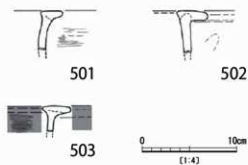


図77 SK202出土遺物

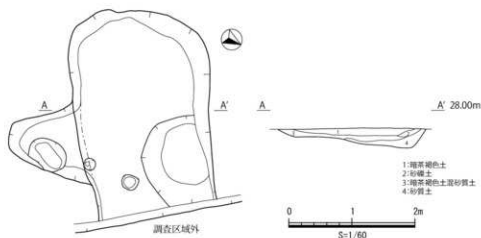


図78 9C区 SK405

浅い部分の深さは最大10cm、深い部分は28～32cmである。

出土遺物 (図76)

497、498は鋤形の水平な口縁をなす甕形土器である。467は口縁部に刻み目を施し、外面は丹塗りである。499、500も甕形土器である。500は口縁部に刻み目を施し口縁下に断面「M」字形の突帯を廻らし、突帯と口縁部間に鋸歯状の細線文を施す。口径は25.0cmに復元できる。内外面丹塗りである。

8E区 SK202 (図75)

SK201に一部重複する不正方形の土坑である。北西－南東方向の幅は74cm、北東－南西の長軸方向は1.72mである。床面は南西方向に緩やかに傾斜する。深さは最大8cmで、SK201南西側の一段高い部分の床面の深さとほぼ同じである。

出土遺物 (図77)

501は小形の壺で、直立気味に胴部から口縁部が立ち上がり、ほぼ水平な口縁部がつく。502、503は甕形土器である。502は鋤形の水平な口縁をなす。503は口縁部内面の鋤形の突出がやや明瞭である。全体的に丹の痕跡が点在しており、本来は内外面とも丹塗りである。

9C区 SK405 (図78)

9C区の東側に位置する。隅丸長方形を呈し、土坑北東側は調査区外になる。長軸は略北東－南西方向で3.3m、短軸2.3m、深さは南側で14cm、北側隅の一段深くなる部分で32cmである。

出土遺物 (図79)

504から516は甕形土器である。504は逆「L」字形の水平な口縁で、505、506、507、508は粘土貼付けの際に口縁部上面にわずかなくぼみを形成する。509、510は鋤形の水平な口縁である。511と512は口縁端部を欠損する。また、512は口縁部下位に突帯がつく。513は厚い粘土を貼付けて口縁部を形

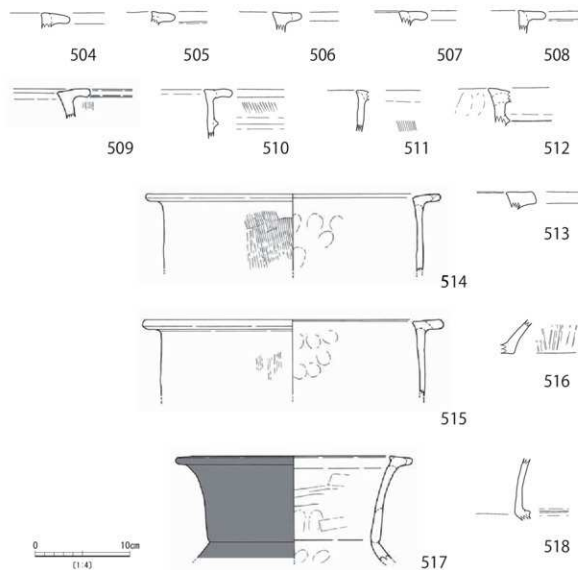


図79 SK405出土遺物

成する。514は逆「L」字形の水平な口縁部で、口径は30.6cm、515も同様に水平な口縁であるが内面の突出がややはっきりしている。口径は30.8cmに復元できる。516は底部片で外面に粗い単位のハケメがみられる。517と518は壺形土器である。517は鋤形のやや外傾する口縁部を呈し、口径は24.6cmに復元できる。518は壺の頸部で胴部にいたる屈曲部に突帯が廻る。

9D区SK305 (図80)

9D区東部と8D区西部の境界に位置する。平面は長軸端が丸味を持つほど長い形態を呈する。北東-南西の長軸で2.58m、北西-南東方向の幅が64cmである。床面は土坑中央がやや低くなる。深さは最大で30cmである。

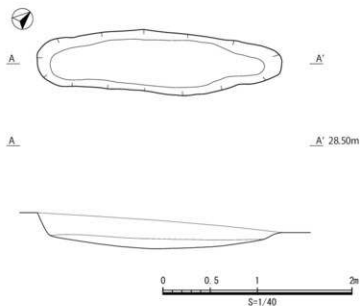


図80 9D区 SK305

出土遺物 (図81・82)

519は蓋で口径は28.4cmに復元できる。520から524は甕形土器である。520は外側に短く屈曲する口縁部である。521と522は底部で、521は厚みのある上げ底を呈し、522は平底で底面に粘土接合部のくぼみがわずかに残る。523は逆「L」字形の口縁で、口縁部下位に突帯が1条廻る。524は523と同一個体と推定される厚みのある底部でわずかに底面が湾曲している。口径43.4cm、底径9.0cmに復元できる。525は大形の甕形土器で、逆「L」字形の口縁部に刻み目が施され、口縁下に突帯が2条つく。口径は56.8cmに復元できる。

526は壺形土器で、鋤形口縁をなす。頸部に暗文が施される。527は壺底部で器面外面に丹を施す。底径は8.4cmに復元できる。528は玄武岩製の太形蛤刃石斧で基部を欠損する。

9D区 SK413 (図83)

9D区の西隅、SD316の東側に位置する。南西方向約7mにSK414が位置する。やや南北に長い楕円形プランで、南北の長軸2.12m、東西の短軸1.68mである。深さは最も深い土坑中央部分で34cm残存する。

出土遺物 (図84)

529は高坏で、口縁部及び脚部を欠損する。坏部屈曲部から緩やかに外湾する。530、531は壺形土器で、530は鋤形の口縁である。531は頸部屈曲部に突帯が廻り、刻み目が施される。532は支脚で、外面はタタキにより面が形成されている。533と534は甕形土器である。533の口縁部屈曲部内面は打ちかかっている。534は鋤形口縁で端部がやや下垂する。口径は46.0cmに復元できる。

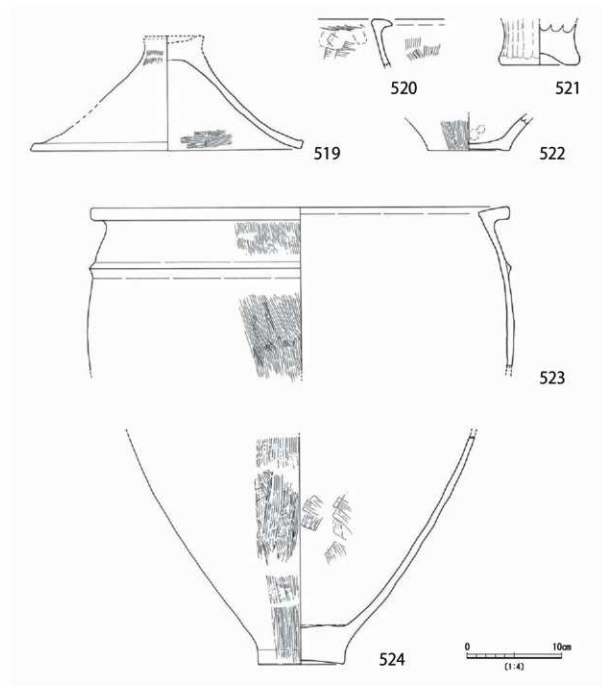


図81 SK305出土遺物1

9D区SK414 (図83)

9D区西隅に位置する。不正形な円形プランを呈し、南北方向で最大1.62m、東西方向で最大幅は1.84m、深さは40~42cmほどである。

出土遺物 (図85)

535は小形の甕形土器で、逆「L」字形の水平な口縁である。胎土が精良で内外面とも丹塗りである。536は甕形土器の底部で、底径は9.0cmに復元可能である。537は壺形土器の胴部片で突帯が2条

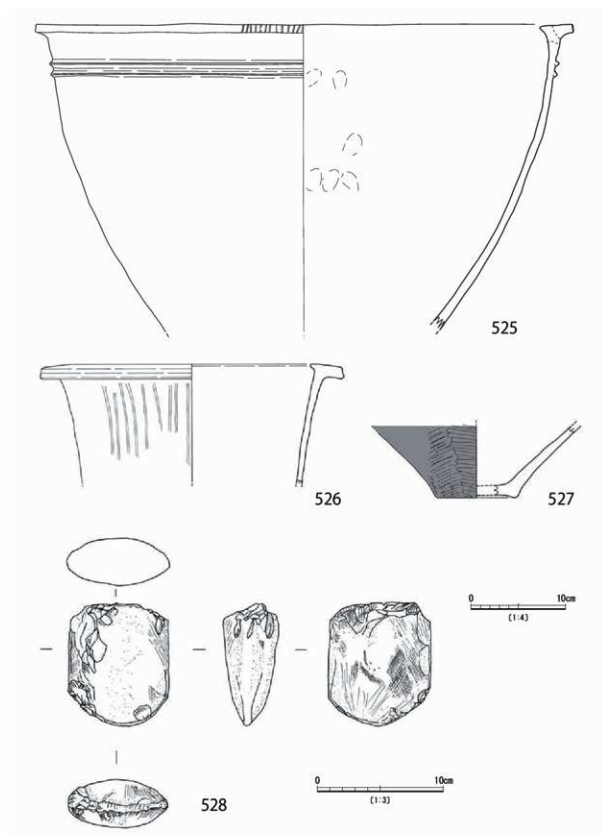


図82 SK305出土遺物2 (525-527 : S=1/4, 528 : S=1/3)

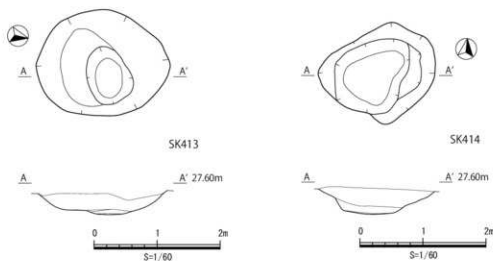


図83 9D区SK413, SK414

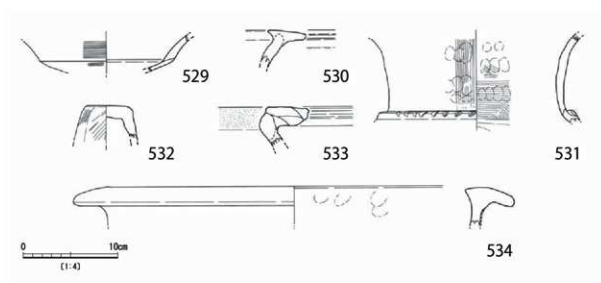


図84 SK413出土遺物

みられ、外面に丹が施される。538は壺の底部で外面丹塗り、底径6.0cmに復元できる。539と540はいずれも高坏で、540の脚部内面には絞り痕が認められる。双方とも丹塗りである。541は筒形器台の脚部と推定される。脚端部の径は40.0cmに復元できる。外面は丹塗りである。542は器台で、脚部径は15.0cmである。543は緑色岩製の太形蛤刃石斧である。

9D区SK415 (図86)

9D区西側、SK414の南西1.5mのところに位置する。南北の長軸が1.82m、東西幅が1.24mの長楕

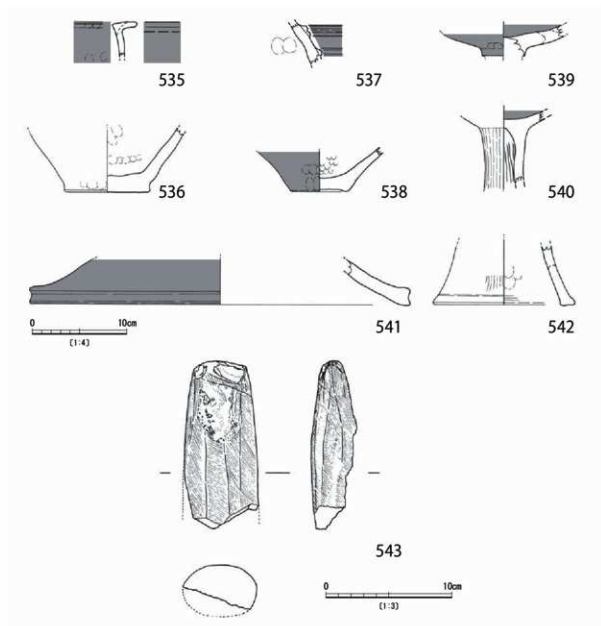


図85 SK414出土遺物 (535-542 : S=1/4, 543 : S=1/3)

円形プランの土坑とその東側の幅50cmほどの土坑が重複している。長楕円形の土坑の深さは最大で62cm、東側の土坑の深さは22cmである。

出土遺物 (図87)

544、545、546、548と549は甕形土器である。544は緩やかに外反する口縁で端部が丸みを帯びる。545は鋤形口縁で、546は逆「L」字形の口縁である。548は鋤形の水平な口縁をなし、口縁下部に突帯が2条つく。549は「く」字形の口縁で内面の突出がみられ、口縁屈曲部直下に突帯がみられる。547は蓋で裾部が欠損する。550は甕形土器底部で、底面のほぼ中央に焼成後穿孔がみられる。551は器台の脚部であろう。脚部径は12.0cmである。552は黒曜石製の凹基式打製石鏃で1.3gである。553は

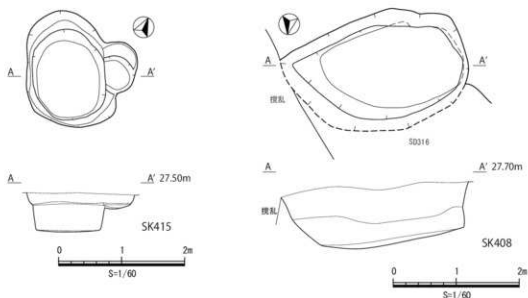


図86 9D区SK415, 10C区SK408

粘板岩製の磨製石剣片である。残存長は7.9cmである。

10C区SK408 (図86)

10C区の北西側に位置する。土坑の東側が鋭角をなす不正な楕円形のプランを呈する。略東西方向の長軸は2.8m、南北方向の短軸は1.76m、深さは98cmである。

出土遺物 (図88-90)

554から575は本土坑の上層および中層から出土した遺物である。554から563は甕形土器である。554、555、556、557、560は口縁下に突帯が廻る。558と559は「く」字形の口縁である。561、562、563は底部で、561は厚みのあるやや上げ底の底部である。564と565は壺形土器の底部で、双方とも外面に丹が施される。

566は有孔の短頸壺で、内外面共に丹塗りである。567は有孔の蓋である。口径は19.0cmに復元でき、外面は丹塗りである。568、569、571は壺形土器で、570は壺ないしは高杯の口縁部片である。568は鋤形の水平な口縁で、頸部に1条と胴部最大径部に2条の突帯が廻る。569は口縁端部に突起状のわずかな突出がみられる。570は鋤形口縁内面の突出が強く、口縁部がのびる。571は粘土貼付により厚みのある口縁部を形成する。572は瓢形土器の口縁部で外面丹塗りである。573は筒形器台の胴部で、外面丹塗りであり暗文が施される。574と575はともに石庖丁片で、574は赤紫色泥岩、575は重青石ホルンフェルス製である。

576から591は本土坑の下層出土の遺物である。576、577、578、579は甕形土器である。576と577は「く」字形の口縁で、576は端部がやや肥厚し丸みを持つ。578と579は鋤形口縁で、579はやや口縁が内側に傾く。いずれも口縁部下位に突帯がつく。580は高杯の口縁部片であろう。鋤形の水平な口縁である。581と582は蓋で、581の内面に丹が残存する。583は短頸壺で口径16.6cmである。外面と口縁

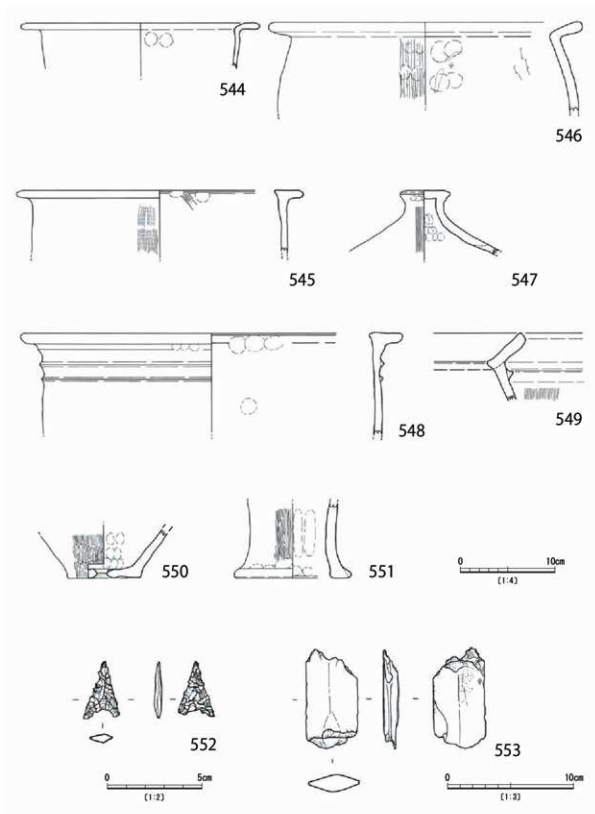


図87 SK415出土遺物 (544-551 : S=1/4, 552 : S=1/2, 553 : S=1/3)

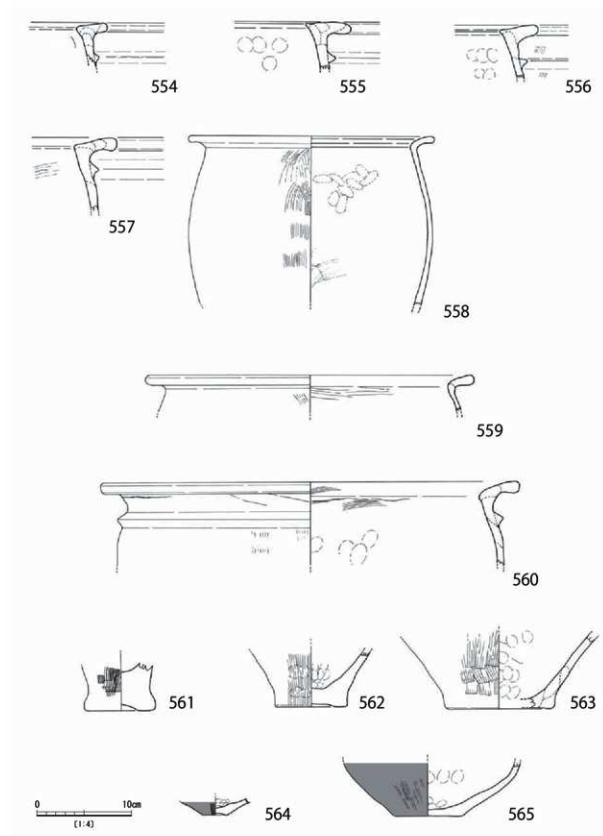


図88 SK408上層出土遺物1

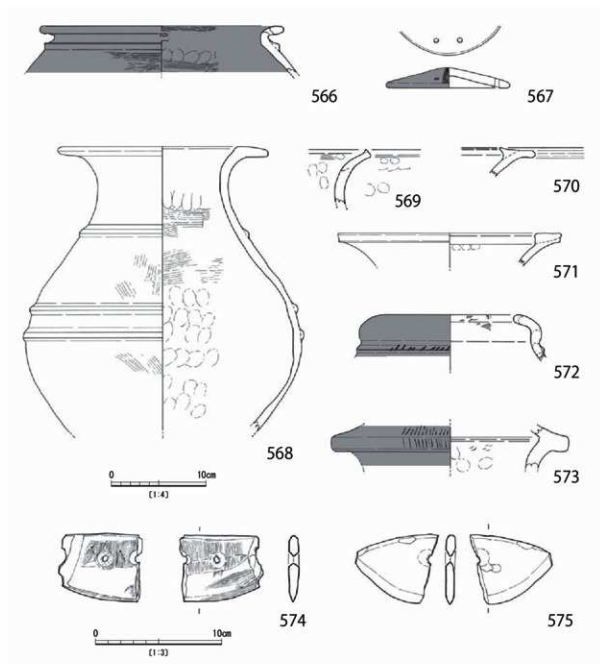


図89 SK408上層・中層出土遺物2 (566-573 : S=1/4, 574・575 : S=1/3)

部内面が丹塗りである。584から587は壺形土器である。584と585はともに鋤形口縁である。585は端部がやや下垂し、口縁部上面に暗文、口縁端部に刻み目、頸部に暗文状のミガキが施され、頸部屈曲部に突帯が1条廻る。口径は30.8cmに復元できる。586と587は底部で、ともに外面丹塗りである。588、589、590は器台で、588と589は脚端部が外反する。591は大形の甕形土器で、「く」字形口縁で口縁直下に突帯がつく。

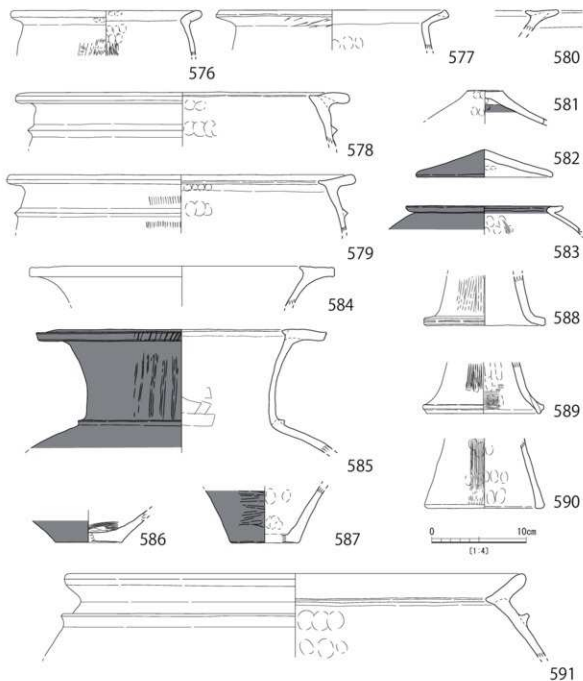


図90 SK408下層出土遺物

10C区SK409 (図91)

10C区中央部、SK408の南西8.2mのところの位置する。平面は不正円形を呈する。南北方向で最大1.54m、東西方向で最大1.38mをはかる。床面はほぼ平坦だが土坑の壁面から中央に向かってやや深くなる。深さは壁際で18~22cm、床面中央付近の最も深いところで26cmである。

出土遺物 (図92)

592と593は甕形土器で、いずれも鐏形の口縁である。592は口縁下位に断面三角形の小さな突帯が

III 調査の結果

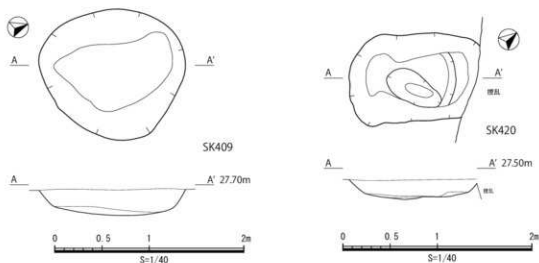


図91 10C区SK409, 10E区SK420

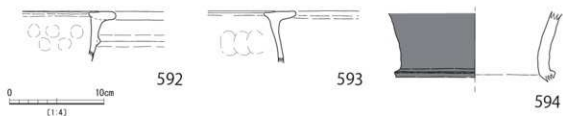


図92 SK409出土遺物

つく。593は口縁部内側の突出が明瞭である。594は壺形土器の頸部で、屈曲部に突帯がみられる。

10E区SK420 (図91)

10E区東側9E区との境界近くに位置する。遺構の北東側は攪乱によって切られる。北東-南西方向の長軸は1.28m残存し、北西-南東方向は92cmを測る。深さは最大で22cmである。

出土遺物 (図93)

595は壺ないしは高杯の口縁部であるが、小片のためいずれかは不明である。596は壺の底部で、外面が丹塗りである。597は脚部で端部がわずかに外反する。598と599は甕の底部で、底径は598が7.4cm、599は8.0cmに復元できる。600は甕の胴部である。

10・11E区SK425 (図94)

11E区の南東から10E区との境界にかけて位置する。SB407の南西約7.3mのところ

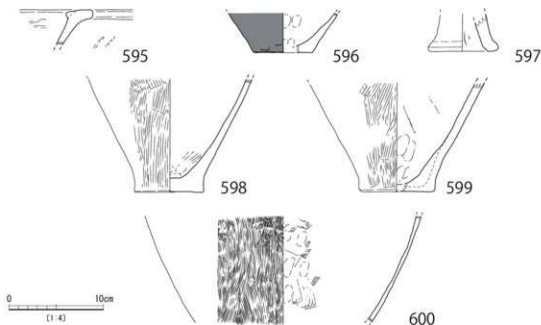


図93 SK420出土遺物

面ブランは不正形で、北西側は直線をなし、南東側は鋭角に突出する。規模は土坑の北西-南東軸で1.02m、北東-南西軸で1.1mである。深さは10cmである。北西壁に対し南東壁は傾斜が緩やかである。出土遺物 (図95)

601から607は甕形土器である。601、602、603、604は口縁部が逆「L」字形をなす。605は鋤形口縁で内面の突出が明瞭である。底部はやや上げ底である。606と607は底部であるが、606は上げ底で、607はほぼ平底を呈する。608は壺形土器の底部で、底径は6.8cmに復元できる。

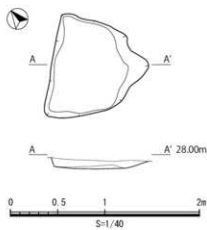


図94 10・11E区SK425

9F区SK428 (図96)

9F区の西側隅に位置する。不正形の土坑で、北西-南東方向に最大で2.8m、北東-南西方向に最大1.4mを測る。深さは土坑の北西側で70cm、土坑南東側で14cmである。

出土遺物 (図97)

609は甕形土器で、断面三角形の口縁の下位に突帯が1条廻る。610は甕の底部であるが、器表面の風化が著しい。底径は10.0cmに復元できる。611は素口縁の広口壺で頸部に暗文状の浅い凹線状の沈線が施されている。口径は23.5cmである。612は支脚で中央に焼成前穿孔がみられる。

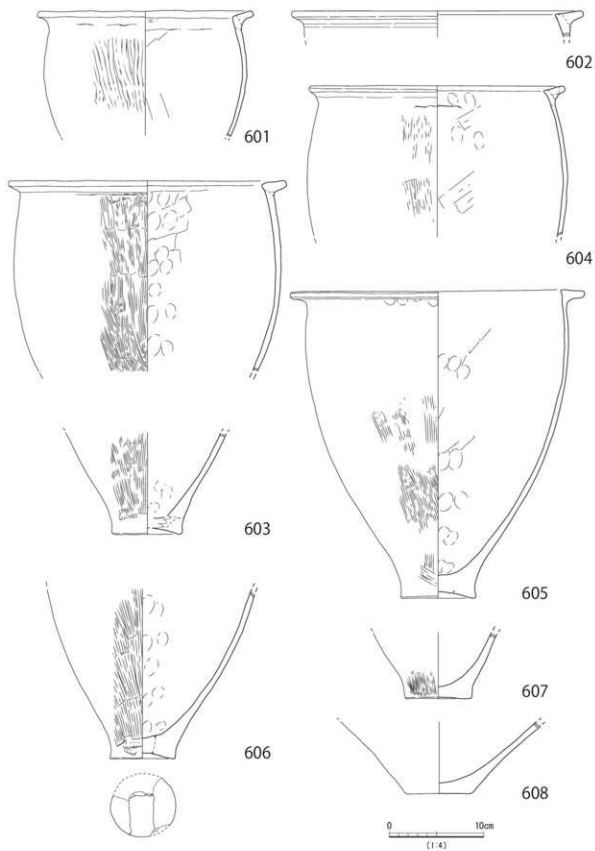


図95 SK425出土遺物

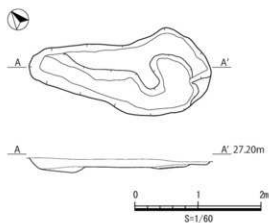


図96 9F区 SK428

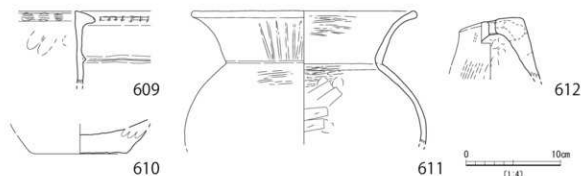


図97 SK428出土遺物

10F区 SK429 (図98)

10F区北西側、SB408の西側に隣接して位置する。南東-北西軸1.5m、北東-南西軸1.36mの不正方形を呈する。深さは最も深いところで50cmである。

出土遺物 (図99)

618以外は甕形土器の底部である。613、614、615、616は厚みのある上げ底の底部で、617はうすい平底の底部である。618は支脚と推測される。端部はナアにより平坦面をなすが、中央に指で押えたことによるわずかなくぼみが見られる。

10F区 SK431 (図98)

10F区の北西側11F区との境界近くに位置する。平面形は北西側が不正円形を呈し、南東側は方形を呈する。遺構北西部でピットが重複している。土坑の南東側は床面が平らである。土坑規模は北西-南東軸1.62m、北東-南西軸70cmである。深さは北西端で18cm、南東側で20cmである。

Ⅲ 調査の結果

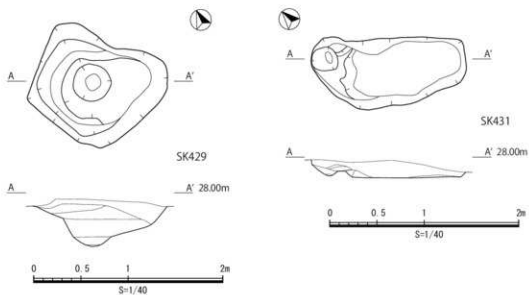


図98 10F区 SK429, SK431

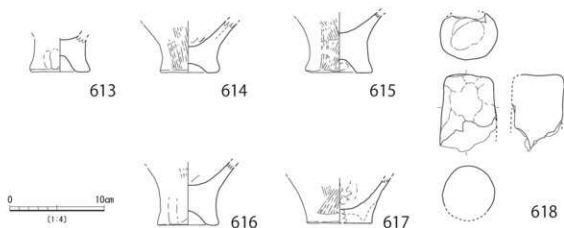


図99 SK429出土遺物

出土遺物 (図100)

619から623は甕形土器である。619と620は逆「L」字形の口縁部で、後者はわずかに内側に突出する。621は水平な鋤形口縁で内側の突出が明瞭である。622と623はゆるく「く」字形を呈する口縁である。

10F区 SK433 (図101)

9Fと10Fの境界に位置し、SK428の南約3mに位置する。不正な方形プランを呈し、土坑の規模は北西-南東方向に最大2.24m、北東-南西方向に1.46mである。深さは最大16cmである。

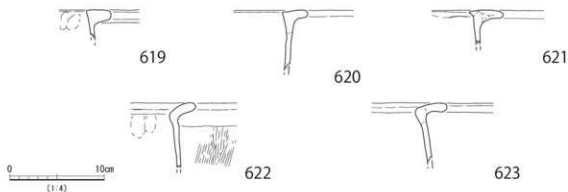


図100 SK431出土遺物

出土遺物 (図101)

624と625は甕形土器の口縁部片で、624は水平な鋤形口縁、625は「く」字形の口縁をなす。626は脚部の小片で、器種は不明であるが器壁が厚く支脚であろう。

11B区SK503 (図102)

11B区南東側、SK505の北東方向3.3mに位置する。不正円形のプランを呈し、南西-北東軸1.2m、北西-南東軸で90cmをはかる。床面はほぼ平らで、深さは8cmである。

出土遺物 (図103)

627から635は甕形土器である。627は口縁端部に廻る突帯に刻み目が施される。628は断面三角形に近い口縁部形態で、629は短く屈曲する口縁の端部に刻み目が施される。630、631、632、633はいず

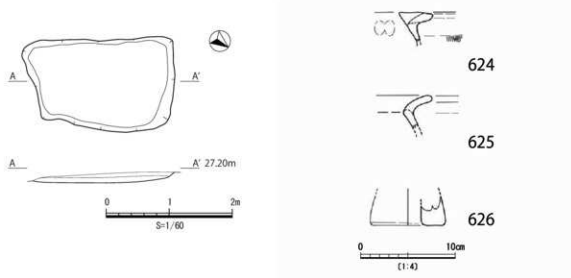


図101 10F区SK433と出土遺物

III 調査の結果

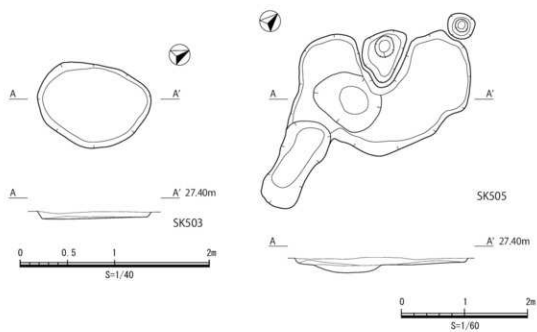


図102 11B区 SK503 (S=1/40), SK505 (S=1/60)

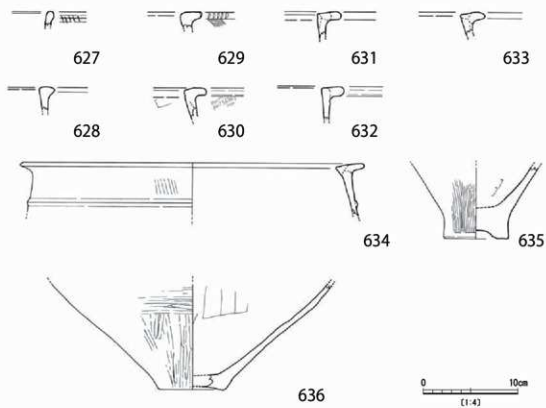


図103 SK503出土遺物

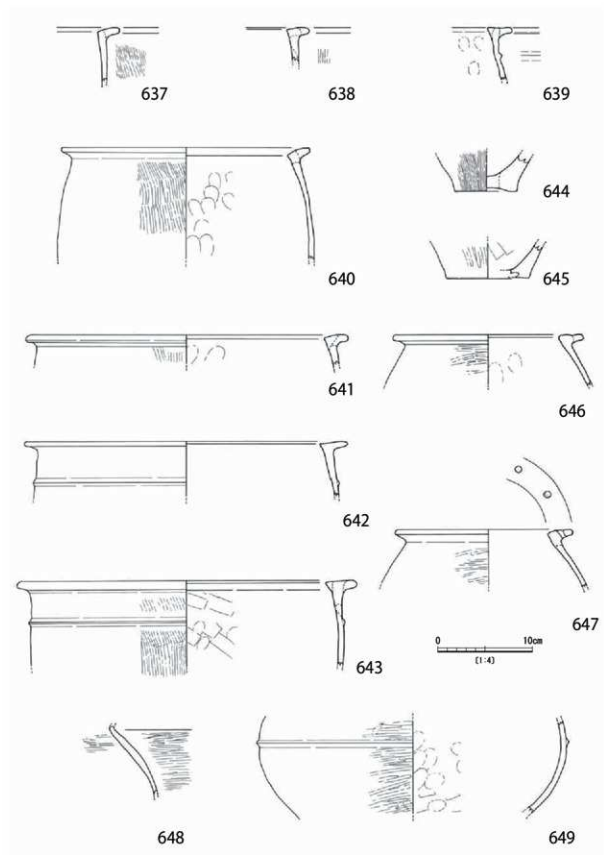


図104 SK505出土遺物

III 調査の結果

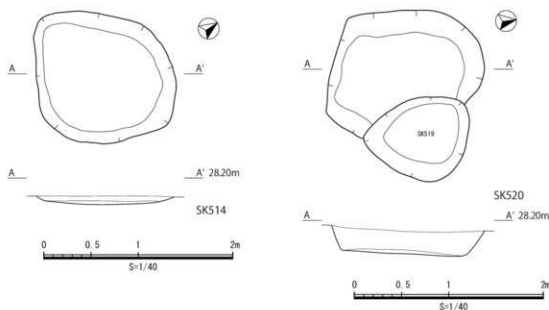


図105 11D区 SK514, SK520

れも逆「L」字形口縁で内側にわずかな突出がみられる。634は鋤形の口縁で、口縁下に突帯が廻る。口径は36.0cmに復元できる。635は上げ底の厚い底部で、底径6.8cmに復元可能である。634と635はそれぞれ後述のSK505出土の土器片と接合する。636は壺形土器の底部で、外面は丁寧な研磨である。底径は6.8cmに復元できる。

11B区 SK505 (図102)

11B区北東部、SK503から南西3.3mのところのところに位置する。複数の遺構が重複しており、いびつな形をしている。北東-南西軸で最大2.76m、北西-南東軸で最大1.68mをはかる。深さは10~22cmである。南東隅の長方形の土坑は長軸1.5m、最大幅74cmである。

出土遺物 (図104)

637から645は甕形土器である。637、638、640、641は逆「L」字形の口縁で内側の突出は明瞭ではない。639、642、643は鋤形口縁で口縁がやや伸びる。644と645は甕の底部である。646から649は壺形土器である。646と647は短頸壺で、646は口径19.8cmに復元できる。647は有孔の短頸壺で、口径18.4cmである。648は壺の胴部上半部で外面は丁寧な研磨である。649は壺の胴部下半部で、胴部最大径部に突帯が1条つく。

11D区 SK514 (図105)

11D区のはほぼ中央に位置する。不正方形のプランを呈し、北東-南西軸で1.46m、北西-南東軸で1.38mをはかる。床面はほぼ平らで、深さは10cmである。

出土遺物 (図106)

650から653は甕形土器である。650は断面三角形の口縁部、651は短く屈曲する口縁部で、652は平

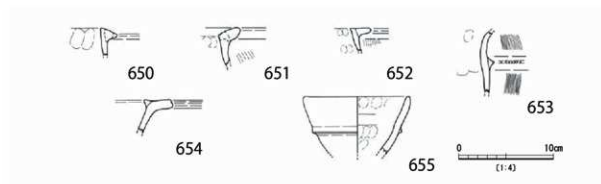


図106 SK514出土遺物

坦な鋤形の口縁を呈する小形の甕であろう。653は甕の胴部片で口縁端部を欠損するが如意形口縁の下位に刻み目突帯が廻る。

654は壺または高坏で、鋤形口縁である。655は胴部の中位に断面三角形の突帯が廻る小形の鉢である。口径は11.0cmに復元できる。

11D区 SK520 (図105)

11D区南東部、SK514の南東約10.8mに位置する。平面は不正方形のプランと推定されるが、東側をSK519に切られる。南北軸1.62m、東西軸1.32mである。床面はほぼ平らで、深さ24cmである。

出土遺物 (図107)

656、657、658は甕形土器の口縁部、659は甕棺の口縁部片である。656は逆「L」字形の短い口縁部で内面にわずかな突出がみられる。657と658は鋤形口縁で、後者は内外面ともに丁寧なナデを施すが口縁部上面に粘土貼付けの際のくぼみが残る。659は口縁部の内側への張り出しが強く、口縁部上面は強いナデのためややくぼむ。660は壺の胴部片である。

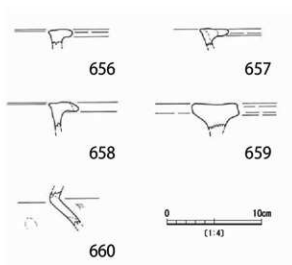


図107 SK520出土遺物

11E区 SK532 (図108)

11E区北部、SK520の南東約5mに位置する。土坑の南東側は攪乱により消失している。平面プランは隅丸方形ないしは長方形を呈すると推定される。南北幅96cm、東西の長軸方向は最大1.2m残る。出土遺物 (図109)

661は甕形土器で、如意形口縁の端部に刻み目を施し、その下位にも刻み目突帯が廻る。662は甕形土器の胴部片で、突帯が2条つく。663は壺の底部で、底径は12.4cmに復元できる。664は黒曜石製の縦長剥片である。

III 調査の結果

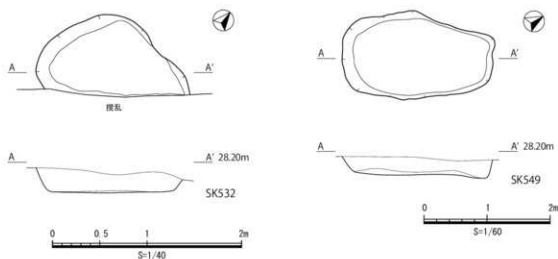


図108 11E区SK532 (S=1/40), 11G区SK549 (S=1/60)

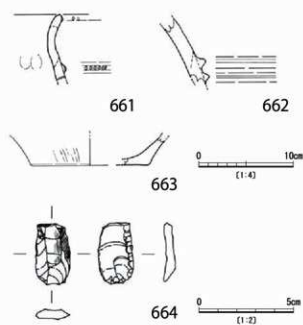


図109 SK532出土遺物 (661-663 : S=1/4, 664 : S=1/2)

11G区SK549 (図108)

11G区北西部、11F区との境界近くに位置する。平面は不正形な長方形プランを呈する。北東-南西方向の長軸は2.38m、北西-南東方向の短軸の幅は1.4mである。床面はほぼ平らであるが、北東側土坑端部で若干深くなる。深さは28cmである。出土遺物 (図110・111)

665から675までは甕形土器である。また、673、674と678から685までは甕の底部である。665は口縁部が外に短く屈曲する。666、667、668、669、670、671、672、675は逆「L」字形の口縁である。675は口径27.3cm、器高33.1cm、底径7.8cmに復元できる。673は厚みのある上げ底で底部に向

かって大きくすぼまる。674はうすい底部だが上げ底を呈する。678はわずかに上げ底で、679から685まではほぼ平底の底部である。

676、677と686は壺形土器である。676は小形の広口壺で、口径は13.7cm、底径は5.0cmである。677は大形の壺で胴部最大径部に突帯が1条廻る。686は底部で底径は10.0cmに復元できる。687は大形の壺の底部であろう。器面の風化が著しい。688は器台で、脚部径は6.8cmに復元できる。689は粘板岩製の石甕丁片で、残存長7.8cmである。

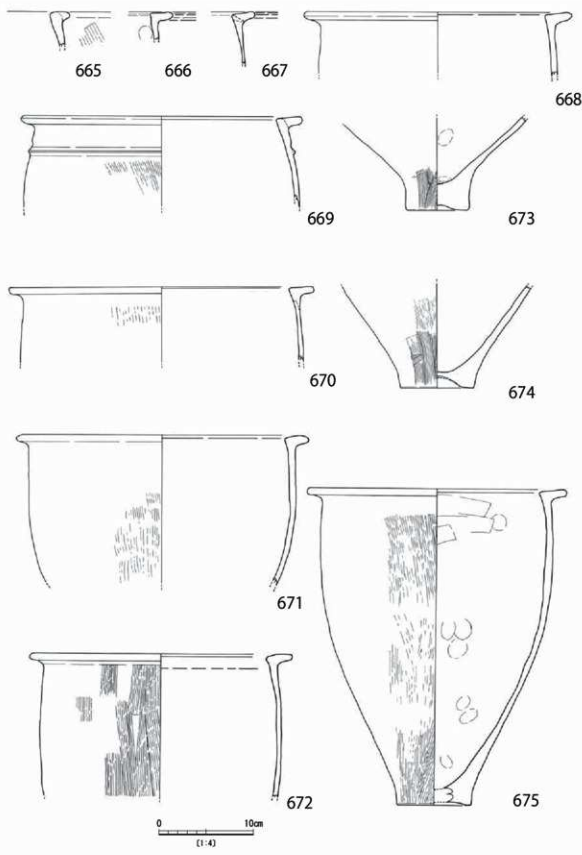


図110 SK549出土遺物1

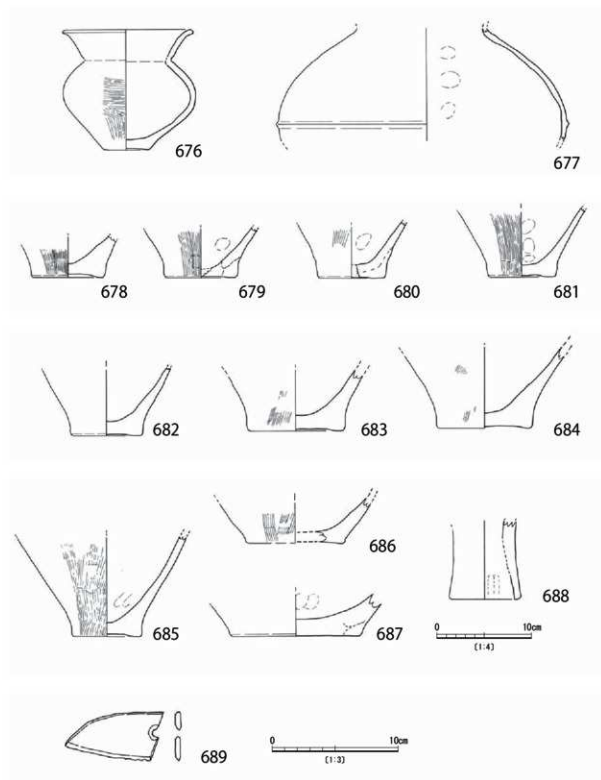


図111 SK549出土遺物2 (676-688 : S=1/4, 689 : S=1/3)

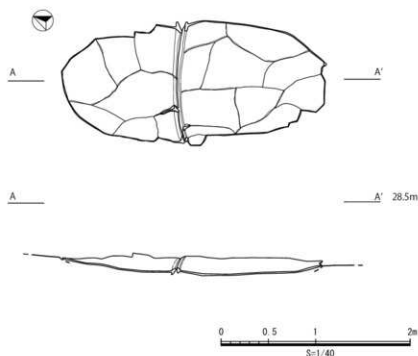


図112 11C区 SJ502

甕棺墓

エリア I からは2基の甕棺が出土している。いずれも11C区で検出されたものであるが、後世の削平が著しく、甕棺の一部が残存するのみである。

11C区 SJ502 (図112)

11C区のはほぼ中央部で検出された。主軸を北北西-南南東にとる。合わせ口甕棺であるが、後世の削平のため墓壇など詳細はほとんど不明で、わずかに棺底部に相当する甕棺下部が残存するのみである。

出土甕棺 (図113)

690は上甕で、内側に強く張り出す「T」字形の口縁で、口縁下に突帯はなく胴部中に1条突帯がつく。口縁から胴部突帯部分までさほど膨らまず、突帯下位から底部に向かってすぼまる。口径60.0cm、残存高58.8cmである。691は下甕で、上甕同様内側に強く張り出す口縁部で、胴部中に突帯がつく。胴部上半から底部に向かって徐々にすぼまる。口径68.8cmで、残存高は77.8cmである。

11C区 SJ503 (図114)

甕棺の底部のみ残存し、他は削平されているため詳細については不明である。

出土甕棺 (図115)

692は甕棺の底部のみで、底径15.7cm、残存高は40.0cmである。

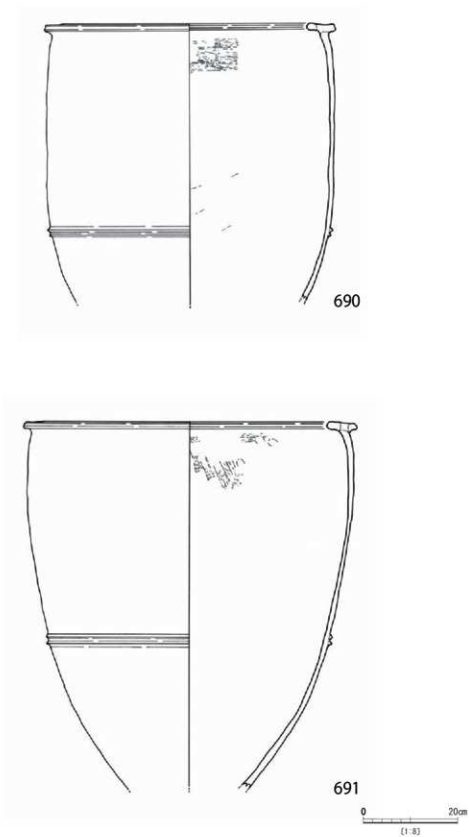


図113 SJ502墓棺 (690：上墓, 691：下墓)

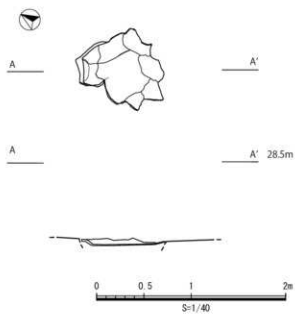


図114 11C区 SJ503

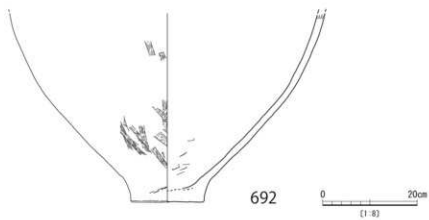


図115 SJ503甕棺

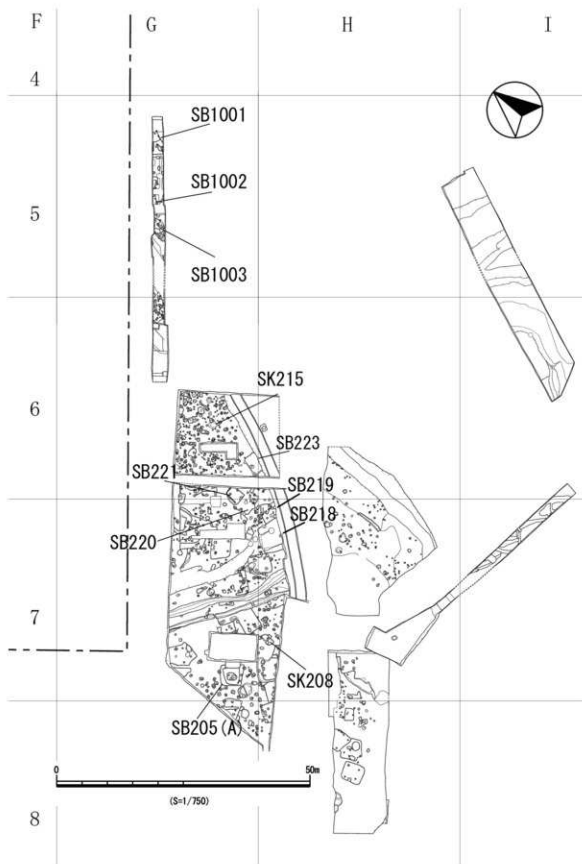


図116 エリアII・遺構配置図

(3) エリアⅡ (図116)

住居跡

5・6-G・I区SB1001 (図117)

5G区の中央に位置する。遺構の北西部は調査区外のため不明である。平面は隅丸の長方形を呈するものと推定される。北東-南西方向の長軸は最大1.9mをはかり、北西-南東方向は最大1.44m残る。床面は南西方向に向かって緩やかに傾斜している。深さは5~14cmである。

出土遺物 (図118)

693から695は甕形土器で、693は断面三角形の口縁部で、口縁の下位に突帯がつく。694は逆「L」字形の口縁部で内側がわずかに突出する。695は鋤形口縁で、内側の突出が明瞭である。696は小形の壺で、口縁端部が屈曲する。口径は15.6cmに復元できる。697は素口縁壺の口縁部片である。698は小片で器面の風化が著しい。甕形土器の底部であろう。699は砥石で、石材は石英斑岩である。砥面は4面確認できる。

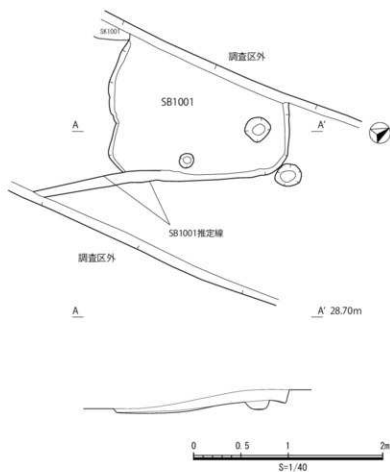


図117 5・6-G・I区SB1001

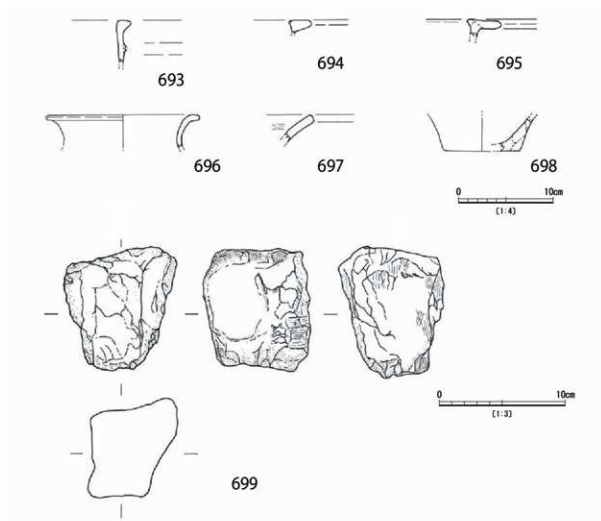


図118 SB1001出土遺物 (693-698 : S=1/4, 699 : S=1/3)

5・6-G・I区 SB1002 (図119)

5G区中央部、SB1001の南西約10mのところに位置する。遺構の西側は調査区外であり、また、南西側は攪乱によって消失する。そのため平面形は方形ないしは長方形を呈すると推定されるが、詳細不明である。北東-南西方向で1.94m、北西-南東方向で58cm残る。床面はほぼ平坦で、深さは32cmである。

出土遺物 (図120)

700と701は甕形土器である。700は鋤形口縁で、701は緩く屈曲し「く」字形の形態となる口縁部である。702は甕棺の口縁部片で、「T」字形の口縁部内面の張り出し部分の破片である。器表面の風化が著しい。703から705は底部片であるが、小片で器壁の風化が著しいため器種の同定が難しい。

5・6-G・I区 SB1003 (図121)

5G区中央部、SK1002の27m西に位置する。遺構の北西部は調査区外である。平面は残存部から

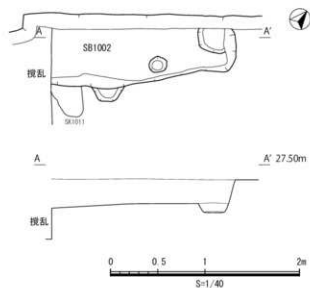


図119 5・6-G・I区 SB1002

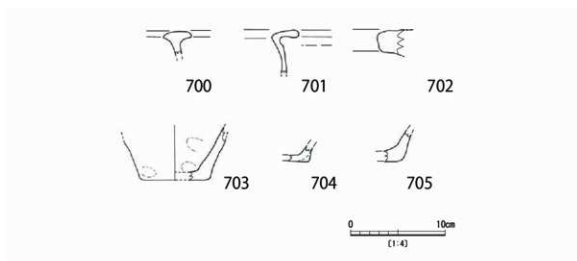


図120 SB1002出土遺物

円形を呈すると推定される。床面の深さは最大で36cmである。

出土遺物（図122）

706は甕形土器の口縁部で、鋤形の水平な口縁である。707は壺の口縁部片である。708、709、710は甕の底部である。いずれもうすい平底の底部である。底径は708が8.8cm、709が8.0cm、710が9.2cmに復元できる。

7G区SB220（図123）

7G区東隅に位置する。すぐ南にSB219、SB218が位置する。平面は隅丸の長方形を呈すると推定

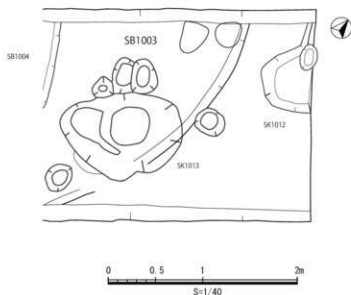


図121 5・6-G・I区SB1003

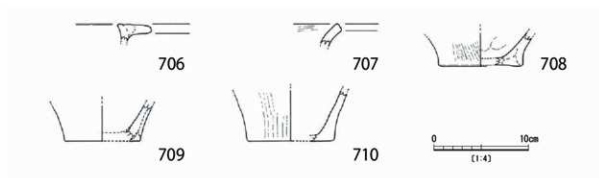


図122 SB1003出土遺物

されるが、遺構の北東隅が不明である。また遺構の北側はSB221によって切られている。西壁で3.04m、南壁で4.12mをはかる。床面はほぼ平坦で、中央に炉と推定されるピットが検出されている。床面の深さは16cmである。

出土遺物（図124）

711は小形の甕形土器で、胴部から屈曲して外反する頸部がつく。712は「く」字形口縁の甕形土器で、屈曲部に突帯がつく。713は壺の底部である。714は脚付椀などの脚部と考えられるが器種は不明である。脚部径は18.0cmに復元できる。

6・7G区SB221（図125）

6G区南隅から7G区東隅にかけて位置する、すぐ南のSB220を切っている。また、遺構の北東隅は調査区外である。平面は西壁側がやや影らむが略方形のプランと推定される。南北軸で3.2m、東西軸で2.8～2.96mである。床面はほぼ平坦で、深さは12cmから24cmである。床面中央に炉がみられる。

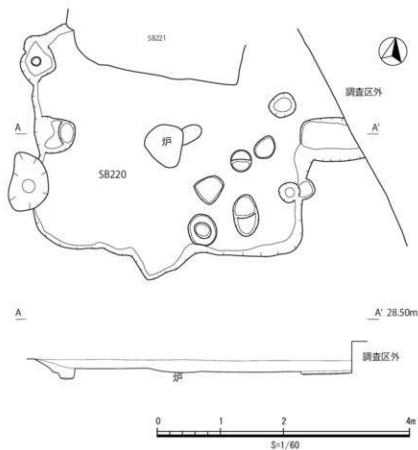


図123 7G区SB220

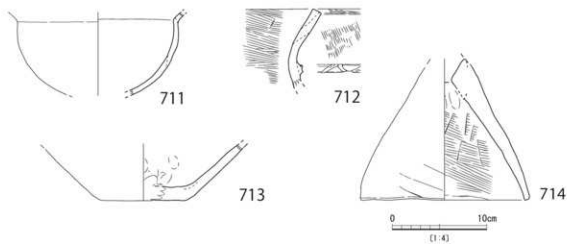


図124 SB220出土遺物

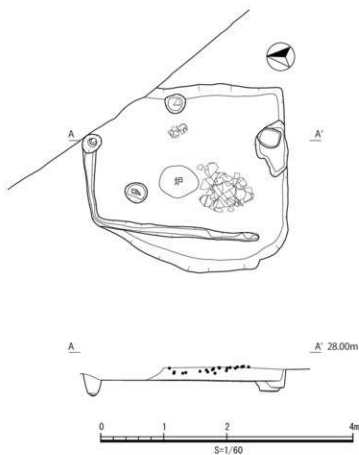


図125 6・7G区 SB221

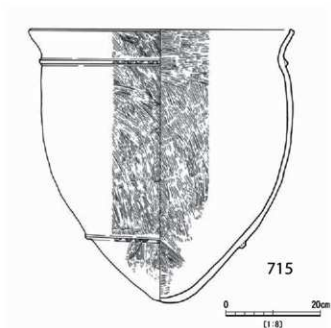


図126 SB221出土遺物

また、北壁から西壁にかけて幅16～20cm、床面からの深さ最大10cmの溝状の掘り込みがみられる。遺物はほぼ完形に復元可能な甕棺が床面から浮いた状態で出土している。

出土遺物（図126）

715は「く」字形口縁の屈曲部に突帯がつき、胴部最大径部から底部に向かってすぼまり尖底に近い形態の底部にいたる。胴部下半にも突帯が1条つく。突帯にはいずれも鋸歯状の刻みが施されている。内外面とも調整はハケメである。口径は55.8cm、器高58.0cm、胴部最大径52cmに復元できる。

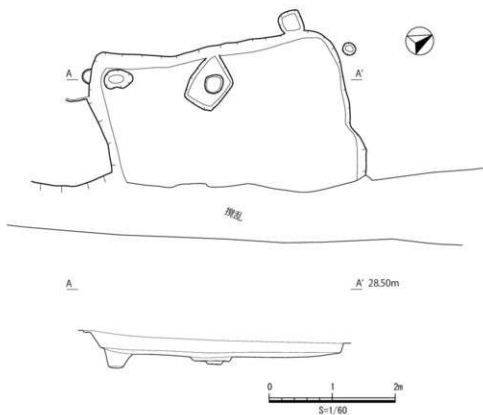


図127 6G区SB223

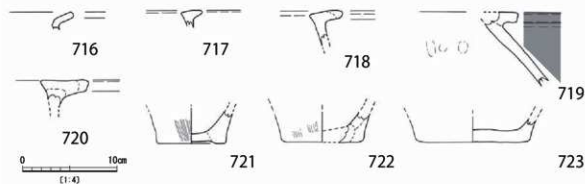


図128 SB223出土遺物

6G区SB223 (図127)

6G区南部、SK215の南86mに位置する。遺構の東側部分は攪乱により消失する。南北方向に2.0mをはかり、東西方向に1.26m残存する。床面深さは12~14cmである。

出土遺物 (図128)

III 調査の結果

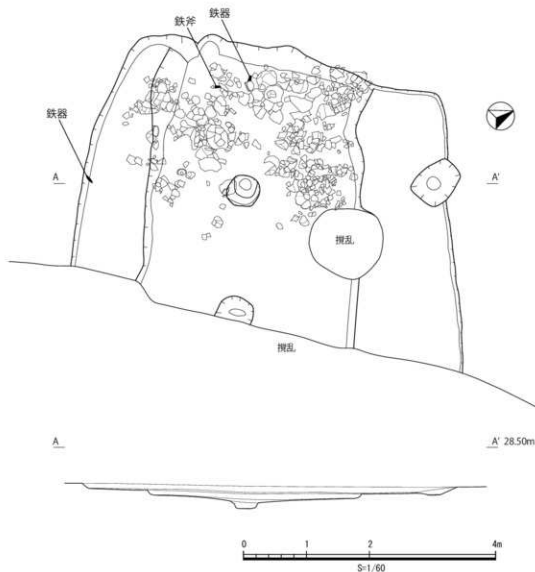


図129 7H区 SB218

716は甕形土器で、「く」字形に屈曲する口縁部である。717は小片のため器種の同定が難しい。鋤形口縁を呈する小形の甕形土器あるいは短頸壺の口縁部片であろう。718は鋤形口縁の甕形土器である。719は丹塗りの甕形土器である。胴部から口縁部にかけてすばまり短い口縁部が水平につく。口縁部内面の形状は欠損しており不明である。外面全面を丁寧に磨き丹が施される。内面にも顔料が点的に付着する。720は大形甕の口縁部である。鋤形の口縁部で口縁部上面は粘土の継ぎ目でややくぼむ。721から723は甕の底部である。721は底部の粘土接合部が明瞭にみられる。

7H区 SB218 (図129)

7H区の北部7G区との境界近くに位置し、東側のSB219を切っている。周辺には、SB220が位置している。平面は方形ないしは長方形のプランを呈すると推定されるが、東側の掘乱のため詳細は不明である。北東-南西方向の幅が6.24mをはかり、北西-南東方向で最大4.4mが遺存する。床面は、

遺構の北東側と南西側で床面より一段高くなっており、ベッド状遺構がみられる。また、床面にピットがみられるが、そのうち西側のピットが本住居跡に伴う可能性がある。柱穴は径28cm、深さは床面から12cmほどである。

出土遺物 (図130-133)

724から727は器高の低い甕形土器である。724と725は胴部があまり張らず口縁が外反して立ち上がる。726と727は胴部から口縁部にいたる屈曲部が明瞭で、胴部もやや張る。727の口縁端部には刻み目が施される。728から741は口縁部が「く」字形を呈する甕形土器である。731や739などはそのほかの土器に比べて口縁部の伸びが短い。741は口縁がやや伸びる。口径は28.6cm、器高38.5cm、底径7.6cmである。底部に焼成後穿孔がみられる。742と743は短く口縁部が「く」字形に立ち上がり、屈曲部を経て肩の張る胴部にいたる土器である。742は口径が20.8cmに復元できる。

744は複合口縁壺の口縁部から頸部で、口縁部は丸みを帯びる。口径は18.8cmに復元できる。745、746、747は底部で、745がレンズ状の底部、746は丸底、747は尖底に近い形態を呈する。

748、749、750、751は甕形土器である。748は頸部から胴部にいたる屈曲部に刻み目を施した突帯がつく。749は複合口縁壺で、頸部-胴部屈曲部に同様の突帯がつく。750は、頸部から胴部にいたる屈曲部が不明瞭で口縁部も素口縁を呈する。頸部-胴部の境界に刻み目突帯がつく。口径26.5cmに復元できる。751は球形の丸みを持つ胴部からいったんすぼまり、直立する頸部を経て外反する口縁端部にいたる甕形土器である。口径は13.0cm、器高28.6cm、底径6.6cmである。753は「く」字形口縁の甕棺である。屈曲部下位に突帯がつき、調整は非常に粗いハケメである。口径は41.8cmに復元できる。この甕棺と同一個体と推定される胴部下半部も器面に粗いハケメが施されており、胴部下半部の粘土の接合部に突帯がつく。突帯から底部に向かってすぼまる器形を呈する。

754は碗形土器で、口径10.0cmに復元可能である。755は小形壺であろう。胴部上半から上を欠損する。底部径は6.8cmである。756は脚部である。脚部径は13.8cmに復元でき、脚端部に刻み目が施される。757と758は杵形支脚である。759は器台で、外面はハケメ、内面は指で縦方向にナデている。

760から762は鉄器である。760は鋤先の一部で、最大長2.5cm、最大幅4.2cm、最大厚0.3cm、重量10.2gである。761は袋状鉄斧である。最大長7.7cm、刃部最大幅3.3cm、袋部最大幅2.2cm、最大厚は1.1cm、重量は90.6gである。762は棒状の鉄製品で断面は略方形である。最大長は15.6cm、最大幅0.9cm、最大厚1.2cm、重量144.5gである。

7H区SB219 (図134)

7H区北部に位置し、遺構の東側は擾乱によって失われており、また南西部はSB218に切られている。残存部分からは方形ないしは長方形のプランが推定される。床面上に複数の土坑が検出されているが、本住居跡との関係はいずれも不明である。西側壁面で3.92m、北側壁面で2.64m残存する。

出土遺物 (図135)

763は甕形土器口縁部片である。鋤形の水平な口縁部を呈する。口縁部上面は粘土接合により2箇所わずかなくはみを持つ。764は甕形土器底部である。器面は風化が著しく調整は不明瞭だが、外面はナデと推測される。底径は推定6.2cmである。

7G区SB205A (図136)

7G区の南部、SK208の西側約8mのところのところに位置する。北東壁が南西壁に比べやや長い不整形

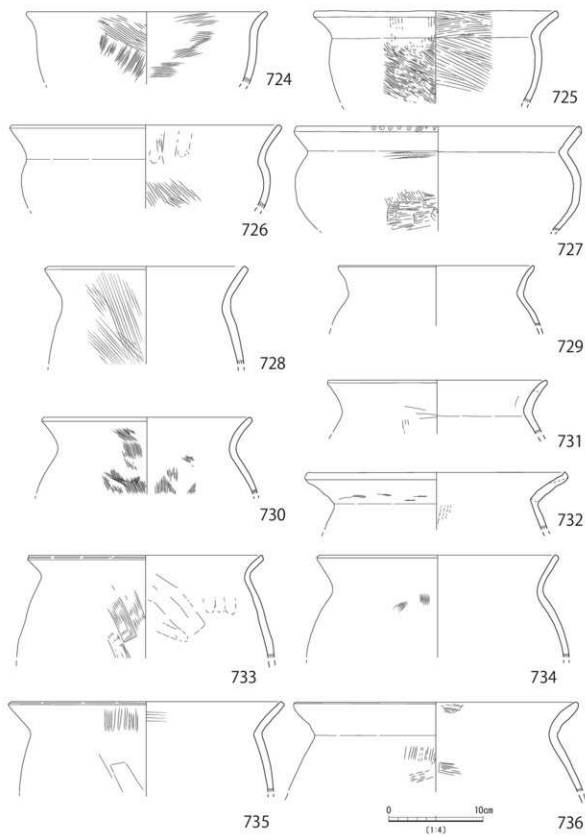


図130 SB218出土遺物1

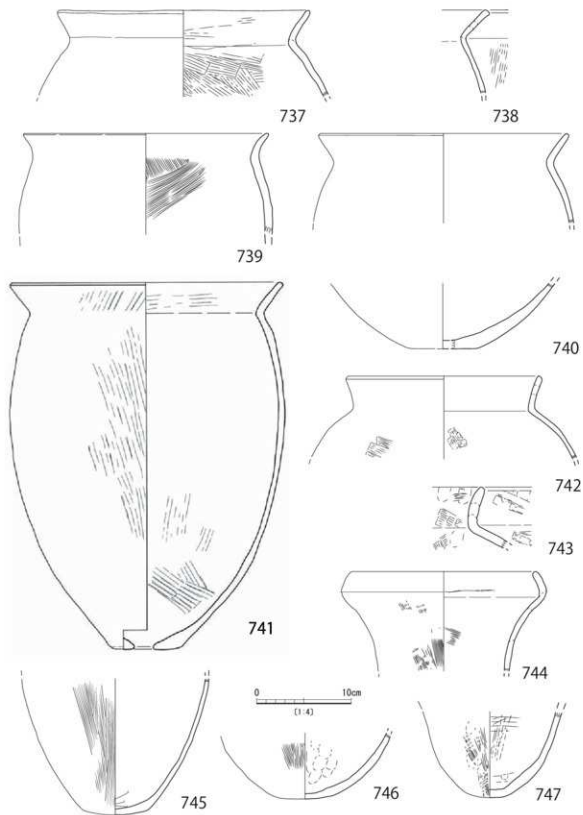


図131 SB218出土遺物2

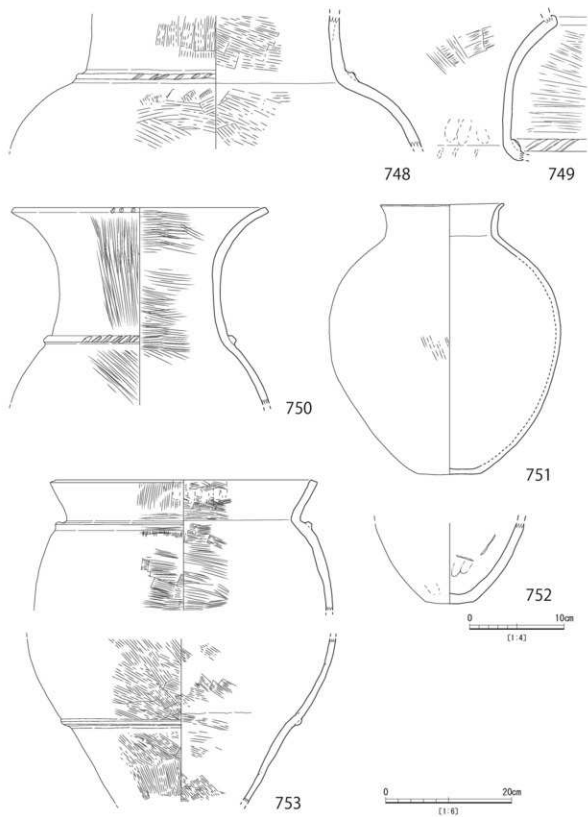


図132 SB218出土遺物3 (748-752 : S=1/4, 753 : S=1/6)

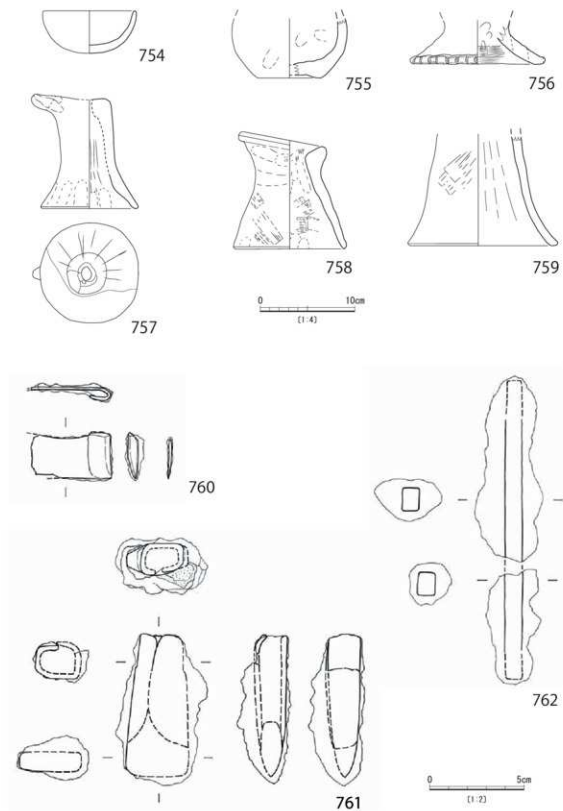


図133 SB218出土遺物4 (754-759 : S=1/4, 760-762 : S=1/2)

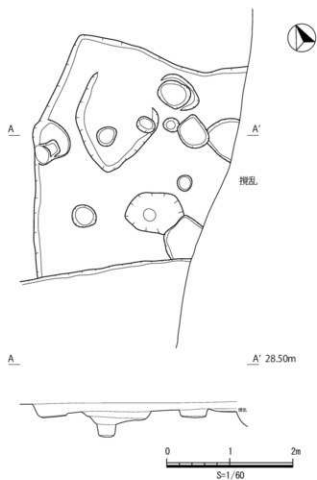


図134 7H区SB219

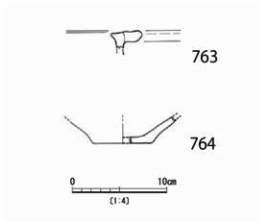


図135 SB219出土遺物

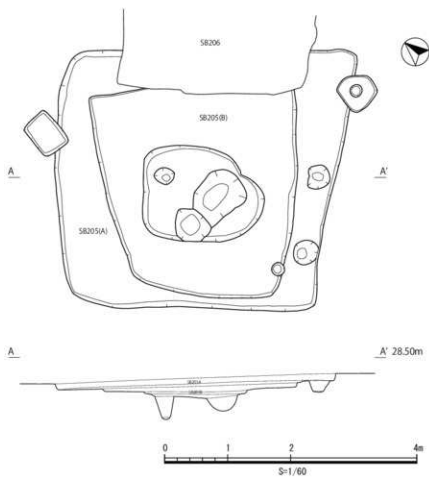


図136 7G区 SB205A

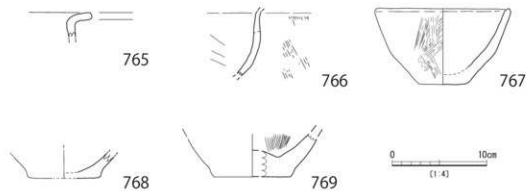


図137 SB205A 出土遺物

III 調査の結果

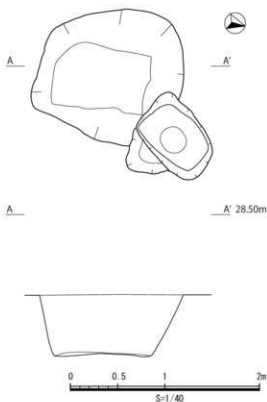


図138 6G区SK215

東隅は別遺構が重複しており残っていない。土坑規模は南北方向で1.52m、東西方向に最大1.46mである。床面はほぼ平らで、深さは64～66cmである。

出土遺物 (図139)

770から772は小形の甕形土器である。770は口縁が逆「L」字形に屈曲し、口径は20.4cmに復元できる。771は「く」字形の口縁でやや肥厚する。772は器高が低い小形甕で、「く」字形口縁を呈する。口径は25.4cmで、器高15.3cm、底径10.8cmである。773から776は甕形土器である。773は逆「L」字形口縁で口縁端部がやや肥厚する。774、775と776は「く」字形口縁を呈する。

777と778は高坏である。777は坏部で鋤形口縁を呈する。778は脚部である。779は小形の鉢形土器で胴部に突帯がつく。口径は12.6cmに復元できる。780は甕形土器の底部で、底径は11.6cmに復元できる。781は高坏の脚部で、内外面ともハケメがみられる。脚部径は22.6cmに復元できる。

7H区SK208 (図140)

7H区西側、7G区との境界近くに位置する。西側6mにはSB206が位置する。平面は南西および北東角が隅丸のややいびつな長方形を呈する。本遺構の北西および東側には別遺構が重複している。南北方向で2.52m、東西幅は最大で1.36mである。床面は遺構の南側が浅くくぼみ、北半分はほぼ平坦である。深さは最も深いところで24cmである。

の平面を呈する。遺構の北東側はSB206によって切られている。また、本遺構の中にもみられる台形プランのSB205Bも本遺構を切っている。北西-南東軸で4.3m、北東-南西方向で4.08～4.12mをはかる。床面は残存部分のみをかぎりほぼ平坦で、深さは12cmである。

出土遺物 (図137)

765は甕形土器の口縁部で、外側に屈曲する。766は小形の壺形土器と推定される。胴部外面にハケメが残る。767は小形の鉢である。外面に縦および斜方向のハケメがみられる。口径は15.2cmに復元可能で、底径は5.0cmである。768は甕形土器の底部である。平底を呈し、底径は7.6cmに復元できる。769は甕形土器の底部であろう。

土坑

6G区SK215 (図138)

6G区中央部やや南側に位置する。西側1mにSK214が位置する。平面は南側がやややすまるといびつな方形を呈するが、北

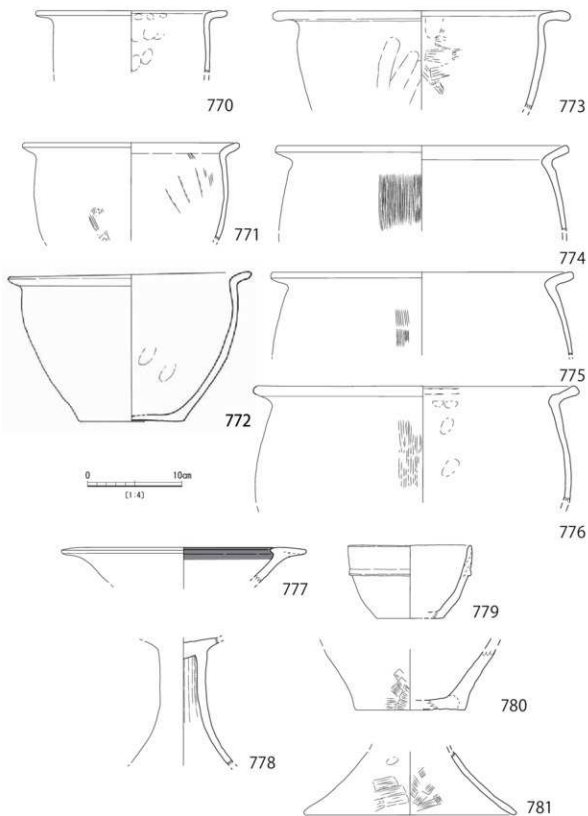


図139 SK215出土遺物

III 調査の結果

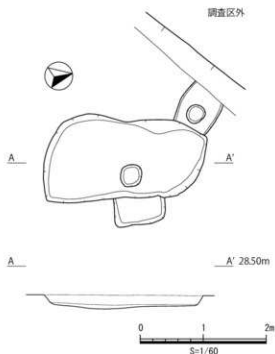


図140 7H区 SK208

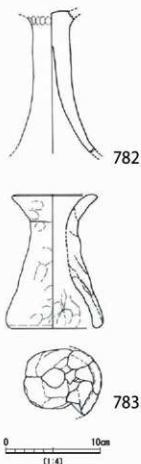


図141 SK208出土遺物

出土遺物 (図141)

高坏の脚部片と支脚が出土している。782は高坏脚部で、残存高14.7cmである。坏部との接合部から脚部下半にかけて残存する。器面が風化によって荒れているため調整の詳細は不明であるが、坏部との接合部には指頭圧痕が廻っており、脚部内面は絞り痕が認められる。783は支脚である。底径は推定8.8cm、器高14.0cmである。端部がゆるく外反する方が上部、端部がやや内湾する方が底部と推測される。外面は指押さえないしは手で握って粗い成形を行なっているため器面の凹凸が著しい。一部ナデが見られる。粘土の接合部で剥離破損している部分が認められることから、粘土を幾重かに重ねて製作したものと推測される。

(4) エリアIV (図142)

住居跡

12・13H区 SB423 (図143)

12H区と13H区の境界に位置している。遺構南壁をSK451によって切られ、北側は擾乱によって残存しない。平面は隅丸の方形を呈するものと推定される。南北方向で3.04m残存しており、東西幅は最大で2.68mをはかる。床面は南壁から北壁へ向かってわずかに傾斜する。深さは8～10cmである。出土遺物 (図144)

784から787は甕形土器である。784は「く」字形の口縁を呈し、口径32.0cmに復元できる。785は鋤形の口縁で内面の突出は弱い。786は「く」字形口縁を呈する。787は底部である。外面に縦方向のハケメが施される。

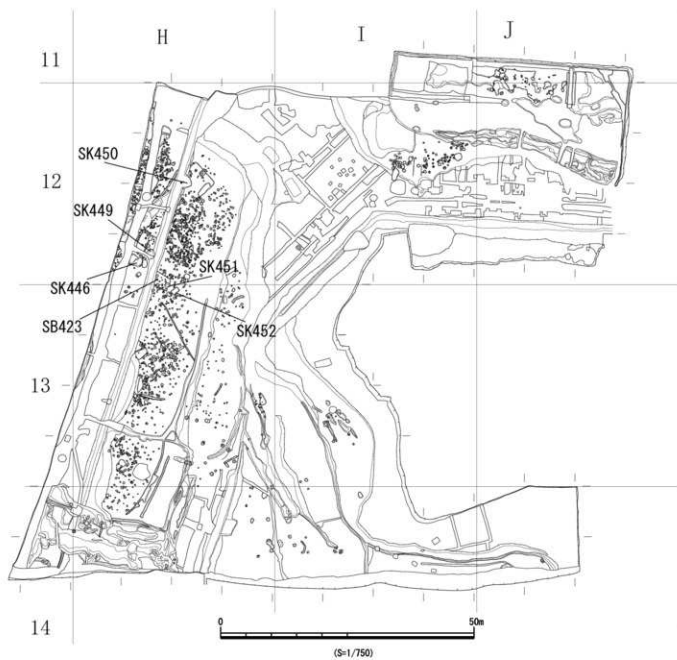


図142 エリアⅣ・遺構配置図

土坑

12H区SK446 (図143)

12H西部、SB423の北37mのところの位置する。土坑の北西部と中央は攪乱により消失する。平面は北壁が不規則な壁面であるが、隅丸の略方形を呈する。北西-南東の長軸方向で2.54m残存し、北東-南西方向で2.16mである。床面はほぼ平坦で、深さ14~19cmである。

III 調査の結果

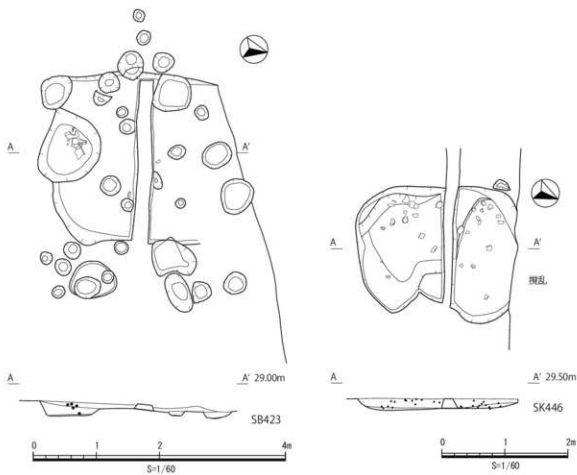


図143 12・13H区 SB423, 12H区 SK446

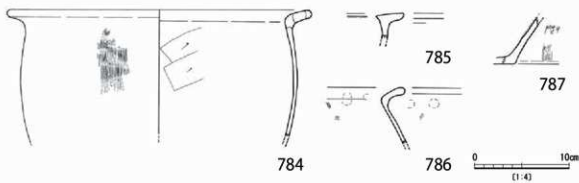


図144 SB423出土遺物

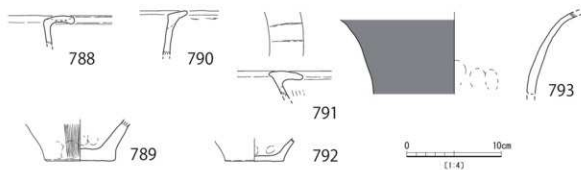


図145 SK446出土遺物

出土遺物 (図145)

788は甕形土器の口縁部で逆「L」字形を呈する。789は甕の底部で、底径は7.2cmである。790は壺形土器の口縁部で、口縁部が短く逆「L」字形をなす。791は短頸壺で鋤形口縁の上面に暗文風の沈線が施される。792は壺の底部で、底径6.2cmである。793は広口壺の頸部で、外面は丹塗りである。内面には頸部下半部に指頭圧痕が残る。

12H区SK449 (図146)

12H区の西部に位置し、SK446の東側に隣接する位置にある。土坑の西側は攪乱によって一部消失する。平面は不正円形を呈し、北西-南東方向で1.70m、東西方向で1.96mをはかる。床面は攪乱で失われた部分以外はほぼ平坦で、深さは最大36.0cmである。

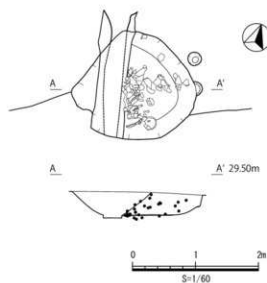


図146 12H区SK449

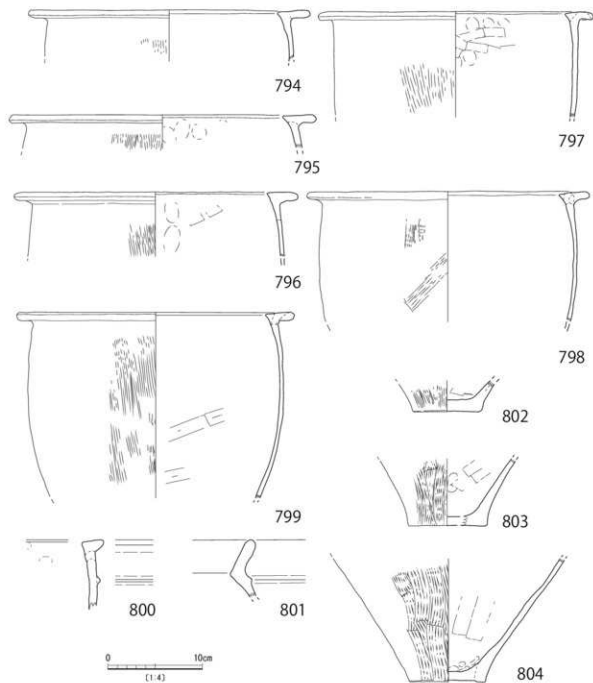


図147 SK449出土遺物1

出土遺物（図147・148）

794から804は甕形土器である。794から797は口縁部が水平な鋤形口縁を呈する。いずれも口縁部の内側の突出はさほど顕著ではない。798と799は鋤形口縁であるが、やや口縁部が内側に傾いて立つ。800は口縁部が断面三角形を呈し、口縁部下位に突帯が1条つく。801は「く」字形口縁を呈し、屈曲部下位に微小な突帯がつく。802、803、804はいずれも底がうすい平底を呈する。

805は甕形土器で、口径12.5cmに復元できる。806は短頸壺で、口縁部上面に焼成前穿孔がみられる。807は素口縁広口壺の口縁部片であろう。外面に丁寧な縦方向の研磨が施される。808は甕形土器の底

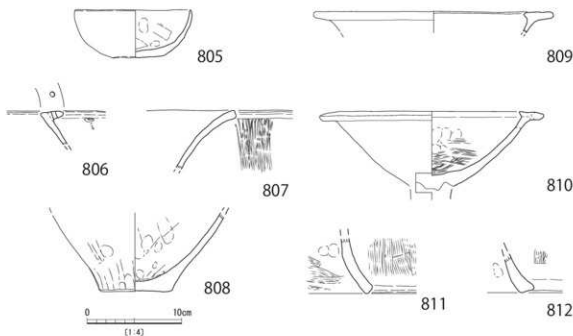


図148 SK449出土遺物2

部で、外面磨きである。底径は7.8cmである。809と810は高坏である。809は口縁部上面が水平な鋤形口縁で、口径25.2cmに復元できる。810は鋤形口縁でやや端部が下垂する。坏部内面は丁寧な研磨が施される。口径は23.8cmである。811と812は器台の小片である。

12H区 SK450 (図149)

12H区中央部に位置しており、他の弥生時代の遺構とはやや離れた場所にある。土坑の北部分は攪乱により遺存しない。遺構の半分ほどを攪乱によって消失するため平面形態は不明である。略東西方向で2.72mをはかり、北西-南東方向で1.56m残存する。床面は残存部分ではほぼ平坦で、深さは最大で44cmである。

出土遺物 (図150)

813から817は甕形土器である。813は鋤形口縁を呈する。口縁部上面中位が粘土接合のための強いナデでややくぼむ。814と815はいずれも「く」字形口縁を呈し、口縁部中位でやや肥厚する。815は口径31.4cmに復元可能である。816も「く」字形口縁であるが内面に明瞭な稜をもち、屈曲部下に微小な断面三角形の突帯がつく。817は底部で、底径7.4cmに復元可能である。818は壺の底部と推測される。底径6.0cmに復元できる。819は器台片である。

12・13H区 SK451 (図151)

12H区と13H区の境界に位置する。SB423の南壁を切っている。土坑の南側は別の浅い土坑が重複し、南東部も別の土坑が重複している。平面は、北西-南東方向95cm、北東-南西方向88cmで、やや北西-南東軸に長い略方形を呈する。床面はほぼ平坦で、深さは36~42cmである。

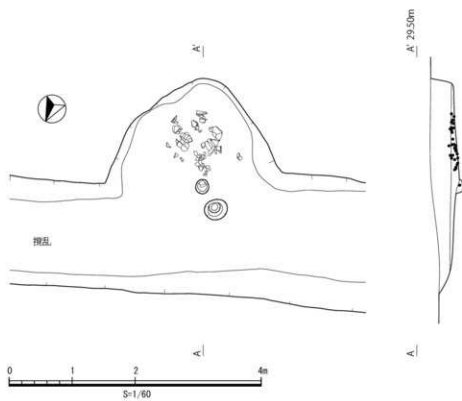


図149 12H区SK450

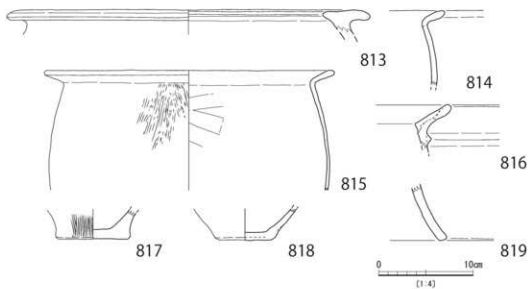


図150 SK450出土遺物

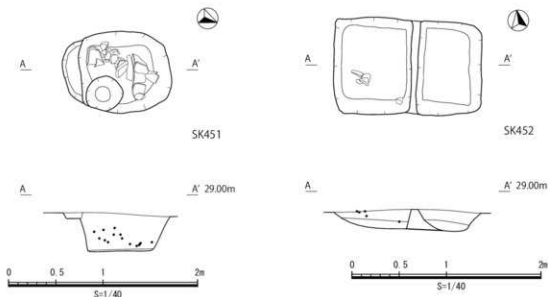


図151 12H区SK451, SK452

出土遺物 (図152)

820から822は甕形土器である。820と821は逆「L」字形口縁が湾曲して、口縁部が下垂する。いずれも口縁部下に小さい突帯がつく。口径は820が29.4cmに復元できる。822は「く」字形口縁を呈し、胴部の張りが弱い。823と824は壺形土器の底部である。底径は6.0cmと7.5cmに復元できる。825は甕棺片で口縁部上面が弧を描き、内面に強く張り出す。口縁部下位に断面三角のつまみ出したような微小な突帯がつく。826は甕の底部である。器面が荒れているが、外面にわずかにハケメが残り、内面には指頭圧痕の他に調整時の工具痕が残る。

13H区SK452 (図151)

13H区の北東部に位置し、SK451やSB423の南約1.0mのところにある。平面は略長方形を呈する。東西方向で1.56m、南北方向で1.02mをはかる。床面は土坑の西半部はほぼ平坦で緩やかに壁が立ち上がる。深さは22cmである。

出土遺物 (図153)

827と828はいずれも甕形土器である。827は「く」字形の口縁を呈し、口径は29.0cmに復元できる。828は「く」字形口縁を呈するが、やや口縁部が湾曲して端部に至る。口径は33.4cmに復元できる。

(5) エリアI-IV その他の遺構出土遺物

これまで述べてきた主たる遺構出土の資料のほかにも、エリアIあるいはエリアIIからは溝や旧河川、包含層などを中心に重要な遺物が出土している。これらの遺物について、一部の遺物に限られるが以下遺構別に報告する。また、エリアIIIには弥生時代の遺構が認められないものの、古墳時代から古代にかけての遺構から石庵丁が出土している。それらも他の石庵丁資料との比較のため報告する。

エリアI 10・11F区SD404出土遺物 (図154-157)

SD404はエリアIの南部10F区と11F区にまたがり略南北方向で検出されている (図4)。全長は

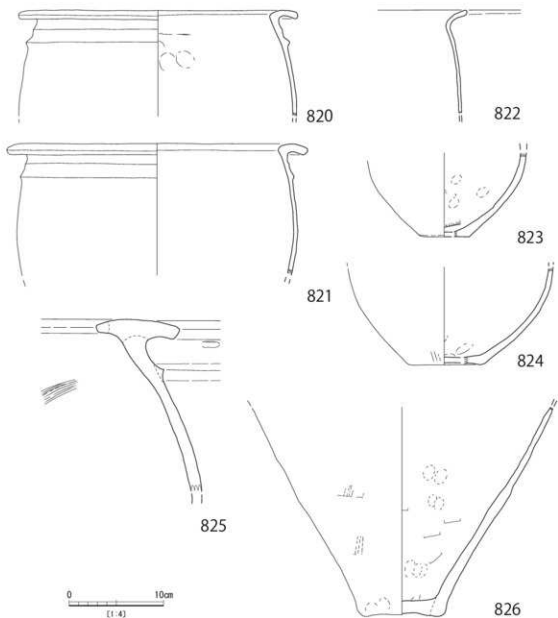


図152 SK451出土遺物

約72m、幅48cm～185cmで、溝の中央付近と南側でやや幅が広がる。

829は有孔の短頸壺で口縁部が短く立ち上がる。830は高坏で、鋤形の口縁部が長く伸びる。内面と口縁部上面は丹が残存する。831は筒形器台の鈎部分あるいは瓢形土器の突帯と思われるが小片のため詳細は不明である。832は甕棺の口縁部で内側への張り出しが強い。833と834はミニチュア土器で、833は脚付き土器である。

835、836、837、838は壺形土器である。そのうち835、836、837は頭部の短い直口壺である。また、835は頭部から胴部への屈曲部上に「M」字形突帯が廻る。838は複合口縁壺で、口縁部屈曲部はやや丸みがある。839は高坏で、口縁部が長く伸びる。脚部中位に円形の小孔がみられる。口径28.8cm、器高19.7cm、脚部径15.8cmである。841は器台で、840は器種不明であるが、高坏脚部あるいは器台の

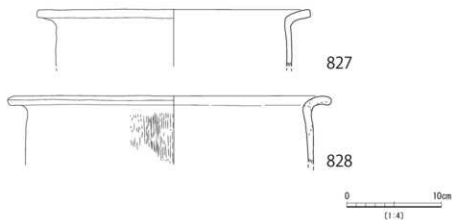


図153 SK452出土遺物

いずれかと思われる。842は器壁が厚く支脚であろう。843と844は石甕丁で、844は頁岩製、残存長は5.6cmである。

845、846、847は小形の壺で、胴部から短い頸部がやや外反気味に立ち上がる。848は小形の甕で口径11.0cmに復元できる。849は脚台付小形甕で丸みのある胴部を持ち「く」字形口縁を呈する。胴部は内外面ともハケメ調整で口縁部には指頭圧痕が残る。口径は19.0cm、底径12.0cmに復元でき、器高は22.9cmである。

850から860は甕形土器である。850は逆「L」字形口縁で、851は「く」字形口縁、852、853、854は鋤形口縁である。855は「く」字形に短く口縁が立ち上がる。856と857は「く」字形に長く口縁が立ち上がる。858から860は甕の底部で、859は低い上げ底状である。861から863は甕あるいは壺形土器の底部である。

864から870は甕形土器で、868以外はほぼ底部が丸底である。864と865は「く」字形口縁が比較的短く、867と868は胴部がすぼまり、肩の張る器形をしている。

エリアI SD316出土遺物 (図158-160)

SD316はエリアIの西部部分から中央部分にかけて、9C・D・E区と10C区にわたって検出された溝である(図4)。エリアI調査範囲内をほぼ東西方向に長軸をとる。また、未調査区を挟み9E区東側で調査されたSD403がこの溝の続きである可能性がある。溝の全長は約81.8m、幅は西端部で6.6m、9C区と9D区境界で4.86m、最も幅の狭くなっている部分で約3.0mである。

871は鐔形土製品である。頂部3箇所に焼成前穿孔が開けられている。外面は丁寧な磨きで丹塗りである。872は土製紡錘車で径は3.5~3.6cmである。873は土製の投弾で重量は40gである。874は泥岩製の柱状片刃石斧基部片である。875と876は太形蛤刃石斧片でいずれもカンラン石単斜輝石玄武岩製である。877から880は磨製石剣である。877は切先片、878と879は基部に近い部分である。881は石戈である。先端部と胡の左側から穿にかけて欠損している。

882から907は石甕丁である。889は背部が外湾しており意図的に剥離している可能性がある。892は紐孔間の背部に楕円形の剥離がみられる。901には背部に複数箇所意図的に刻みが施されている。

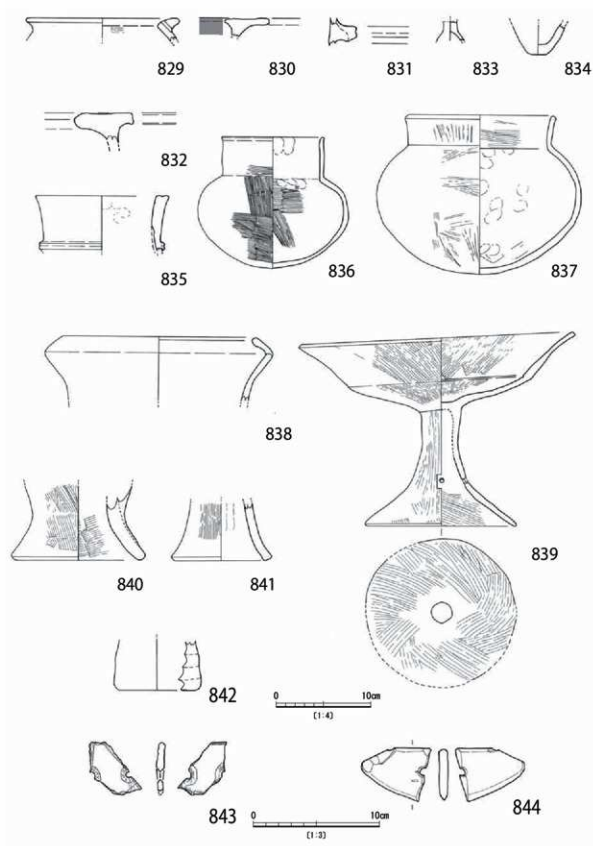


図154 SD404出土遺物1 (829-842 : S=1/4, 843・844 : S=1/3)

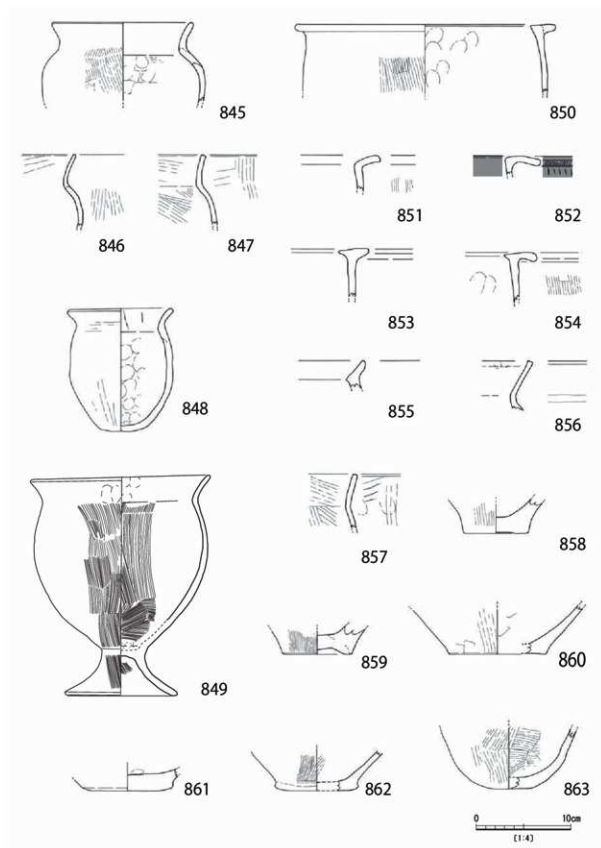


図155 SD404出土遺物2

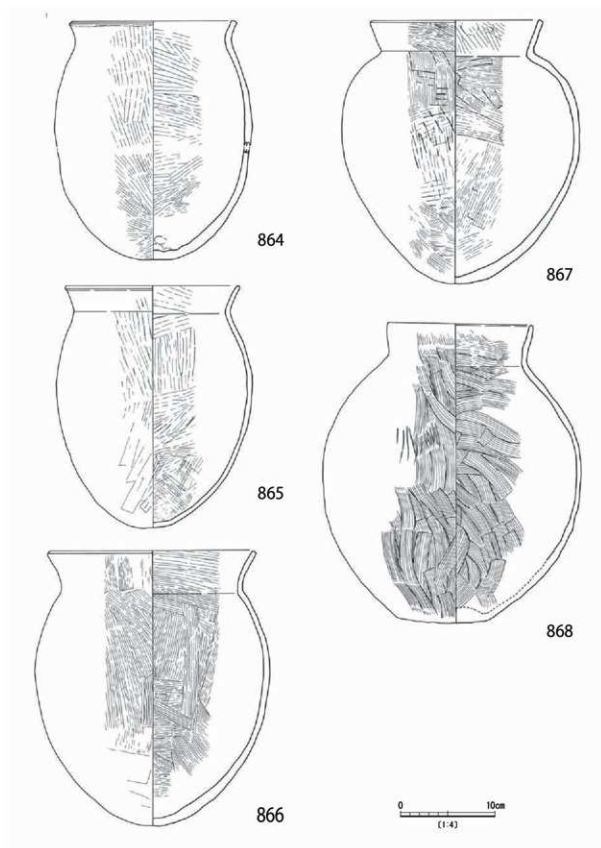


図156 SD404出土遺物3

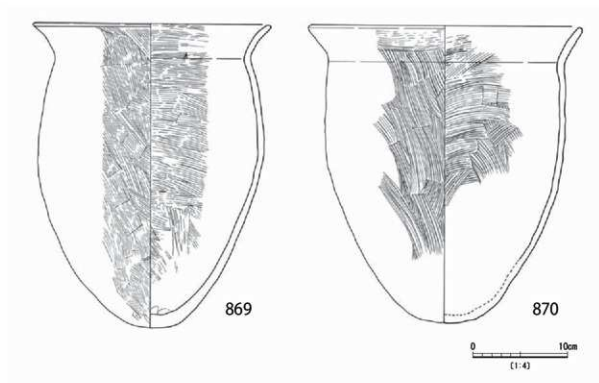


図157 SD404出土遺物4

908と909は青銅製鏃先である。双方とも袋部付近の破片である。

エリアI SD101、SD109、SX303出土遺物 (図161)

8B区 SD101出土石戈

SD101はエリアIの北西部から北東部、8B区～8F区にかけて位置する(図4)。古代官道の側溝の可能性が想定される遺構で、SD109とあわせて詳細は次年度報告の古墳時代遺構編で報告予定であるが、全長は約166mにわたる。このうち8B区から910の片岩製の石戈が出土している。援の途中から鋒端部を欠損する。

10F区 SX303出土銅戈鑄型

SX303は旧河川で、エリアI調査範囲内をほぼ縦断するような形で、東部から南部、7F-8・9E-9F-10F・G-11G区にかけて位置する(図4)。東西に蛇行するように検出されている遺構で、弥生時代以降、古墳時代から古代を中心とした遺物が出土している。旧地形で丘陵斜面の裾部に相当する部分を流れている。このSX303の10F区から銅戈の鑄型(911)が出土している。中細形銅戈の樋が合流する箇所が両面に彫り込まれている。石英斑岩製で、残存長は11.5cm、最大幅10.0cm、最大厚2.2cmで、重量は470gである。

エリアII その他の出土遺物 (図162)

エリアIIでは、1995年度56次調査で巴形銅器の鑄型(913)が出土している。この調査区は3・4

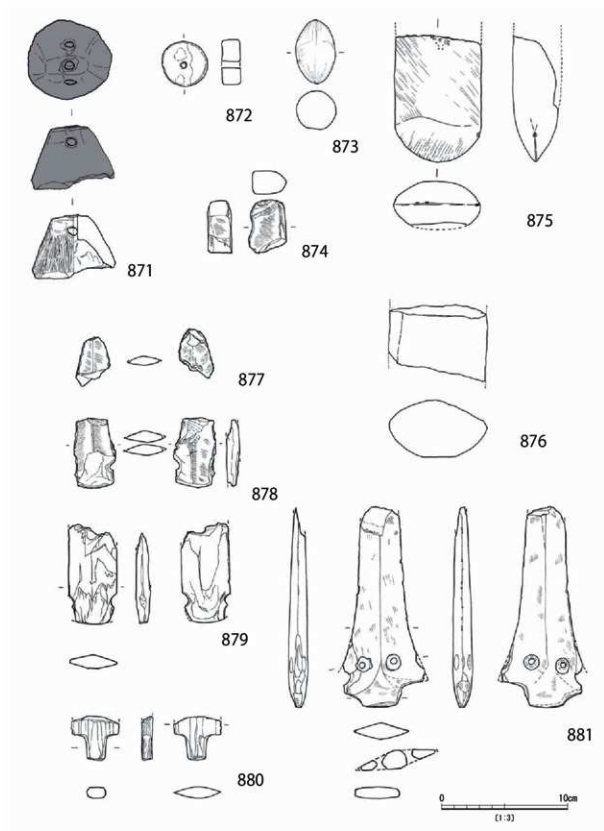


図158 SD316出土遺物1

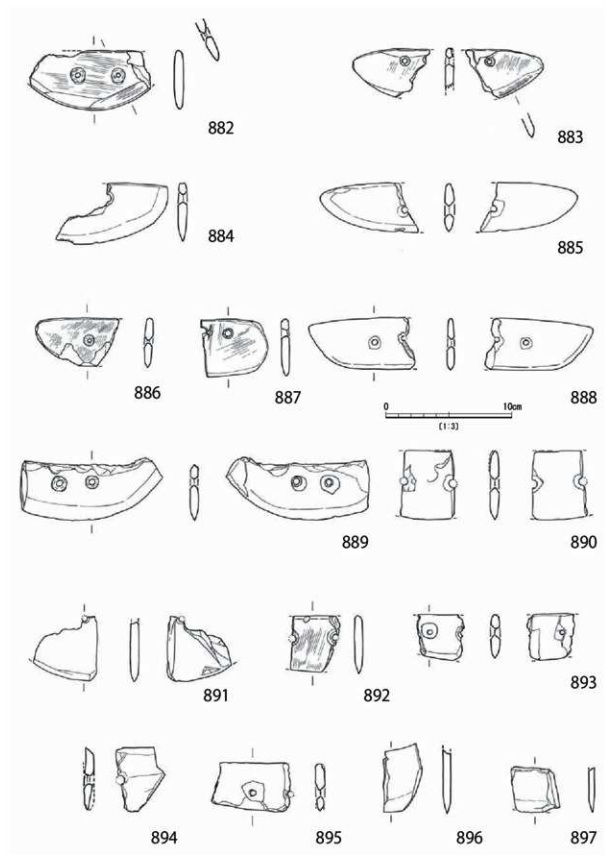


図159 SD316出土遺物2

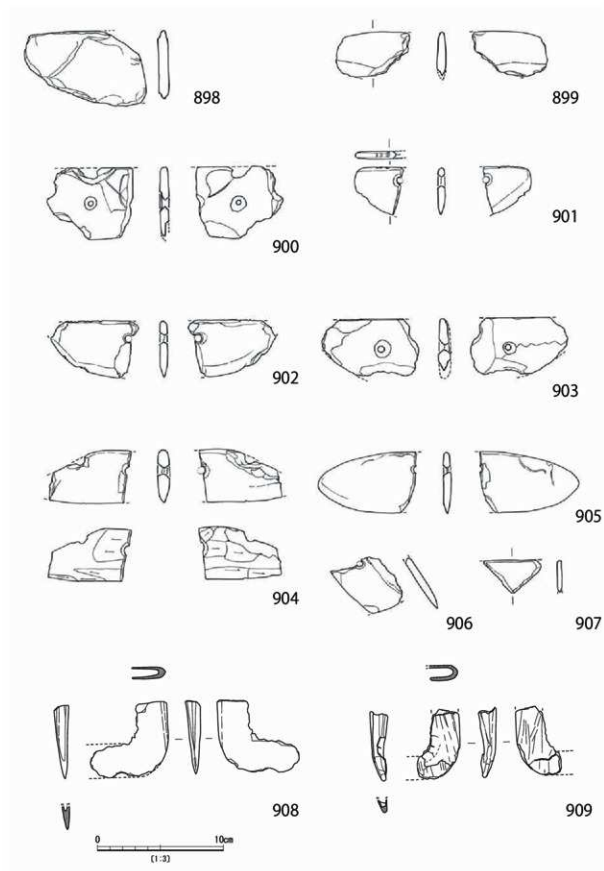


図160 SD316出土遺物3

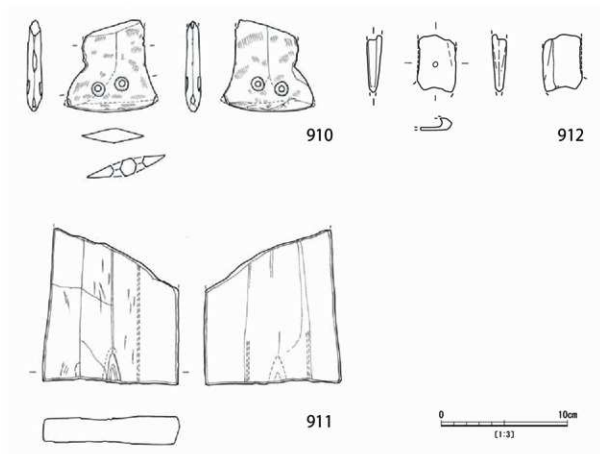


図161 エリアI その他の溝、旧河川出土遺物

- H・I区にまたがる(図1)。弥生土器が包含層から出土しているが、弥生時代の遺構はこの調査区では確認できていない。本鋳型も包含層からの出土である。包含層出土の弥生土器は全般的に器面の風化が著しく、器面がもろくなった土器が多くみられる。

本鋳型は11.9cm×12.9cmで、最大厚6.9cmをはかる。石材は石英長石斑岩である。本鋳型以外にもエリアIIから石燈丁が出土している。914はエリアII・7H区のビットから出土している。残存長6.5cm、最大幅4.1cm、重量19.2gである。

エリアIII その他の出土遺物(図162)

915と916はエリアIII・6N区(図1)のSX302Cから出土した石燈丁である。この遺構は官道に関連するものである可能性があるため、次年度に報告予定である。915は粘板岩製、916は凝灰岩製と考えられる。いずれも一部欠損するが略完形である。915は全長11.7cm、最大幅3.5cm、最大厚0.65cm、重量49.2g。916は全長12.3cm、最大幅4.6cm、最大厚0.7cm、重量53.8gである。

エリアIV その他の出土遺物(図162)

917はエリアIV・11P区(図1)のSD518から出土している磨製石剣である。董青石で略完形である。全長12.8cm、最大幅2.7cm、最大厚0.7cmで、重量は29.9gである。

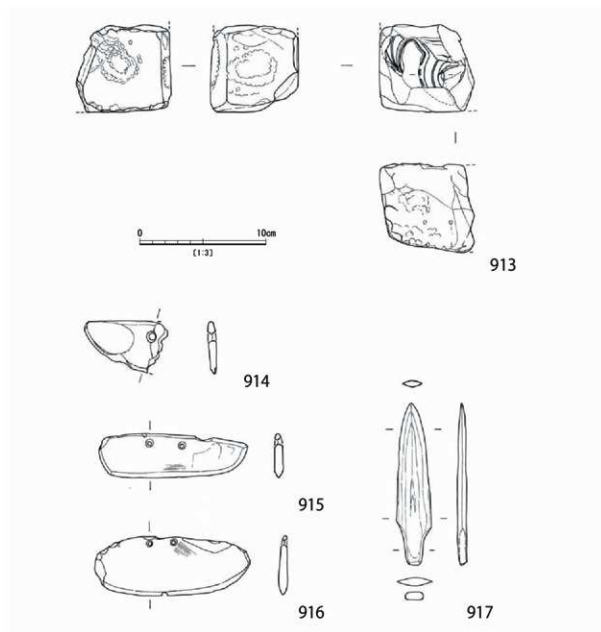


図162 エリアII・III・IV その他の出土遺物

註

1. 調査時はSD701/702の遺構番号が付されている。旧報告時にもこれらの遺構番号で報告が行われている（西編1992 p.59第6図、p.75第19図）。しかし、別の調査区において調査された古墳時代から古代の溝で同じ遺構番号であるSD701およびSD702が付けられている。そのため、本遺構に関してはSD001と遺構番号を変更する。それに伴い、SK101の南西脇で検出されているSD001と連続する可能性のある溝状遺構についてはSD002とした。縄文時代の遺構をこのように番号変更したため、SD705として調査されている10B区の縄文時代の溝状遺構についてもSD003と変更した。

文献

西健一郎編1992『九州大学埋蔵文化財調査報告-九州大学筑紫地区遺跡群-（第1冊）』九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡

IV 理化学的分析の結果

1. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群から出土した弥生時代石斧資料の地球科学的分析

足立達朗^(1, 2)・田尻義了^(1, 2)・中野伸彦^(1, 2)・小山内康人^(1, 2)

(1) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

(2) 九州大学大学院比較社会文化研究院

(1) はじめに

今山系石斧は、弥生時代の採掘石斧として、福岡市西区に所在する今山遺跡において製作され、広く北部九州に流通し使用されたとされる。当センターでは、これまでの一般的な考古学的理解を進めるため、今山系石斧に関連する石材について地球科学的高精度分析を実施してきた。その結果、岩石組織や全岩化学組成などの岩石学的データに基づき、今山で採取した玄武岩とそれ以外を区別することが可能となり、今山産玄武岩を用いた石斧の広域流通が検証可能となった(足立ほか, 2017)。今山系石斧であると考古学的に認定された資料は、福岡・佐賀・大分を中心に、最遠では熊本中部に及ぶとされ(下條, 1989)、佐世保、五島、志岐や八代などでも報告がある(森, 2018)。本稿では、これまで提案されている今山系石斧流通の実態を検証するため、九州大学筑紫キャンパス遺跡群から出土した今山系石斧について地球科学的高精度分析を実施し、これらの石斧石材が今山産玄武岩と対比可能かを検討した。

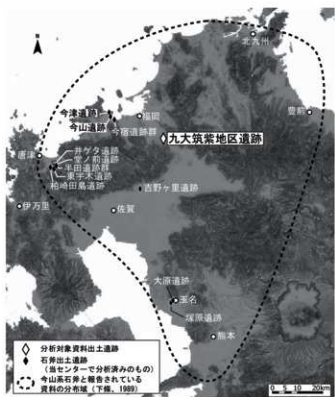


図1 分析対象遺跡の位置。地形の起伏も示してある

(2) 分析対象資料・分析手法

今回の分析は、九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土石斧資料9点が対象である。

分析に用いた石材サンプルは、石斧資料から、岩石カッター(岩本鉱産製)を用いて2cm角程度

切り出したものを用いた。このサンプルを精密切断装置 (BUEHLER 製 Isomet 1000) を用いて半割した。半割した資料の一方を用いて岩石薄片を作成した後、岩石組織の観察・構成鉱物の同定に基づく岩石記載を行った。他方は粉碎し岩石粉末を作成した後、融剤と混合してガラスビードを作成し、波長分散型蛍光 X 線分析装置 (XRF) およびレーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計 (LA-ICP-MS) を使用して主要・微量・希土類元素組成を分析した。使用装置は、九州大学大学院比較社会文化研究院設置の XRF (リガク製 ZSX primus II) および LA-ICP-MS (レーザー: New Wave Research 製 UP-213, ICP-MS: Agilent7500cx) を用いて分析を実施した。測定条件の詳細は、中野ほか (2009, 2012)、Nakano et al. (2010) を参照されたい。

(3) 分析結果

(3)-1. 岩石記載

今回分析を行った石斧石材は岩石学的特徴に基づき、3つの岩石種が認められた。それらは、緑色岩 (トレモラ閃石-斜長石岩、資料番号 QKS01)、砂岩 (長石質ワッケ、資料番号 QKS02) およびカンラン石単斜輝石玄武岩 (資料番号 QKS03~08) である。

緑色岩は主にトレモラ閃石と斜長石からなり、緑泥石を少量含む。トレモラ閃石は淡緑色で200~50 μm 程度の粒径で、柱状から針状の形状を示す。比較的粗粒の柱状結晶はおおよそ1 mm 程度でほぼトレモラ閃石のみからなる球状の集合体を形成する。針状で細粒のトレモラ閃石は、無色の斜長石 (50 μm 程度) とともに基質を構成する。また淡褐色の緑泥石は、トレモラ閃石集合体の周囲や基質などに分布する。

砂岩は主に石英、斜長石、緑泥石、絹雲母からなり、ジルコンや黒雲母などをわずかに含む。全体として、200~60 μm の粒径を示す石英および斜長石を鉱物片として多く含む、基質の割合が2割程度の長石質ワッケである。淘汰はよく、円磨度は低い。石英および斜長石は破断して角ばった形状を示す。緑泥石および絹雲母は極細粒で基質を構成する。

カンラン石単斜輝石玄武岩は、斑状組織を呈し、斑晶鉱物としてカンラン石、単斜輝石、不透明鉱物を含み、微晶質の石基からなるカンラン石単斜輝石玄武岩である (表1、図2)。

カンラン石は自形~半自形の形状で、0.08~1 mm (平均0.3 mm) 程度の粒径を示す。粒子の周縁部が変質し、イディングス石化している場合がある。単斜輝石は自形~半自形の形状で、0.06~

表1 分析対象資料の岩石名および出土状況

資料番号	岩石名	器種	地区	出土遺構	時期	報告
QKS01	緑色岩 (トレモラ閃石-斜長石岩)	太形鋸刃石斧	10C162	SK414中層	弥生中期中頃	P186の第102図
QKS02	砂岩 (長石質ワッケ)	太形鋸刃石斧	9D377	SD316中層	弥生中期	未報告
QKS03	カンラン石単斜輝石玄武岩	太形鋸刃石斧	9D337	SD316中層	弥生中期	未報告
QKS04	カンラン石単斜輝石玄武岩	太形鋸刃石斧	9D397	SD316中層	弥生中期	未報告
QKS05	カンラン石単斜輝石玄武岩	太形鋸刃石斧	9D098	SD316上層-?		未報告
QKS06	カンラン石単斜輝石玄武岩	太形鋸刃石斧	9D059	SD316中層	弥生中期	未報告
QKS07	カンラン石単斜輝石玄武岩	太形鋸刃石斧	9D078	SD316下層		P205の第115図4
QKS08	カンラン石単斜輝石玄武岩	太形鋸刃石斧	9D217	SD316上層		P205の第115図8

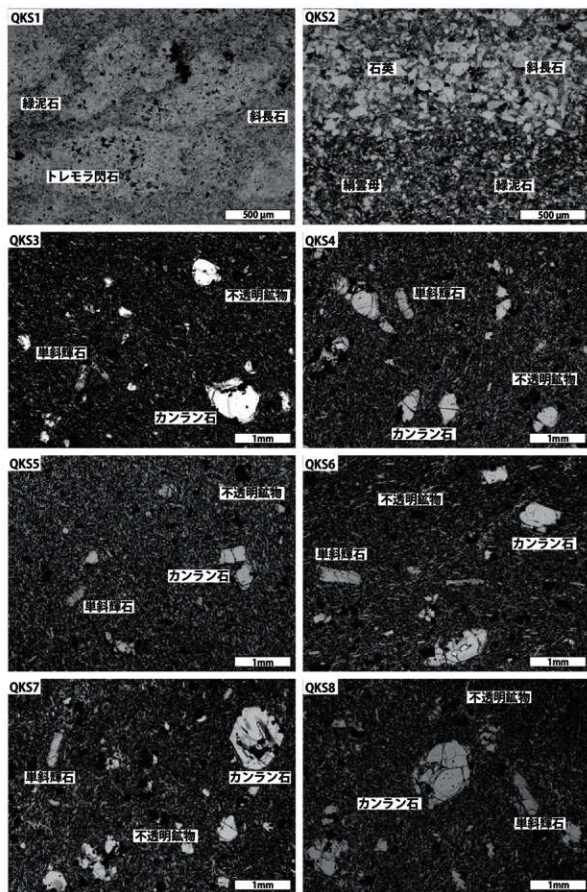


図2 分析対象資料の顕微鏡写真 (すべて単ポーラーで撮影)

0.8 mm (平均0.25 mm) 程度の粒径を示す。淡い緑褐色を呈し、砂時計状のセクター累帯構造を示す場合がある。不透明鉱物は、三角形や正方形形状の外形を示し、主に自形で、0.04~0.3 mm (平均0.1 mm) 程度の粒径を示す。石基を構成する鉱物は、カンラン石、単斜輝石、斜長石、不透明鉱物である。

(3)-2. 全岩化学組成

玄武岩製石斧資料が今山産玄武岩と対比可能かを検証するため、主要・微量・希土類元素を含む全岩化学組成分析を行った結果を表2に示す。なお、資料番号 QKS02は砂岩であるため、各種ダイアグラム上にプロットしていない。また資料番号 QKS04は分析に充分量の石材が切り出せなかったため分析しなかった。

分析を行った玄武岩製石斧資料5点は、すべての元素で非常に近接した化学組成を示すことが分かる。また SiO_2 が約44 wt.% で、 $\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}$ が約4.9 wt.% であり、TAS (Total Alkali-Silica) ダイアグラム (Le

Maitre et al, 1989) に基づくとベイスナイトに区分される。アルカリ・非アルカリ岩系の区分 (Irvine and Baragar, 1971) ではアルカリ岩系に区分され、総合的にはアルカリ玄武岩に分類される (図3)。

玄武岩の地球化学組成の特徴に基づいて形成場を推定する地球科学的判別図 (Meschede, 1986) 上では、すべての資料がプレート内玄武岩の領域にプロットされる (図4)。岩石の微量元素含有量の特徴を表現するために始源マントル (Wood et al, 1979) で規格化した値を示したスパイダー図では、全体的に含有量が高く、緩やかな右肩下りのパターンを示す (図5)。このパターンは、プレート内玄武岩の一種である海洋島玄武岩とよく類似しており、地球科学的判別図と同様の結果を示す。

これらの全岩化学組成の結果からは、今回分析を行った玄武岩製石斧資料は、すべて非常に近接した化学組成を示し、プレート内玄武岩の特徴を持つアルカリ玄武岩であることが分かった。

(4) 考察—今山産玄武岩との対比

顕微鏡観察の結果、対象資料の石斧石材のうち、玄武岩製の資料はすべて、斑状組織を呈し斑晶鉱

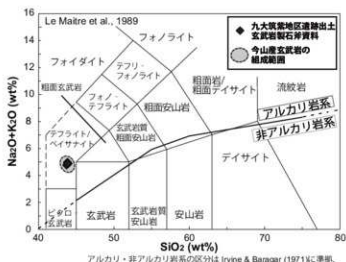


図3 分析対象資料のTASダイアグラム

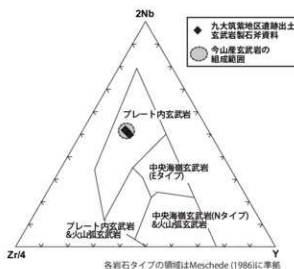


図4 分析対象資料の地球化学的判別図

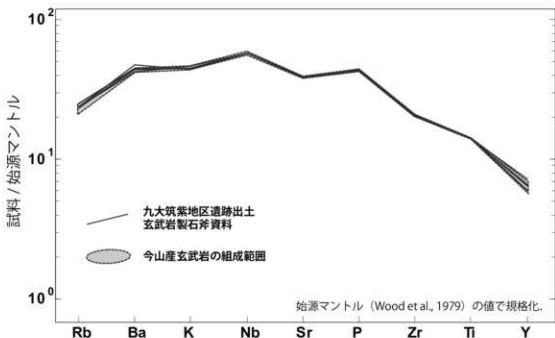


図5 分析対象資料のスパイダー図。始源マントル (Wood et al., 1979) の値で規格化したものをグラフ化した。

物としてカンラン石、単斜輝石、不透明鉱物が認められるカンラン石単斜輝石玄武岩であることがわかった。これは今山産玄武岩と同じ岩石であり、また鉱物の粒径、量比などの項目でも資料石材と今山産玄武岩とで一致が認められた (表1、図2)。また、全岩化学組成分析の結果からは、5資料すべてが非常に近接した化学組成を示し、プレート内玄武岩の特徴を持つアルカリ玄武岩に分類されることが分かった (表2、図3、4、5)。これら図中には、今山産玄武岩の化学組成範囲 (足立ほか、2017) を示しているが、すべての図において対象資料の分析値は今山産玄武岩の化学組成範囲に収まることが分かる。

以上のことから、今回分析を行った九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土の石斧石材は、鉱物組み合わせなどの岩石組織や、主要・微量・希土類元素を含む全岩化学組成などの点で今山産玄武岩とすべての項目で一致しており、地球科学的に今山産玄武岩と対比可能であることが分かった。

(5) まとめと今後の展望

今回の地球科学的分析により、今山産玄武岩を材料として製作された今山系石斧が現在の大野城市周辺地域にも流通していたことが実証され、これまで肉眼観察によって認定されていた今山系石斧の流通が検証された。大野城市周辺は、既に当センターの研究によって今山系石斧の流通が検証されている福岡平野と筑紫平野および菊地平野の接続口である二日市地峡帯地域に位置する。このことは、今山系石斧の南方への流通経路を考察する上でカギとなる可能性がある。今後、弥生時代における交易ネットワークの解明のためには、同様の地球科学的分析を九州地域の広域に展開し、今山系石斧の分布範囲を正確に把握することが不可欠であり、それによって、当時の交易流通の実態を検証することが可能となることが期待される。

表2 九州大学筑紫キャンパス遺跡から出土した石斧資料の全岩化学組成

	QKS02	QKS03	QKS05	QKS06	QKS07	QKS08	今山産玄武岩 代表値
SiO ₂	70.01	43.47	43.43	43.51	43.50	43.58	43.98
TiO ₂	0.82	3.51	3.50	3.52	3.53	3.51	3.56
Al ₂ O ₃	12.66	14.23	14.19	14.25	14.26	14.22	14.43
Fe ₂ O ₃ *	7.60	16.06	16.09	16.17	16.16	16.18	16.26
MnO	0.08	0.21	0.21	0.22	0.22	0.22	0.21
MgO	3.18	6.80	6.79	6.83	6.92	6.94	6.83
CaO	1.78	9.20	9.18	9.21	9.58	9.20	9.35
Na ₂ O	1.00	3.46	3.39	3.51	3.25	3.40	3.40
K ₂ O	1.76	1.34	1.32	1.35	1.38	1.35	1.33
P ₂ O ₅	0.18	0.90	0.89	0.90	0.90	0.91	0.91
LOI	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.
Total	99.08	99.20	99.00	99.46	99.70	99.50	100.25
V	72.00	229.57	227.33	228.33	228.47	230.59	229.92
Cr	103.76	138.80	170.08	223.11	148.35	210.38	164.28
Ni	42.02	36.20	48.88	84.08	55.46	82.10	58.81
Cu	15.37	35.93	39.22	41.59	40.08	37.63	39.93
Zn	42.56	189.44	190.43	191.35	192.45	192.53	194.03
Ga	13.41	20.36	20.43	21.03	20.32	20.85	21.03
Rb	72.61	17.73	16.48	16.23	16.48	16.47	15.13
Sr	88.02	882.49	876.70	887.04	892.97	882.41	900.45
Y	40.09	28.82	31.40	30.77	28.64	34.63	33.15
Zr	278.02	223.98	225.25	225.26	226.35	227.31	229.39
Nb	14.90	45.76	45.54	45.68	46.06	45.70	47.09
Ba	516.90	332.09	352.48	334.09	315.85	327.98	322.83
La	86.30	34.61	39.60	37.96	34.64	38.09	36.41
Ce	141.74	82.12	81.65	80.69	80.85	82.45	82.77
Pr	16.61	12.04	12.67	12.25	11.92	12.36	12.08
Nd	65.86	54.32	58.43	56.67	55.11	56.29	53.60
Sm	12.43	11.15	11.99	11.73	11.38	11.27	10.83
Eu	3.46	2.98	3.22	3.04	3.01	3.13	2.98
Gd	10.62	9.59	10.62	10.34	9.74	10.05	9.30
Tb	1.41	1.22	1.40	1.32	1.28	1.30	1.19
Dy	7.69	6.65	7.56	7.11	6.80	7.00	6.45
Ho	1.36	1.14	1.31	1.24	1.19	1.24	1.13
Er	3.44	2.82	3.27	3.08	2.90	3.06	2.82
Tm	0.46	0.36	0.43	0.40	0.38	0.39	0.37
Yb	2.93	2.19	2.54	2.39	2.31	2.36	2.21
Lu	0.42	0.32	0.36	0.34	0.32	0.33	0.31
Hf	7.40	6.32	6.77	6.82	6.49	6.30	5.70
Ta	1.20	2.83	2.94	2.79	2.65	2.60	2.44
Pb	3.96	5.57	4.56	5.51	5.50	5.14	5.10
Th	12.27	2.26	2.29	2.31	2.23	2.15	2.05
U	1.56	0.29	0.21	0.22	0.22	0.26	0.22

*全鉄を Fe₂O₃として表した値。

引用文献

- 足立達朗・田尻義了・中野伸彦・小山内康人2017「今津遺跡および今宿遺跡群出土玄武岩製石斧の地球科学的高精度分析」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会、136-137.
- 足立達朗・田尻義了・中野伸彦・小山内康人2015「地球科学的精密分析に基づく今山系石斧石材に関する新たな展開」『日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会、236-237.
- Irvine, T.N., Baragar, W.R.A. 1971 A Guide to the Chemical Classification of the Common Volcanic Rocks. *Canadian Journal of Earth Science*, 8: 523-548.
- Le Maitre, R.W., Bateman, P., Dudek, A., Keller, J., Lameyre, Le Bas, M.J., Sabine, P.A., Schmid, R., Sorensen, H., Streckeisen, A., Woolley, A.R., Zanettin, B. 1989 *A classification of igneous rocks and glossary of terms*. Blackwell, Oxford.
- Meschede, M. 1986 A method of discriminating between different types of mid-ocean ridge basalts and continental tholeiites with the Nb-Zr-Y diagram. *Chemical Geology*, 56: 207-218.
- 森貴教2018『石器の生産・消費からみた弥生社会』九州大学人文叢書13、九州大学出版会。
- 中野伸彦・角縁進・小山内康人・米村和絃・桑原義博2009「低希釈率ガラスビードを用いた主成分・微量・軽希土類元素の定量」『比較社会文化』、15、1-15.
- 中野伸彦・小山内康人・足立達朗・米村和絃・吉本絃・Nugroho SETIAWAN 2012蛍光X線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・希土類元素の迅速定量分析、『比較社会文化』18: 81-94.
- Nakano, N., Osanai, Y., Adachi, T. 2010 Major and trace element zoning of euhedral garnet in high-grade (>900°C) mafic granulite from the Song Ma Suture zone, northern Vietnam. *Journal of Mineralogical and Petrological Sciences*, 105: 268-273.
- 下條信行1989「村と工房」下條信行編『弥生農村の誕生』（古代史復元4）、講談社、pp113-124.
- Sun, S. S. and McDonough, W. F. 1989 Chemical and isotopic systematics of oceanic basalts; implications for mantle composition and processes. In: *Magnetism in the ocean basins*. Saunders, A. D. and Norry, M. J. (Editors). Geological Society, London. Special Publications, 42, 313-345.
- Wood, D.A., Joron, J.T., Treuil, M., Norry, M., Tarney, J. 1979 Elemental and Sr isotope variations in basic lavas from Iceland and surrounding ocean floor: The nature of mantle source inhomogeneities. *Contributions to Mineralogy and Petrology*, 70: 319-339.

【図版出典】

第1図：国土地理院の地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp>) に搭載された赤色立体地図（アジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許3670274、特許4272146）を使用）に著者が一部加筆して作成したものである。

2. 青銅製鋤先の分析結果

九州大学総合研究博物館 岩永 省三

(1) はじめに

青銅製鋤先は、弥生後期に北部九州に特徴的に見られる青銅器であり、広形銅矛・小型仿製鏡と同様に粗製品が多い。弥生時代の青銅器は、武器形品・祭器・装身具が多く、土木用具（斧・鑿・鉈・鋤）は少ない。土木用具は少ないながらも良く使い込まれた例が多く、鋤先も使い込まれ破片で出土する例が多い。

当地区出土の青銅製鋤先を含む弥生時代～古墳時代の青銅器について、2010年度に実施された九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト「高精度元素・同位体分析システムを用いた原始古代人口移動・物流ネットワークの研究」(以下、P & P プロジェクトと略す)において、地球科学的精密分析手法の考古学への応用研究の一部として、先端分析装置を用いた分析調査が行われた。その成果については、2011年7月の九州考古学会・日本地質学会西日本支部合同大会「考古学と地球科学—融合研究の最前線—」において報告した(岩永・米村・小山内・田中, 2011)。本項は、その報告内容に基づき青銅製鋤先に関わる部分を主体に記述する。

P&P プロジェクトでは、中国戦国～前漢、弥生時代～古墳時代の青銅器について、反射顕微鏡観察、反射電子像観察、SEM-EDSによる定性分析が行なわれた。分析の流れは、A) 樹脂で包埋、B) 面だし、鏡面研磨、C) 反射顕微鏡で観察、相や組織を把握、D) SEM-EDSによる定性分析、EPMAによる微小領域元素分析である。本分析では金属組織のごく微小な部分の元素組成もピンポイントで分析可能である。

(2) - 1 鋤先の分析結果

当地区出土の青銅製鋤先は3点あり、そのうち、9D区SD316(下層)出土の1点(以下No.31とする)、8C区SD109出土の1点(以下No.32とする)を分析した。

No.31から1.5mm×1.0mm程の試料を採取して分析した。写真1(反射電子像)は試料の中心部分での測定位置、写真2(反射電子像)は試料の周辺部分での測定位置を示す。表1は、各測定位置での元素組成を示す。表1を見ると、中心部分でも、90%以上の銅からなる部分(31-2、31-4、31-7)と、鉛主体の部分(31-1、31-5)とがはっきり分かれており、合金組織をなしていない事が判る。

No.32から1.5mm×1.0mm程の試料を採取して分析した。写真3(反射電子像)は試料の測定位置を示す。表2は、各測定位置での元素組成を示す。表2を見ると、鉛主体の部分(32-7、32-8)も僅かにあるが、80%以上の銅からなる部分(32-1、32-2、32-3、32-4、32-5、32-6)が大部分で、ほとんど銅からなり合金ではないことが判明した。

このNo.31・No.32の状況は、弥生後期の青銅器の一般的状況である可能性があるが、同時に分析した総合研究博物館所蔵の戦国式銅剣の錆部分の状況と似ていることから、No.31・No.32がほとんど錆化した部分を分析した可能性もある。広形銅矛・小型仿製鏡など分析例を増やす必要がある。

(2) - 2 ヨウ素の検出

No.31の定性分析で、表面近くにスポット状に多量のヨウ素を含む部分があると判明した。表面近くであることから、離型剤・塗型剤の可能性はあるが、同一個体 No.31の他の破片や No.32では検出されなかった。現在の製造では離型剤・塗型剤として油煙・黒鉛 (graphite) ・雲母 (mica) ・蛭石 (vermiculite) などを用いており、ヨウ素を用いる例は無いようである。この破片のみ農薬・肥料な

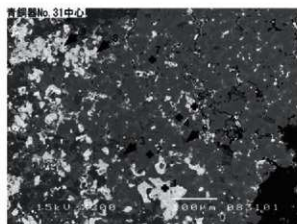


写真1 青銅製鋤先 No.31中心部の金属組織と分析点位置

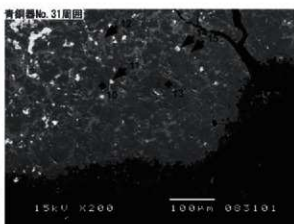


写真2 青銅製鋤先 No.31周辺部の金属組織と分析点位置

表1 青銅製鋤先 No.31の各分析点における元素組成 (%)

分析点	31-1	31-2	31-3	31-4	31-5	31-6	31-7	31-8	31-9	31-10	31-11	31-12	31-13	31-14	31-15
Cu	5.51	93.21	84.85	92.5	4.54	72.44	97.79	2.33	77.35	78.96	n.d.	96.46	86.63	n.d.	68.72
Sn	n.d.	3.89	1.86	4.21	1.56	7.55	2.07	0.76	5.34	6.07	n.d.	2.95	n.d.	3.23	8.85
Pb	75.27	1.58	n.d.	1.44	74.45	4.49	0.14	77.15	3.56	1.3	79.61	n.d.	3.74	89.03	2.54
O	19.22	1.33	13.29	1.84	19.45	15.52	n.d.	19.75	1.75	13.66	20.39	0.6	9.63	7.74	19.89

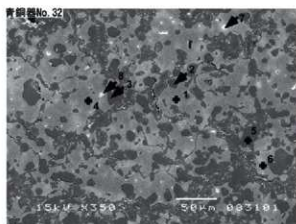


写真3. 青銅製鋤先 No.32の金属組織と分析点位置

表2 青銅製鋤先 No.32の各分析点における元素組成 (%)

分析点	32-1	32-1	32-3	32-4	32-5	32-6	32-7	32-8
Cu	96.35	87.34	84.85	99.82	85.66	99.42	14.47	35.25
Sn	3.41	n.d.	1.86	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.
Pb	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	69.79	61.43
O	0.24	12.66	13.29	0.08	14.34	0.58	15.74	6.32

どによって汚染された可能性もあるが、ヨウ素は表面付近の錆びた金属組織内に1~2ミクロン程度の大きさでスポット状に点在しており、さらに検討を要する。小山内康人は、青銅器を作る際に使用した土製増堀に由来する可能性、高温多湿地域の場合、土壌中のヨウ素含有量が多いため、土壌中で青銅器が緑青となる際に、土壌中のヨウ素と鉛が結びついた可能性も指摘している。

なお、ヨウ素は海藻の成分であり、かつて多数の銅剣を埋納した某遺跡の銅剣覆土からヨウ素ではない海藻成分が検出されたとの情報が流れたこともあるが、確証はないようである。

(3) 分析結果の評価に向けて

以上の結果の評価のために、P & Pプロジェクトで扱った他種の青銅器の分析結果と比較しておく。分析した資料を、製作年代が古い順に、種類・出土地・所蔵者を記す。

①. 戦国式銅剣・出土地不詳・九州大学総合研究博物館

中国戦国時代を中心に製作された身と柄を一体に作る銅剣で、本品は有節柄を有し、鐔に文様を鑄出す。

②. 前漢鏡・福岡県須玖岡本D地点・九州大学人文科学研究院

異体字銘帯鏡ないし昭明鏡の可能性が高いが断定はできない(宮本一夫氏教示)。

③. 細形銅剣・福岡県須玖岡本・九州大学総合研究博物館

弥生時代前期末~中期中葉に多く見られる。朝鮮半島製か日本列島製か形態から識別するのは難しい。

④. 小型仿製鏡・佐賀県小長崎山1号墳・九州大学人文科学研究院

反射電子像で組織をみると、中国製の①②と半島ないし列島製の③④および本項で扱った青銅製鋤先とは金属組織に大差がみられる。

①戦国式銅剣のメタル部分は、銅-錫合金の初晶 α 相が樹枝状に発達し、その隙間をやや酸素が増えた共析組織が埋め、最後に結晶化した鉛がスポット状に分布している。典型的鑄造組織が見られる。錆部分ではその程度によって状況が異なるが、錆化が進んだ部分では組織が崩壊している。

②前漢鏡は、鉛を含まず、銅-錫合金のスポット状の初晶の周囲を微細な共晶組織が埋め尽くしている。

①②からみて中国製青銅器は十分な合金化が成し遂げられていると言えよう。

これに対して③細形銅剣のメタル部分は2ヶ所(A・B)を分析したが、状況に大差がある。Aは銅が微量で錫-鉛主体の合金であり、鉛の樹状組織の間を錫が埋め、微細な銅粒子が散在する。この部分だけ見れば銅剣でなく錫剣である。これに対して、Bは酸化銅を主成分とし、他の金属を含まない。A・Bの様相から見ると、増堀に銅・錫・鉛の材料を入れて溶かした際に、錫・鉛が先に溶け銅が十分に溶けきらずに底にたまった時点で注湯したため、注入初期には錫-鉛合金が入ってAとなり、遅れて銅が入った部分がBと考えられる。溶解時に増堀内の温度が十分上がらず、合金化が不十分であったと言えよう。

④小型仿製鏡は、銅-鉛合金で、鉛の含有量が多いが、合金組織は見られず、スポット状に鉛が分布する。青銅製鋤先は、上で述べたように合金組織をなしておらず、弥生後期の青銅器の一般的状況である可能性はある。

以上から見て、中国製品の金属組織は十分に合金化がなされているのに対し、半島ないし列島製品

は合金化がいずれも不十分であり、技術的拙劣さが中国青銅器に比して際立つ。これが、分析した諸個体の特性か、弥生時代の列島製品の技術水準一般を示すのか、半島製品でもそうなのかが問題である。今後さらに資料を増やして詳細な比較を進めることで、中国製・半島製・列島製青銅器の金属組織、さらには技術水準の差異が明らかになれば、形態のみでは製作地を絞り込めない資料の製作地推定に展望が開けるとともに、流通論に確かな拠り所が得られるであろう。

文 献

岩永省三・米村和敏・小山内康人・田中良之2011「弥生時代青銅器研究における今次分析成果の意義」『考古学と地球科学—融合研究の最前線—』九州考古学会・日本地質学会西日本支部。

V 考察

1. 筑紫キャンパス遺跡群より出土した縄文土器の位置づけ

(1) エリア I・8B区出土縄文土器の評価

8B区は1979（昭和54）年度5次調査に初回の調査が行われている。続いて1983（昭和58）年度、1985（昭和60）年度にも当調査区の調査が行われており、いずれの調査においても少なからず縄文土器が出土している。1979年度調査では、小片が多く本報告では省略したが主に弥生時代の土坑である

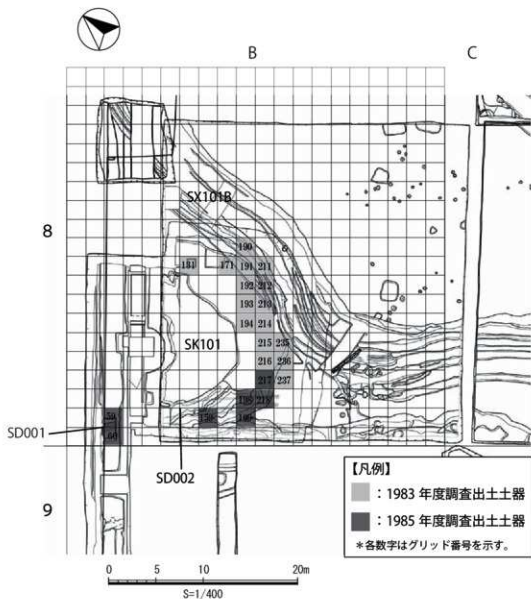


図1 8B区における縄文土器のグリッド分布

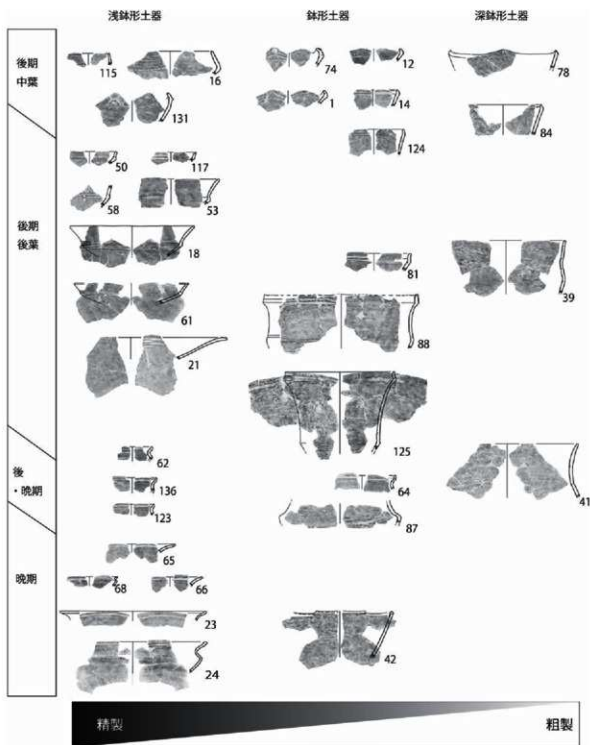


図2 筑紫キャンパス遺跡群出土縄文土器と様式構造 (S=1/10)

SK101の覆土から縄文土器が出土している。その後の1983年度と1985年度調査によって出土した縄文土器について8B区内での分布と遺構分布の関係をみると(図1)、まず1983年度調査出土縄文土器は、およそSK101-SX101B間の平坦部分で、双方の遺構よりレベルの高い範囲から出土している(図1)。すなわち、1983年度調査では1979年度の調査時に掘り下げていなかった範囲が縄文土器

の包含層と認識され調査されたものと考えられる。

その後、1985年度に8B区と10B区のキャンパス敷地境界部分で47次調査が行われた。その際SK101の敷地境界側である遺構の北側部分が新たに発掘され、1979年度に調査されたSK101の再発掘が合わせて行われている。この調査の際にも縄文土器が出土しており、既に報告した通り溝状の遺構およびSK101の南側から遺物が出土している（図1）。

一方この1985年度47次調査ではSK101の東-南側を取り囲むように溝状の落ち込みが検出されている。この落ち込みはちょうど1979年度調査時にSK101とSX101Bの間の掘り残されていた範囲の下から検出されており、1983年度および1985年度の調査によって出土した縄文土器の分布範囲ともおおよそ重なってくる。これらのことから、SK101の周辺に縄文時代に流路状の落ち込みが形成されていた可能性が高い。そして、おそらくこの流路状の落ち込みに土砂とともに縄文土器が流れ込んだのであろう。その後、SK101やSX101Bなどの掘削によって、その一部は破壊され、それぞれの遺構の覆土に縄文土器が混入する結果となったものと考えられる。

これらの土器の本来堆積していた場所については知りようがないが、10B区においてもエリアI内西側にあったと推定される微高地から牛頸川の方へ向かう溝状遺構が検出されている。おそらくこの微高地から土砂とともに今回報告した縄文土器の多くが流入、堆積したものと推定される。

(2) 出土土器の時期と特徴

これらの調査によって出土した土器の帰属時期についてまず整理する。多くの土器が出土した8B区と10B区の土器群に大きな時期の相違は認められず、ほぼ後期中葉太郎迫式期以降晩期中葉の黒川式期までの土器が出土している（図2）。ただし、8B区の流路状の遺構であるSD001での堆積状況を見ると、必ずしも下層と上層の出土土器で明瞭に時期差が認められるという状況ではない。この点は旧報告においても指摘されている（西編、1992）。下層から太郎迫式期やその後の後期後葉の細線羽状文を施す三万田式期および凹線文を施す鳥居原式期に併行する土器群とともに黒川式期の土器が出土している。一方、上層においても太郎迫式以降の後期中葉以後、後期末から晩期初頭の後・晩期に属する土器群と晩期の土器が出土している。その他の包含層や流路状の遺構から出土した土器群で層別別の土器の様相を比較することができないため、上記のような堆積状況については不明と言わざるをえないが、出土する縄文土器の帰属時期はおおよそ縄文時代後期中葉から晩期中葉ごろまでといえる。

これらの出土土器群の特徴について簡単に述べると、まず後期中葉の太郎迫式期から後葉の三万田式期まではおおよそ中九州などの当該時期の他地域の土器と際立った相違は認められない。一方、凹線文を施す鳥居原式期や後・晩期の御領式期に併行する時期の土器群については、精製の浅鉢形土器や鉢形土器は少量しか出土していないものの、中九州などの文化的に当時盛行していた地域と類似した形態的特徴がみられる。そのような中で一部の鉢形土器については精製度が低く、口縁部文様帯に凹線文などの施文を行うが、器面調整が貝殻条痕による仕上げであったりして半精製といえるような土器が認められる（図2：125）。また、中九州などでみられる口縁部に文様帯のカラーを付す精製器種の深鉢形土器が本遺跡群では後期後葉以降ほとんど認められない。

これまで編年研究の蓄積・整備とともに九州内での土器の地域差が明らかにされてきた（小池、1982；水ノ江、1997；坪井、1981）。後期中葉以降九州内で最も文化的に盛行する地域の一つである

中九州地域と北部九州地域の間での土器にみられる地域的相違については以前より研究が蓄積されている。広域に土器の類似性の高い浅鉢形土器などの精製器種に対して、深鉢形土器において両地域間で相違がみられる点がこれまで明らかにされている（松本、1995；山崎・島津、1981など）。また、後期後葉における広域土器分布圏の分化という観点からこのような地域差の様相を位置づける研究もある（家根、1996）。中九州などでは少なくとも後・晩期頃までは浅鉢や鉢形土器とともに鉢形土器の精製度が高く器面も研磨が施されることが多い。一方、北部九州では浅鉢や鉢形土器など精製度の高い土器に対して深鉢形土器の精製度が相対的に低下する状況がこれまでも指摘されており（石川、1999）、本遺跡群出土土器群についても、出土遺物量などが関与している可能性があるが、精製度の低い鉢形土器がみられる点などこれまで指摘されてきた土器様式構造の一部の要素における粗製化傾向と矛盾しないものといえよう。

出土点数は決して多くはないが、このように後期中葉以降の土器の様式構造における特徴はこれまで北部九州で指摘されてきた傾向とある程度一致しているものと推測される。さらに、本遺跡出土土器群については、後期中葉の鐘ヶ崎式土器が少数ながら出土している点も特筆される。すでに述べたように本遺跡群周辺には縄文時代の遺跡はさほど多くはないが、後期中葉における磨光縄文土器の伝播が本格化する直前の鐘ヶ崎式期の土器は周辺遺跡でもほとんど認められない。わずか2点でありかつ包含層や旧河川からの出土で生活遺構に伴うものではないが貴重な資料といえる。当該時期の生活の具体像を把握する上で、今後周辺地域での事例数の増加が期待される。

文献

- 石川健1999「九州における縄文後・晩期土器の様式構造変化と地域性」『古文化談義』43：1-31
- 小池史哲1982「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器-晩期初頭広田式の設定-」（森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編）『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 福岡、127-146頁
- 松本直子1995「土器の地域性に関する認知考古学的研究-縄文時代後晩期九州の地理勾配の検討を通して-」『鹿児島考古』29：20-29
- 水ノ江和同1997「北部九州の縄文後・晩期土器-三万田式から刺目突帯文土器の直前まで-」『縄文時代』8：73-110
- 西條一郎編1992「九州大学埋蔵文化財調査報告-九州大学筑紫地区遺跡群-（第1冊）」九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡
- 坪井清足1981「縄文晩期の土器-西日本-」（鈴木公雄、林謙作編）『縄文土器大成』4 晩期 講談社 東京、155-158頁
- 家根祥多1996「縄文土器の終焉」（泉拓良編）『縄文土器出現（歴史発掘2）』講談社 東京、134-154頁
- 山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」（加藤晋平、小林達雄、藤本強編）『縄文文化の研究』4 雄山閣 東京、249-261頁

2. 弥生時代の北部九州と筑紫キャンパス遺跡群

(1) 弥生時代の遺構の時期と集落の構造

九州大学埋蔵文化財調査室 石川 健

1) はじめに

以下では、Ⅲで報告した各遺構出土遺物に基づき遺構の時期を確定し、本遺跡群内での弥生時代の遺構分布を検討する。そのうえで集落の様相についての把握を試みる。また、Ⅳ-1やⅤ-2-(3)では石器石材資源の産地や石器に関する分析によって、複数の産地からの物資が本遺跡群に流入していることが明らかにされている。このような石器・石材資源の動きに加え土器にみられる地域的特性について検討し、人や物の動きをより多層的に把握することによって、本遺跡群の性格をより明らかにすることが可能になるものと考えられる。そのため、遺構出土土器群にみられる地域的特性についても最後に簡単に整理する¹¹⁾。

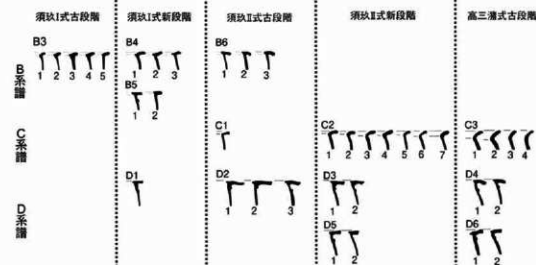
このような目的で遺構の時期や分布の解析を行うが、これまで指摘されている通り本遺跡群は九州大学筑紫キャンパス用地として活用される以前の段階ですでに旧地形がかなり改変されている。そのため、多くの遺構が土地の造成等によって削平されている。このことは、今回報告した遺構の残存状況が概してよくないことから十分にかがわれる。このような遺跡形成過程の結果、残存した遺構のみに基づいて遺跡内の土地利用の様態やあるいは集落構造を復元することにはおのずと限界が伴うことは多言を要しないであろう。

しかし、残存している遺構を旧地形と重ね合わせることによって、本来遺構が存在した可能性の高い部分と、そうではなくおそらく遺構密度が相対的に低いと予想される場所の推定はある程度可能と考える。また、遺構の性格によってある程度場所の機能的側面についても推定が可能となるであろう。Ⅰにおいて旧地形とキャンパス内遺跡群の各調査区の関係を示した図を挙げた(Ⅰ章：図1)。これはあくまで現地形に残る起伏を参考にして明治期の陸軍陸地測量部作成の地形図を重ねたもので正確性に欠ける部分はあろうが、これに基づきひとまず以下で遺構の時期的推移と遺構分布について検討することにしたい。

2) 遺構の時期

まず、エリア別に遺構の時期の比定を行う。出土土器による遺構の時期比定は、既存の土器編年に基づくが、中期・須玖Ⅰ、須玖Ⅱ式期の土器群については、石田(2009)が本遺跡出土土器も対象資料に含めた甕形土器の属性変異の時期的推移についての整理を行っている。そのため、中期についてはおおむね石田の成果(図1)に基づき、対象外の中期初頭の土器も含めたくらいで時期比定を行う。後期については遺構数が限られるが大川他編(1996)および福岡市博物館編(1998)を参考にした。

以上のような既存の編年研究に基づき作業を行うが、遺構の堆積状況や遺物の出土状況について記録されている遺構に限られており、かつ図面上の遺物と実際に出土した土器の対応関係を確認できるものとなるとさらに限られる。そのため、遺構の時期を絞り込んで同定するのが困難であった。現在の弥生土器の編年研究は非常に細分化され精度の高いものであることは承知しているが、上記のような事情により中期については中期前半と後半というように大まかな時期区分によらざるをえない。了



- B3-口唇部に高めの口字の歯と歯を結合して面字の形を造形に仕上げたものや、B6に口唇部内部に乳歯を結合して造形の造形部に仕上げたものがある。いずれも口唇部内部に強い線、あるいは線跡により示す。歯部はやや狭める。顔上半部に歯と歯を結合する形が示されるが、新段階が従来の形に近い口唇部に近い。
- B3-1歯の間に口字の字の口で、口唇部上面にやや丸みをもつ。口唇部は丸みを持つ。
- B3-2B3-1より口唇部上面がやや長く、口唇部上面にやや丸みをもつ。口唇部は丸みを持つ。
- B3-3B3-2より口唇部の長さがやや長く、口唇部上面の丸みがなくなり、直線的にのびる。口唇部の付け根がやや太い。口唇部は丸みを持つ。
- B3-4B3-3より口唇部の長さがやや長く、口唇部の付け根がやや太い。口唇部は丸みを持つ。
- B3-5B3-4より口唇部の長さがやや長く、口唇部の付け根がやや太い。口唇部は丸みを持つ。
- B4-歯部は狭く平たい。口唇部が歯部を覆う。口唇部内部に乳歯、歯部が示される。
- B4-1B3-1より口唇部の長さが短く、口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- B4-2口唇部は丸い。歯部が示される。口唇部内部への突出が示される。口唇部外部の歯部が口唇部上面に持ち上げられているため、口唇部上面にひびきあられる。口唇部は丸みを持つ。
- B4-3B4-1より口唇部内部に歯部が行われ、口唇部内部への歯部も突出を持つ。口唇部外部の歯部も丸みを持つ。口唇部上面は平たい。口唇部上面に、B4-2と比べてやや丸みがある。口唇部は丸みを持つ。
- B5-口唇部は丸い。歯部が示される。口唇部内部への突出が示される。口唇部外部の歯部が口唇部上面に持ち上げられているため、口唇部上面にひびきあられる。口唇部は丸みを持つ。
- B5-1B5-0より口唇部の長さが短く、口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- B5-2口唇部は丸い。歯部が示される。口唇部内部への突出が示される。口唇部外部の歯部が口唇部上面に持ち上げられているため、口唇部上面にひびきあられる。口唇部は丸みを持つ。
- B5-3B5-2より口唇部の長さが短く、口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- B6-歯部は丸いと示す。歯部は丸いと示す。口唇部が丸いと示す。口唇部内部に乳歯、歯部が示される。
- B6-1口唇部が丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- B6-2口唇部が丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- B6-3口唇部が丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- B6-4口唇部が丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- B6-5口唇部が丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- C1-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- C2-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- C3-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- C4-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- C5-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- C6-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- C7-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- D1-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- D2-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- D3-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- D4-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- D5-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。
- D6-口唇部は丸いと示す。口唇部内部に乳歯と歯部とが結合して行っている。口唇部内部の歯部が狭く、歯部は丸みを持つ。歯部は丸みを持つ。

図1 口唇部分類基準 (石田, 2009より転載)

とされたい。なお中期前半は従来の城ノ越式期-須玖Ⅰ式期、中期後半は須玖Ⅱ式期に対応する。ただし、中期前半のうち初頭の城ノ越式期の土器のみが出土しているような場合は、その点を加味した時期比定とする。

エリアⅠ (図2)

中期前半：住居跡では8E区SB201 (図2：3、以下()内番号は図2中の番号)、10E区SB407 (39)、10F区SB408 (40)、11F区SB506 (41)、SB507 (42)、SB508 (43)、SB509 (44)などがこの時期に比定できる。土坑では7D区SK509 (11)、SK510 (12)、SK511 (13)、SK513 (15)、8C区SK104 (6)、SK105 (7)、SK106 (8)、8E区SK201 (16)、SK202 (17)、9C区SK405 (18)、9D区SK305 (19)、9F区SK428 (26)、10C区SK409 (21)、10F区SK429 (36)、SK431 (37)、SK433 (27)、11B区SK503 (28)、SK505 (29)、11D区SK520 (33)、11D区SK514 (32)、11E区SK532 (34)、10/11E区SK425 (35)、11G区SK549 (38)などが中期前半に属する遺構である。

これらの遺構のうち、より古い時期の遺構と考えることのできるのは、城ノ越式期併行の土器が出土している9F区SK428 (26)、10F区SB408 (40)、11E区SK532 (34)などである。また、これらの遺構が位置する9F区から10E・F区、11D・F区などエリアⅠの南部、丘陵部であるエリアⅣに近い範囲からは遺構出土の土器に中期初頭の資料が混在する傾向にある。すべてが直接遺構に伴うものではないが、この範囲で中期初頭に人々が活動していたことを示すものであろう。以上の住居跡や土坑に加え、11C区で検出されている甕棺墓SJ502 (30)及びSJ503 (31)も中期前半の遺構に含まれる。

中期後半：住居跡は7C区SB501 (1)、SB502 (2)の2基、土坑は7D区SK508 (10)、SK512 (14)、8C区SK103 (5)、9D区SK413 (22)、9D区SK415 (24)、10C区SK408 (20)、10E区SK420 (25)、そして出土した土器が少なく確実ではないが8D区SK107 (9)の8基ほどとなる。

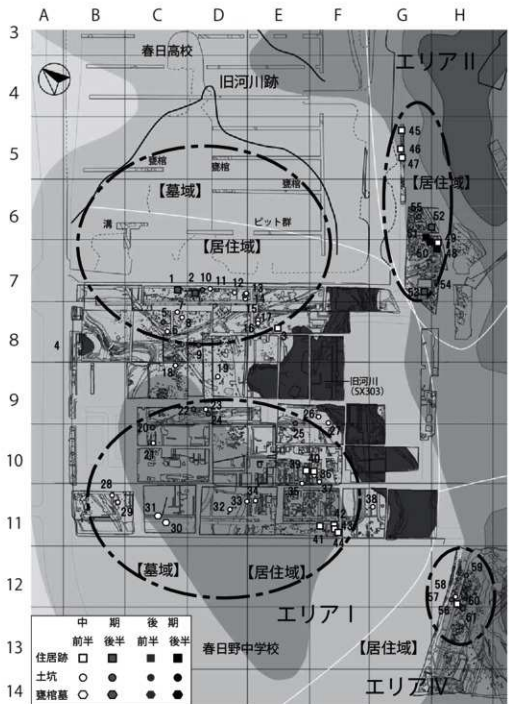
以上の中期の遺構に加え、エリアⅠではSD404が後期の遺構と考えられるが、出土土器の様相からは後期以降一部古墳時代に属する遺物も出土している。遺構の堆積状況や出土状況が今一つ判然としないため、このようなある程度時期幅を持たせた時期比定にとどめざるをえない。

エリアⅡ

中期前半：住居跡は、5/6・G/I区のSB1001 (45)、SB1003 (47)、7H区のSB219 (49)の3基となる。これらに加え、須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式古段階にかけての土器が出土しているSB1002 (46)があり、中期の中頃になるものと判断できる。

中期後半：住居跡では6G区SB223 (52)、土坑ではSK215 (55)が中期中頃から後半にかけての時期の遺構と考えられる。また、7G区SB205A (53)も時期の判別できる遺物が少ないが、中期後半の遺構の可能性はある。ただしこれらのうちSK215からは、後期高三瀬式期の鉢形土器 (図139：772) や後期に属する高坪脚部 (図139：781) なども出土しており弥生時代後期まで下る可能性がある。

後期：7H区SK208 (54)は須玖Ⅱ式土器の他に後期初頭と考えられる支脚などが出土しており、後期初頭を前後する時期の土坑の可能性はある。そのほか住居跡である7H区SB218 (48)、7G区SB220 (50)、6/7G区SB221 (51)などは主に下大隈式期の土器に加え一部弥生時代終末期に及ぶ時期の土器や日佐原式期の甕棺などが出土している。また、古墳時代に入る土器も含まれる。しかし、遺物の出土状況や一括性について判断できない部分があることから、後期後半以降後期末頃までの遺構としておく。



- | | | | | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|-----------|
| 1. SB501 | 9. SK107 | 17. SK201 | 25. SK420 | 33. SK520 | 41. SB506 | 49. SB219 | 57. SK446 |
| 2. SB502 | 10. SK508 | 18. SK405 | 26. SK428 | 34. SK532 | 42. SB507 | 50. SB220 | 58. SK449 |
| 3. SB201 | 11. SK509 | 19. SK305 | 27. SK433 | 35. SK425 | 43. SB508 | 51. SB221 | 59. SK450 |
| 4. SK101 | 12. SK510 | 20. SK408 | 28. SK503 | 36. SK429 | 44. SB509 | 52. SB223 | 60. SK451 |
| 5. SK103 | 13. SK511 | 21. SK409 | 29. SK505 | 37. SK431 | 45. SB1001 | 53. SB205A | 61. SK452 |
| 6. SK104 | 14. SK512 | 22. SK413 | 30. SJ502 | 38. SK549 | 46. SB1002 | 54. SK208 | |
| 7. SK105 | 15. SK513 | 23. SK414 | 31. SJ503 | 39. SB407 | 47. SB1003 | 55. SK215 | |
| 8. SK106 | 16. SK202 | 24. SK415 | 32. SK514 | 40. SB408 | 48. SB218 | 56. SB423 | |

図2 九州大学筑紫キャンパス遺跡群内の遺構分布と御供田遺跡周辺調査区 (1/2500)

エリアIV

中期前半：12/13H区SB423(56)、12H区SK449(58)などが、出土遺物がほぼ須玖Ⅰ式期に取りまり、中期前半あるいは中頃までの時期の遺構であろう。

中期後半：12H区SK446(57)、SK450(59)、13H区SK451(60)、SK452(61)などが須玖Ⅱ式期の土器を主に出土する遺構である。SK452以外は須玖Ⅱ式でもより古相の土器が目立つ。

3) 遺構分布(図2)

エリアⅠでは東側の範囲に土坑の他に数基の住居跡が北西-南東方向にかけて検出されている。これに対して、8/9C/D区などエリアⅠの中央部は土坑が中心で弥生時代の住居跡と明確に判断できる遺構は認められない。このようにエリアⅠ内の東側、すなわち春日高校との敷地境界にほぼ沿って住居跡を含む遺構が分布している点については、春日高校建設前の地形を参照することである程度理解できる(図2:旧河川跡)。高校建設前の地形図では、高校の敷地を南北に斜めに流れる流路状の地形により敷地内が東西に二分されている点が指摘されている(重藤編, 2005)。この流路状の地形は、九大筑紫キャンパス敷地内の調査で検出されている旧河川流路SX303と一体のものと考えられることができる(重藤編, 2005)。エリアⅠの南側の一段高くなる丘陵裾部を南西-北東方向に流れるSX303が春日高校敷地内に連続して流れていることになる。そのように考えると、上記のエリアⅠ東部、春日高校グラウンドに接する位置に認められる遺構群は少なくとも春日高校の旧河川が形成される部分や九大内エリアⅠ南側の旧河川流路SX303が流れる範囲などに比べ標高が若干高いことが想定される。このような微妙な地形の起伏が影響してこの範囲に居住施設が設けられていたものと推測される。

一方、エリアⅠ西-南西部は住居跡を含む遺構が比較的多く分布しており、かつ甕棺墓を2基検出している。ここは旧地形図によると微高地になっている場所である。現状では造成によって地形の起伏をほとんど認識できないほど平坦になっているが、本来は微高地上にさらに多くの遺構が分布していたものと予想される。エリアⅠにはおそらくこのように比較的高い東側と西-南西部に遺構が多く分布し、かつ住居跡などの分布も合わせて考えると居住域が形成されていたものと想定される。

遺構の時期をみると、先述のようにエリアⅠ西部で中期初頭のSB408、SK532やSK428などがみられる。その後、須玖Ⅰ式期古段階以降、須玖Ⅰ式期新段階の中期前半や、中期中頃から後半の須玖Ⅱ式期古段階の遺構が多く認められるようになる。エリアⅠの東側と西、南西部に挟まれた居住施設のみられない8C/D区や9C/D区といったエリアⅠ中央部もこの時期に遺構が認められるようになる。このような遺構の形成時期は、SK101出土土器の時期ともおおそ軌を一にする。SK101では、1985年度に行われた47次調査で出土した土坑最下層出土遺物には須玖Ⅰ式期新段階に比定されるものが多く含まれ、また、5次調査出土資料も含めそのほかの遺物は須玖Ⅰ式新段階をピークに須玖Ⅱ式古段階が多く含まれる(石田, 2009)。その後、このエリアではSK428が後期の土坑である可能性があるが、その他には明確に後期の遺構は把握されていない。ただし、SX303の西側を並走するように位置するSD404から後期から古墳時代初頭の遺物が比較的多く出土している。

エリアⅡで検出した弥生時代の遺構は、エリアⅠに比べ全体的に標高がやや高い丘陵北側裾部の調査区に位置している。なかでもエリア内のより西側、エリアⅠに近い調査区で多くの遺構が検出されている。54次調査区と9次調査区で住居跡及び土坑などが調査されている。54次調査区は南西-北東方向に細長い調査区であるため、遺構の広がりに関しては不明な部分が多いが、中期前半の住居跡が認められる。その南西の9次調査区では中期前半・須玖Ⅰ式期新段階から中期後半・須玖Ⅱ式新段階

までの遺構が広がる。さらに、後期下大隈式期以降弥生時代末にかけての住居跡がみられる。とくにSB218とSB221からは後期後半から末ごろの甕棺が出土しており注目される。また、このうちSB218では土器とともに鉄器3点が住居跡内から出土しており、この住居跡の性格や住居の廃絶儀礼との関わりなどを考えるうえで重要な資料と考えられる。

エリアⅣでは弥生時代の遺構は29次調査の範囲のうち南側から延びる丘陵の西側にあたる12/13H区で土坑、住居跡が調査されている。このあたりは、現地形でもエリアⅠに比べ一段高くなっており、旧河川SX303がエリアⅠとの境界を流れている。この範囲からは弥生時代の住居跡は1基が検出されており、そのほかに5基の土坑がみられる。調査範囲の北側、傾斜のやや緩やかな丘陵斜面に沿って遺構が分布している。遺構の時期は中期前半の須玖Ⅰ式期新段階から中期後半須玖Ⅱ式期の新段階までに及ぶが、須玖Ⅰ式新段階および須玖Ⅱ式古段階の遺構が多く中期中頃に遺構が多くなる傾向がある。必ずしも出土遺物の豊富な遺構ばかりではなく、土器の小片のみによって時期を決めざるをえない部分もあるが、中心となる時期はエリアⅠと重なる。

以上のように、本遺跡群では弥生時代の遺構はキャンパス敷地内の北西部、すなわち南側から延びる丘陵の西側斜面およびその北側の微高地を中心に分布しており、この微高地上において弥生時代中期初頭ごろから住居跡や土坑がみられるようになる。その後、須玖Ⅰ式以降須玖Ⅱ式期にかけて微高地周辺やその背後の丘陵斜面に遺構分布が広がってゆく。さらに、エリアⅡを中心に後期中葉以降の住居跡等が丘陵西側斜面に営まれていたということができよう。

さらに、このような遺構分布に基づくならば、住居跡といった居住にかかわる施設の痕跡が、エリアⅠ、エリアⅡおよびエリアⅣという各範囲で少なからず検出されており、かつエリアⅠではその西部で住居跡や土坑に加え基数は限られるものの甕棺墓2基が出土している。そして、このエリアⅠの東部に目を転じると、やはり住居跡が少ないとはいえSB501、SB502、SB201が検出されており、すぐ東側に隣接する春日高校敷地内では至近のところで甕棺墓が試掘によって確認されている(図2、井上・川述編, 1980)。つまり、エリアⅠにおけるこのような居住域と墓域のコンパクトなセットが存在する可能性に加え、エリアⅡやエリアⅣの遺構分布も考慮するならば、本キャンパスを含む御供田遺跡内において弥生時代中期を盛期とする集落が複数の居住単位によって構成されていたという集落構造を垣間見ることができるとであろう。

4) 出土土器群にみる地域的特徴

最後に本遺跡群において出土した土器にみられる特徴について簡単に整理しておく。ただし、筆者には弥生土器の地域的特徴について詳しく述べる力量はないため、簡単な外観にとどめざるを得ない。

まず、すでに本遺跡群のSK101出土土器群の分析から、他地域との関係について研究がなされている(石田, 2009)。石田によると、小形丹塗樽形甕(図50: 412)などは筑紫平野北部を中心に分布することから、この地域との関連性を想定することができる。

そのほかに中期の土器で他地域との関係をうかがうことのできる特徴を持つ土器として、一つには糸島地域との関係を想定できる資料が出土している。該当するのは8B区SK101で出土している口径が60cm前後あるいはそれ以上に及ぶ大形の壺形土器である(図56: 398, 400等)。また壺形土器では同じエリアⅠで検出された10C区SK408出土の頸部から胴部にかけて突帯が多条につく個体をあげることができよう(図89: 568)。そのほかにも糸島地域からの影響の可能性を想定できる特徴としては、

甕形土器の口縁で「く」字形の口縁がやや内湾してスプーン状を呈し、内面に鋤形口縁の名残の突出が比較的明瞭に残るものをあげることができる。該当する資料としては9D区SK415出土の甕口縁部片(図87:549)や近接して位置するSK408から出土した大形の甕形土器(図90:591)などがある。

これらのうち大形の甕形土器については、糸島地域の潤地頭給遺跡で弥生時代中期後半の事例がみられるようであり、当該地域では弥生時代後期以降にも同様の大形の甕形土器がみられる(平尾, 2013)。また、頭部と胴部の境界が不明瞭で突帯が多条化した鋤形口縁の甕形土器についても中期後半ないしは中期末頃に飯氏遺跡(池田・久住編, 2000)や今宿五郎江遺跡(加藤編, 2010; 二宮編, 1991)など糸島地域あるいはその周辺でみられる(平尾, 2013; 石田, 2013; 石橋, 1992)。さらに口縁部がやや内湾する「く」字形口縁の甕なども今宿五郎江遺跡でみられる(二宮編, 1991)。本遺跡群で出土した上記のような特徴を持つ土器については、このように糸島周辺の遺跡に類似資料がみられることから当該地域との相互関係による産物と推測することができるであろう。

また、SK101から出土した土器には甕形土器で頭部下半に突帯が1条あるいは稀に2条つくものが須玖I式新段階から須玖II時期にかけてみられる(図49:330, 332, 図54:374-380, 382)。これらに加え、胴部上半部を中心に突帯を2条つけるものも比較的多く出土している(図49:334, 335, 図55:389-392, 図56:393, 394)。これらの特徴のうち胴部に多条突帯をもつ壺については類例が筑豊や筑後、あるいは早良など糸島に近い地域などで散見される。このように胴部多条突帯に注目するとやや広い範囲に類似した土器の分布がみられるものの、器形のプロポーシオンをみるとSK101から出土した土器のほとんどは胴部が扁平なプロポーシオンを呈している。このような胴部のプロポーシオンにみられる特徴も具備した類似の事例としては、甘木市の栗山遺跡出土祭祀遺構(筑前町史編さん委員会編, 2018; 松尾宏編, 1994; 篠原編, 1996)や小郡市大板井遺跡出土の3号祭祀土坑(小郡市教育委員会編, 1982)などをあげることができ、筑後地方との関係を想定することができる。さらに頭部下半に施される突帯についても、同地域の甘木市平塚川添遺跡198号住居跡(松尾編, 2001)や大板井遺跡祭祀土坑(1号・3号・6号・10号祭祀土坑)および34号住居跡など(小郡市教育委員会編, 1982)で確認できる。このような類例の地理的分布から、壺の頭部下半の突帯や胴部多条突帯といった特徴については筑後地方との関係を推定できるであろう。また、以上の中期の土器に加え、後期の土器ではエリアIのSD404から出土している脚台付小形甕が野辺田式土器(図155:849)で他地域の土器といえるものである。

以上、中期の土器を中心にみたが、本遺跡群出土土器には少なくとも糸島や筑後地方との関係を想定しうる土器群が認められる。ただし、他地域の影響を受け在地で製作された土器なのか移入土器なのかなどは今後胎土分析や詳細な形態的分析を待つ必要がある。しかし、これまでの石田による指摘も含め(石田, 2009)すくなくとも複数の地域との相互関係を反映する土器がみられる点は、石器あるいは石器石材などの流入状況からうかがえる地域間関係とも矛盾するものではないであろう。

5) まとめ

弥生時代中期は縄文時代後半期以降形成されてきた部族的社会あるいは地域社会を基盤としつつ、次第に社会の階層化が進展する一つの画期としてとらえられてきた(溝口, 1998; 下條, 1986; 高倉, 1973; 田中, 2002, 2008a, 2008b等)。本遺跡群において居住域と墓域あるいは居住域のみを単位とする居住集団が複数集まって集落を構成しているという点は、上記のように地域社会が階層化へと傾斜してゆく時期を前後する頃に、部族的な様相を呈する社会編成の基層的部分を把握してきたという意

味において重要である。ただし、冒頭にも述べたように、戦後の土地改変が非常に激しく遺構の残存状況は決して良好とはいえない。そのため、今回報告した遺構だけでは、本遺跡群における弥生時代の人々の活動や土地利用の推移のごく一部を把握できるのみである。将来的には御供田遺跡全体の中で、本遺跡群の形成過程についても位置付けてゆく必要があろう。

一方で、このような構成をもつ集落において石器、石材や土器については複数地域からの物資の流入や地域間の影響関係を伺うことができた。上記のような地域社会の複雑化ないしは階層化への胎動という社会動態と、このような人や物の動きをどのように関連付けて理解できるのか、本遺跡群の歴史的意義の問題ともかかわるものでより包括的かつ多角的分析・検討が今後必要となるであろう。

註

- (1) 遺構の時期比定および土器にみられる他地域との関係等に関しては、九州大学埋蔵文化財調査室の谷直子氏、ならびに九州大学比較社会文化研究院教授・本学アジア埋蔵文化財研究センター長の溝口孝司先生に多大なご協力、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

文献

- 筑前町史編さん委員会編2018『筑前町史 資料編』筑前町
福岡市博物館編1998『特別企画展 弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館 福岡
平尾和久2013『第5章 遺物編 I. 土器』(平尾和久編)『三雲・井原遺跡Ⅱ-総集編-』糸島市文化財調査報告書第10集 糸島市教育委員会 糸島、193-235頁
池田祐司・久住猛雄編2000『JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集 福岡市教育委員会 福岡
石橋新次1992『糸島型祭祀用土器の成立とその意義』(有明文化を考える会編)『北部九州の古代史』名著出版 東京、13-46頁
石田智子2009『【特論】北部九州弥生時代中期の土器祭祀-九州大学筑紫地区8B区 SK101土坑の位置づけ-』(岩永省三・田尻義之編)『九州大学総合研究博物館 平成20年度公開展示・九州国立博物館 トビック展示 飯国の南-九大筑紫地区の埋蔵文化財-』九州大学総合研究博物館 福岡、64-83頁
石田智子2013『北部九州地域における黒彩土器の展開』『九州考古学』88:1-20
井上裕弘編1980『春日御供田区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書56集 福岡県教育委員会 福岡
加藤隆也編2010『今宿五郎江Ⅱ第12次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1066集 福岡市教育委員会 福岡
松尾宏編1994『栗山遺跡Ⅱ 福岡県甘木市大字平塚字栗山所在遺跡の調査』甘木市文化財調査報告書第28集 甘木市教育委員会 甘木
松尾宏編2001『平塚川添遺跡Ⅰ 福岡県甘木市大字平塚字川添所在遺跡の調査』甘木市文化財調査報告書第53集 甘木市教育委員会 甘木
二宮忠司編1991『今宿五郎江遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集 福岡市教育委員会 福岡
小郡市教育委員会編1982『大板井遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第14集 小郡市教育委員会 小郡
大川清・鈴木公雄・工業善通編1996『日本土器事典』雄山閣出版 東京
重藤輝行編2005『御供田遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書205集 福岡県教育委員会 福岡
下條信行1986『弥生時代の九州』(近藤義郎・横山浩一・甘粕健・加藤晋平・佐原眞・田中琢・戸沢充則 編)『岩波講座 歴史学』5 岩波書店 東京、125-156頁
篠原浩之編1996『甘木市内遺跡群 栗山遺跡Ⅲ・平塚垣添遺跡』甘木市文化財調査報告書第37集 甘木市教育委員会 甘木
高倉洋彰1973『墳墓からみた弥生社会の発展過程』『考古学研究』40.2、7-24。
田中良之2000『墓地から見た親族・家族』(都出比呂志・佐原眞編)『古代史の論点2』小学館 東京、131-152頁
田中良之2008a『山鹿貝塚墓地の再検討』『地域・文化の考古学 下條信行先生退任記念論文集(愛媛大学法文学部考古学研究室編)』下條信行先生退任記念事業会 愛媛、47-60頁
田中良之2008b『骨が語る古代の家族:親族と社会』吉川弘文館 東京

(2) 青銅器生産と筑紫キャンパス遺跡群

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター 田尻 義了

1. はじめに

弥生時代を特徴づける1つの要素として青銅器の利用と生産が挙げられる。筑紫キャンパス遺跡群の所在する春日市には、弥生時代の青銅器生産地として数多くの鋳型が出土する須玖遺跡群が存在しており、筑紫キャンパス遺跡群の理解とも密接に関わる。そこで本稿では青銅器生産に焦点をあて、筑紫キャンパス遺跡群の評価を行いたい。筑紫キャンパス遺跡群においては、これまで2点の鋳型が出土している。1点は昭和57年度調査(26次調査区)SX303より出土の中細形銅戈が彫り込まれた鋳型である。もう1点は平成10年度調査(56次調査区)包含層出土の巴形銅器が彫り込まれた鋳型である。また、鋳型を転用して砥石として利用したと考えられる資料が2点出土している。以下ではこれらの資料を中心¹⁾に筑紫キャンパス遺跡群における青銅器生産について触れていきたい。

2. 筑紫キャンパス遺跡群における青銅器生産

筑紫キャンパス遺跡群では青銅器生産に関わる被熱した遺構などは確認されていない。しかし、関連遺物として上記で触れたように鋳型資料2点と鋳型転用砥石2点が出土しており、付近で青銅器生産が行われていたことを想定させる。そこで以下ではそれらの資料を確認したい。

A) SX303(旧河川)出土中細形銅戈鋳型(旧報告書P408第254図1)(図1-1)

この鋳型はSX303の旧河川の埋土から出土した。中細形銅戈の樋が合流する箇所が両面に彫り込まれている転用范である。石材は石英斑岩(田尻ほか, 2012)であり、矢部川流域から持ち込まれている。鋳型の表面を裏面で彫り込みの深さが異なり、黒変して彫り込みの深さが浅い裏面は、鋳型としての使用後に砥石へ再利用されている。製作された製品に近似しているのは小城市牛尾神社蔵品(図1-2・3)である。

B) 包含層出土巴形銅器鋳型(図2-1)

巴形銅器の脚部の一部が彫り込まれた鋳型で、包含層より出土した。脚部周辺は黒変しており、実際に鑄造に利用している。石材は石英斑岩である。これまでの調査により、この鋳型で製作された製品は左捻7脚の戟頭円錐座の巴形銅器であり、香川県さぬき市森広天神遺跡出土の資料であることが判明している(田尻, 2008, 2009)。森広天神遺跡からは同范品が3点(図2-2~4)出土しており、これらの製品を製作した鋳型が本資料である。

C) SX303(旧河川)出土砥石(旧報告書P407第253図2)(図3-1)

旧河川から出土した砥石である。形状から持ち砥と判断した。鋳型石材に使用する石英斑岩製であることから、鋳型の転用品と判断した。残存最大厚が端部で7.7cm呈することから中広形や広形などの大型の製品を彫り込んでいた可能性がある。

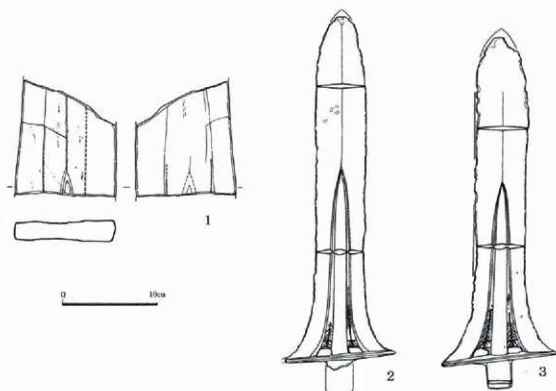


図1 中細形銅戈鑄型と関連遺物 (S=1/4)

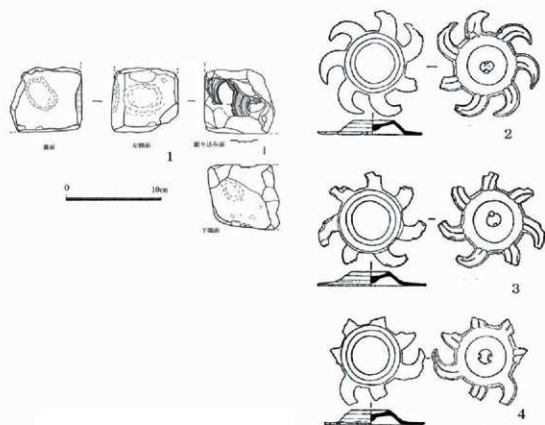


図2 巴形銅器鑄型と関連遺物 (S=1/4)

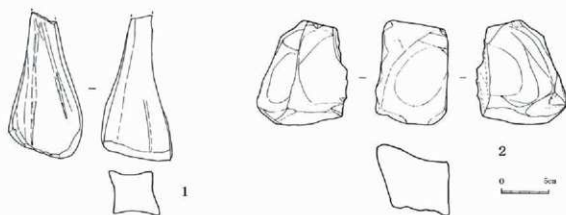


図3 砥石（鋳型転用品）(S=1/4)

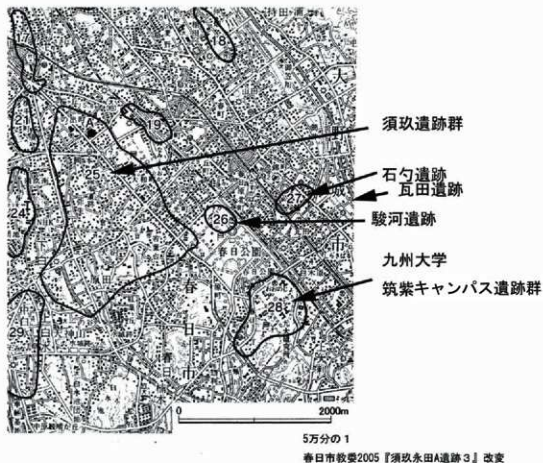


図4 周辺遺跡図

D) 5G区SB1001住居出土砥石(旧報告書P375第227図1)(図3-2)

大型の置砥の破片である。石材は石英班岩であり、住居跡より出土した。最大残存厚が6.2cmをはかることから大型の製品を彫り込んでいた鋳型の可能性がある。鋳型として利用した痕跡は認められないが、石材が石英班岩であるため鋳造関連製品として取り上げた。

以上の4点が青銅器生産関連遺物である²⁾。筑紫キャンパス遺跡群では、弥生時代に属するその他の銅滓や炉壁などの鋳造関連遺物は出土しておらず、遺跡内での青銅器生産を積極的に認めることはできない(田尻, 2001)。したがって、これらの鋳型や鋳型転用砥石は鋳造が行われた周辺の遺跡から持ち込まれたものと判断している。筑紫キャンパス遺跡群の周辺には広形銅矛の鋳型が出土した瓦田遺跡、石勺遺跡が存在し、また、北西約3kmには須玖遺跡群が所在している(図4)。このような周辺の青銅器生産遺跡から、破損し砥石として転用され運び込まれたのであろう。なお、Aは中細形銅戈が彫り込まれていることから弥生時代中期に属するが、Bは確実に後期に属する資料であり、CやDも残存状況から鋳型であれば大型製品を彫り込んでいた可能性があり、そうであるならば後期に属する。それらのことから遺跡より出土している青銅器関連遺物の持ち込まれた時間幅は、かなり広いこととなる。これらの資料の時期が一時期に集中していない点も、周囲の鋳造遺跡から散発的に持ち込まれた結果である理解の一助と考えている。

3. おわりに

筑紫キャンパス遺跡群では青銅器生産が行われていたとは積極的に評価することはできなかった。しかし、鋳造関連遺物として鋳型や鋳型転用砥石が出土しており、付近の鋳造遺跡からそれらの遺物が運び込まれた可能性を指摘した。また、その時期も幅広く中期や後期に属する資料が存在することから、散発的に持ち込まれている様相を復元した。鋳型に使用する石材は石英班岩であり、これまでの調査研究の結果、筑紫キャンパス遺跡群周辺付近に産地が存在するのではなく、福岡県南部を流れる矢部川流域から持ち込まれたことが判明している。矢部川流域と筑紫遺跡群は直線距離で約30kmも離れており、そのような産地よりこれらの石材は持ち込まれているのであるが、付近の遺跡から出土する転用鋳型や鋳型転用砥石の存在より、青銅器生産の量的センターである須玖遺跡群に一度運び込まれた石材が、福岡平野の各地に所在する鋳造地に分配され、さらにその後、転用され筑紫地区遺跡群へ持ち込まれたものと考えている(田尻, 2019)。すなわち筑紫地区遺跡群に居住していた人々が砥石を製作するために、直接、矢部川流域へ採取しに行ったものではないであろう。

最後にこの遺跡から出土した巴形銅器鋳型で製作した製品が、香川県森広天神遺跡より出土したことに関する評価を行いたい。北部九州では以前より多くの鋳型が存在することから実際に青銅器が鋳造されており、また同時に鋳造された青銅器が数多く出土している。しかしながら、これまで鋳型と製品が特定された事例はなく、この巴形銅器の事例が始めてであった。今後も事例が増加する可能性があり、形態や文様の詳細な比較を通じて検討していく必要がある。遠隔地に青銅器が運ばれた点に関しては、3点の同范品が出土しており、個別に森広天神遺跡へ運び込まれたと考えるより、製品は生産地よりまとまって運ばれていたと考えている。弥生時代青銅器の流通を復元するうえで貴重な事例となっており、筑紫キャンパス遺跡群の評価にも繋がるであろう。

註

- 1) 旧報告書ではP375第227図の解説で2つの砥石の図を掲載し、鑄型の可能性があると報告していた。しかしながら、2の遺物は鑄型石材として使用される石英斑岩ではなく、砂質泥岩であるため砥石となる。同様にP408第254図には鑄型として、本文中のAともう1点の資料を掲載しており、銅戈鑄型の可能性を指摘しつつも確証に乏しいと記載されている。確認したところ、石材は石英斑岩製ではないため鑄型と判断せず、砥石であると理解した。
- 2) さらにもう1点、13L区SD702堆積土出土の石英斑岩製の大型持ち砥を確認している。この資料は次回の報告書で報告する予定である。

参考文献

- 田尻義了2001「弥生時代青銅器生産における生産体制論—北部九州出土の鑄型資料の分析から」『九州考古学』76：11-33
- 田尻義了2008「九州大学筑紫地区出土巴形銅器鑄型の位置づけ—巴形銅器の分類と製作技法の検討—」『九州と東アジアの考古学・九州大学考古学研究室50周年記念論文集』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会 福岡、201-216頁
- 田尻義了2009「弥生時代巴形銅器の生産と流通—九州大学筑紫地区出土巴形銅器鑄型と香川県森広天神遺跡出土巴形銅器の一致」『考古学雑誌』93-4：265-286
- 田尻義了・足立達朗・中野伸彦・米村和敏・小山内康人・田中良之2012「弥生時代北部九州における鑄型石材の原産地同定と鑄型素材の加工と流通」『日本考古学』33：95-112
- 田尻義了2019「弥生時代青銅器の生産と流通から捉えた権力」『考古学研究』66-2：12-25

図版出典 一部改変

- 図1 旧報告書、吉田広2001「弥生時代の武器形青銅器」考古学資料集21 国立歴史民俗博物館 佐倉、72頁
- 図2 岩永省三・田尻義了2009『奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—』九州大学総合研究博物館 福岡、56頁
杉原莊介1972『日本青銅器の研究』中央公論美術出版 東京、145頁
- 図3 旧報告書
- 図4 春日市教育委員会2005『須玖永田 A 遺跡3』春日市文化財調査報告書第43集 3頁

(3) 磨製石器からみた弥生時代の筑紫キャンパス遺跡群

—石庖丁・石戈を中心に—

新潟大学 森 貴教

1 はじめに

九州大学筑紫キャンパス遺跡群では非常に多くの石器が出土している。福岡平野南部から二日市地峡帯の北縁部にあたる、いわゆる「奴国の南」の地域における石器様相を把握するうえで、基礎的かつ重要な資料群といえる。本稿では本遺跡出土の石器を最も特徴づける石庖丁と磨製石戈の検討を通して、弥生時代中期における石器利用からみた遺跡の特質について考察する。

2 石庖丁について

(1) 溝 SD316 出土石庖丁

1) 出土状況

遺跡の北部地区に位置する溝 SD316 から、まとまった数量の石庖丁が出土している。ここでは実物を観察することができた計 25 点の石庖丁（製品 21 点、未成品 4 点）について検討する。SD316 では上層からは弥生時代後期～古墳時代初頭の土器も出土しているが、下層は弥生時代中期後半を主体とする¹⁾。調査担当者は、弥生時代後期の遺物はごく少量であることから、古墳時代初頭頃に再掘削され、弥生時代後期の遺物包含層が破壊されたものと判断している（西編, 1993, p.219）。したがって石庖丁の所属時期は弥生時代中期後半を主体とし、一部弥生時代後期のものを含むと考えられる。

2) 使用石材（図 1）

石庖丁の使用石材をみると、ホーンフェルス 堇青石ホルンフェルスが 8 点（32.0%）、赤紫色泥岩（立岩系石庖丁）が 7 点（28.0%）、その他の石材が 10 点（40.0%）であった。堇青石ホルンフェルス製石庖丁 8 点のうち 4 点が未成品である。近年、頁岩質砂岩と呼称されてきた石材が地球科学的分析によって「堇青石ホルンフェルス」（以下、堇青石 Hf と呼称）と同定され、石材原産地は長崎県対馬島南部の対州層群と指摘された（能登原ほか, 2007）。弥生時代前期末以降に、長崎県老岐市原の辻遺跡で同石材製の石庖丁や石鎌が多量に生産され、北部九州に広く流通したと考えられている（能登原, 2014）。

立岩系石庖丁は弥生時代前期末から福岡県飯塚市立岩遺跡群で生産されはじめ、中期前半以降に多量に流通することが先行研究で指摘されている。弥生時代中期後半は、北部九州において石庖丁全体の出土量が増加し、立岩系石庖丁は非常に広域的に分布するようになる（能登原, 2014；森, 2018）。ただし、北部九州各地における石庖丁全体に占める立岩系石庖丁の割合は 30% 程度であり、本遺跡でも同様の組成比の傾向が

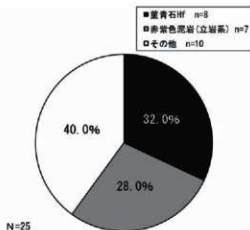


図 1 SD316 出土石庖丁の石材構成

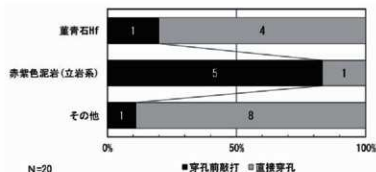


図2 SD316出土石庖丁の穿孔技法 (石材別)

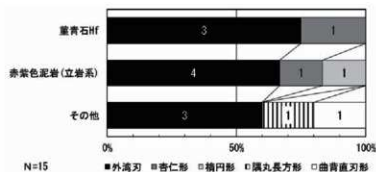


図3 SD316出土石庖丁の形態 (石材別)

に玄武岩質安山岩製のものが認められた。同石材製の石庖丁は弥生時代後期以降、佐賀平野を中心に分布し、その石材原産地は佐賀県・長崎県境に位置する多良岳の東部河口付近である可能性が指摘されている(渡部, 2017)。玄武岩質安山岩製石庖丁は穿孔前に研磨が施されることが一般的とされており、本遺構出土品もこうした製作技術的な特徴が共通している。

3) 穿孔技法 (図2)

石庖丁は通常、器面中央の上方寄りの箇所にも2つの紐孔が開けられる。穿孔技法は大きく以下の2パターンが確認される。

直接穿孔技法: 器面への敲打を経ずに錐による回転作業のみで両面から穿孔したものの。孔周辺に敲打痕がみられず、孔の内面に同心円状の線状痕跡が認められる。

穿孔前敲打技法: 両面からの敲打で穿孔予定部分にある程度凹ました後、または貫通させた後に、工具の回転穿孔によって孔を拡張、貫通させるもの。孔の周囲に不正形な敲打痕が認められる。なお、この技法を用いると直接穿孔技法に比べ孔の外径が大きくなる傾向がある。

高木芳史は近畿地方の石庖丁の穿孔技法について検討するなかで、石材産出地に近い遺跡ほど穿孔

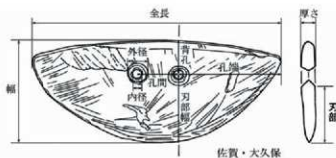


図4 石庖丁の計測位置 (弥生時代中期後半)

指摘できる。

弥生時代中期後半まで董青石Hf製石庖丁が一定量存在することにも注目できる。能登原(2014)は、北部九州における石庖丁の生産・流通の時期的変遷について検討するなかで、弥生時代中期後半になると立岩系石庖丁の出土量が大幅に増加する一方、董青石Hf製石庖丁の出土量は減少すると指摘している。本遺跡を含め福岡・春日地域は、そうした北部九州全体の傾向と異なっており、董青石Hf製石器を量産している原の辻遺跡との関係性が弥生時代中期後半まで継続した可能性を示している。

また、その他の石材のうち1点

穿孔前敲打の採用率が高いことを明らかにし、この技法の採用率が集団の石材入手力を反映していると指摘した(高木, 1999)。この技法は、敲打を事前に施すことにより直接回転穿孔する手間を省略できるという利点がある一方、破損の危険性が高まるという欠点があるため、石材入手力との相関性は整合的

に理解できる。

石庖丁の使用石材別に穿孔技法をみると、立岩系石庖丁は穿孔前敲打が施されたものが多く6点中5点(83.3%)を占める一方、董青石Hf製石庖丁やその他の石材製のものは直接穿孔が多いことがわかる。立岩系石庖丁の穿孔技法は弥生時代後期以降になると直接穿孔が圧倒的に多くなることが明らかになっており(森, 2018)、本遺構出土の立岩系石庖丁は弥生時代中期後半に立岩遺跡群で製作されたものである可能性が高い。穿孔前敲打は、立岩遺跡群において(自家消費量を超える特産品として)大量生産された石庖丁に特有の製作痕跡と考えられ(森, 前掲)、本遺跡には穿孔まで施された製品が搬入されたといえる。

4) 平面形(図3)

石庖丁の平面形についてみると、董青石Hf製石庖丁、立岩系石庖丁は外湾刃半月形(背部が直線的なもの)と杏仁形

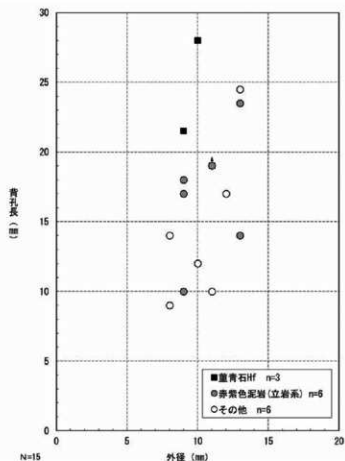


図5 SD316出土石庖丁の穿孔孔長と外径

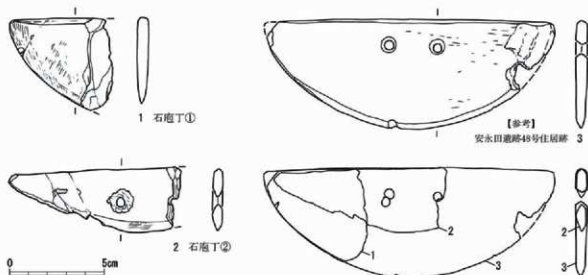


図6 SB502出土立岩系石庖丁の消費過程 (S=1/2)

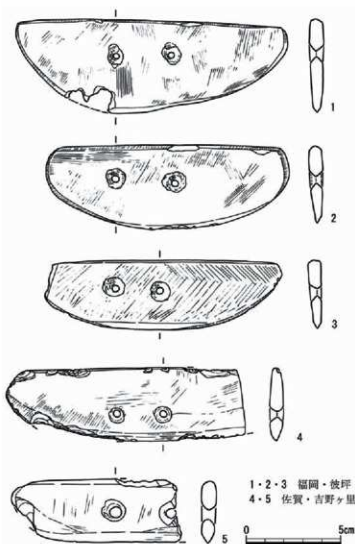


図7 縮小した立岩系石廂丁 (S=1/2)

(背部が外湾するもの)が多いことがわかった。その他の石材製のものには隅丸長方形、曲背直刃形が1点ずつ認められる。石廂丁の平面形の時期的変遷(森, 2018)との対比でいえば、ほぼ弥生時代中期後半の組成を示しており、他石材製のものを中心に弥生時代後期に属する資料が僅かに含まれていると解釈できる。

5) 法量(図4・5)

石廂丁の法量について先行研究で時期的変遷が明らかにされている。武末(2001)は、弥生時代前期から後期にかけて、背孔長(背部から孔までの距離)、外径(外孔の直径)が極めて漸移的だが全体的に縮小していき、後期後半～末になると背孔長15mm以下、外径10mm以下になると指摘した。また、筆者も背孔長と外径の時期的変遷を検討し、弥生時代中期後半から後期前半にかけてそれぞれ有意に縮小することを示した(森, 2017, 2018)。

本遺構出土のものを見ると、背孔長9～28mm、外径8～13mmの範囲に分布し、それぞれ平均値は17.1mm、

10.1mmを測る。佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の石廂丁(弥生時代中期後半～中期末)は、背孔長14～26mm、外径5～13mmに分布する(武末, 1988)。本遺構の石廂丁の法量もこれらの分布範囲と概ね重複していることから、同時期のものと評価できる。また、立岩系石廂丁より重石系H1製のものの方が、背孔長が長い傾向があり、法量の時期的変遷の点からみて古い様相を示している。

(2) 竪穴建物跡SB502出土石廂丁2例

遺跡の北部地区に位置する7D区竪穴建物跡SB502から立岩系石廂丁が2点出土している(図6-1・2)。本遺構は、出土土器から弥生時代中期中頃～中期後半が主体である。

図6-1は石廂丁の端部の破片である(石廂丁①)。平面形は外湾刃半月形に復元される。残存長55mm、残存幅49mmを測る。図6-2は左端部から右側の孔にかけての破片である(石廂丁②)。平面形は外湾刃半月形に復元され、右側の孔の部分で短軸方向に破損している。残存長91mm、残存幅35mm、刃部幅16mmを測る。

立岩系石廂丁の消費過程を復元するために、ほぼ未使用と考えられる安永田遺跡48号住居跡出土の立岩系石廂丁完形品(図6-3)の法量と比較する。出土土器から弥生時代中期後半～中期末であり、

本遺構の時期とはほぼ同時期と考えられる。平面形は外湾刃半月形で、全長154mm、幅58mm、刃部幅43mmを測る。石庖丁②とこの完形品の外形を重ね合わせると、刃部は中央部で24mm縮小していることがわかる。一方、石庖丁①と完形品の外形線はほぼ一致することから、本遺跡には完形品と同程度の量目の石庖丁が製品として持ち込まれ、使用に伴い著しく縮小したものと判断できる。

北部九州各地の消費地遺跡では、このような縮小した立岩系石庖丁が散見される。福岡県久留米市後坪遺跡7号住居跡では住居の床面付近から3点の立岩系石庖丁が出土している(図7-1・2・3)。平面形はすべて外湾刃半月形である。背孔長、孔間長、背部の平面形、背部の断面形などは3点とも類似するが、刃部幅が1から3にかけて約10mm縮小していることがみてとれる。佐賀県神埼市・神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡でも著しく縮小した立岩系石庖丁が出土している(図7-4・5)。極限まで使用された結果、刃部が孔に接近していき刃部幅が背孔長よりも短くなったものや、幅40mm以下まで縮小したものの存在は、立岩系石庖丁が他の石庖丁に比べ相対的に使用価値が高かったことを示しているといえる²¹(武末, 2011)。

3 磨製石戈について

(1) 資料解説

本遺跡からは型式および使用石材の異なる2点の磨製石戈が出土している。

図8-1(石戈①)は溝SD316の中層から出土した。所属時期は弥生時代中期後半と考えられ、多量の祭祀土器とともに出土している。

灰色を呈する凝灰質泥岩で脇野亜層群に産出する石材とみられる。部分的に、石材の火山灰・泥質部が抜け落ち穴があいた状態となっており、石質はあまり良くない。立岩遺跡群で製作された可能性が高い。先端部および胡の左側から穿にかけて欠損しており、残存長15.8cm、援部の残存長14.2cm、内部長1.5cmを測る。全長は約21cmに復元され、全長に比して内の長さは非常に短い。胡幅は約8cmに復元され、刃部から胡にかけては左右にさほど大きく広がらない。内の端部の幅は

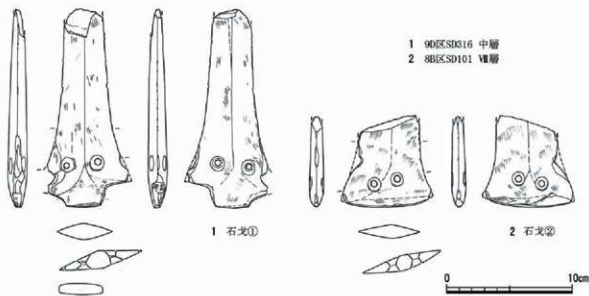


図8 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土の石戈 (S=1/3)

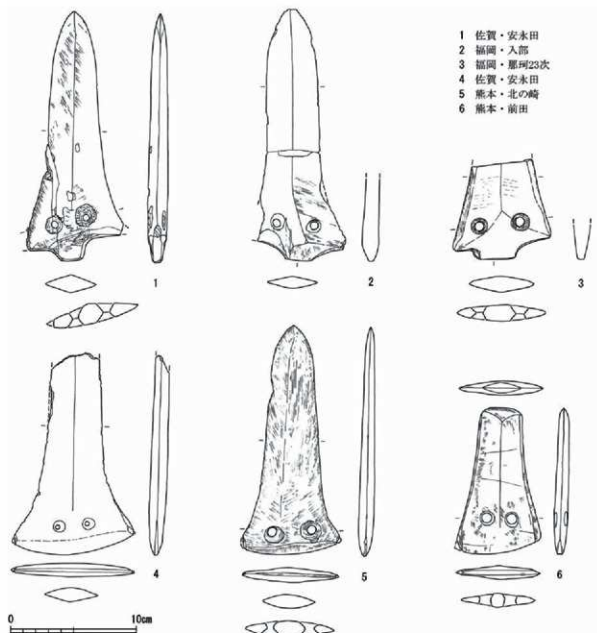


図9 石戈の類例 (S=1/3)

2.7cm、厚さは0.4cmを測る。内から胡の左側にかけてゆるやかな曲線をなしており、段をもたない。断面形は菱形を呈するが鈍はややあまい。穿付近から内にかけて、不明瞭な鈍がハ字状に広がる。穿は両面からの回転穿孔により開けられている。下條 (1982) による分類のBb式、中村 (1997) による分類の無穂型石戈Ⅲ2類である。寺前 (2014) は石戈の援と内の境界部分の縦断面形に着目して有段型、有稜型、平坦型に分類しており、石戈①は平坦型に該当する。

図8-2 (石戈②) は溝SD101のⅢ層から出土した。調査担当者は隣接する8B区土坑SK101から混入した可能性を指摘している (西福, 1993, p.270)。土坑SK101からは、弥生時代中期中頃～中期後半を中心とする土器が多量に出土しており、日常生活で用いられる器種だけでなく、丹塗土器も多数含まれている。出土した土器の様相からみると、石戈①と石戈②の所属時期の差はほとんどないと考えられる。

オリブ灰色を呈する片岩製で全体的に脆弱な印象の石材である。援の途中から鋒端部を欠損しており、残存長7.2cm、胡幅7.0cmを測る。内をもたず、援・胡の端部（基端部）はゆるやかに外湾する。断面形は菱形を呈するが鑄は不明瞭である。穿は両面からの回転穿孔により開けられている。下條（1982）による分類のCb式、中村（1997）による分類の無極型石戈Ⅳ類に該当する。

(2) 型式学的位置づけ

本遺跡出土の磨製石戈2例について、類例との比較検討をとおして型式学的な位置づけを行う。

石戈①の類例として安永田遺跡6区堅穴住居SH6073出土例（図9-1）が挙げられる。所属時期は出土土器から弥生時代中期中頃である。石戈①の方が内の幅が広く、刃部から胡にかけての広がり具合も異なるものの、平面形において内の左側辺から胡の左側にかけて屈曲せずにゆるやかにつながっている点は類似する。福岡市西区入部遺跡出土例（図9-2）は内がさらに退化し、胡と一体化した形態になっている。また、福岡市博多区那珂遺跡23次溝SD44出土例（図9-3）は平面形において内を突出させてはいるものの内部長約0.9cmと非常に短くなっている。所属時期は弥生時代中期後半～中期末で、多量の丹塗土器とともに出土している。

先行研究により石戈の型式変化では、内が退化し、柄に嵌め込むための装着機能が失われていく方向性が重視されてきた（下條，1976，1982；中村，1995，1997）。石戈①は内が装着部という機能を失い、単なる突出部へと痕跡化していく型式変化の最終段階に位置付けられる。

内をもたない石戈②の類例としては安永田遺跡出土例（図9-4）が挙げられる。5号トレンチの楕円形もしくは溝状の落ち込みから出土している。所属時期は弥生時代中期後半～中期末であり、本遺構からは祭祀土器が多量に出土している。蛇紋岩製で内をもたず、援・胡の端部（基端部）は弧状をなす。形骸化し、僅かな突出部となった内がさらに簡略化されたため、弧状をなしているのかもしれない。熊本県玉名市北の崎遺跡8号住居出土例（図9-5）は刃部から胡にかけてあまり広がらない。穿は援・胡の端部（基端部）の比較的近接した位置にあげられている。変ハンレイ岩製である。所属時期は出土土器から弥生時代中期末である。本遺構からは丹塗土器が出土しており、この住居跡の南側には遺構が全くない空地が広がることから、報告者は居住のための建物ではない可能性を指摘している（馬場編，2011）。穿の位置は異なるものの平面形、援端部（基端部）の形態は石戈②に類似する。熊本県玉名市前田遺跡住居跡S076出土例（図9-6）は胡の幅が狭く、鋒端部を両側から研ぎ出し刃状にする³¹。穿は援・胡の端部（基端部）から離れた位置に左右が近接してあげられている。変成岩製である。所属時期は出土土器から弥生時代中期末である。

(3) 使用石材の変化と石戈を用いる儀礼の担い手

前述のように、先行研究では石戈のもつ様々な属性のうち、内に注目して編年が論じられてきた。下條信行は、援と内に厚さの違いが段差で表現されている段階（A型式）から厚さが漸移的に変化する段階（B型式）、そして援部が薄くなり援と内の厚さが等しくなる段階（C型式）に区分して、型式変化を捉えた（下條，1982）。近年、寺前直人は援と内が形成する縦断面形に注目して、型式学的変遷を整理した。そして、援と内の厚さの差を計測値で示し、最も段差の大きい福岡県速賀町金丸遺跡1号土坑墓出土例が最古型式であると指摘した（寺前，2014）。

ところで、こうした石戈の型式変化の過程は大局的にみれば使用石材の変化に連動していると捉えられる。まず寺前が列島出土の石戈の最古型式と指摘した金丸遺跡出土例は暗灰色凝灰岩粘板岩製で、

遠賀川下流の右岸域（北九州市域）に産出する石材とみられる。また、型式学的に古相であるA型式は、遠賀川下流域の北九州市八幡西区金剛山遺跡群（香月遺跡、馬場山遺跡、辻田遺跡、原遺跡、門田遺跡）で製作された、脇野亜層群由来の暗灰色・緑灰色を呈する凝灰質細粒砂岩製のものが主体をなしている（梅崎，1999）。馬場山遺跡 A-2 号袋状貯蔵穴からはこの石材製のA型式の石戈が出土している。出土土器から弥生時代前期末から中期初頭に位置付けられており、時期的に矛盾しない。内が退化し始めるB型式は、遠賀川中流域の立岩遺跡群で製作されたとみられる赤紫色を呈する凝灰質泥岩製のものが目立つ。この石材は立岩系石庖丁の素材と同一で、福岡県宮若市八木山川（千石峡）周辺で採取できるものである。石質は北九州市域のものよりもやや悪く、火山灰や泥質部が抜け、ところどころ穴が空いたものが多く含まれる（石戈①）。さらに内が痕跡化、あるいは内と胡が一体化したC型式は蛇紋岩や片岩、滑石製のものが多数である（石戈②）。蛇紋岩や片岩、滑石といった変成岩類は、片理によって割離性に富み極めて軟質の石材であり、石器石材には適していない。そのため儀器化の方向性に呼応した石材と評価できる。こうした変成岩類の石材原産地としては、福岡県南部、久留米市東方～甘木・朝倉地域の三郡帯・三郡変成岩が候補として考えられる（日本の地質「九州地方」編集委員会編，1992）。

以上のように、石戈の型式変化に合わせてその使用石材は遠賀川下流域・北九州市域の凝灰質細粒砂岩から遠賀川中流域・八木山川周辺の赤紫色泥岩、さらに三郡山地東南部の変成岩類へと遠賀川を下流から上流に遡るように変遷しており、弥生時代中期中頃から中期後半、中期末にかけて急速に進行する。こうした石戈の使用石材の南下現象、とりわけ脇野亜層群由来の凝灰質砂岩・泥岩から変成岩類への石材の転換は甘木・朝倉地域や二日市地峡帯地域、筑紫平野の集団が石戈を必要とし、新たに石材産地が開発された結果生じたと考えられる。また、弥生時代中期末は立岩遺跡群における石器生産が衰退していく時期であり、石戈の需要-供給のバランスがこの時期に崩れ始めたことを示唆している。本遺跡出土の石戈2点はその移行過程を示す資料といえる。

4 おわりに

本稿では石庖丁と磨製石戈の検討をとおして、九州大学筑紫キャンパス遺跡群における石器利用の特質について考察した。本遺跡が所在する福岡平野南部から二日市地峡帯の北縁にかけての地域の周辺では、石庖丁や石斧といった農耕活動と密接に関わる石器の良質石材は採取できない。しかし、このように利用可能な石材資源が乏しい状況下でありながら、弥生時代前期末から中期後半にかけて相当の高率で人口が増加し（田中・小沢，2001）、地形的制約を要因として物流ネットワークの要衝・集約点としての地域特性が醸成されていく（溝口，2008）。

石庖丁をはじめ外部資源である流通石器が多量に入手されている状況は、拠点的な消費地としての遺跡様相を反映しているが、一方で他地域の集団との関係性に依存しなければ集落経営が立ちゆかなくなるという矛盾・緊張関係を抱えていたとも評価できる。本遺跡で出土した2点の石戈はこうした社会・文化的環境を背景として、地域を取り巻く集団との利害関係を調整するために生み出され、共同体の儀礼の場で用いられたと解釈できる。

なお、本稿では筆者の力量不足から中部高地や埼玉県熊谷市前中西遺跡出土の石戈の系譜関係など、東日本の弥生社会における石戈の展開まで議論を深めることができなかった。こうした点は今後の検討課題としたい。

註

- 1) なお、溝SD316は上層・中層・下層に分層して遺物が取り上げられていたため、層ごとに後述する項目の検討を試みたが、層位による明確な傾向の差はみられなかった。
- 2) 能登原孝道によると、立岩系石廬丁の素材である赤紫色泥岩はビッカース硬度試験での計測が不可能（ダイヤモンド圧子を押しつけた際、表面が丸くクレーター状につぶれる）なほど軟らかい岩石である（能登原ほか、2007、p.6）。したがって、石廬丁の縮小はこうした岩石特性を反映している可能性もあり、「長期間」使用した結果と評価できるかは難しい問題である。少なくとも他の石材製石廬丁よりも廃棄されるまでの消費スパンが長く、何度も研ぎ直され使用が継続されたものといえる。
- 3) 石川（2018）は、こうした石戈の先端部を斧刃状に研ぎ出すような再加工のあり方が、宮崎や中部高地でも共通的に認められることから、石戈を用いる儀礼の広域的な波及を見出している。

謝辞

本稿の作成にあたり、九州大学埋蔵文化財調査室の石川健氏と前任の田尻茂了氏に多くの御教示を頂き、資料調査の便宜を図って頂いた。また、関連資料の調査などでは、梅崎恵司氏と渡部芳久氏に大変御世話になった。未筆ながら深く感謝申し上げる。

文献

- 馬場正弘編 2011『北の崎遺跡 鍛冶遺跡』熊本県文化財調査報告第264集 熊本県教育委員会 熊本
- 藤瀬植博編 1985『安永田遺跡—佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸型出土地点の調査—』鳥栖市文化財調査報告書第25集 鳥栖市教育委員会 鳥栖
- 石川日出志 2018『磨製石戈と弥生文化』『季刊考古学』143: 97-102
- 溝口亨司 2008『④弥生社会の組織とカテゴリー』（設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編）『弥生時代の考古学8 集落からよむ弥生社会』同成社 東京、74-95頁
- 森 貴教 2017『弥生時代北部九州における石廬丁の消費形態—立岩系石廬丁を中心として—』『古文化談叢』79: 39-55
- 森 貴教 2018『石器の生産・消費からみた弥生社会』九州大学出版会 福岡
- 中村修身 1995『石戈の分類と編年について』『地域相研究』23: 29-42
- 中村修身 1997『石戈の形態分類と編年（再考）』『地域相研究』25: 33-51
- 日本の地質『九州地方』編集委員会編 1992『日本の地質9 九州地方』共立出版株式会社 東京
- 西健一郎編 1993『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』（第二冊）九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 福岡
- 能登原孝道 2014『北部九州における石廬丁の生産と流通』（高倉洋彰編）『東アジア古文化論叢』2 中国書店 福岡、83-102頁
- 能登原孝道・中野伸彦・小山内康人 2007『いわゆる「頁岩質砂岩」の原産地について』『九州考古学』82: 1-19
- 岡本真也編 2005『前田遺跡』熊本県文化財調査報告第225集 熊本県教育委員会 熊本
- 下條信行 1976『石戈論』『史淵』113: 211-253
- 下條信行 1982『武器形石製品に性格—石戈再論—』『平安博物館研究紀要』7: 1-33
- 下村智・荒牧宏行編 1992『那珂遺跡4—那珂遺跡群第23次調査の報告 その2—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集 福岡市教育委員会 福岡
- 高木芳史 1999『畿内地方の石廬丁の生産と流通』『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 大阪、95-114頁
- 武末純一 1988『佐賀県安永田遺跡の石廬丁—石廬丁の計測値（2）—』『古文化談叢』19: 27-32
- 武末純一 2001『石器の生産と流通—石廬丁と蛤刃石斧を中心に—』（筑紫野市史編さん委員会編）『筑紫野市史資料 編（上）考古資料』筑紫野市 福岡、528-555頁
- 武末純一 2011『1章 石包丁一つ、なにを語る』（武末純一・森岡秀人・設楽博己編）『列島の考古学 弥生時代』河出書房新社 東京、15-29頁
- 田中良之・小沢佳憲 2001『Ⅱ. 渡来をめぐる諸問題』（田中良之編）『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座 福岡、3-27頁

- 寺前直人 2014「銅戈形石戈の出現—福岡県金丸遺跡出土石戈の評価—」『駒沢史学』82:148-160
- 飛野博文・吉村靖徳・本田岳秋(編)2002『彼塚遺跡Ⅰ—福岡県三井郡北野町大字今山所在遺跡の調査—』福岡県文化財調査報告書第167集 福岡県教育委員会 福岡
- 徳永貞紹・白木原宜・渋谷格・吉田恵美・内野武史・島孝寿編 2002『袖比遺跡群2』佐賀県文化財調査報告書第150集 佐賀県教育委員会 佐賀
- 徳永貞紹・白木原宜・吉本健一・鹿田昌宏・田中大介編 2001『袖比遺跡群1』佐賀県文化財調査報告書第148集 佐賀県教育委員会 佐賀
- 梅崎恵司 1999「福岡県北九州市の弥生時代石器の素材」『研究紀要』13:19-30
- 渡部芳久 2016「吉野ヶ里遺跡出土の弥生時代石器について」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』40:1-11
- 渡部芳久 2017「玄武岩質安山岩製石庖丁の製作技術」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』41:13-21

図版出典

図1～3・5:筆者作成、図4:徳永ほか編2001より一部改変のうえ転載、図6-1・2:原図を元に再トレース、図6-3:藤瀬編1985より再トレース、図7-1～3:飛野ほか編2002より再トレース、図7-4・5:渋谷編2015より再トレース、図8-1・2:筆者実測・トレース、図9-1:徳永ほか編2002より再トレース、図9-2:中村1995より再トレース、図9-3:下村・荒牧編1992、図9-4:下條1982より一部改変・再トレース、図9-5:馬場編2011より再トレース、図9-6:岡本編2005より再トレース。

(4) 弥生時代の鉄器と筑紫キャンパス遺跡群

九州大学人文科学研究院 宮本一夫

弥生時代の鉄器（図1、表1）は、弥生中期の土坑 SK101と弥生後期の住居址 SB218から出土している。SK101は弥生中期中頃～後葉の須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式、SB218は弥生後期後半～終末期の下大隈式～西新式段階の遺構である。

1はSK101から出土した鋳造鉄器片である。鋳造鉄斧の一部であろう。研磨などの再加工の痕跡は認められない。

2～4はSB218から出土した。2は鋤先の一部である。3は袋状鉄斧で完形なもの。4は棒状鉄製品であり、後世の混入ではないとすれば、鍛冶における素材である可能性も高い。しかし、本調査区からは鍛冶遺構は発見されておらず、不明鉄製品であるといえよう。

この他、古墳時代以降の遺構や包含層から出土したもので、形態的に弥生時代の可能性の高い鎌、鉾、板状鉄斧、鏃などの鉄製品が存在するが、出土遺構・包含層の年代を重視して次回の報告書で報告することにしたい。出土した鋳造鉄器、鋤先、袋状鉄斧、さらに形態からみて弥生時代の可能性の高い鉄器を加えれば、北部九州で一般的に認められる弥生時代後半期の中・後期の鉄器組成を本遺跡

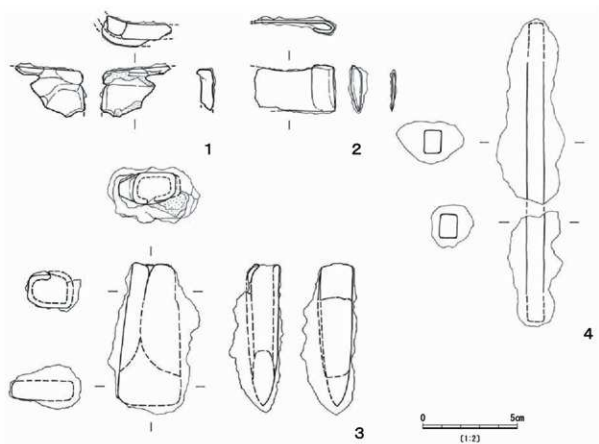


図1 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器

表1 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器

番号	器種	調査年度	調査区	出土遺構	時期	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	鑄造片	昭和54年度	8B区	SK101	弥生時代中期	2.5	4.6	0.9	7.3
2	鋤先	昭和55年度	7H区	SB218	弥生時代後期	2.5	4.2	0.3	10.2
3	鍛造鉄斧	昭和55年度	7H区	SB218	弥生時代後期	7.7	刃：3.3、 袋：2.2	1.1 (復元値)	90.6
4	棒状鉄製品	昭和55年度	7H区	SB218	弥生時代後期	15.6 (復元値)	0.9	1.2	144.5

も示しているといえよう。したがって、出土鉄器の性格からは、本遺跡が北部九州の弥生時代の一般的な集落遺跡と捉えることができよう。

VI 調査の成果と課題

九州大学筑紫キャンパス遺跡群で調査された遺構および遺物は縄文時代以降古代あるいは中世までおよぶ。本報告では縄文時代から弥生時代にかけての主たる遺構を対象に報告を行ってきた。縄文時代については溝状遺構などが検出されているが住居跡などは発見されなかった。しかし、後期中葉以降晩期までの比較的まとまった土器が出土しており、周辺でこのような遺跡がほとんどみられないことをふまえると一つの大きな成果といえる。とくに包含層や旧河川からの出土ではあるものの鐘ヶ崎式土器は近隣遺跡での出土例がほとんどなく貴重な資料である。また、続く太郎迫式期以降は精製器種を中心に粗製土器も多く出土している。そして後・晩期を前後する時期においては、従来から中九州に比べ北部九州では土器様式構造の一部を構成する深鉢形土器で粗製化が進むことが指摘されていたが、本遺跡出土資料では本来精製器種である一部の鉢形土器で作りが粗い点などから、北部九州地域における粗製化の動向を考えるうえで重要な特徴がみられた。このように当時の土器様式構造の諸側面を考える上でも本遺跡出土土器群は重要な意義を持つものである。今後の調査事例および資料の増加が待たれる。

弥生時代の調査成果としては、住居跡や土坑が数多く検出されたことを挙げることができよう。しかし戦後、米軍キャンプ用地として利用されたため旧地形が大きく削平、改変されており、遺構の残存状況は必ずしも良好なものではなかった。それにもかかわらず、キャンパス敷地内という比較的広範囲を対象とした調査によって、本遺跡群がその一部を構成する御供田遺跡内での遺構の時的な展開過程の一端を把握することが可能となった。

弥生時代の遺構の時的な推移をみると、中期初頭頃からキャンパス内北西部の河岸段丘面の比較的平坦な部分で遺構が形成されるようになる。その後中期後半まで住居跡や土坑が数多く形成される。米軍による土地改変による消失を考慮すると、本来はさらに多くの遺構が残されていたものと推察される。この時期の遺構分布からはキャンパス北西部の東西両側のやや標高の高いと推定される部分に遺構が多く分布するのに加え、南から延びる丘陵の西側斜面を中心に生活の痕跡が残されていた。このような遺構分布と時期の推移を隣接する春日高校におけるこれまでの調査成果などと合わせて考えると、居住域と墓域によって構成される単位が複数存在する可能性がうかがわれた。そして、続く後期になると居住生活の範囲がやや狭くなり、現 JR 大野城駅近くの丘陵裾部に住居跡や土坑がみられる。このように中期初頭以降後後半まで、キャンパス内の北西部を中心に遺構が展開しており、中期における集落構造の一端を明らかにすることができた。

さらに、本遺跡群からは青銅器鋳型や青銅製鋤先など青銅器生産に関わる遺物も出土している。鋳型の検討からは青銅器生産の行われていた他遺跡からの流入品である可能性が指摘された。また、青銅製鋤先の元素組成に関する分析の結果、合金化が十分ではないことが判明し、今後の弥生時代の青銅器生産技術の水準を検討する上で非常に重要な成果をうるることができた。一方、石庖丁や武器形石製品についての詳細な検討の結果、筑豊地域や肥前地域あるいは対馬に産地の求められる石材あるいは製品が入ってきている点なども明らかにされた。また太形船刃石斧の石材についての地球科学的高精度分析の結果からは、岩石組織や全岩化学組成などの諸点で今山産玄武岩であることが明らかとなった。このような石器器種による石材の供給地の多様な様相に加え、出土土器の地域的特徴をみる

と糸島や筑後などの地域との関係も垣間見ることができた。本遺跡群が位置する三郡山地と背振山塊に挟まれた二日市地峡帯という立地環境のもと、九州北部の物資や人の流れの結節点となっていたことをうかがわせる大きな成果といえよう。それと同時に以上のような研究成果は、石器石材や青銅製鋤先の地球科学の高精度分析・研究によるところが大きく、従来の考古学的研究と自然科学的研究を融合させた文理融合型研究の重要性を改めて示すものといえよう。今後はこのような成果を踏まえ、土器の胎土分析なども組織的に行うことによって、重層的かつ多様な人と物の動きの具体像とその結節点の歴史的意義などについて明らかにされることが期待される。

図番号	遺物番号	出土地点・遺構等	種類	形状	品質 (cm ²) [1] 形状・厚さ ② 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
図6	1	8B SD001	縄文土器	浅鉢		1~2 ¹ の白色砂粒を多く含む・1 ¹ 以下の輝石を少量含む	貝	内：黒褐色10YR3/1・外：黒褐色10YR3/2	器部：ヨコ方向傾斜・口縁部：磨消焼	器部の劣化著しいがヨコ方向の断面	
	2	8B SD001	縄文土器	鉢		1 ¹ 程の白色砂粒を多く含む・赤雲母を含む	貝	内：黄褐色10YR6/3・外：黄褐色2.5YR7/2	ヨコ磨消	ヨコ磨消	外面に黒クワ一に1条沈線文
	3	8B SD001	縄文土器	浅鉢		1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む・赤雲母を含む	貝	内：黒褐色10YR3/1・外：黄褐色2.5YR6/3			
	4	8B SD001	縄文土器	浅鉢		1 ¹ 以下の白色砂粒及び赤雲母を多く含む	貝	内：灰青褐色10YR5/2・外：明赤褐色5YR5/8	研削	研削	外：器部に2条沈線文・内：口縁部に1条沈線文
	5	8B SD001	縄文土器	浅鉢		1 ¹ 程の白色砂粒及び赤雲母をやや多く含む	貝	内：灰青褐色10YR6/2・外：黒褐色10YR3/2	ヨコ磨消	ヨコ磨消	外面に沈線文
	6	8B SD001	縄文土器	浅鉢		1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む	貝	内：灰青褐色10YR4/2・外：黒褐色10YR3/2			
	7	8B SD001	縄文土器	浅鉢		1~2 ¹ の砂粒を含む	貝	内：褐色2.5YR4/3・外：褐色2.5YR4/4	研削	研削	
	8	8B SD001	縄文土器	浅鉢		精製	貝	内外：浅灰褐色2.5YR6/3	器部裏面に磨消	器部裏面に磨消	器部裏面に1条沈線文
	9	8B SD001	縄文土器	浅鉢	胴部最大径(φ22)	精製・1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む	貝	内：黒灰色10YR4/1・外：灰青褐色10YR4/2	ヨコ磨消	ヨコ磨消	
	10	8B SD001	縄文土器	深鉢	③ (11.0)	1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む	貝	内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR6/3	テズリ後ナデ	ナデ	
11	8B SD001	縄文土器	深鉢	③ (12.8)	1~2 ¹ の砂粒及び1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む・3 ¹ 程の砂粒を含む	普通	内：灰青褐色10YR5/2・外：明赤褐色5YR5/8	ナデリ	磨研ナデ・ナデ	内面にヌス付着	
図7	12	8D 包含層下層	縄文土器	鉢	② 34±α	1~2 ¹ の白色砂粒及び1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む	貝	内：黒褐色10YR3/1・外：黒褐色2.5YR6/3	研削	研削	口縁部カラーに磨消焼文及び赤褐色沈線文・赤褐色器欠部
	13	8D 包含層下層	縄文土器	鉢		1~2 ¹ の砂粒をやや含む	貝	内外：黄褐色10YR7/2	研削	研削	口縁部外面に1条沈線文・口縁部に黒点有
	14	8D 包含層下層	縄文土器	鉢		1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む・赤雲母及び赤雲母を少量含む	貝	内：黄褐色10YR6/3・外：黄褐色10YR5/3	研削	研削	口縁部外面に2条沈線文(ヨコ)
	15	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢	② 33±α	1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む・赤雲母を少量含む	貝	内：明赤褐色5YR5/6・外：黒灰色10YR4/1	ヨコ磨消	ヨコ磨消	口縁部カラーに2条の沈線文
	16	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢		1 ¹ 以下の砂粒を多く含む・赤雲母が混入	貝	内：灰青褐色10YR4/2・外：黄褐色2.5YR5/4	磨消焼	研削	口縁部：波状沈線文
	17	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢		精製・1 ¹ 以下の白色砂粒及び輝石を含む	貝	内外：黄褐色10YR6/4	研削	研削	口縁部内：3条沈線文・外：4条沈線文・波状口縁で器部表面を飾りしている可能性
	18	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢	① (33.0)	極めて緻密な粒長及び輝石・赤雲母を含む	貝	内：黒褐色10YR3/2・外：黄褐色10YR4/3	ヨコ磨消	ヨコ磨消	口縁部内面に黄褐色沈線文
	19	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢	② 40±α	精製・1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む・輝石及び赤雲母を少量含む	貝	内：灰青褐色10YR4/2・外：黒褐色10YR3/2	研削	研削	胴部に2条沈線文
	20	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢/深鉢		精製・1 ¹ 以下の白色砂粒及び赤雲母・輝石を少量含む	貝	内：黒褐色10YR3/2・外：黒褐色10YR3/4	ヨコ磨消	ヨコ磨消	胴部に2条沈線文
	21	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢	① 124~261 ② 57±α	1 ¹ 以下の白色砂粒を含む・輝石が混入	貝	内：灰青褐色10YR5/2・外：灰褐色2.5YR4/2	研削	研削	口縁部内面に4條沈線文
	22	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢		1 ¹ 以下の白色砂粒及び輝石を多く含む・2 ¹ 程の砂粒を多く含む・赤雲母を少量含む	貝	内：灰褐色2.5YR4/2・外：黄褐色2.5YR5/3	ヨコ磨消	ヨコ磨消	口縁部内面に1条沈線文
	23	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢	① (38.6)	1 ¹ 程の白色砂粒及び1 ¹ 以下の砂粒を多く含む	貝	内：黄褐色10YR6/3・外：黒褐色10YR3/1	ヨコ磨消	ヨコ磨消	外：口縁部に1条沈線文・黄褐色器部に1条沈線文・内：口縁部に1条沈線文
	24	8D 包含層下層	縄文土器	浅鉢		1.5~3 ¹ の白色砂粒をやや多く含む	貝	内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR7/4	研削 (3 ¹ 前後の幅)	研削 (3 ¹ 前後の幅)	
	25	8D 包含層下層	縄文土器	鉢		1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む	貝	内：灰青褐色10YR5/2・外：明赤褐色5YR5/6	テラナナデ	板状工具によるナデ・平磨削	
	26	8D 包含層下層	縄文土器	深鉢		1~4 ¹ の白色砂粒を多く含む・砂粒及び輝石を少量含む	貝	内：灰青褐色10YR5/2・外：灰青褐色10YR6/2	ヨコ磨消	研削	胴部に2条沈線文
図8	27	8E 包含層下層	縄文土器	鉢		1 ¹ 以下の白色砂粒を多く含む	貝	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR6/3	貝殻未磨削ナデ	ナデリ後ナデ	
	28	8E 包含層下層	縄文土器	深鉢	② 92±α	白色砂粒を多く含む	貝	内外：明赤褐色5YR5/6	貝殻未磨削	磨研ナデ器具	口縁部外面の一部に黒点有
	29	8E 包含層下層	縄文土器	鉢/深鉢		1~3 ¹ の砂粒を多く含む	貝	内：黒灰色10YR4/1・外：黄褐色10YR5/3	赤雲母後ナデ(無い)	ナデリ後ナデ	磨研孔有
	30	8E 包含層下層	縄文土器	鉢		1 ¹ 程の砂粒が混入	貝	内：黒褐色10YR3/2・外：黄褐色10YR6/3	貝殻未磨削	ナデリ後へつ拭工具で磨削	
	31	8E 包含層下層	縄文土器	深鉢	③ (14.4)	1 ¹ 程の白色砂粒を多く含む	貝	内外：明赤褐色5YR5/6	ナデリ?	ナデリ?	
	32	8E 包含層下層	縄文土器	深鉢	③ (6.4)	1 ¹ 以下の白色砂粒及び輝石を多く含む・1~2 ¹ の砂粒がわずかに混入	貝	内：黒灰色2.5YR4/1・外：褐色2.5YR6/6	研削	研削	
	33	8E 包含層下層	縄文土器	鉢	② 18±α③	比較的緻密・白色砂粒及び輝石・赤雲母を含む	貝	内：灰青褐色2.5Y6/2・外：灰青褐色10YR5/3	研削	研削	
	34	8E 包含層下層	縄文土器	深鉢	③ (9.6)	砂粒を多く含む	貝	内：灰褐色2.5YR4/2・外：黄褐色10YR6/4	ナデリ後ナデ	ナデリ?	
	35	8E 包含層下層	縄文土器	深鉢	③ (11.4)	3 ¹ 程の白色砂粒を含む・その他砂粒を多く含む	貝	内：灰青褐色10YR6/2・外：黄褐色2.5YR7/2	磨研ナデ・一部ナデリ方向のナデリ	磨研ナデ	

国番号	通称番号	出土地点・遺構等	種類	器種	法量 (cm) ³ [1以上の器高・ 3口径]	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
109	36	8B 包含層 下層	縄文土器	深鉢	① (11.5)	1 ⁺ 以上の砂粒を多く含む	真	内：灰黄褐色10YR5/2・外：黄褐色10YR3/4	ナデ (底面ナズリ残ナデ)	器面裏れにより調整不明	
	37	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (8.8)	1-2 ⁺ の砂粒及び1 ⁺ 以下の白色粒子を含む	真	内：黄褐色10YR7/2・外：灰黄褐色10YR7/2	ナデ	器面裏れにより調整不明	
	38	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子を多く含む・器母を含む	不真	内：明赤褐色5YR5/8・外：明赤褐色5YR5/6	ナズリ残ナデ	調整不明	
	39	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	②14.0 + α	2 ⁺ の砂粒及び1 ⁺ の白色粒子を含む・礫石を含む	真	内：黄褐色10YR6/3・外：黄褐色10YR3/3	ナズリ残ナデ (ヨコ方向)	ナズリ残ナデ	底面が暗く粘土層が目比較的薄型
	40	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		1-3 ⁺ の砂粒を多く含む	真	内：灰黄褐色10YR6/2・外：灰黄褐色10YR7/2	ナズリ	片割調整・1部ナデ	
	41	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		2 ⁺ の砂粒を多く含む・内両面及び器母が混入	普通	内：黄褐色10YR7/3・外：褐色2.5YR6/6	ナズリ	ナズリ残ナデ	
	42	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		石炭及び長石を含む	真	内：黒褐色10YR3/2・外：明赤褐色5YR5/6	ヨコ方向のナズリ		
	43	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (8.0)	1 ⁺ 以下の白色粒子を多く含む・2-5 ⁺ の白色粒子を少量含む・器母を含む	普通	内：褐色2.5YR6/6・外：黄褐色10YR7/3	ナズリ残ナデ	器面裏れにより調整不明	
	44	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	② 9.2	1-3 ⁺ の砂粒及び白色粒子を多く含む	真	内：灰白色10YR8/1・外：黄褐色10YR7/3	ヨコナデ	器母ナデ	内面一部薄透明
	45	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	③ (11.2)	1-3 ⁺ の砂粒を多く含む・3 ⁺ の砂粒及び器母を含む	真	内：浅黄褐色2.5YR6/3・外：黄褐色10YR6/4			
46	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	③ (11.0)	2-5 ⁺ の砂粒及び白色粒子を多く含む	真	内：灰黄褐色10YR5/2・外：黄褐色10YR7/3	ナズリ残ナデ (横ゴ)	器母ナデ・ナデ		
47	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	③11.6	1-2 ⁺ の砂粒を多く含む	普通	内：黄褐色5YR4/1・外：灰褐色2.5Y3/2	ナズリ残ナデ	器母ナデ・ナデ		
48	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	③ 9.6	砂粒を少量含む	真	内：黄褐色10YR6/3・外：黄褐色5YR6/6	器母ナデ・ナデ	ナデ		
110	49	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		精製1 ⁺ の白色粒子を少量含む	真	内：黄褐色10YR5/3・外：黄褐色10YR7/3	研磨	研磨	口縁部に2条沈線文
	50	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢?		1 ⁺ の砂粒及び1 ⁺ 以下の白色粒子を含む	普通	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR6/4		器面裏れにより調整不明	器面裏れにより調整不明
	51	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子及び器母を含む	真	内：赤褐色2.5Y3/1・外：黄褐色10YR7/3	研磨	研磨	口縁部に凹線文
	52	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子及び器母を含む	真	内：明赤褐色5YR5/8・外：褐色2.5YR6/6	研磨	研磨	胴部に1条縦流文
	53	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子を多く含む・1 ⁺ 以上の砂粒及び礫石・器母を含む	真	内：黄褐色2.5YR5/4・外：赤褐色2.5YR3/1	研磨	研磨	外：3条沈文・内：13筋目に1条沈線文
	54	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1-2 ⁺ の砂粒及び1 ⁺ 以下の白色粒子を多く含む	真	内：黄褐色10YR4/1・外：黄褐色10YR6/2	研磨	研磨	胴部に2条沈線文
	55	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子を多く含む・器母を含む	真	内：明褐色2.5YR5/6			胴部に凹線文及び流文
	56	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1 ⁺ の砂粒及び器母を含む	真	内：灰白色10YR7/1・外：灰黄褐色10YR5/2			胴部に2条沈線文及び細線文
	57	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子を多く含む・器母を含む	真	内：黒褐色10YR3/1	研磨	研磨	胴部に2条沈線文
	58	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1-2 ⁺ の砂粒を多く含む	真	内：赤褐色10YR3/1・外：黒褐色10YR3/2	研磨	研磨	胴部最大径上に2筋点及び2条凹線文
	59	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		5 ⁺ の砂粒を少量含む	真	内：灰黄褐色10YR5/2・外：黒褐色10YR3/2	研磨	研磨	胴部に2条凹線文
	60	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ⁺ の白色粒子を多く含む・礫石を含む・器母を少量含む	真	内外：明赤褐色5YR5/8	丁寧なヨコ研磨	丁寧なヨコ研磨	
	61	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢	① (30.4)	1 ⁺ 以下の白色粒子を多く含む・器母を含む	真	内：黄褐色2.5YR5/4・外：褐色2.5YR6/6	ヨコ研磨	ヨコ研磨	口縁部内面に1条沈線文・胴部に2条沈線文
	62	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子を少量含む	真	内：灰黄褐色10YR6/2・外：黄褐色10YR7/2	研磨	研磨	口縁部及び胴部に凹線文
	63	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子及び器母を少量含む	真	内：黄褐色10YR4/1・外：黒褐色10YR3/1	研磨	研磨	口縁部外面に2条沈線文
	64	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子及び器母を多く含む・1-2 ⁺ の砂粒を含む・礫石を少量含む	真	内外：黄褐色10YR4/1			口縁部から9に凹線文
	65	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢	① (26.4)	3 ⁺ の白色粒子をわずかに含む・器母ごく少量混入	真	内：灰黄褐色10YR4/2・外：黄褐色10YR3/2	研磨	研磨	口縁部に1条沈線文
66	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		精製	真	内：黄褐色10YR5/3・外：褐色2.5YR6/6	研磨	研磨		
67	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		精製	普通	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色2.5YR4/1	研磨	研磨	口縁部内面に1条沈線文	
68	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		1 ⁺ 以下の白色粒子及び器母を多く含む	不真	内：黄褐色10YR4/1・外：黒褐色2.5YR3/1			口縁部内面に1条沈線文	
69	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		精製	やや甘い	内：黄褐色10YR4/1・外：黄褐色10YR5/1	研磨	研磨	口縁部に沈線文	
70	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢		精製	真	内：黄褐色10YR5/1・外：黄褐色10YR4/1			口縁部内面に1条沈線文	
71	8B 包含層 上層	縄文土器	浅鉢?		1 ⁺ の砂粒を多く含む	真	内：黄褐色10YR4/1・外：黄褐色10YR3/1	研磨	研磨	胴部に9に黄帯がめぐる	
72	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1.5 ⁺ の白色粒子及び2 ⁺ の粗の半透明粒子を多く含む	真	内：赤褐色10YR3/1・外：黄褐色2.5YR5/4	研磨	研磨	口縁部に2条沈線文	
73	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	①15.8	2-3 ⁺ の砂粒を多く含む・礫石及び器母を含む	真	内：赤褐色10YR3/1・外：黄褐色10YR4/2	研磨	研磨	口縁部に2条沈線文	

図番 番号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm) ³ [1.0立方寸相当 3立方寸]	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
1011	74	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む、輝石を含む・1 ¹ 、輝の砂粒を少量含む	真	内：橙 色75YR6/6・外：褐色75YR4/4	ヨコ研ぎ	ヨコ研ぎ	磨滑縄文
	75	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、輝の砂粒を含む	真	内：黄い黄褐色10YR6/3・外：黒褐色10YR3/2	研ぎ	研ぎ	流紋13編・13研部に沈殿灰及び磨滑縄文
	76	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、輝の砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む	真	内：黒灰色10YR5/1・外：黄い黄褐色10YR7/2	研ぎ	研ぎ	13研部に1条沈殿灰
	77	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、輝の砂粒及び白色粒子を多く含む	真	内：灰黄色10YR6/2・外：黄い黄褐色10YR7/2	研ぎ	研ぎ	13研部に磨滑縄文及び沈殿灰
	78	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	① (29.0)	1 ¹ 、以下の白色粒子及び器母を多く含む	真	内：灰褐色75YR4/2・外：明赤褐色5YR5/6	研ぎ	研ぎ	流紋13編
	79	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1-2 ¹ 、の砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む	真	内：黒灰色75YR5/1・外：褐色75YR4/6	研ぎ	研ぎ	13研部に剥文
	80	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む・輝石及び角閃石を少量含む	真	内：灰褐色75YR4/2・外：褐色75YR4/6	研ぎ	研ぎ	13研部にカーニ磨滑縄文
	81	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢/鉢		1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む	真	内外：黒褐色10YR3/1	研ぎ	研ぎ	13研部に磨滑文
	82	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢/鉢		砂粒を多く含む	真	内：黄い黄褐色10YR7/2・外：灰黄色10YR6/2	器面見れにヨリ調整不明	器面見れにヨリ調整不明	13研部に研削文の跡
	83	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、輝の白色粒子を多く含む・器母が混入	真	内：黄い 褐色75YR6/3・外：灰黄色10YR6/2	磨滑縄文	研ぎ	13研部に凹点
	84	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		1 ¹ 、輝の砂粒を含む	真	内：黒灰色10YR6/1・外：黄い黄褐色10YR6/3	ナズリ	ナズリ	
	85	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、以下の砂粒を多く含む	普通	内：灰 黄 褐色 10YR6/2・外：黄い黄褐色10YR5/3	研ぎ	研ぎ	13研部に2条沈殿灰
	86	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1-2 ¹ 、の砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む	真	内：黒褐色10YR3/1・外：褐色10YR5/4	ナズリ後粗い研ぎ	ナズリ後粗い研ぎ	
	87	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	胴部最大径(32)	2-3 ¹ 、の砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む・5 ¹ 、以上の砂粒を少量含む	真	内外：黄い黄褐色10YR7/2	粗い研ぎ	粗い研ぎ又はナズリ	
	88	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	① (40.8)	1 ¹ 、以下の白色粒子及び器母を多く含む	真	内外：褐色75YR4/1	粗い研ぎ	粗い研ぎ	器面ナズリ後粗い研ぎ・胴部最大径上に1条磨滑文
	89	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		3 ¹ 、輝の砂粒を多く含む	真	内外：黄い黄褐色10YR6/4	ナズリ後ナズリ	ナズリ後ナズリ	
	90	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む・1 ¹ 、輝の砂粒を少量含む	真	内： 茶 褐色 10YR3/1・外：灰黄色10YR5/2	研ぎ	研ぎ	器面ナズリ後研ぎ
	91	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1-3 ¹ 、の砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む	真	内： 黒 灰 色 10YR4/1・外：黄褐色10YR5/2	研ぎ	研ぎ	13研部内面に沈殿灰
	92	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1 ¹ 、輝の砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む	真	内： 灰 黄 褐色 10YR6/2・外：黄い黄褐色10YR6/3	ナズリ後ナズリ	ナズリ後ナズリ	
	93	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		砂粒を少量含む	普通	内： 黒 灰 色 75YR4/1・外：褐色75YR5/4	目録記載後ナズリ	目録記載後ナズリ	
94	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		1 ¹ 、以下の砂粒及び白色粒子を多く含む・輝石及び器母を含む	真	内： 黒 灰 色 75YR4/1・外：褐色75YR3/3	目録記載	ナズリ後ナズリ		
95	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		砂粒を多く含む・器母を少量含む	普通	内： 黒 灰 色 10YR4/1・外：褐色75YR6/6	ナズリ後ナズリ	研ぎ		
96	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		1-2 ¹ 、及び5 ¹ 、の砂粒を含む・器母を含む	真	内： 灰 黄 色 25Y7/2・外：灰黄色10YR6/2	ナズリ後ナズリ	ナズリ後ナズリ		
97	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		2-3 ¹ 、の砂粒を多く含む・器母及び輝石を含む	真	内： 黄い 褐色 75YR6/4・外：灰褐色75YR4/2	粗いナズリ後ナズリ	ナズリ後ナズリ		
1012	98	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢?		1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む・器母及び角閃石を含む	真	内： 橙 色 5YR6/6・外：黄い褐色75YR6/4	目録記載	目録記載? 幾丁器ナズリ	
	99	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢		4-5 ¹ 、の砂粒を多く含む	真	内：黄い黄褐色10YR7/2・外：灰黄色10YR6/2	ナズリ後ナズリ	ナズリ後ナズリ	
	100	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢?		1 ¹ 、以上の砂粒及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む・器母を含む	普通	内：黄い黄褐色75YR6/3・外：黄褐色10YR3/2	粗い目録記載後ナズリ	ナズリ後ナズリ	
	101	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		2-3 ¹ 、の砂粒を多く含む・5 ¹ 、以上の砂粒を含む	真	内： 黒 灰 色 75YR4/1・外：黄褐色10YR5/2	粗いナズリ後ナズリ	ナズリ後ナズリ	
	102	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	① (5.7)	2 ¹ 、輝の砂粒を多く含む・1 ¹ 、以下の白色粒子を含む	真	内： 灰 黄 褐色 10YR6/2・外：褐色25YR6/8	器面ナズリ・ナズリ	ナズリ	
	103	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	① (6.4)	1 ¹ 、以下の砂粒及び白色粒子・輝石を含む	真	内： 灰 黄 褐色 10YR5/2・外：褐色75YR6/6	器面ナズリ後研ぎ	ナズリ	
	104	8B 包含層 上層	縄文土器	鉢	① (6.4)	2-3 ¹ 、の砂粒を多く含む	真	内： 黒 灰 色 10YR5/1・外：黄い黄褐色10YR7/3	ナズリ	ナズリ	
	105	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢		3 ¹ 、輝の白色粒子及び1 ¹ 、以下の白色粒子を多く含む	真	内：黄い黄褐色10YR7/2・外：黄い黄褐色10YR7/3	粗いナズリ	ナズリ後ナズリ	
	106	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (6.2)	2 ¹ 、以上の砂粒を多く含む	真	内： 橙 色 5YR6/6・外：褐色25YR6/8	ナズリ	ナズリ後ナズリ	
	107	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (9.3)	2-3 ¹ 、の砂粒を多く含む	普通	内： 灰 黄 褐色 10YR6/2・外：明赤褐色5YR5/6	器面見れのため調整不明	器面見れのため調整不明	
	108	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (10.4)	4-5 ¹ 、の砂粒及び1 ¹ 、輝の白色粒子を含む・器母を多く含む	真	内：黄い黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR6/6	ナズリ	ナズリ	
	109	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (9.6)	1 ¹ 、以下の砂粒を多く含む	普通	内： 茶 褐色 10YR3/1・外：黄褐色10YR5/4	器面ナズリ・ナズリ	器面ナズリ	
	110	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (10.1)	砂粒を多く含む・器母を含む	真	内： 灰 黄 褐色 10YR6/2・外：黄い黄褐色10YR6/4	ナズリ	条痕後ナズリ	
	111	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	① (10.2)	1-2 ¹ 、の砂粒を多く含む	真	内：黄い黄褐色10YR7/2・外：黄い黄褐色10YR7/3	ナズリ	ナズリ	

図番 番号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm ³) [1.1立方寸(約) 3.3立方寸]	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
103	112	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	③ (8.8)	砂粒を少量含む	真	内・黒褐色10YR3/1・外・ 鈍い黄褐色10YR6/3	丁寧なナデ		内面にスス付着	
	113	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	③ (11.7)	1~5%の砂粒を多く含む	普通	内・明褐色10YR7/2・ 外・鈍い褐色10YR7/4	ケズリ後削いナデ		胎押さえ・ナ デ	
	114	8B 包含層 上層	縄文土器	深鉢	③ (11.8)	1%程の砂粒を多く含む	真	内・黒褐色10YR3/1・外・ 灰青褐色10YR4/2	ケズリ後ナデ		一部胎押さ え・ナデ	
	115	10B 包含 層	縄文土器	浅鉢		1%以下の白色粒子を多く 含む	真	内・黒褐色10YR3/1・外・ 灰青褐色10YR4/2	研ぎ	研ぎ	研	口縁部及び胴部に 沈着
	116	10B 包含 層	縄文土器	浅鉢		1%以下の砂粒及び白色粒 子を多く含む	普通	内・鈍い黄褐色10YR6/3・ 外・黒褐色10YR3/1	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明	器面荒れにより 調整不明	
	117	10B 包含 層	縄文土器	浅鉢		精真	真	内・灰青褐色10YR4/3・ 外・鈍い黄褐色10YR6/3	研ぎ	研ぎ	研	口縁部に内蔵文及び 線文
	118	10B 包含 層	縄文土器	浅鉢/ 鉢		精真	真	内・黒色 N1.5/0・外・ 黒褐色2.5Y3/1	研ぎ	研ぎ	研	
	119	10B 包含 層	縄文土器	鉢		1~3%の砂粒を多く含む	不真	内・黒褐色10YR3/1・外・ 鈍い黄褐色10YR7/2	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明	口縁部に2条沈着 文	
	120	10B 包含 層	縄文土器	浅鉢		2~3%の砂粒及び1%以下 の白色粒子を多く含む	真	内・黒褐色10YR3/1・外・ 灰褐色10YR4/1	研ぎ	研ぎ	研	胴部に内蔵文
	121	10B 包含 層	縄文土器	浅鉢		1%程の砂粒を多く含む	真	内・鈍い黄褐色10YR7/3・ 外・鈍い黄褐色10YR7/2	研ぎ	研ぎ	研	
	122	10B SD002	縄文土器	浅鉢		1%以下の砂粒を含む	真	内外・黒褐色2.5Y3/1	研ぎ	研ぎ	研	
	123	10B 包含 層	縄文土器	浅鉢		1%以下の白色粒子を多く 含む	普通	内外・灰白色10YR7/1	研ぎ	研ぎ	研	
124	10B 包含 層	縄文土器	鉢		1%以下の砂粒及び白色粒 子を多く含む	真	内・灰青褐色10YR5/2・ 外・灰青褐色10YR4/2	研ぎ	研ぎ	研	口縁部に浅い2条 沈着文	
125	10B 包含 層	縄文土器	鉢	① (29.0)	1~3%の砂粒を多く含む	真	内・鈍い黄褐色10YR7/3・ 外・黒褐色10YR2/2	口縁部を削り残すナ デ			口縁部に内蔵文	
126	10B SD002	縄文土器	鉢		1~2%の砂粒を含む	真	内・黒色 7.5YR4/4・外・ 黒褐色3YR3/1	ナデ	研ぎ	研	外面にスス付着	
127	10B 包含 層	縄文土器	鉢	③ (5.5)	1%程の砂粒及び1%以下の 白色粒子を多く含む・2~3 %の砂粒を含む	真	内・鈍い褐色 7.5YR5/4・ 外・鈍い黄褐色10YR3/4	研ぎ	研ぎ	研		
128	10B SD002	縄文土器	浅鉢	③ (6.5)	1~3%の砂粒を含む	真	内・灰青褐色10YR6/2・ 外・褐色 5YR6/6	チタケズリ・ナデ		胎押さえ		
129	10B 包含 層	縄文土器	深鉢	③ (8.9)	1%以下の砂粒及び白色粒 子を多く含む	普通	内外・褐色 5YR7/6	チタケズリ・ナデ		ナデ		
130	10B 包含 層	縄文土器	深鉢	③ (11.3)	1~2%の砂粒及び1%以下 の白色粒子を多く含む	真	内・灰青褐色 10YR5/2・ 外・褐色 5YR6/6	胎押さえ後ケズリ・ 研ぎ	研ぎ	研		
104	131	8-9C SD108	縄文土器	鉢/浅 鉢		精真・1%程の砂粒を少量 含む	真	内・鈍い褐色 7.5YR5/4・ 外・鈍い褐色 7.5YR5/3	研ぎ	研ぎ	研	
	132	8-9C SD108	縄文土器	鉢		1%以下の砂粒を多く含む	真	内・鈍い褐色 7.5YR7/4・外・ 鈍い黄褐色10YR7/3	ケズリ後ナデ		ケズリ後ナデ	
	133	8-9C SD108	縄文土器	鉢		精真	真	内・鈍い褐色 7.5YR7/4・ 外・鈍い褐色 7.5YR7/3	研ぎ	研ぎ	研	
	134	8-9C SD108	縄文土器	浅鉢		1%以下の白色粒子を多く 含む	真	内・黒褐色10YR3/1・外・ 黒褐色10YR3/2	研ぎ	研ぎ	研	口縁部内面に沈着 文・胴部に内蔵文
	135	8-9C SD108	縄文土器	浅鉢		精真	真	内・鈍い黄褐色10YR4/3・ 外・暗褐色 7.5YR3/3	研ぎ	研ぎ	研	胴部に沈着文
	136	8-9C SD108	縄文土器	浅鉢		精真	真	内外・黒褐色10YR3/1	研ぎ	研ぎ	研	口縁部に内蔵文
	137	8-9C SD108	縄文土器	浅鉢		1%以下の白色粒子を少量 含む	真	内・鈍い褐色 7.5YR7/4・ 外・鈍い褐色 7.5YR6/4	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明	口縁部に沈着文	
	138	8-9C SD108	縄文土器	浅鉢	③ (4.8)	1%程の砂粒を多く含む	普通	内外・鈍い黄褐色10YR7/3	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明	器面荒れにより 調整不明	
	139	8-9C SD108	縄文土器	浅鉢	③ (7.3)	1~2%の砂粒を含む	真	内・黒褐色10YR3/1・外・ 黒褐色10YR3/2	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明	器面荒れにより 調整不明	
	140	12B 包含 層	縄文土器	鉢	① (34.8)	1~2%の砂粒及び1%以下 の白色粒子、輝石を多く含む	真	内・鈍い黄褐色10YR5/3・ 外・鈍い黄褐色10YR7/3	ケズリ後ナデ		胎押さえ後 ココナデ	
	141	5X303	縄文土器	鉢	① (25.6)	砂粒及び輝石を多く含む	真	内外・鈍い黄褐色10YR7/3	ケズリ後ナデ		胎押さえ後 ココナデ	波状1線
	107	142	7D SE501	弥生土器	甕		極めて微細な金剛砂及び 砂粒を多く含む	真	内外・鈍い黄褐色10YR7/3	甕減により調整不明	甕減により調整 不明	
143		7D SE501	弥生土器	甕		石炭粒を多く含む	真	内外・褐色10YR7/6・外・ 褐色 7.5YR6/6	ココナデが一部残る		丁寧なナ デ	
144		7D SE501	弥生土器	甕		極めて微細な白色粒及び赤 色粒を含む	真	内外・浅褐色 7.5YR6/4	甕減により調整不明	甕減により調整 不明		
145		7D SE501	弥生土器	甕		石炭粒を多く含む	真	内外・鈍い黄褐色10YR6/3	ココナデ		甕減により調整 不明	
146		7D SE501	弥生土器	不明		微細な石炭粒を多く含む	真	内外・鈍い黄褐色10YR7/4	ココナデ		胎押さえ後 ココナデ	
109	147	7D SE502	弥生土器	甕	① (30.8) ± 8.2* _a	石炭粒を多く含む	真	内外・褐色 7.5YR6/4・外・ 鈍い褐色 7.5YR7/4	チタケ方向のハケ		胎押さえ後 ココナデ	
	148	7D SE502	弥生土器	甕	① (30.8) ± 9.0* _a	2~3%の石炭粒を多く含む	真	内・褐色 2.5YR6/8・外・ 褐色 5YR6/6	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明	胎押さえ (一 部胎拭工具により ココナ デ)	
	149	7D SE502	弥生土器	甕	① (30.0) ± 15.7* _a	石炭粒を多く含む	真	内・褐色 5YR6/8・外・ 褐色 5YR6/8	一部チタケ方向のハケ が認められる		胎押さえ後 ココナ デ	
	150	7D SE502	弥生土器	甕		3~5%の砂粒をやや多く 含む・石炭粒をわずかに含 む	真	内・褐色 7.5YR7/6・外・ 鈍い黄褐色10YR7/4	一部ココナデが残る		一部ココナ デ	
	151	7D SE502	弥生土器	甕		石炭粒を多く含む	真	内・鈍い褐色 7.5YR7/3・ 外・鈍い褐色 7.5YR7/4	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明	器面荒れにより 調整不明	

図番 番号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (mm) ^① L1/L2/L3の高さ ③底径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
図199	152	7D S1602	灰土器	甕		石灰灰及び金雲母を多く含む	真	内：鈍い黄褐色10YR6/3・外：鈍い黄褐色10YR7/3	ハケ残ナリ消し	指押さえ		
	153	7D S1602	灰土器	甕		陶面を石灰灰わずかに含む	真	内：橙褐色7.5YR 7.6・外：鈍い黄褐色10YR6/4	磨滅の高調整不明	ナデ		
	154	7D S1602	灰土器	甕		陶面を砂粒及び石灰灰を多く含む	真	内：灰白色2.5YR 2・外：鈍い黄褐色10YR7/2	指押さえ後丁寧な消し	ハケ目後ナデ		
	155	7D S1602	灰土器	甕	2.178+α③ (76)	長石粒をわずかに含む・白色粒及び砂粒を含む	真	内：鈍い橙褐色7.5YR7/4・外：鈍い黄褐色10YR	ココ方同のナデ・取扱工具のナデ	指押さえ後ナデ		
	156	7D S1602	灰土器	甕	2.42+α③ (75)	石灰灰を多く含む	真	内：鈍い橙褐色7.5YR 7・外：鈍い黄褐色10YR4	ナデ目後ココナデ	ハケ目		
	157	7D S1602	灰土器	甕	2.36+α③ (106)	陶面を石灰灰及び石灰灰を含む	真	内：鈍い黄褐色10YR7/4・外：黄褐色10YR8/3	タテハケ後ココナデ	指押さえ後丁寧なナデ	外面丹塗り	
	158	7D S1602	灰土器	甕	2.50+α	1～3'の砂粒を多く含む・極めて微細な金雲母を含む	模写	内：灰白色2.5Y7/1・外：灰白色2.5Y8/2	タテ目後ナデ消し	指押さえ後ナデ	内面に工具痕	
	159	7D S1602	灰土器	高杯		砂粒を多く含む	真	内外：鈍い黄褐色10YR7/3	ココナデ	ココナデ		
	160	7D S1602	灰土器	短頸甕		精細	真	内：橙褐色5YR6.6・外：非陶色2.5YR4.6	1ガキ	ナデ	外面丹塗り	
	161	7D S1602	灰土器	小甕	① (11.0) ② 1.5+α	砂粒をわずかに含む	真	内：黄褐色10YR8/3・外：黄褐色2.5YR6.4	磨滅により調整不明	磨滅により調整不明		
	162	7D S1602	灰土器	甕		石灰灰をやや含む	真	内外：淡黄褐色7.5YR8/4	磨滅花れにより調整不明	指押さえ		
	163	7D S1602	灰土器	甕		精細	真	内：淡黄褐色10YR 8/4・外：橙褐色5YR7/6	1ガキ?	ナデ	外面丹塗り	
	164	7D S1602	灰土器	甕		石灰灰及び金雲母を多く含む	真	内：淡黄褐色2.5YR 2・外：黄褐色2.5YR 3	ナデ	ナデ		
	165	7D S1602	灰土器	甕		石灰灰を多く含む・やや大粒の石灰灰も含む	真	内：灰黄褐色10YR 4/2・外：鈍い黄褐色10YR7/3	磨滅花れにより調整不明	一部タテリナデ		
	166	7D S1602	灰土器	甕		精細	真	内：鈍い黄褐色10YR6/3・外：黄褐色10YR8/4	磨滅花れにより調整不明	ココナデ		
	167	7D S1602	灰土器	甕	2.46+α③ (60)	精細	真	内：鈍い橙褐色7.5YR6/4・外：明赤褐色5YR5.6	ナデ	1ガキ	外面丹塗り	
	168	7D S1602	灰土器	甕	2.45+α③ (80)	精細	真	内：黄褐色10YR6/1・外：鈍い橙褐色7.5YR7/4	指押さえ	磨滅花れにより調整不明		
	169	7D S1602	灰土器	甕	2.30.5+α③ (63)	陶面を白色粒を含む	真	内：橙褐色5YR6.6・外：黄褐色7.5YR7/4	磨滅により調整不明	1ガキ	外面丹塗り	
	170	7D S1602	灰土器	甕	2.100+α③ (80)	砂粒を多く含む	真	内：鈍い橙褐色7.5YR6/4・外：鈍い黄褐色7.5YR5/4	ハケ目丁寧なナデ	ナデ	外面一部工具痕	
	171	7D S1602	灰土器	甕	つまみ縁 (3.2) 2.2+α	石灰灰を多く含む	真	内外：鈍い黄褐色5YR6/4	指押さえ	指押さえ		
	172	7D S1602	灰土器	小短甕	1.752.36③ 1.8	石灰灰を含む	真	内：鈍い黄褐色10YR7/4・外：黄褐色10YR 5/1	指押さえ	指押さえ		
	173	7D S1602	灰土器	付付筒	① 124.0 ② 66+α	石灰灰及び陶面を金雲母を多く含む	真	内：灰黄褐色2.5Y7/2・外：淡黄褐色5Y7/3	ハケ目後ナデ消し	ハケ目	口縁部一部磨滅の色黄褐色	
	174	7D S1602	灰土器	甕	① 126.0 ② 48+α	精細	真	内：橙褐色5YR7/6・外：明赤褐色5YR5.8	丁寧なココナデ	丁寧なナデ	受部に黒い目	
	175	7D S1602	灰土器	甕		石灰灰を含む	真	内：鈍い黄褐色7.5YR7/4・外：明赤褐色5YR5.8	1ガキ?	ココナデ	内外丹塗り	
	図200	176	7D S1602	土製品	石製品	①全長192 最大幅0.8 最大厚0.35 重量0.8		真	橙褐色2.5Y6.6			丹塗り
		177	7D S1602	石器	石製	①全長223 最大幅1.5 最大厚0.4 重量1.0						黒曜石
		178	7D S1602	石器	石製	①全長223 最大幅1.5 最大厚0.4 重量1.0						黒曜石
		179	7D S1602	石器	石製	①全長230 最大幅1.6 最大厚0.4 重量1.7						黒曜石
		180	7D S1602	石器	石製	①全長219 最大幅1.4 最大厚0.3 重量0.6						黒曜石
		181	7D S1602	石器	石製	①全長172 最大幅0.5 最大厚0.6 重量0.94						粘板岩
182		7D S1602	石器	石製	①全長155 最大幅0.9 最大厚0.6 重量1.90						赤紫泥岩	
183		7D S1602	石器	石製	①全長162 最大幅1.3 最大厚0.35 重量2.61						輝綠閃岩	
184		7D S1602	石器	石製	①全長109.6 最大幅0.8 最大厚0.5 重量2.25						凝灰岩	
185		7D S1602	石器	石製	①全長168.9 最大幅0.9 最大厚1.5 重量1.50						花崗岩	
図202	186	8E S1201	灰土器	甕		陶面粒を含む	真	内外：橙褐色5YR6.6	ナデ	ナデ		

図号	透視 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm ³) 1.1L以下の器 3口径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
R34	187	8E SR201	弥生土器	甕		細砂粒を含む	真	内・黄い褐色5YR6/4・外・ 褐色5Y6/6	ナデ	ナデ	
	188	8E SR201	弥生土器	甕	① 26.0 ② 3.8+α	細砂粒を含む	真	内・黄い褐色7.5YR7/4・ 外・褐色5YR6/3			
	189	8E SR201	弥生土器	甕		細砂粒を含む	真	内・黄い褐色7.5YR6/3・ 外・黄い褐色7.5YR6/4	ハケ目	ナデ	
	190	8E SR201	弥生土器	甕		細砂粒を含む	真	内・浅黄褐色10YR8/3・ 外・黄い褐色5YR6/4	ハケ目	ナデ	
	191	8E SR201	弥生土器	甕	① 22.5+α ② 5.7	細砂と白色粒及び砂粒を多 く含む	真	内・灰青色2.5Y6/2・外・ 黄褐色5YR6/3	ナデハナ	磨滅により調整 不明	底面に円形状に粘土 跡目
	192	10F SD407	弥生土器	甕	① 22.6 ② 3.0+α	砂粒を多く含む	真	内・黄褐色10YR7/3・外・ 褐色5YR 6/6	ハケ目	磨滅により調整 不明	
	194	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.0+α	細砂粒をわずかに含む	真	内外・灰青色10YR6/2	ナデ	ナデ	別注目
	194	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.0+α	砂粒を含む	真	内・褐色7.5YR7/6・外・ 黄い褐色7.5YR7/4	ナデハナ	ナデ	内面一部工具痕
	195	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.6 ② 6.0+α	石炭粒及び炭屑を多く含 む	真	内・浅黄褐色7.5YR8/4・ 外・褐色5YR 7/6	ナデハナ	磨滅させ	
	196	10F SD407	弥生土器	甕	① 28.5+α	砂粒を含む	真	内外・灰白色10YR8/2	ナデハナ	ナデ	
	197	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.2+α	砂粒を含む	真	内・褐色5YR6/4・外・黄 い褐色7.5YR7/3	ナデ	磨滅させ	
	198	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.0 ② 4.3+α	細砂粒を多く含む	真	内外・灰青色2.5Y7/2	磨滅により調整不明	磨滅させ	
	199	10F SD407	弥生土器	甕	① 28.4 ② 4.3+α	石炭粒及び炭屑を多く含 む	真	内・黄い褐色7.5YR7/3・ 外・褐色5YR7/6	ナデハナ	磨滅させ	
	200	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.6+α	砂粒を多く含む	真	内・灰褐色7.5YR6/2・外・ 黄褐色7.5YR6/2	ナデ	ナデ	
	201	10F SD407	弥生土器	甕	① 32.5+α	砂粒を含む	真	内・褐色5YR 6/6・外・明 赤褐色5YR5/6	ナデハナ	ナデ	
	202	10F SD407	弥生土器	甕	① 28.0 ② 5.8+α	砂粒を含む	真	内外・褐色5YR6/6	ナデハナ	ナデ	
	203	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.8 ② 4.3+α	灰石及び石炭粒を多く含 む	真	内・浅黄褐色10YR8/4・ 外・黄褐色7.5YR7/4	ナデハナ	磨滅させ後ナ デ	
	204	10F SD407	弥生土器	甕	① 30.0 ② 9.5+α	砂粒を含む	真	内・黄い黄褐色10YR7/4・ 外・黄い黄褐色10YR7/3	ナデハナ	ゴコナデ	
	205	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.0 ② 8.5+α	砂粒を含む	真	内・黄い褐色5YR7/4・外・ 黄い褐色5YR7/3	ナデハナ	ナデ	
	206	10F SD407	弥生土器	甕	① 26.0 ② 10.0+α	細砂粒を多く含む	真	内・黄い黄褐色10YR7/3・ 外・黄い褐色7.5YR7/4	ナデハナ	磨滅させ	内面ケズリ?
207	10F SD407	弥生土器	甕	① 26.6+α	細砂粒をわずかに含む	真	内・浅黄褐色7.5YR8/4・外・ 黄褐色5YR8/4	ナデハナ	調整不明		
208	10F SD407	弥生土器	甕	① 23.5+α ② 6.8	石炭粒を含む	真	外面のみ・褐色5YR 7/6	ハケナデ磨し	磨落		
209	10F SD407	弥生土器	甕	① 22.4+α ② 6.0	石炭粒及び炭屑を多く含 む	真	外面のみ・褐色5YR 7/6	ナデハナ	磨落		
210	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.3+α ② 7.6	石炭粒及び炭屑を多く含 む	真	内・黄褐色10YR8/1・外・ 黄い黄褐色10YR7/2	ナデハナ	磨滅させ	外面一部工具痕	
R35	211	10F SD407	弥生土器	甕	① 28.0 ② 13.5+α	砂粒を含む	真	内外・褐色5YR6/6	ナデハナ	ナデ	
	212	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.3+α ② 7.3	大粒の砂粒を多く含む	真	内・褐色2.5YR6/6・外・ 褐色2.5YR6/8	調整不明	調整不明	
	213	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.9+α ② 6.8	砂粒を多く含む	真	内・赤灰色2.5YR4/1・外・ 褐色2.5YR6/8	ハケ目	磨滅させ	
	214	10F SD407	弥生土器	甕	① 26.8+α ② 6.6	細砂粒を多く含む	真	内・明褐色7.5YR7/1・外・ 褐色2.5YR6/6	ハケ目	磨落により調整 不明	
	215	10F SD407	弥生土器	甕	① 26.1+α ② 7.7	大粒の砂粒を多く含む	真	内・灰褐色7.5YR6/2・外・ 褐色2.5YR6/6	調整不明	磨滅させ	
	216	10F SD407	弥生土器	甕	① 26.9+α ② 6.9	砂粒を多く含む	真	内・褐色5YR7/6・外・黄 褐色5YR6/4	ハケ目	磨滅させ	内面一部工具痕
	217	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.9+α ② 6.8	石炭粒を多く含む	真	内・黄褐色7.5YR4/1・外・ 浅黄褐色7.5YR6/6	ハケ目	磨滅させ	
	218	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.8+α ② 8.0	砂粒を含む	真	内・黄い褐色5YR7/4・外・ 褐色5YR 7/6	ナデハナ	ナデ	
	219	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.2+α ② 6.8	砂粒を含む	真	内・灰褐色5YR5/2・外・ 黄褐色7.5YR7/6	ハケ目	磨滅させ	
	220	10F SD407	弥生土器	甕	① 26.8+α ② 7.0	石炭粒及び炭屑を多く含 む	真	内・黄褐色5YR7/1・外・ 褐色5YR7/6	ナデハナ	磨滅させ	
	221	10F SD407	弥生土器	甕	① 26.8+α ② 6.6	石炭粒を多く含む	真	内・黄い褐色7.5YR7/3・ 外・黄い褐色7.5YR7/4	ナデハナ	調整不明	
	222	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.9+α ② 6.5	砂粒を含む	真	内・黄褐色2.5YR2/1・外・ 褐色2.5YR6/6	ハケ目	磨滅させ	
	223	10F SD407	弥生土器	甕	① 28.8+α ② 7.0	砂粒を含む	真	内・褐色5YR6/8・外・黄 褐色2.5YR6/6	ハケ目	磨滅させ	
	224	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.0+α ② 7.0	大粒の砂粒を含む	真	内外・黄い黄褐色5YR6/4	ナデ	磨滅させ	
	225	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.6+α ② 6.8	細砂粒を多く含む	真	内・黄褐色7.5YR6/1・外・ 褐色5YR6/8	ナデ	磨落により調 整不明	内面一部磨滅
	226	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.0+α	砂粒を含む	真	内・明赤褐色5YR 3/2・外・ 褐色5YR 7/6	ナデハナ	磨滅させ	調整不明
	227	10F SD407	弥生土器	甕	① 27.9+α ② 5.8	砂粒を多く含む	真	内・明赤褐色5YR 5/6・外・ 褐色5YR 6/8	調整不明	調整不明	
	228	10F SD407	弥生土器	甕	① 24.0+α ② 7.0	大粒の砂粒を含む	真	内・黄い褐色5YR6/4・外・ 黄褐色5YR6/3	ナデ	ナデ	
	229	10F SD407	弥生土器	甕	① 25.6+α ② 6.6	石炭粒を多く含む	真	内・黄褐色7.5YR8/1・外・ 黄い褐色7.5YR7/4	ナデハナ	磨滅させ	

図番 番号	遺物 番号	出土地点・ 遺物等	種類	器種	法量 (mm) [1] 口径・高さ 3 底径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
R30	230	HF SB407	灰土土器	甕	260+α③ (78)	大粒の砂粒を含む	真	内: 褐色色75YR5/1-外: 褐色色5YR7/6	ナチハク後ナチ	節押え	
	231	HF SB407	灰土土器	甕	230.5+α③ (64)	大粒の砂粒を含む	真	内: 褐色色25YR6/8-外: 褐色色25Y7/6	ナチハク後ナチ	ナチ	
	232	HF SB407	灰土土器	甕	267+α③ (64)	石炭粒を多く含む	真	内: 褐色色75YR4/1-外: 浅黄褐色75YR8/4	ナチハク	ナチ	内面一部磨光
	233	HF SB407	灰土土器	甕	つまみ係 (74) 28.5+ α	砂粒を含む	真	内: 鈍い褐色5YR7/3-外: 褐色色5YR 6	面取り	ナチ	
	234	HF SB407	灰土土器	支脚	290+α	細砂粒を含む	真	外面のみ: 褐色5YR7/6	瓶状工具によるナチ		
	235	HF SB407	灰土土器	支脚	裾部径142± 102+α	砂粒を多く含む	真	内: 浅黄褐色75YR8/4- 外: 褐色75YR 7.6	管減により調整不明	ナチ	
	236	HF SB407	灰土土器	甕	① 27.0 ② 58+α	大粒の砂粒を含む	真	内: 鈍い褐色5YR7/4-外: 褐色5YR6/6	ミガキ	丁寧なナチ	
	237	HF SB407	灰土土器	甕	272+α	石炭粒及び器母を多く含む	真	内: 鈍い黄褐色10YR7/4- 外: 浅黄褐色10YR8/4	器面取れにより調整 不明	瓶ナチ	
	238	HF SB407	灰土土器	甕	260+α	細砂粒を含む	真	内外: 鈍い褐色75YR7/4	ハラミヤキ	瓶ナチ	
	239	HF SB407	灰土土器	甕	230.5+α	砂粒を含む	真	内: 褐色色75YR3/1-外: 鈍い褐色75YR7/4	ヨコナチ	ヨコナチ	
	240	HF SB407	灰土土器	甕	264+α	石炭粒を多く含む	真	内外: 浅黄褐色10YR8/3	ミガキ	器面取れによ り調整不明	
	241	HF SB407	灰土土器	甕	238+α③ 100	砂粒を多く含む	真	内: 褐色5YR 6-外: 黒 褐色5YR4/1	ハラミヤキ	調整により調 整不明	
242	HF SB407	灰土土器	甕	277.1+α③ (66)	石炭粒及び赤器母を含む	真	内: 浅黄褐色75YR8/3- 外: 鈍い黄褐色10YR7/3	ミガキ	節押え		
243	HF SB407	灰土土器	甕	① 45.4 ② 37+α	砂粒及び赤色粒子を多く含む	真	内: 鈍い黄褐色10YR8/4- 外: 浅黄褐色10YR8/3	ナチハク	ハケ後ナチ消し		
R38	244	HF SB408	灰土土器	甕	239+α	細砂粒を多く含む	真	内外: 灰白色10YR8/2	ハケ後ナチ消し	ナチ	
	245	HF SB408	灰土土器	甕	258+α	微細な白色粒を多く含む	真	内: 灰白色25Y5/1-外: 褐色色10YR5/1	ハケ後ナチ	ハケ後ナチ	
	246	HF SB408	灰土土器	高杯	253+α	微細な白色粒を含む	真	内: 灰白色25Y8/1-外: 灰黄色25Y7/2	ハケ後ナチ消し	ハケ目	
R30	247	HF SR506	灰土土器	甕	① 28.6 ② 45+α	赤石炭粒及び器母を多く 含む、赤色粒を稀やかに 含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR6/6	管減により調整不明	管減により調 整不明	
	248	HF SR506	灰土土器	甕	237+α	微細な石炭粒及び赤器母 を含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR6/3	ヨコナチ	ヨコナチ	
	249	HF SR506	灰土土器	甕	240+α	石炭粒・白器母を含む	真	内: 褐色75YR7/6-外: 明黄褐色5YR 5.8	調整不明	ヨコナチ	外面磨光
	250	HF SR506	灰土土器	甕	263.3+α③ 84	石炭粒を多く含む	真	内: 褐色5YR 6.6-外: 褐色 5YR 6.6	ナチハク	器面取れによ り調整不明	内面一部工具
R32	251	HF SR507	灰土土器	甕	240+α	大粒の砂粒及び稀めて微細 な器母を含む	真	内外: 褐色5YR 6.6	ナチハク	丁寧なヨコナチ	
	252	HF SR507	灰土土器	甕	230+α	細砂粒を含む	真	内: 灰褐色25YR6/2-外: 鈍い褐色75YR7/4	ナチ	ナチ	
	253	HF SR507	灰土土器	甕	224+α③ (60)	細砂粒を多く含む	真	内外: 鈍い褐色75YR6/4	器面取れにより調整 不明	器面取れによ り調整不明	
	254	HF SR507	灰土土器	甕	227+α	砂粒を含む	真	内: 褐色色75YR3/1-外: 鈍い褐色75YR7/6	ハケ後ナチ消し	ナチ	内面一部工具
	255	HF SR507	灰土土器	高杯	238+α	砂粒を含む	真	内: 褐色5YR 6.6-外: 褐色 色5YR 7.6	器面取れにより調整 不明	ナチ	口縁部に磨光
	256	HF SR507	灰土土器	甕	245+α③ (10)	大粒の砂粒及び稀めて微細 な器母を含む	真	内: 浅黄褐色10YR8/3- 外: 浅黄褐色10YR8/3	ヨコナチ	器面取れによ り調整不明	内面に磨光
	257	HF SR507	灰土土器	高杯	240+α③ 底径 90	砂粒を含む	真	内: 褐色75YR7/6-外: 褐色75YR6/6	ハケ目磨がわずかに 残る	ナチ	
	258	HF SR507	石器	石碇丁	① 横径長355 ② 最大厚 0.51 ③ 重量 9.9						特殊な石
R34	259	HF SR508	灰土土器	甕	225+α	細砂粒を含む	真	内: 鈍い褐色75YR6/4- 外: 鈍い褐色75YR7/4	ナチ	管減により調 整不明	
	260	HF SR508	灰土土器	甕	218+α	細砂粒をわずかに含む	真	内: 明赤褐色5YR 6.8-外: 明赤褐色5YR6/8	ナチ	管減により調 整不明	
	261	HF SR508	灰土土器	甕	230+α	細砂粒を含む	真	内: 褐色75YR6/6-外: 鈍い褐色75YR 6.4	ナチハク後ヨコナチ	管減により調 整不明	
	262	HF SR508	灰土土器	甕	226+α	細砂粒を含む	真	内: 褐色色25YR6/6-外: 褐色75YR7/6	ナチハク	管減により調 整不明	
R35	263	HF SR509	灰土土器	甕	236.7±25+ α (60)	石炭粒を多く含む	真	内: 鈍い黄褐色10YR6/3- 外: 浅黄褐色10YR8/4	丁寧なナチ	節押え	
	264	HF SR509	灰土土器	甕	243+α③ (60)	石炭粒を多く含む	真	内: 浅黄褐色75YR8/4- 外: 褐色75YR 6.6	ハケ後ヨコナチ	節押え	内面に磨光
R37	265	7D SK308	灰土土器	甕	① 28.6 ② 160+α	石炭粒を多く含む	真	内: 褐色色75YR3/1-外: 明赤褐色5YR 5.5	ハケ後ナチ消し	瓶ナチ	
	266	7D SK308	灰土土器	甕	① 38.8 ② 181+α	微細な石炭粒を多く含む	真	内外: 褐色5YR 6.6	ハケ後ナチ	節押え後瓶 ナチ	
	267	7D SK308	灰土土器	甕	240+α	石炭粒を多く含む	真	内: 褐色25YR6/8-外: 褐色 色5YR 6.6	ハケ後ナチ	器面取れによ り調整不明	
	268	7D SK308	灰土土器	甕	273+α	石炭粒を多く含む	真	内: 褐色5YR 6.6-外: 褐色 色5YR 6.6	ナチハク	器面取れによ り調整不明	
	269	7D SK308	灰土土器	甕	235+α③ (74)	石炭粒を多く含む	真	内: 明赤褐色5YR 5.8-外: 褐色5YR 6.6	ハケ目	節押え	
	270	7D SK308	灰土土器	甕	244+α③ 8.8	微細な砂粒を含む	真	内: 明赤褐色5YR 5.8-外: 褐色5YR 6.6	ハケ目	器面取れによ り調整不明	
	271	7D SK308	灰土土器	甕	211.5+α③ (78)	大粒の砂粒及び微細な白色 粒をやや多く含む	真	内: 褐色5YR 6.8-外: 褐色 色5YR 5.8	器面取れにより調整 不明	ナチ	

図番 号	透視 番号	出土地・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm・g) [1.1] 秤寸法 3.0倍	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
1030	272	7D SK508	弥生土器	缶	① 1420 ② (205)	大粒の砂粒及び微細な全面 母を多く含む	真	内： 黄い・棕色25YR7/4・ 外： 明赤褐色25YR5/8	ミガキ	丁寧なナデ	内外丹塗り
	273	7D SK508	弥生土器	缶	① 240+α③ 66	石炭粒を多く含む	真	内： 棕色25YR6/8・外： 浅黄褐色25YR8/4	器面見れにより調整 不明	器面見れにより調整 不明	内外丹塗り
	274	7D SK508	弥生土器	缶	① 250+α③ (78)	精細	真	内外： 明灰色5YR 5-1	ミガキ	器押さえ	内外丹塗り
	275	7D SK508	弥生土器	高杯	① 3029.270+α (326)	大粒の砂粒を少量含む	真	内： 浅黄褐色10YR8/4・ 外： 浅黄褐色25YR8/3	器面見れにより調整 不明	器面見れにより調整 不明	内外丹塗りが残る
	276	7D SK508	弥生土器	高杯	① 148+α	精真	真	内： 黄褐色25YR6/8・外： 明赤褐色25YR 5/8	ハワミガキ	ナデ	外面丹塗り
	277	7D SK508	弥生土器	高杯	① 150+α③ 142	石炭粒を多く含む	真	内外： 浅黄褐色25YR6/6	ヘラナデ	ハケ目	外面丹塗り
	278	7D SK508	弥生土器	器台	① 10.2②170 ③126	石炭粒を多く含む	真	内： 明赤褐色5YR 5/8・ 外： 明赤褐色5YR 5/6	ハケ目ナデ	ハケ目	外面丹塗り
	279	7D SK508	弥生土器	器台	① 10.8②130 ③125	石炭粒を多く含む	真	内： 棕色25YR6/6・外： 明赤褐色25YR 5/8	ハケ目	器押さえ	内面一部工具痕
	280	7D SK508	土製品	紡錘車	① 960+α・孔 (86)・直径	微細な白色粒及び細砂粒を わずかに含む	真	明赤褐色5YR 5/8	ナデ		
	281	7D SK508	石器	石斧丁	① 残存長4.0 ② 最大幅2.8 ③ 最大厚0.6 ④ 重量9.4						輝緑輝灰岩
	282	7D SK508	石器	磨製石 槌	① 残存長5.3 ② 最大幅2.1 ③ 最大厚0.8 ④ 重量13.4						粘板岩
	1030	283	7D SK509	弥生土器	甕	① 334.4 ② 25+α	砂粒を多く含む	真	内外： 黄い・棕色25YR7/4	器底により調整不明	器底により調整不明
284		7D SK509	弥生土器	甕	① 300.0 ② 109+α	石炭粒を多く含む	真	内： 浅黄褐色25YR8/4・ 外： 橙25YR7/6	ナデハナ		器底により調整不明
285		7D SK509	弥生土器	甕	① 260+α③ (74)	細砂粒及び細砂粒を含む	真	内： 黄い・黄褐色10YR7/3・ 外： 黄い・褐色25YR5/4	ナデハナ		器底により調整不明
286		7D SK509	弥生土器	甕	① 232+α③ (94)	砂粒及び石炭粒を多く含む	真	内外： 棕色5YR 6-6	器底により調整不明	器押さえ	外面工具痕
1030	287	7D SK510	弥生土器	甕	① 220+α	精真	真	内外： 棕色25YR6/8	ミガキ	ミガキ	内外丹塗り
	288	7D SK510	弥生土器	甕	① 247+α③ (72)	細砂粒及び極めて微細な 炭母を含む	真	内： 灰黄褐色10YR 4/2・ 外： 棕色5YR 6-6	ナデハナ	器押さえ後ナ デ	
	289	7D SK511	弥生土器	甕	① 242+α	細砂粒及び石炭粒を含む	真	内外： 棕色5YR 7-6	ナデハナ	丁寧なナデ	
	290	7D SK511	弥生土器	甕	① 218+α	石炭粒を多く含む	真	内： 浅黄褐色10YR8/4・ 外： 黄い・褐色10YR8/4	ココナデ	ココナデ	
1030	291	7D SK511	弥生土器	高杯	① 228+α	細砂粒及び細石炭粒をわず かに含む	真	内外： 棕色5YR6/6	ミガキ	ミガキ	内外丹塗り
	292	7D SK511	弥生土器	高杯	① 272+α	精細	真	内外： 赤褐色5YR 4-6	ミガキ	器押さえ後ナ デナデ	内外丹塗り
	293	7D SK512	弥生土器	甕	① 140.4 ② 50+α	砂粒を含む	真	内外： 棕色5YR6/6	ナデ	ナデ	内面一部工具痕
	294	7D SK512	弥生土器	甕	① 223+α	石炭粒を多く含む	真	内外： 棕色5YR7/6	ナデ	ナデ	
1030	295	7D SK512	弥生土器	甕	① 212+α	石炭粒を多く含む	真	内外： 明灰色5YR5/8	ナデ	ナデ	
	296	7D SK512	弥生土器	器台	① 250+α	石炭粒及び炭母を含む	真	内： 黄い・黄褐色10YR7/3・ 外： 棕色5YR7/6	ナデハナ	器押さえ後ナ デ	
	297	7D SK513	弥生土器	甕	① 222+α	細砂粒を含む	真	内： 赤褐色5YR4/6・外： 黄い・赤褐色5YR4/4	ナデ	器底により調整 不明	
	298	7D SK513	弥生土器	甕	① 216+α	微細な白色粒を含む	真	内： 黄い・棕色10YR7/2・ 外： 黄褐色25YR7/3	板ナデ	ナデ	
1030	299	7D SK513	弥生土器	甕	① 218+α	微細な白色粒を多く含む	真	内外： 黄い・棕色25YR7/4	ナデ	ナデ	
	300	7D SK513	弥生土器	甕	① 220+α	砂粒を含む	真	内外： 棕色5YR6/6	ナデ	ナデ	
	301	7D SK513	弥生土器	甕	① 217+α	砂粒を含む	真	内外： 明灰色25YR7/2	ナデ	ナデ	
	302	7D SK513	弥生土器	甕	① 232+α	細砂粒を多く含む	真	内： 黄褐色5YR2/1・外： 棕色5YR6/6	ナデハナ後ナ デ	ナデ	
1030	303	7D SK513	弥生土器	甕	① 235+α	精真	真	内外： 棕色5YR7/6	器面見れにより調整 不明	器面見れにより調整 不明	
	304	8D SK101 最下層	弥生土器	甕	① 1145	精真	良好	内： 黄い・黄褐色10YR8/4・ 外： 黄い・黄褐色10YR7/4	器面見れのため不明	器面見れのため不明	底部付近に焼成痕 等あり
	305	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 130.4 ② 9.5③5.3	石炭・貝石を含む	良好	内： 黄褐色25YR6/6・外： 棕色25YR5/8・外： 棕色 5YR6/6-25YR7/6	器面見れのため不明	器押さえ、ナ デ	
	306	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 245+α	精真	良好	内： 黄褐色25YR7/6・外： 明赤褐色5YR5/8	ミガキ	ナデ	外面丹塗り
	307	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 256+α	砂粒を含む	良好	内： 棕色5YR6/8・外： 明赤褐色5YR5/8	器面見れのため不明	ナデ	外面丹塗り
	308	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 150.0 ② 118③3.6	1.3mm砂粒、石炭含む	良好	内： 明赤褐色5YR5/6・外： 明赤褐色5YR5/6・灰褐色 5YR4/2	丁寧なナデ 一層ナデ	器押さえ、一 層ナデ	
	309	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 136.3 ② 5.5+α	砂粒を含む	良好	内： 黄い・棕色25YR6/4・ 外： 明赤褐色5YR5/8	ミガキ	ナデ	外面丹塗り
	310	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 190.0 ② 6.3+α	白色細粒、炭母を含む	良好	内： 灰褐色10YR6/1・外： 黄い・黄褐色10YR7/4	ナデ	ナデ	
	311	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 185.0 ② 167③6.7	1.3mm砂粒多量含む	良好	内： 棕色5YR6/6・外： 明 赤褐色5YR5/6	ミガキ	ナデ	底部丁寧なナデ
	312	8D SK101 最下層	弥生土器	短頸甕	① 230.0 ② 161+α	精真	良好	内： 棕色5YR7/6・外： 黄褐色10YR6/8	ミガキ	ナデ	外面丹塗り、1層部 焼成痕等あり

図号 番号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm・g) [1] 口径・高さ [2] 底径 [3] 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
104	313	80 SK101 墓下層	灰土器	横腹瓶	① 258・α③ ①(12)	精瓦	良好	内：橙色5YR7・6・外：赤褐色10YR5/8	ミガキ	ナデ		
	314	80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (131) ② 82・α	赤母・砂粒を少量含む	良好	内：灰青褐色10YR6/2・外：赤褐色10YR5/2	ナデ	ナデ	外面片僅	
	315	80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (208) ② 67・α	2.5mm砂粒を含む	良好	内：橙褐色5YR6・6・外：橙褐色5YR6/8	ナデ	磨すりえ後ナデ		
	316	80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (209) ② 130・37.7	砂粒を含む	良好	内：明赤褐色5YR5/8・外：橙褐色5YR6/8	磨面残のため不明	磨面残のため不明		
	317	80 SK101 墓下層	灰土器	小形甕	① (158) ② 67・α	精瓦	良好	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR6/3	ナデ	ナデ		
	318	80 SK101 墓下層	灰土器	小形甕	① (64.3) ② 6.0・α	砂粒少量含む	良好	内：黄褐色5YR6/4・外：黄褐色5YR6/6	丁寧なナデ	ナデ		
	319	80 SK101 墓下層	灰土器	小形甕	① (17.4) ② 4.9・α	1mm以下白色粒子を含む	良好	内：橙褐色5YR7/6・外：橙褐色5YR7/6	ミガキ	ナデ	断面外面に破文	
	320	80 SK101 墓下層	灰土器	小形甕	① (16.4) ② 4.0・α	砂粒を少量含む	良好	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR6/4	ミガキ	ミガキ		
	321	80 SK101 墓下層	灰土器	小形甕	① (23.3・α③) ② 6.7	1.2mm砂粒を含む	良好	内：黄褐色5YR7/6・外：黄褐色5YR7/4	ナデ	ナデ		
	322	80 SK101 墓下層	灰土器	高杯	① 225・α	微細な炭母を含む	良好	内外：黄褐色5YR7/4	磨面残のため不明	磨面残のため不明		
	323	80 SK101 墓下層	灰土器	高杯	① 227・α	細砂粒・炭母を含む	良好	内外：明赤褐色5YR5/8	磨面残のため不明	磨面残のため不明		
	324	80 SK101 墓下層	灰土器	高杯	① 235・α	細砂粒を含む	良好	内：橙褐色5YR6・6・外：橙褐色5YR6・6・黄褐色10YR7/4	磨面残のため不明	ナデ	口縁部上面・内面一部片残存	
	325	80 SK101 墓下層	灰土器	高杯	① 209② 223・α ③ 15.9	細砂粒を含む	良好	内外：黄褐色5YR7/6・外：黄褐色5YR7/6	磨面残のため不明	磨面残のため不明		
	326	80 SK101 墓下層	灰土器	高杯	① (28.0) ② 12.0	精瓦・炭母多く含む	良好	内外：橙褐色5YR6/6	ナデナデ後ナデ	丁寧なナデ	内面片が明々残る	
	327	80 SK101 墓下層	灰土器	高杯	① (30.4②) ② 8.0・α	細砂粒・微細炭母を含む	良好	内外：黄褐色5YR6/4	磨面残のため不明	一部ミガキ	内面下半片僅	
	328	80 SK101 墓下層	灰土器	高杯	① 30.4② ② 11.5・α	精瓦・微細炭母を含む	良好	内：橙褐色5YR6/8・黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR7/4	一部ナデ	ミガキ	内面片僅・外面一部に破文	
	1049	329	80 SK101 墓下層	灰土器	仏口壺	① (22.6) ② 15.0・α	白色粒子を含む	良好	内：黄褐色5YR7/4・外：黄褐色10YR6/3	丁寧なナデ	ナデ	
		330	80 SK101 墓下層	灰土器	仏口壺	① (35.1) ② 126・α	2mm以下砂粒を含む	良好	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR7/3	ナデ	ナデ	
		331	80 SK101 墓下層	灰土器	仏口壺	① 30.0② 298 ③ 17.0	砂粒・石英を含む	良好	内：橙褐色5YR6・6・外：黄褐色10YR7/2	ナデ	磨面残のため不明	
		332	80 SK101 墓下層	灰土器	仏口壺	① 34.2② 335 ③ 9.6	微細炭母を含む	良好	内：浅黄褐色10YR8/3・外：黄褐色10YR7/4	ナデ	磨すりえ、ナデ	
333		80 SK101 墓下層	灰土器	仏口壺	① (25.6・α) ② 11.0	精瓦	良好	内：黄褐色5YR7/3・外：黄褐色5YR7/4	ナデ	ナデ	外面・内面断面片僅	
334		80 SK101 墓下層	灰土器	仏口壺	① 27.5・α③ ② 17.4	1.2mm砂粒を含む	良好	内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR7/3	丁寧なナデ	磨すりえ後ナデ		
335		80 SK101 墓下層	灰土器	仏口壺	① 31.5② ③ 29.2・α	1.2mm砂粒を含む	良好	内：橙褐色5YR6/6・外：黄褐色10YR7/4	丁寧なナデ	磨すりえ後ナデ	外面に縁部や頸部に一部片が付着	
336		80 SK101 墓下層	灰土器	表110 仏口壺	① 33.2② 330 ③ 17.7	1mm以下白色粒子を含む	良好	内：橙褐色5YR7・6・外：橙褐色5YR7・6-8	ミガキ	磨すりミガキ	外面・内面断面片僅の磨すり	
1050		337	80 SK101 墓下層	灰土器	甕	① (25.2) ② 240.37.0	細砂粒・石英を含む	良好	内：橙褐色5YR7/6・外：黄褐色10YR5/3-橙褐色5YR7/6	ナデナデ	磨すりえ後ナデ	
		338	80 SK101 墓下層	灰土器	甕	① (32.4) ② 200・α	細砂粒・石英を含む	良好	内：黄褐色10YR7/4・外：橙褐色5YR6・6	ナデナデ	磨すりえ後ナデ	断面黄褐色のため不明
	339	80 SK101 墓下層	灰土器	甕	① (31.8) ② 348.28.4	微細な砂粒を含む	良好	内：黄褐色10YR7/3・6・外：黄褐色10YR7/3	ナデナデ後ナデ	磨すりえ後ナデ	底部焼成後穿孔	
	340	80 SK101 墓下層	灰土器	甕	① 40.0② 293 ③ 11.0	細砂粒多く含む	良好	内：明褐色5YR5/6・暗灰褐色2.5YR4/2・外：明赤褐色5YR5/8	ハナ目	丁寧なナデ		
	341	80 SK101 墓下層	灰土器	甕	① (30.4) ② 92・α	石英を含む	良好	内：橙褐色5YR7・6・灰白色2.5YR8/1・外：浅黄褐色10YR8/3	ヨコナデ	磨面残のため不明		
	342	80 SK101 墓下層	灰土器	甕	① (41.2) ② 33.0・α	微細な炭母・3mm内外の石粒わずかに含む	良好	内：黄褐色5YR7/4・外：黄褐色10YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ		
	343	80 SK101 墓下層	灰土器	甕	① 46.0② 280.3 ③ (13.5)	微細な炭母・細砂粒多く含む	良好	内：橙褐色5YR6・6・外：橙褐色5YR6/6	ナデ	ナデ	工具痕が残る	
	1051	344	80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (81) ② 5.13 (4.6)	1.2mm砂粒を含む	良好	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR6/2	ハナ目後ナデ	ナデ	
		345	80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① 88.2③ 37.3 ④ 6.7	細砂粒を含む	良好	内：黄褐色10YR6/1・外：黄褐色10YR5/1-黄褐色10YR7/3	丁寧なヨコナデ	ナデ	外面一部片が付着
		346	80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (121.2③ 78.3) ④ 1.8	石英・長石・砂粒を含む	良好	内：黄褐色10YR7/4・外：黄褐色10YR7/6	ヨコナデ	ヨコナデ	内面に縁部付近に片が付着
347		80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (178.2③ 79.3) ④ 5.3	3mm程度砂粒を含む	良好	内：黄褐色5YR8/2・外：黄褐色5YR7/3	底部付近ハナ目・口縁部ナデ	口縁部ナデ・頸部工具痕		
348		80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (116.25.43) ② 4.0	砂粒多く含む	良好	内外：浅黄褐色10YR8/3	口縁部ナデ	口縁部ナデ・頸部板状工具痕		
349		80 SK101 墓下層	灰土器	鉢	① (170.285.3) ④ 6.4	1.3mm砂粒・石英を含む	良好	内：橙褐色5YR7・6・外：灰白色10YR8/2-橙褐色5YR7/6	口縁部ナデ・頸部ナデ	磨すりえ後ナデ		

図号	透視 番号	出土地・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm・g) [1] 口径・高さ ・3 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
R52	350	8B SK101	灰土土器	鉢	[1] 15.6×11.2 3.56	微細白色粒子・雲母含む	良好	内：灰白色25YR7/1・外： 灰白色10YR8/2-黄い黄褐色 7.5YR7/2	チタハナ	磨研さえ後ナ	口縁部内外面残存	
	351	8B SK101	灰土土器	鉢	[1] 17.5×8.83 6.0	砂粒多く含む	良好	内外：浅褐色25YR7/2	チタハナ・口縁部チ タハナ	磨研さえ後ナ	底部焼成痕あり	
	352	8B SK101	灰土土器	鉢	[1] 18.4×10.4 3.75	1cm内外砂粒含む	良好	内外：橙褐色5YR6/6-黄い 黄褐色10YR7/3	ハケ目後チタ	磨研さえ後ナ	外面口縁部付近に 残存	
	353	8B SK101	灰土土器	鉢	[1] 16.0×9.93 6.7	精良	良好	内：黄い黄褐色10YR7/4・ 外：橙褐色5YR7/6-灰黄 色25YR7/2	磨研見れのため不明	チタ	底部に焼成痕あり	
	354	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 10.0・ 7.83・5.66 1.11	精良・1mm程度砂粒含む	良好	内：黄い黄褐色10YR7/4・ 外：黄い黄褐色10YR7/4	チタ	チタ	外面丹塗	
	355	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.5・ 9.93・6.31 1.1	精良・1mm程度砂粒含む	良好	内：橙褐色5YR6/6・外：明 赤褐色5YR5/8	チタ	チタ	外面丹塗	
	356	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 9.5×7.10×3 1.3	細粒含む	良好	内：灰白色25YR8/1・外： 灰白色25YR8/2	ココナテ→一部ハ ケ目後	磨研さえ後ナ		
	357	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.6×7.13× 3.73	砂粒含む	良好	内：橙褐色5YR7/8・外：橙 褐色5YR7/8-黄い黄褐色 10YR7/4	ハケ目後チタ	磨研さえ後ナ		
	358	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.6×2.10× 3.53	細粒含む	良好	内外：橙褐色5YR6/8	ココナテ	瓶チタ		
	359	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.5・ 5.3 1.1	精良	良好	内：黄い黄褐色10YR6/3・ 外：橙褐色5YR6/6	磨研さえ・チタ	磨研さえチ タ		
	360	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.2×11.4 3.67	微細雲母・石英多く含む	良好	内：黄い黄褐色10YR6/3・ 外：黄い黄褐色10YR6/3 黄い黄褐色10YR5/3	磨研丁寧なココナ テ・瓶底ノミ	丁寧なチタ	外面・内面用月 残存	
	361	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.0 10.5×5.9	2mm砂粒含む	良好	内外：橙褐色5YR6/6	ココナテ	磨研チタ		
	362	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.2×11.5× 3.69	細粒砂粒含む	良好	内：橙褐色5YR6/6・外：橙 褐色5YR6/6-黄い黄褐色 5YR6/4	ココナテ	ココナテ	磨研丁寧に焼成痕 あり	
	363	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.4× 10.9×5.5	精良	良好	内外：灰白色25YR7/2	チタ	磨研丁寧なチ タ	磨研丁寧に焼成痕 あり	
	364	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.2×11.7× 3.70	白色砂粒含む	良好	内：橙褐色5YR7/6・外： 黄い黄褐色7.5YR7/4-浅黄 褐色10YR8/3	ココロギキ	口縁部ココナ テ	磨研外面に磨文・ 磨研最大径部に焼 成痕あり	
	365	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.1×11.8× 3.52	石英・長石細粒含む	良好	内外：橙褐色5YR7/8	磨研見れのため不明	磨研チタ	磨 研チタハナ	
	R53	366	8B SK101	灰土土器	小形壺	[1] 11.6×2.17× 3.51	1.3mm砂粒・微細雲母含む	良好	内：浅黄褐色7.5YR8/4・明 赤褐色25YR5/8・外：浅 黄褐色10YR8/4・明赤褐色 2.5YR5/6	ミギキ	瓶底ノミ・チ タ	外面・瓶部内面丹 塗
		367	8B SK101	灰土土器	瓶口 残片	[1] 12.2×2.56× 3.6	精良・雲母わずかに含む	良好	内：橙褐色5YR6/6・外：黄 い黄褐色10YR7/3	チタ・ココロギキ	チタ	外面丹塗・焼成痕 あり
		368	8B SK101	灰土土器	蓋	[1] 11.6×5.3× 4.5	精良	良好	内：橙褐色5YR7/6・外：灰 黄色25YR7/2	チタミギキ	磨研チタ	双孔・内面丹付着
		369	8B SK101	灰土土器	短瓶壺	[1] 11.4・ 9.3×5.5	精良・1.3mm程度粗じり	良好	内：橙褐色5YR6/6・外：黄 い黄褐色10YR7/4	チタ	チタ	
370		8B SK101	灰土土器	短瓶壺	[1] 15.2×14.7 3.86	精良	良好	内：黄灰25YR5/1・外： 10YR7/6	丁寧なチタ	チタ	外面丹塗	
371		8B SK101	灰土土器	短瓶壺	[1] 18.0・ 12.5× 3.60	精良	良好	内：浅黄褐色7.5YR8/4・ 外：明赤褐色25YR5/6	ココロギキ	チタ	外面・口縁部内面 丹塗	
372		8B SK101	灰土土器	短瓶壺	[1] 11.4×13.5 3.91	精良	良好	内：橙褐色5YR6/6・外： 明赤褐色25YR4/8	ココロギキ	磨研チタ	外面・口縁部内面 丹塗・磨研片垂れ 焼成痕あり	
373		8B SK101	灰土土器	短瓶壺	[1] 15.2×14.9 3.94	精良・石英・長石細粒含む	良好	内：橙褐色5YR7/6・外：明 赤褐色25YR5/8	ココロギキ	口縁部ミギ キ・瓶部：チ タ	外面・口縁部内面 丹塗・磨研片垂れ 焼成痕あり	
R54		374	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 28.0・ 11.2	5mm以上の砂粒含む・23mm 砂粒多い	良好	内外：橙褐色5YR6/8	チタハナ	ココナテ	
		375	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 32.1・ 11.5	1.4mm砂粒多く含む	良好	内外：橙褐色5YR7/6	チタハナ後チタ	チタ	
	376	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 27.0・ 21.6	1.3mm白色粒子・砂粒多く 含む	良好	内：橙褐色5YR6/6・外： 黄い黄褐色7.5YR5/4	丁寧なココナテ	磨研さえ後ナ		
	377	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 28.7×28.1 3.67	2.3mm砂粒含む	良好	内：黄い黄褐色5YR6/4・外： 明赤褐色25YR5/8	チタ	チタ		
	378	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 29.0×28.7 3.64	微細雲母・石英含む	良好	内：橙褐色5YR7/6-6/6 外：橙褐色5YR3/2	チタハナ後丁寧なチ タ消し	磨研チタ	磨研最大径部に黄 い黄褐色の焼成痕あり	
	379	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 31.2・ 30.8・30.6	精良・1mm以下白色粒子含 む	良好	内外：黄褐色10YR7/4	磨研見れのため不明	磨研チタ		
	380	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 32.8× 12.5× 3.94	精良・1mm以下白色粒子含 む	良好	内外：明赤褐色5YR5/8	ミギキ	ココナテ	外面・内面口縁部 磨研片垂れ丹塗	
	381	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 32.3× 12.2× 3.9	精良・2mm砂粒わずかに含 む	良好	内：黄い黄褐色10YR7/4・ 外：黄い黄褐色10YR6/4	ココロギキ	チタ		
	382	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 36.0× 14.8× 3.9	1.4mm砂粒多く含む	良好	内：橙褐色5YR7/6・外： 黄い黄褐色10YR3/4	チタ	磨研見れのため 不明		
	383	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 30.0× 17.8× 3.9	微細砂粒・石英・微細雲母含 む	良好	内：黄い黄褐色10YR7/4・ 外：黄い黄褐色7.5YR7/4	ココナテ	磨研見れのため 不明		
384	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 30.3× 21.8× 3.9	精良・白色粒子含む	良好	内：橙褐色5YR6/8・外：明 赤褐色5YR5/8	ミギキ	チタ	内外面丹塗・瓶部 外面磨文		
385	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 34.5× 20.5× 3.9	1mm程度砂粒多く含む	良好	内外：黄い黄褐色10YR7/4	チタ	チタ			
R55	386	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 32.5× 23.0× 3.9	精良・1mm程度砂粒含む	良好	内：黄灰5Y4/1・外：橙 褐色10YR7/6	丁寧なチタ	チタ	磨研外面磨文風の チタ方向ミギキ	
	387	8B SK101	灰土土器	広口壺	[1] 31.2×30.8 3.80	微細白色粒子・雲母含む	良好	内：黄灰5YR6/6・明赤褐色 10YR7/6・外：橙褐色5YR6/8	丁寧なチタ	磨研見れのため 不明		

図番 番号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm) [1.1] 厚さのみ 3次元	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
R58	388	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.304] ± 122 ⁺ α	5mm以下砂粒含む	良好	内外：橙色7.5YR6-6	底部ナギミギキ	器面丸のため不明	
	389	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.302] ± 238 ⁺ α	細砂粒・微細雲母含む	良好	内：浅黄褐色10YR8-4・外：黄褐色10YR7-2・黄褐色5YR7-6	ヨコナテ	ナテ	
	390	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.310] ± 292 ⁺ α	石英・白色粒子や多く含む	良好	内外：橙色5YR6-6・黄褐色10YR7-4	底部丁寧なナテ	ナテ?	
	391	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.310] ± 275.5 8.5 ± 10.4	1.3mm砂粒・微細な雲母含む	良好	内：浅黄褐色10YR8-3・外：黄褐色10YR7-4・黄褐色5YR7-6	ナテ	器面丸のため不明	
	392	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.302] ± 272 ⁺ α	微細な雲母・白色粒子含む	良好	内：赤褐色5YR2-2・外：褐色10YR4-4・黄褐色5YR7-6	器面丸のため不明	底部丁寧なナテ・底部取付工具でナテ	
	393	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.312] ± 322 ⁺ α	微細な雲母含む	良好	内：黄褐色10YR7-4・黄褐色5YR7-6・黄褐色5YR7-6	器面丸のため不明		
	394	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.322] ± 395 ⁺ α	細砂粒含む	良好	内：橙褐色5YR6-8・5YR6-6・黄褐色5YR7-6・黄褐色5YR7-6・黄褐色5YR7-6	ヨコナテ	器押さえ・器面丸のため不明	
	395	8B SK101	灰生土器	無蓋甕	[1.110] ± α ± 168 ⁺ α	微細な雲母・細砂粒含む	良好	内：黄褐色5YR6-6・外：黄褐色5YR7-6・黄褐色5YR7-6	器面丸のため不明	丁寧なナテ	
	396	8B SK101	灰生土器	大形煎茶盆	[1.324] ± 297 ⁺ α	1.2mm砂粒含む	良好	内：黄褐色5YR6-6・外：黄褐色5YR7-4	ナテハケ後ナテ	器押さえ後丁寧なナテ	
	397	8B SK101	灰生土器	器種不明	[1.254] ± α	2mm砂粒・雲母含む	良好	内：黄褐色5YR6-6・外：黄褐色10YR8-2	丁寧なナテ	丁寧なナテ	
398	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.427] ± 145 ⁺ α	1.3mm内外砂粒・石英や多く含む	良好	内：黄褐色5YR6-6・外：黄褐色5YR7-6	ヨコナテ	ヨコナテ		
399	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.280] ± α	3-4mm砂粒多く含む	良好	内：浅黄褐色10YR8-3・黄褐色10YR7-4・外：黄褐色5YR7-6	器面丸のため不明	ナテ	口縁上部・内面突出部に片持ち	
400	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.499] ± 72 ⁺ α	2-4mm砂粒含む	良好	内：黄褐色5YR6-6・外：黄褐色5YR7-6	器面丸のため不明			
R57	401	8B SK101	灰生土器	表1.100 広口壺	[1.333] ± 246 ⁺ α	砂粒含む	良好	内：橙褐色5YR7-6・外：黄褐色5YR6-6	器底ナギミギキ	器押さえ後ナテ	外面・底部内面ナテ
	402	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.356] ± 293 1.7	精丸	良好	内外：赤褐色5YR4-8	ミギキ	器底・ミギキ調整・器押さえ後ナテ	外面・内面器底内縁・断面は上部から下に順に厚くなる
	403	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.255] ± α ± 6.8	微細白色粒子含む	良好	内：黄褐色10YR8-3・外：赤褐色5YR4-6	底部ナギミギキ・底部ヨコミギキ	器底ヨコミギキ	外面・底部内面ナテ
	404	8B SK101	灰生土器	広口壺	[1.255] ± α ± 7.4	砂粒含む	良好	内外：黄褐色10YR7-4・黄褐色5YR6-6	器面丸のため不明	器面丸のため不明	
R58	405	8B SK101	灰生土器	柳作広口壺	[1.160] ± 135 ⁺ α	精丸	良好	内：浅黄褐色10YR8-3・外：黄褐色10YR8-4	ミギキ	器底・丁寧なナテ	丹が散発的に残る口縁部片
	406	8B SK101	灰生土器	高杯	[1.164] ± 185 ⁺ α	精丸	良好	内外：赤褐色2.5YR5-6	ミギキ	杯底・ナテ後ミギキ・調整・ナテ	外面・杯内内面ナテ
	407	8B SK101	灰生土器	高杯	[1.204] ± 200 ⁺ α	精丸	良好	内外：赤褐色2.5YR5-8	ミギキ	杯底・ミギキ調整・ナテ	外面・杯内内面ナテ
	408	8B SK101	灰生土器	高杯	[1.267] ± 297 1.82	精丸	良好	内外：橙褐色5YR6-6	ナテ・調整面取り	ハケ後ナテ	内面・杯内内面ナテ
	409	8B SK101	灰生土器	高杯	[1.184] ± 285 3.68	石英・砂粒含む	良好	内外：淡黄褐色7.5YR8-6	口縁部ミギキ	杯底・ミギキ調整・ナテ	外面・杯内内面ナテ
	410	8B SK101	灰生土器	高杯	[1.150] ± α ± 187	砂粒少量・石英・雲母含む	良好	内外：橙褐色5YR7-6・外：赤褐色10Y8-8	ナギミギキ	器押さえ	外面片断・内面片断
	411	8B SK101	灰生土器	柳形甕	[1.118] ± 2138 3.62	石英・長石細粒含む・精丸	良好	内外：赤褐色2.5YR5-8	ミギキ	器押さえ	外面片断・内面口縁部片断・断面は厚くなる
	412	8B SK101	灰生土器	柳形甕	[1.150] ± 2163 3.90	精丸	良好	内外：黄褐色10YR7-2	ミギキ	器押さえ後丁寧なナテ	外面・口縁部内面ナテ
	413	8B SK101	灰生土器	柳形甕	[1.158] ± 2141 ⁺ α	微細な雲母含む	良好	内外：黄褐色10YR7-3	ヨコナテ後ナギミギキ	ハケ後ヨコミギキ	内面片断
	414	8B SK101	灰生土器	甕	[1.280] ± 130 ⁺ α	1.3mm砂粒混じる	良好	内：橙褐色5YR6-6・黄褐色7.5YR7-4・外：橙褐色5YR6-6	ナテハケ後ヨコナテ	器押さえ後ナテ	
415	8B SK101	灰生土器	甕	[1.280] ± α ± 107	1.3mm砂粒混じる	良好	内：橙5YR6-6・外：橙褐色5YR6-6・黄褐色7.5YR7-4	ナテハケ後ヨコナテ	器押さえ後ナテ		
416	8B SK101	灰生土器	甕	[1.308] ± 282 ⁺ α	精丸・1.3mm砂粒混じる	良好	内：黄褐色5YR6-6・外：黄褐色7.5YR7-6・外：黄褐色10YR7-3・黄褐色7.5YR7-6	器押さえ後ヨコナテ	ヨコナテ		
R60	417	8B SK101	灰生土器	甕	[1.290] ± 197 2.15.63 11.14	石英細粒含む	良好	内外：橙褐色5YR6-6	ナテハケ・器底はナテ	ナテ	
	418	8B SK101	灰生土器	甕	[1.290] ± 181.15 2.16.2.3 11.24	石英・長石含む	良好	内外：橙褐色5YR6-6・黄褐色7.5YR7-4	ナテハケ・器底はナテ	器押さえ後ナテ・器底はハケ後ナテ	
	419	8B SK101	灰生土器	甕	[1.290] ± 199.9 2.15.2.3 11.20	石英・砂粒含む	良好	内外：橙褐色5YR6-6	ナテハケ・器底はヨコハケ後ナテ	器押さえ後ナテ・器底はヨコハケ	
	420	8B SK101	灰生土器	甕	[1.290] ± 198.8 2.16.2.3 11.23	石英含む	良好	内外：橙褐色5YR7-6・黄褐色10YR7-4	ナテハケ・器底はナテ	器押さえ後ナテ・器底はヨコハケ	
	421	8B SK101	灰生土器	甕	[1.290] ± 199.9 2.16.3.3 11.14	石英細粒含む	良好	内外：黄褐色10YR7-4	ナテハケ・器底はヨコハケ後ナテ	器押さえ後ナテ	

図番 号	透視 番号	出土地・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm-g) ① 口部径 ② 高さ ③ 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
1050	422	8B SK101	灰生土器	器台	① 上部径107 ② 高さ33 ③ 重量11.6	石英・長石・砂粒含む	良好	内外：橙色75YR6-6S/RS-6	ナメハケ・底部はナメ	受部ナメ		
	423	8B SK101	灰生土器	器台	① 上部径113 ② 高さ37 ③ 重量13.4	石英・砂粒含む	良好	内外：橙色75YR7-6 鈍い 橙色75YR7-4	ナメハケ・底部はナメ	ヨコナテ・脚部はヨコハテ		
	424	8B SK101	灰生土器	器台	① 上部径1128 ② 高さ13 ③ 重量19.0	石英・長石・砂粒含む	良好	内外：灰白色10YR8-2 橙色5YR6-6	ナメハケ・底部はナメ	ナメ・底部はヨコハテ		
	425	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 242+α ② 3脚部径215	砂粒含む	良好	内外：明赤褐色5YR5-8	ニガキ	ヨコナテ	器底破片	
	426	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 258+α ② 3脚部径216	砂粒多く含む	良好	内外：橙色75YR7-6	ヨコナテ	ヨコナテ	外面丹の痕跡	
	427	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 341+α ② 3脚部径197	2mm砂粒多く含む	良好	内外：明赤褐色25YR6-8	ハケ目・ナメ残ミガキ	不明	外面丹	
	428	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 273+α ② 3脚部径134.6	石英多く含む	良好	内：橙色5YR6-6・外：橙 色5YR7-6	ナメミガキ	器押さえ残ナメ	外面丹	
	429	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 279+α ② 3脚部径139.7	精瓦	良好	内外：橙色75YR7-6	ナメミガキ	器押さえ残ナメ	外面丹	
	430	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 290+α ② 3脚部径135.8	精瓦	良好	内：橙色5YR6-6・外：明 赤褐色5YR5-8	ナメミガキ	器押さえ残ナメ	外面丹	
	1061	431	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 217+α ② 3脚部径92.9	微細砂粒・炭屑含む	良好	内：橙色5YR7-6・外：橙 色5YR6-6・外：明 赤褐色25YR4-8	ナメミガキ	器押さえ残ナメ	外面丹
		432	8B SK101	灰生土器	器台	① 230+α	精瓦	良好	内：明色75YR6-6・外： 明色25YR5-8 赤褐色 25YR4-8	ナメミガキ	器押さえ残ナメ	外面丹
		433	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 280+α ② 280	1mm砂粒含む	良好	内：淡褐色5YR8-4・外： 赤褐色25YR4-8	ナメミガキ・脚部 ヨコハテ	器押さえ残ナメ	外面丹
		434	8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 314② ③ 775+α	微細な砂粒を含む	良好	内：橙色5YR7-6・外：明 赤褐色25YR5-8	ナメミガキ	器押さえ残ナメ	外面丹 (器底下部は破片)
435		8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 314② ③ 425+α	極めて精瓦	良好	内：鈍い橙色75YR7-4・ 外：明赤褐色25YR5-8	ナメミガキ	器押さえ残ナメ	外面丹	
436		8B SK101	灰生土器	陶器器台	① 322+α ② 脚部径338	3mm程度砂粒含む	良好	内：鈍い橙色5YR7-4・外： 明赤褐色25YR4-6	ナメミガキ・脚部 ヨコハテ	器押さえ残ナメ ヨコハテ・脚部底部 コハテ	外面・底部内面に 中央まで丹塗 (器底 下部は破片)	
1062	437	8B SK101	灰生土器	陶器土器	① 266+α	白色砂粒含む	不貞	内：鈍い橙色75YR7-6 鈍 い黄褐色5YR6-3・外： 明赤褐色25YR5-8	ナメミガキ	器面残れのため 不明	外面丹	
	438	8B SK101	灰生土器	陶器土器	① 218+α	1.3mm砂粒・石英含む	不貞	内：淡黄褐色75YR8-6・ 外：明赤褐色25YR5-8 褐色25YR4-6	丁寧なニガキ	ナメ	外面丹	
	439	8B SK101	灰生土器	陶器土器	① 236+α	精瓦・微細炭屑含む	良好	内：鈍い橙色5YR6-4・外： 鈍い黄褐色5YR6-3・外： 橙色5YR6-8	丁寧なヨコナテ ミガキ	破瓦工具による 丁寧なナメ	外面丹 (工半部 のみ残片)	
1063	440	8B SK101	灰生土器	常備材 陶器器台	① 222② ③ 100+α	1.3mm砂粒多く含む	良好	内：明褐色75YR5-8・外： 橙色5YR6-8	ナメハケ	ナメ	① 縁部直下に染 色	
	441	8B SK101	灰生土器	常備材 陶器器台	① 217② ③ 119+α	2mm前後砂粒多く含む	良好	内：明黄褐色10YR6-6・ 外：橙色5YR7-8	ナメハケ	ナメ	器面残れのため 不明・一部 破片	
	442	8B SK101	灰生土器	常備材 陶器器台	① 227② ③ 60+α	1.3mm砂粒多く含む	良好	内：橙色75YR6-6・外： 鈍い橙色75YR6-4	ナメハケ	ナメ	器面残れのため 不明	
	443	8B SK101	灰生土器	常備材 陶器器台	① 実部径 338② 282+α	2-4mm砂粒多く含む	良好	内：鈍い黄褐色10YR6-4・ 外：鈍い黄褐色10YR7-4	ナメハケ	ナメ	器面残れのため 不明	
	444	8B SK101	灰生土器	変植	① 225+α	1.5mm砂粒含む	良好	内外：明赤褐色5YR5-8	ヨコナテ	ヨコナテ	外面・口縁部上面 丹塗	
	445	8B SK101	灰生土器	変植	① 297+α	1.5mm砂粒含む	良好	内：橙色5YR7-6 褐色 5YR5-1・外：淡黄褐色 10YR8-6 褐色10YR8-1	ヨコナテ	ヨコナテ		
	446	8B SK101	灰生土器	変植	① 230+α	粗砂粒含む	良好	内：橙色5YR7-6・外： 鈍い黄褐色10YR6-6 5YR7-6	ヨコナテ	ヨコナテ		
447	8B SK101	灰生土器	変植	① 253+α	粗砂粒含む	良好	内：橙色5YR7-6・外： 鈍い黄褐色10YR7-4	ヨコナテ	ヨコナテ			
448	8B SK101	灰生土器	変植	① 251+α	1.3mm砂粒含む	良好	内：橙色5YR7-6・外： 鈍い黄褐色75YR7-4	ヨコナテ	ヨコナテ			
449	8B SK101	灰生土器	変植	① 247+α	1.3mm砂粒含む	良好	内：橙色75YR7-6・外： 鈍い黄褐色75YR7-4	ヨコナテ	ヨコナテ			
1064	450	8B SK101	灰生土器	変植	① 96.0② ③ 41+α	1.3mm砂粒含む	良好	内：灰褐色75YR5-2・外： 橙色5YR6-6 鈍い橙 色75YR7-3	ヨコナテ	ヨコナテ		
	451	8B SK101	灰生土器	変植	① 92.0② ③ 80+α	1.3mm砂粒含む	良好	内：橙色5YR6-6 明赤褐色 5YR5-8・外：明赤褐色 5YR5-8 鈍い黄褐色 10YR7-4	ヨコナテ	ヨコナテ		
1065	452	8B SK101	灰生土器	変植	① 77.2② ③ 129+α	1.5mm砂粒含む	良好	内：橙色5YR7-6・外： 橙色75YR7-6/25YR6-6	ヨコナテ	ヨコナテ		
453	8B SK101	灰生土器	変植	① 33.0② ③ 38+α	1.5mm砂粒含む	良好	内外：橙色75YR6-6	ヨコナテ	ヨコナテ			
454	8B SK101	灰生土器	変植	① 34.0② ③ 82+α	2mm砂粒含む	良好	内外：橙色5YR6-6	ナメ	丁寧なナメ			
455	8B SK101	灰生土器	変植	① 31.0② ③ 51.3/15.0	粗砂粒含む	良好	内：橙色5YR7-6・外： 橙色5YR7-6	ヨコナテ	ヨコナテ	器面残れのため 不明		
456	8B SK101	灰生土器	変植	① 40.1② ③ 51+α	1.5mm砂粒含む	良好	内外：明赤褐色5YR5-6	ヨコナテ	ヨコナテ			
457	8B SK101	灰生土器	変植	① 39.4② ③ 126+α	1.3mm砂粒含む	良好	内：明赤褐色5YR5-6・外： 橙色5YR6-6	ヨコナテ	ヨコナテ			

図番 号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量(m ² g) [1]寸法(高さ ・口径) ・重量	胎土	構成	色調	調整(外面)	調整(内面)	備考	
366	458	8B SK101	弥生土器	横楕	① 92.0 ② 139+α	1.5mm砂粒を含む	良好	内・橙色5YR6/8・外・橙 色5YR6/6・黄い・橙 色7.5YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ		
	459	8B SK101	弥生土器	横楕	① 42.0 ② (65.0)・③102	黄白・砂粒を少量含む	良好	内・橙色7.5YR7/6・黄褐色 色10YR7/4・外・橙 色7.5YR7/6・橙色2.5YR6/6	ナデ	ナデ		
	460	8B SK101	弥生土器	横楕	① 42.8 ② 112+α	1.3mm砂粒を含む	良好	内・明赤褐色5YR5/8	口縁部ヨコナデ・胴 部ハナデ	ヨコナデ		
	461	8B SK101	弥生土器	横楕	① 56.4 ② 182+α	2.3mm砂粒多く含む	良好	内外・黄い・橙色7.5YR7/4・ 外・黄い・橙色2.5YR6/4	ナデ	ヨコナデ		
	462	8B SK101	弥生土器	底皿	① 23.7+α ② 11.0	1.3mm砂粒多く含む	良好	内外・黄褐色5YR7/4・ 外・黄い・黄褐色10YR7/4・ 橙色7.5YR7/6	ナデ	ナデ		
	463	8B SK101	弥生土器	瓢箪形 土器	① 21.3+α ② 8.5	精良	良好	内・黄褐色、外・浅黄褐色 色	ナデミガキ	ナデ	外面丹塗	
	464	8B SK101	弥生土器	柳形盃	① 2.5+α ② 1.0	1mm砂粒を含む	良好	内・黄い・橙色7.5YR7/4・ 外・黄い・黄褐色10YR7/3	器面磨のため不明	ナデ		
	465	8B SK101	弥生土器	支脚	① 支脚径8.2 ② 12.6 ③ 脚底 径8.8	1mm砂粒を含む	良好	内・橙色5YR6/6・外・橙 色7.5YR6/8	曲押さえ・ナデ	曲押さえ・ナ デ		
	466	8B SK101	土製品	紡錘車	① 9.3 ② 3.7 ③ 大径1.6	3mm砂粒を含む	良好		ナデ			
	467	8B SK101	土製品	紡錘車	① 9.6 ② 3.7 ③ 大径1.4	1.2mm砂粒を含む	良好		ナデ			
	468	8B SK101	土製品	土製均 土	① 寸法10.2 ② 11.1 ③ 重量 5.2							
	469	8B SK101	土製品	夜筒	① 寸法4.65 ② ③ 19.5 ④ 重量 25.1							
368	470	8B SK101	石器	石剣	① 残存長7.3 +α ② 最大幅 3.8 ③ 最大厚 1.8 ④ 重量 696						輝緑輝石	
	471	8B SK101	石器	石剣	① 残存長11.0 +α ② 最大幅 3.7 ③ 最大厚 1.5 ④ 重量 681						輝緑輝石	
	472	8B SK101	石器	柱状片 刃石斧	① 残存長7.7 +α ② 最大幅 2.7 ③ 最大厚 3.4 ④ 重量 127.0						輝緑輝石?	
	473	8B SK101	石器	薄切片	① 最大長2.5 ② 最大幅4.4 ③ 最大厚0.9 ④ 重量7.3							
	474	8C SK103	弥生土器	甕	① 24.0 ② 1.6+α	細砂粒をわずかに含む	真	内外・黄褐色10YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ		
369	475	8C SK103	弥生土器	甕	① 36.0 ② 6.5+α	砂粒を多く含む	真	内・浅黄褐色10YR8/4・ 外・浅黄褐色10YR8/3	ヨコナデ	ヨコナデ		
	476	8C SK103	弥生土器	甕	① 39+α ② (6.8)	砂粒を多く含む	真	内外・浅黄褐色7.5YR8/4	ハケ目	器面磨れにより 調整不明		
	477	8C SK103	弥生土器	短頸甕	① 14.0 ② 2.0+α	細砂粒を含む	真	内外・橙色7.5YR7/6	ヨコナデ	ヨコナデ		
	478	8C SK103	弥生土器	高杯	① 25.6 ② (8.4)	顕石黄粒及び長石粒を多く 含む	真	内外・明赤褐色5YR5/8	磨滅により調整不明	磨滅により調整 不明	内外丹塗り	
	479	8C SK103	弥生土器	甕	① 27+α ② (8.4)	砂粒を多く含む	真	内・橙色5YR7/6・外・橙 色5YR7/8	磨滅により調整不明	曲押さえ		
	480	8C SK103	弥生土器	甕	① 30.0	精良	真	内外・明赤褐色5YR5/8	ミガキ	ハケ後ナデ	外面丹塗り	
	481	8C SK104	弥生土器	甕	① 24.5+α	精良	真	内外・黄褐色10YR7/4・ 外・黄い・黄褐色10YR5/4	ヨコナデ	ミガキ		
	482	8C SK104	弥生土器	甕	① 23.8+α ② 10.0	顕石黄粒及び磨滅して微細な 金雲母を含む	真	内外・黄褐色10YR7/4・ 外・明赤褐色5YR5/8	磨滅により調整不明	磨滅により調整 不明		
	483	8C SK104	弥生土器	甕	① 23.0+α	砂粒及び微細な金雲母を多 く含む	真	内外・黄い・橙色7.5YR6/4	ヨコナデ	ナデ		
	484	8C SK104	弥生土器	甕	① 22.5+α	細砂粒を含む	真	内外・橙色7.5YR7/6	ナデ	ヨコナデ	内面丹塗り	
370	485	8C SK104	弥生土器	甕	① 21.8+α	金雲母及び長石粒をわずかに 含む	真	内・黄い・黄褐色10YR7/4・ 外・黄い・黄褐色10YR5/3	板ナデ	丁家々ナデ		
	486	8C SK104	弥生土器	甕	① 21.7+α	顕石黄粒及び微細な金雲母を 含む	真	内外・黄褐色10YR7/3	ヨコナデ	磨滅により調整 不明		
	487	8C SK104	弥生土器	甕	① 27.6 ② 3.5+α	顕石黄粒を多く含む	真	内外・橙色7.5YR 7/6	ハケ目	調整不明		
	488	8C SK104	弥生土器	小形変 形付甕	① 24+α	砂粒をやや多く含む	真	内外・橙色7.5YR 7/6	ヨコナデ	磨滅により調整 不明		
	489	8C SK104	弥生土器	甕	① 21.4+α	顕石黄粒及び砂粒を含む	真	内外・橙色5YR7/6	磨滅により調整不明	磨滅により調整 不明		
	490	8C SK104	弥生土器	甕	① 25.8+α ② 6.8	金雲母及び微細な白色粒を わずかに含む	真	内・黄い・黄褐色10YR7/3・ 外・明赤褐色5YR5/8	ミガキ	曲押さえ後ナ デ	外面丹塗り	
	491	8C SK105	弥生土器	甕	① 29.2+α ② (5.1)	細砂粒を多く含む	真	内外・黄褐色10YR5/1	ナデハケ後ナデ	ナデ		
	492	8C SK105	弥生土器	甕	① 21+α	顕石黄粒及び磨滅して微細な金 雲母を含む	真	内外・橙色7.5YR7/6	板ナデ	ヨコナデ		
	493	8C SK105	弥生土器	甕	① 24.2+α	砂粒及び磨滅して微細な金雲 母を含む	真	内・橙色5YR 6/6・外・浅 黄褐色10YR8/3	丁家々ヨコナデ	磨滅により調整 不明		

図番 番号	出土地・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm・g) [1] 口径・高さ ② 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
R072	494	SK106	灰土器	甕	① (31.0) ② 3.5+α	黒石黄粒及び灰石粒を多く含む	真	内外：橙色5YR7/8	ヨコナデ	ヨコナデ	
	495	SK106	灰土器高坏	高坏	①14+α	黒石黄粒及び灰石粒を多く含む	軟真	内外：赤褐色5YR8/4	管減により調整不明	管減により調整不明	外面丹塗り
R074	496	8D SK107	灰土器	甕	① (26.6) ② 0.5+α	細砂粒を多く含む	真	内外：橙色5YR7/8	ハケ後ナデ	捺押さえ後ナデ	
	497	8E SK201	灰土器	甕	②23+α	細砂粒をわずかに含む	真	内外：橙色5YR7/6	ミガキ	ナデ	外面丹塗り・刷目
R076	498	8E SK201	灰土器	甕	②33+α	細砂粒をわずかに含む	真	内：黄い橙色7.5YR7/3 外：洗黄褐色2.5YR8/4	ナデ	ナデ	
	499	8E SK201	灰土器	甕	① (20.0) ② 3.5+α	砂粒をわずかに含む	真	内：黄い橙色7.5YR7/4・外： 黄い橙色7.5YR7/4	チタハケ	捺押さえ後ナデ	
R077	500	8E SK201	灰土器	甕	① (25.0) ② 4.5+α	砂粒をわずかに含む	真	内外：暗赤褐色5YR3/6	ミガキ	ミガキ	内外丹塗り・刷目 文の刷目
	501	8E SK202	灰土器	甕	②43+α	白色粒を含む	真	内：明褐色7.5YR5/8・外： 橙褐色5YR6/6	ハケ目	ナデ	
R079	502	8E SK202	灰土器	甕	②46+α	白色粒を多く含む	真	内外：暗赤褐色5YR5/8	ナデ	ヨコナデ	
	503	8E SK202	灰土器	甕	②27+α	白色粒を多く含む	真	内外：洗黄褐色7.5YR8/4	管減により調整不明	ミガキ	外面丹が残る
R079	504	9C SK405	灰土器	甕	②17+α	精真	真	内外：黄い橙褐色7.5YR7/4	板ナデ	ナデ	外面通過
	505	9C SK405	灰土器	甕	②21+α	細砂粒を多く含む	真	内外：橙色5YR7/6	ナデ	ナデ	
R079	506	9C SK405	灰土器	甕	②22+α	細砂粒を多く含む	真	内：橙褐色5YR6/8・外：橙 褐色5YR7/6	ナデ	ナデ	
	507	9C SK405	灰土器	甕	②16+α	精真	真	内：黄い橙褐色7.5YR8/4 外：黄い橙褐色7.5YR7/4	ナデ	ナデ	
R079	508	9C SK405	灰土器	甕	②25+α	微細な白色粒を含む	真	内：黄い橙褐色7.5YR5/4 外：黄い橙褐色7.5YR5/4	ナデ	捺押さえ後ナデ	
	509	9C SK405	灰土器	甕	②30+α	微細な石黄粒を含む	真	内：洗黄褐色10YR8/4 外：洗黄褐色5YR8/4	ハケ後ナデ目し	丁寧ナデ	
R079	510	9C SK405	灰土器	甕	②33+α	精真	真	内外：橙褐色7.5YR7/6	ナデ	捺押さえ後ナデ	外面縦線
	511	9C SK405	灰土器	甕	②45+α	細砂粒を多く含む	真	内外：橙褐色7.5YR6/6	チタハケ	丁寧なヨコナデ	
R079	512	9C SK405	灰土器	甕	②43+α	砂粒を多く含む	真	内：橙褐色5YR7/8・外：橙 褐色5YR8/6	ナデ	捺押さえ後ナデ	
	513	9C SK405	灰土器	甕	②18+α	砂粒を含む	真	内：黄い橙褐色7.5YR5/3 外：黄い橙褐色7.5YR7/4	ナデ	ナデ	
R079	514	9C SK405	灰土器	甕	① (30.6) ② 7.0+α	細砂粒及び極めて微細な金 部を含む	真	内：橙褐色5YR7/6・外：黄 い黄褐色10YR7/4	チタハケ	捺押さえ後ナデ	
	515	9C SK405	灰土器	甕	① (30.8) ② 8.0+α	砂粒及び石黄粒を含む	真	内外：橙褐色7.5YR7/6	チタハケ	捺押さえ後ナデ	
R079	516	9C SK405	灰土器	甕	②33+α	精真	真	内：黄い橙褐色7.5YR7/4 外：橙褐色5YR6/6	チタハケ	ナデ	
	517	9C SK405	灰土器	甕	① (24.6) ② 10.7+α	砂粒を含む	真	内外：洗黄褐色7.5YR8/3	管減により調整不明	ハケ後ナデ	外面丹が残る
R081	518	9C SK405	灰土器	広口甕	②63+α	精真	真	内外：橙褐色7.5YR7/6・外： 橙褐色7.5YR6/6	ナデ	捺押さえ後ナデ	
	519	9C SK305	灰土器	甕	① (28.4) ② 11.2+α	精真	真	内：橙褐色7.5YR7/6・外： 黄い黄褐色10YR7/4	一部ハケ目	一部ハケ目	内面通過
R081	520	9C SK305	灰土器	甕	②46+α	細砂粒を含む	真	内外：黄い黄褐色10YR8/4	ハケ目	ハケ目	内面通過
	521	9C SK305	灰土器	甕	②43+α③ 1.26	大粒の砂粒を多く含む	真	内外：黄い橙褐色5YR6/4	ハケナズリ	調整	
R081	522	9C SK305	灰土器	甕	②35+α③ (86)	大粒の砂粒を多く含む	真	内：橙褐色7.5YR6/6・外： 黄い橙褐色7.5YR7/4	チタハケ	ヨコナデ	
	523	9C SK305	灰土器	甕	① (43.4) ② 17.3+α	細砂粒を多く含む	真	内：黄い黄褐色10YR7/4 外：洗黄褐色2.5YR8/6	ハケ後ヨコナデ	丁寧ナデ	外面丹塗り
R081	524	9C SK305	灰土器	甕	②28+α③ 0.9	精真	真	内：灰褐色10YR4/1・外： 黄い橙褐色7.5YR7/4	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	
	525	9C SK305	灰土器	甕	① (36.8) ② 3.4+α	砂粒を含む	真	内：黄い黄褐色10YR8/3 外：黄い黄褐色10YR7/3	丁寧ナデ	丁寧ナデ	口縁部刷目
R082	526	9C SK305	灰土器	甕	① (24.9) ② 1.26+α	細砂粒を多く含む	真	内外：橙褐色5YR7/6	ナデ	ナデ	外面刷目
	527	9C SK305	灰土器	甕	②7.5+α③ (84)	大粒の砂粒を多く含む	真	内：橙褐色5YR6/6・外：暗 赤褐色2.5YR5/6	ナデ	ミガキ	外面丹塗り
R082	528	9C SK305	石器	大形輪 刃石斧	①輪厚9.25 +α②最大幅 7.9③最大厚 4.3④重量 17.1	微細な石黄粒及び金部を含む	真	内：橙褐色5YR7/6・外：黄 い橙褐色7.5YR7/4	ハケ目	器面彫れにより調整不明	
	529	9D SK413	灰土器	高坏	②38+α③ 1.00	微細な石黄粒及び金部を含む	真	内：橙褐色5YR7/6・外：黄 い橙褐色7.5YR7/4	ハケ目	器面彫れにより調整不明	
R082	530	9D SK413	灰土器	甕	②42+α	砂粒を含む	真	内外：灰白色2.5YR8/2	ミガキ	ミガキ	内面丹が残る
	531	9D SK413	灰土器	甕	②93+α	石黄粒及び灰石を含む	真	内外：洗黄褐色10YR8/3	ハケ目	ハケ後ナデ	刷目目取
R082	532	9D SK413	灰土器	瓦甕	②40+α	石黄粒及び灰石を含む	真	内：洗黄褐色10YR8/4・外： 洗黄褐色10YR8/3	チタハケナデ	捺押さえ	
	533	9D SK413	灰土器	甕	②44+α	石黄粒及び金部を含む	真	内外：淡黄褐色2.5Y 8/3	ヨコナデ	ナデ	外面工具痕
R082	534	9D SK413	灰土器	甕	① (46.0) ② 4.9+α	砂粒を含む	真	内：橙褐色5YR7/8・外：橙 褐色5YR7/6	ヨコナデ	ヨコナデ	
	535	9D SK414	灰土器	甕	②42+α	砂粒を含む	真	内：淡赤褐色2.5YR7/3・ 外：暗赤褐色2.5YR5/6	ミガキ	捺押さえ	内面丹塗り

図番	遺物番号	出土地点・遺構等	種類	器種	法量 (cm-g) ①: 長さ ②: 幅 ③: 高さ ④: 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
B08	536	9D SK414	灰生土器	甕	2.63+α③ (90)	大粒の砂粒を含む	真	内: 鈍い褐色5YR5/4・外: 明赤褐色2.5YR5/6	磨滅により調整不明	ナデ		
	537	9D SK414	灰生土器	甕	2.43+α	石炭粒を含む	真	内: 浅黄褐色10YR8/4・外: 明赤褐色5YR5/8	ミガキ	指押さえ	外面丹塗り	
	538	9D SK414	灰生土器	甕	2.43+α③ (60)	微細な石炭粒を含む	真	内外: 暗褐色5YR 7/6	ミガキ	ナデ	外面丹塗り	
	539	9D SK414	灰生土器	高杯	2.33+α	やや大粒の石炭粒を含む	真	内外: 明赤褐色5YR 5/8	ナデ	ナデ	内外丹塗り	
	540	9D SK414	灰生土器	高杯	2.73+α	微細な砂粒を含む	真	内外: 明赤褐色5YR 5/6	ミガキ	ミガキ	内外丹塗り	
	541	9D SK414	灰生土器	指輪器台	2.43+α③ (40)	砂粒を含む	真	内: 明赤褐色5YR5/6・外: 鈍い褐色5YR7/3	ナデ	ヨコナデ		
	542	9D SK414	灰生土器	器台	2.69+α③ (150)	砂粒を含む	真	内: 暗褐色5YR7/6・外: 鈍い黄褐色7.5YR7/6	ハケ目	ハケ目		
	543	9D SK414	石器	太郎輪 万石磨	①: 残存長122 +α②: 最大幅 5.83③: 最大厚 3.5+α④: 重量 11							緑色釉
	544	9D SK415	灰生土器	甕	2.7②: 25.0③ (49)	微細な石炭粒を含む	真	内: 暗褐色5YR 7/6・外: 暗褐色5YR 7/6	磨滅により調整不明	ナデ		
	545	9D SK415	灰生土器	甕	①: 30.0③ (6.5+α)	砂粒を含む	真	内: 鈍い褐色7.5YR7/4・外: 鈍い褐色7.5YR 7/3	ハケ後ヨコナデ	ハケ後ナデ		
	546	9D SK415	灰生土器	甕	①: 33.0③ (8.5+α)	砂粒を含む	真	内: 鈍い褐色7.5YR7/3・外: 暗褐色7.5YR7/6	タテハケ	ナデ	一部月が残る	
	547	9D SK415	灰生土器	甕	2.67+α② (4.65+α)	石炭粒を含む	真	内: 灰白色10YR8/2・外: 浅黄褐色7.5YR8/3	タテハケ	指押さえ後ナデ		
	548	9D SK415	灰生土器	甕	①: 40.0③ (10.5+α)	砂粒を含む	真	内: 灰白色10YR8/2・外: 鈍い黄褐色10YR 7/2	ナデ	ナデ		
	549	9D SK415	灰生土器	甕	2.72+α	石炭粒を含む	真	内外: 暗褐色5YR 7/8	タテハケ	ナデ		
550	9D SK415	灰生土器	甕	2.58+α③ (7.8)	石炭粒を含む	真	内外: 暗褐色5YR 7/6	ハケ後ナデ	指押さえ後ナデ	外底面版状圧痕・穿孔		
551	9D SK415	灰生土器	器台	2.77+α③ (120)	砂粒を含む	真	内: 鈍い褐色7.5YR 7/4・外: 暗褐色7.5YR7/6	タテハケ	ナデ			
552	9D SK415	石器	打製石 器	①: 中央孔3.0② 最大幅1.9③ 最大厚0.35④ 重量1.3							黒曜石	
553	9D SK415	石器	磨製石 器	①: 残存長7.9 最大幅4.0 最大厚1.2 重量46.3							緑色釉	
B08	554	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.48+α	石炭粒及び金器母・長石粉を含む	真	内外: 暗褐色7.5YR6/6	ヨコナデ	ナデ		
	555	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.50+α	石炭粒を多く含む	真	内: 鈍い黄褐色10YR6/3・外: 暗褐色7.5YR6/6	ヨコナデ	指押さえ後ナデ		
	556	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.56+α	石炭粒及び金器母を含む	真	内: 鈍い黄褐色7.5YR6/4・外: 暗褐色7.5YR6/6	ハケ目	指押さえ後ナデ		
	557	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.73+α	砂粒及び石炭粒をやや多く含む	真	内: 暗褐色5YR 7/8・外: 暗褐色5YR 7/6	ナデ	横ハケ		
	558	10C SK408上中層	灰生土器	甕	①: 28.0③ (17.5+α)	細砂粒を多く含む	真	内: 鈍い黄褐色10YR6/3・外: 鈍い黄褐色10YR5/3	ハケ目	ケズリ後ナデ		
	559	10C SK408上中層	灰生土器	甕	①: 35.0③ (3.8+α)	石炭粒及び長石粉をわずかに含む	真	内外: 暗褐色5YR6/8	タテハケ後ヨコナデ	横ナデ		
	560	10C SK408上中層	灰生土器	甕	①: 44.0③ (8.8+α)	細砂粒及び石炭粒を含む	真	内外: 浅黄褐色10YR8/3	タテハケ後ナデ磨し	一部横ハケ		
	561	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.50+α③ (7.3)	石炭粒を含む	真	内: 鈍い褐色5YR 7/3・外: 暗褐色5YR6/6	ハケ後ナデ	ナデ		
	562	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.57+α③ (7.6)	微細な石炭粒及び長石粉を含む	真	内: 暗褐色5YR6/8・外: 鈍い黄褐色7.5YR7/3	ハケ後ナデ	ナデ		
	563	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.54+α③ (7.0)	精細	真	内: 黄灰色2.5YR6/1・外: 暗褐色5YR6/6	ミガキ	磨滅により調整不明	外面丹塗り	
	564	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.17+α③ (2.6)	微細な石炭粒を含む	真	内: 暗褐色5YR6/6・外: 明赤褐色2.5YR5/8	ミガキ	ナデ	外面丹塗り	
	565	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.78+α③ (11.2)	石炭粒・長石粉及び金器母をわずかに含む	真	内: 灰白色10YR7/3・外: 鈍い黄褐色10YR7/3	タテハケ後ナデ磨し	指押さえ後ナデ	内面一部工具痕	
	B09	566	10C SK408上中層	灰生土器	甕	①: 25.6③ (4.8+α)	精細	真	内: 鈍い褐色7.5YR7/4・外: 明赤褐色2.5YR5/8	ミガキ	タテキ	外面丹塗り・穿孔1
		567	10C SK408上中層	灰生土器	甕	2.21±13.0	石炭粒及び金器母を含む	真	内: 暗褐色7.5YR7/6・外: 暗褐色5YR6/6	ミガキ	磨滅により調整不明	外面丹塗り・穿孔1
568		10C SK408上中層	灰生土器	甕	①: 22.2③ (300+α)	極めて微細な金器母及び細砂粒・細石炭粒を含む	真	内外: 暗褐色7.5YR7/6	ハケ後ナデ	ハケ目	外面一部月が残る	

図番 番号	造形 番号	出土地・ 遺積等	種類	器種	法量 (cm-g) [1.1] 標準式高 3 底径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
100	569	IC SK408上中層	赤土土器	壺	②58+α	石瓦粒及び灰石粒を含む	真	内外: 橙色75YR7/6	磨研さへ後丁寧ナデ	磨研さへ後丁寧ナデ	外面工具痕	
	570	IC SK408上中層	赤土土器	高杯・ 壺?	②30+α	石瓦粒・灰石粒及び雲母 石	真	内外: 橙色5YR6/6	磨研さへ後ナデ	ナデ	一部が欠ける	
	571	IC SK408上中層	赤土土器	壺	①21.5②3.5+ α	石瓦粒を含む	真	内: 黄い 橙色75YR7/3・ 外: 橙色5YR7/6	ナデ	ナデ		
	572	IC SK408上中層	赤土土器	瓶類①	① [14.3] ② 1.8+α	石瓦粒を含む	真	内: 橙色5YR6/6・外: 明 赤黄色2.5YR5/6	丁寧なヨコナデ	ナデ	外面丹塗り・跡み 目突	
	573	IC SK408上中層	赤土土器	①腰形 ②筒形 ③白	①腰形部 (2.5) ②4.4+ α	精細	真	内: 浅黄 橙色10YR8/3 外: 明赤黄色2.5YR5/8	磨文風ニガキ	磨研さへ後ナ デ	外面丹塗り・跡み 目突	
	574	IC SK408上中層	赤土土器	石瓶丁	①腰形部6.3 +α②最大幅 5.3③底径 0.7④重量392							赤褐色泥岩
	575	IC SK408上中層	赤土土器	石瓶丁	①腰形部6.5 +α②最大幅 5.4③最大 0.7④重量367							黄褐色ホルンフ ムス
	576	IC SK408下層	赤土土器	壺	①20.4②7+ α	微細な石瓦粒を含む	真	内外: 黄い 橙色75YR7/4	テナハ後ナデ消し	ナデ消し		
	577	IC SK408下層	赤土土器	壺	①20.0②4.2+ α	石瓦粒を含む	真	内外: 橙色2.5YR6/6	ナデ	ナデ		内外化粧土
	578	IC SK408下層	赤土土器	壺	①35.2②5.5+ α	石瓦粒を含む	真	内: 橙色5YR7/6・外: 橙 色2.5YR6/6	ナデ	磨研さへ後ナ デ		
579	IC SK408下層	赤土土器	壺	①36.8②6.2+ α	石瓦粒をわずかに含む	真	内: 灰黄 色7.5YR5/2・外 黄い 赤黄色5YR5/4	テナハ	磨研さへ後ナ デ			
580	IC SK408下層	赤土土器	高杯	②2.2+α	石瓦粒及び灰石粒を含む	真	内: 明赤黄色5YR5/6・外: 浅黄褐色7.5YR6/4	磨滅により調整不明	ヨコナデ		丹が残る	
581	IC SK408下層	赤土土器	蓋	②2.6+α③底 径1.8	精細	真	内: 黄い 橙色75YR7/4・ 外: 明赤黄色2.5YR5/8	ナデ	磨滅により調 整不明		内面丹・穿孔?	
582	IC SK408下層	赤土土器	蓋	②28+α	細石瓦粒を含む	真	内: 黄い 橙色75YR7/4・ 外: 明赤黄色2.5YR5/8	ニガキ	磨研さへ		外面丹塗り	
583	IC SK408下層	赤土土器	壺	①16.6②3.0+ α	微細な砂粒を含む	真	内外: 明赤黄色2.5YR5/6	ニガキ	ハケ目後ナデ		外面丹塗り	
584	IC SK408下層	赤土土器	壺	①32.0②4.0+ α	微細な砂粒を含む	真	内: 橙色5YR5/6・外: 黄 い 赤黄色7.5Y5/4	ニガキ	ヨコナデ			
585	IC SK408下層	赤土土器	壺	① [30.8] ② 1.25+α	精細	真	内: 黄い 橙色75YR6/4・ 外: 明赤黄色2.5YR5/8	磨文風ニガキ	一部欠ナ		口縁部跡目	
586	IC SK408下層	赤土土器	壺	②3.5+α③ (7.2)	微細な砂粒を含む	真	内外: 赤黄色2.5YR4/8	ニガキ	ハケ目後ナデ		外面丹塗り	
587	IC SK408下層	赤土土器	壺	②6.0+α③ (7.0)	微細な石瓦粒を含む	真	内: 橙色5YR7/6・外: 赤 褐色2.5YR4/6	ニガキ	ナデ		外面丹塗り	
588	IC SK408下層	赤土土器	壺	②5.3+α③ (12.8)	砂粒をやや多く含む	真	内: 橙色2.5YR6/6・外: 明赤黄色5YR5/8	テナハナ	ヨコナデ			
589	IC SK408下層	赤土土器	壺	②5.5+α③ (12.2)	石瓦粒を含む	真	内外: 黄い 橙色5YR7/4	テナハ	ハケ目			
590	IC SK408下層	赤土土器	壺	②7.3+α③ (11.8)	石瓦粒及び灰石粒を含む	真	内外: 黄い 橙色75YR7/4	テナハ	ナデ			
591	IC SK408下層	赤土土器	壺	① [48.8] ② 8.8+α	石瓦粒を含む	真	内: 橙色5YR7/8・外: 橙 色2.5YR7/6	ナデ	磨研さへ			
102	592	IC SK409	赤土土器	壺	②5.4+α	微細な石瓦粒を含む	真	内: 橙色5YR6/6・外: 橙 色2.5YR6/6	ナデ	ナデ		
	593	IC SK409	赤土土器	壺	②5.5+α	石瓦粒を含む	真	内外: 橙色2.5YR6/8	ナデ	ナデ		
	594	IC SK409	赤土土器	壺	②7.5+α	石瓦粒を含む	真	内: 橙色5YR7/6・外: 赤褐色2.5YR4/8	ナデ	ナデ		外面丹塗り
	595	IC SK420	赤土土器	壺	②3.7+α	微細な石瓦粒及び灰石粒・ 金雲母を含む	真	内外: 黄い 赤黄色10YR7/3	ヨコナデ	ニガキ		
103	596	IC SK420	赤土土器	壺	②4.3+α③ (6.2)	石瓦粒を含む	真	内: 浅黄 色10YR8/4・ 外: 明赤黄色5YR5/6	磨研さへ	磨滅により調 整不明		外面丹塗り・工具 痕
	597	IC SK420	赤土土器	脚盤	②3.8+α③ (7.4)	砂粒をわずかに含む	真	内: 黄い 赤黄色10YR7/2・ 外: 灰黄褐色10YR6/2	ナデ	ナデ		
	598	IC SK420	赤土土器	壺	②1.20+α③ (7.4)	細砂粒及び石瓦粒をわず かに含む	真	内外: 黄い 赤黄色10YR7/3	テナハ	ナデ		内面工具痕
	599	IC SK420	赤土土器	壺	②11.5+α③ (8.0)	細砂粒及び極めて微細な 雲母をわずかに含む	真	内: 灰白色5YR7/2・外: 黄い 赤黄色10YR7/3	ハケ目	磨滅により調 整不明		内面工具痕
	600	IC SK420	赤土土器	壺	②11.3+α	精製	真	内: 明黄 色10YR8/3 外: 黄い 赤黄色10YR7/3	テナハ	ハケ目後ナ デ消し		
	601	IC SK425	赤土土器	壺	① [23.0] ② 11.8+α	細砂粒を多く含む	真	内: 橙色5YR7/6・外: 黄褐色7.5YR4/8	テナハ	ナデ		
	602	IC SK425	赤土土器	壺	① [31.0] ② 2.8+α	砂粒を多く含む	真	内: 橙色2.5YR6/6・外: 黄褐色5YR6/8	ナデ	ナデ		
603	IC SK425	赤土土器	壺	① [29.4] ② 3.08+α	微細な砂粒及び石瓦粒を 含む	真	内: 灰黄色2.5Y7/2・外: 黄い 赤黄色10YR7/3	テナハ	ナデ		磨研さへ後ナ デ	内面工具痕
604	IC SK425	赤土土器	壺	① [27.0] ② 1.57+α	細砂粒及び微細な金雲母 を含む	真	内外: 灰白色10YR8/2	テナハ	ナデ		内面工具痕	
605	IC SK425	赤土土器	壺	① [31.2] ② 7.8+α③7.8	細砂粒をわずかに含む	真	内外: 浅黄褐色2.5YR6/3	ハケ目	磨研さへ後ナ デ		内面工具痕	
606	IC SK425	赤土土器	壺	②18.0+α③ 6.6	極めて微細な白色粒をわ ずかに含む	真	内: 浅黄 色2.5YR8/3・ 外: 黄褐色2.5YR8/4	ハケ目			表面荒れによる 調整不明	表面土跡目調整
607	IC SK425	赤土土器	壺	②7.0+α③ 7.0	細砂粒をわずかに含む	真	内外: 黄い 赤黄色10YR7/3	テナハ	ナデ		磨滅により調 整不明	内面工具痕

図番	遺物番号	出土地点・遺構等	種類	器種	法量 (cm) ³ (1/1000の容積) ③底径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
R97	608	10E SK425	灰土土器	甗	277+α③	細砂粒及び石英粒を含む	真	内・赤褐色10YR6/6・外褐色5YR6/6	器面見れにより調整不明	器面見れにより調整不明	
	609	9F SK428	灰土土器	甗	280+α	砂粒を多く含む	真	内・黄い褐色7.5YR6/3・外・黄褐色7.5YR7/3	器底により調整不明	器押さえ後ナデ	積み目
	610	9F SK428	灰土土器	甗	273+α③	細石炭粒を多く含む	真	内・黄褐色5YR7/6・外・褐色5YR6/6	器面見れにより調整不明	器押さえ後ナデ	外面通過痕
	611	9F SK428	灰土土器	甗	1325±1 143±α	細砂粒及び微細な金雲母・長石粒をわずかに含む	真	内・黄い黄褐色10YR7/3・外・黄褐色7.5YR7/4	縮み風文ノギキ	1ノギキ	片が残る
R99	612	9F SK429	灰土土器	支脚	1290±164 243+α	白色粒及び微細な長石粒・金雲母を含む	真	内・灰黄褐色10YR6/2・外・黄褐色10YR6/2	ナデハナ後ナデ	ナデ	摩り
	613	10F SK429	灰土土器	甗	235+α③ 62	砂粒及び微細な金雲母を含む	真	内・灰褐色10YR5/1・外・黄褐色7.5YR3/4	ハケ後ヨコナデ	縮みにより調整不明	
	614	10F SK429	灰土土器	甗	231+α③ 63	微細な砂粒及び石英粒を多く含む	真	内外・黄い黄褐色10YR7/3	ナデハナ	器押さえ	内面工具痕
	615	10F SK429	灰土土器	甗	276+α③ 60	微細な砂粒及び石英粒を多く含む	真	内・黄褐色2.5YR5/1・外・褐色5YR6/6	ナデハナ後ナデ	ナデ	
	616	10F SK429	灰土土器	甗	260+α③ 60	砂粒を多く含む	真	内・黄い褐色7.5YR7/4・外・褐色5YR7/6	ハケ目が残る	器面見れにより調整不明	内面工具痕
	617	10F SK429	灰土土器	甗	246+α③ (68)	石英粒を含む	真	内外・褐色2.5YR6/8	ハケ目	ハケ跡ナデ消し	
	618	10F SK429	灰土土器	支脚	282+α	大粒の砂粒及び石英粒を含む	真	外・黄褐色7.5YR7/3	器押成後ナデ		
	619	10F SK431	灰土土器	甗	233+α	石英粒を含む	真	内外・灰白色10YR8/2	器面見れにより調整不明	ヨコナデ	
	620	10F SK431	灰土土器	甗	264+α③ 72	砂粒をやや含む	真	内・褐色5YR6/5・外・褐色2.5YR6/6	ナデ	ナデ	
	621	10F SK431	灰土土器	甗	236+α③ (106)	微細な砂粒及び石英粒を含む	真	内・黄い黄褐色10YR7/4・外・黄褐色7.5YR6/4	ヨコナデ	ナデ	粘土層目跡
R101	622	10F SK431	灰土土器	甗	270+α	細砂粒及び微細な長石粒を含む	真	内・黄い褐色10YR7/3・外・黄褐色2.5YR6/6	ナデハナ	器押さえ後ナデ	内面工具痕
	623	10F SK431	灰土土器	甗	265+α③ (90)	砂粒及び石英粒を含む	真	内外・褐色2.5YR6/6	器底により調整不明	器底により調整不明	
	624	10F SK433	灰土土器	甗	230+α	石英粒を含む	真	内外・褐色2.5YR6/8	ナデハナ	器押さえ	
	625	10F SK433	灰土土器	甗	235+α	砂粒を含む	真	内・褐色5YR6/6	器面見れにより調整不明器面見れにより調整不明		
	626	10F SK433	灰土土器	支脚	232+α③ (78)	砂粒及び微細な白色粒を多く含む	真	内外・黄い黄褐色10YR7/3	ナデ	ナデ	
	627	11B SK503	灰土土器	甗	225+α	精細	真	内外・褐色2.5YR6/3	ヨコナデ	ヨコナデ	積み目
	628	11B SK503	灰土土器	甗	225+α	細砂粒及び石英粒を含む	真	内・黄い黄褐色10YR7/4・外・黄褐色10YR6/3	器ナデ	器底により調整不明	
	629	11B SK503	灰土土器	甗	217+α	砂粒及び微細な金雲母を含む	真	内外・黄い褐色7.5YR7/4	ハケ目	器底により調整不明	積み目
	630	11B SK503	灰土土器	甗	235+α	細石炭粒をわずかに含む	真	内・黄い褐色7.5YR6/4・外・褐色5YR7/6	ハケ目	無ナデ	
	631	11B SK503	灰土土器	甗	227+α	細砂粒及び金雲母を含む	真	内・褐色7.5YR7/6・外・黄褐色7.5YR5/3	無ナデ	器底により調整不明	
R102	632	11B SK503	灰土土器	甗	235+α	細砂粒及び微細な金雲母・石英粒を含む	真	内・黄い黄褐色10YR6/3・外・黄褐色10YR6/6	器底により調整不明	器底により調整不明	
	633	11B SK503	灰土土器	甗	225+α	精細	真	内外・黄い褐色7.5YR7/4	無ナデ	ヨコナデ	
	634	11B SK503	灰土土器	甗	1306③ 55+α	精細	真	内・灰白色2.5YR8/2・外・灰黄褐色10YR8/1	ナデハナ後ナデ	器底により調整不明	外面一部ナデ
	635	11B SK503	灰土土器	甗	272+α③ (68)	細砂粒・細石炭粒及び微細な金雲母を含む	真	内・灰黄色10YR6/2・外・黄褐色5YR7/4	ナデハナ後ナデ	無ナデ	内面工具痕
	636	11B SK503	灰土土器	甗	2119+α③ (68)	細砂粒及び微細な金雲母を含む	真	内・褐色2.5YR7/6・外・黄褐色10YR6/3	1ノギキ	無ナデ	
	637	11B SK505	灰土土器	甗	257+α③ 76	砂粒及び細石炭粒・微細な金雲母を含む	真	内外・褐色7.5YR7/6	ナデハナ	ナデ	
	638	11B SK505	灰土土器	甗	238+α	精細	真	内外・黄褐色7.5YR6/4	ナデハナ	ナデ	
	639	11B SK505	灰土土器	甗	255+α	石英粒を多く含む	真	内外・黄褐色10YR6/3・外・灰白色2.5YR8/2	器底により調整不明	器押さえ後ナデ	
	640	11B SK505	灰土土器	甗	1366③ 116+α	細砂粒を多く含む	真	内外・黄褐色7.5YR6/4	ナデハナ	器押さえ後ナデ	
	641	11B SK505	灰土土器	甗	1330③ 35+α	微細な金雲母をやや多く含む	真	内・黒褐色10YR3/1・外・黒灰黄色2.5Y5/2	ナデハナ	器押さえ後ナデ	
R104	642	11B SK505	灰土土器	甗	1340③ 55+α	精細	真	内外・灰白色2.5YR8/2	無ナデ	ナデ	口縁部に片が残る
	643	11B SK505	灰土土器	甗	1350③ 90+α	細砂粒及び微細な金雲母を含む	真	内・灰黄色10YR6/2・外・黄褐色10YR8/3	ナデハナ	器押さえ後ナデ	
	644	11B SK505	灰土土器	甗	238+α③ 65	細砂粒及び微細な金雲母をやや含む	真	内・黄い黄褐色10YR7/4・外・黄褐色10YR6/3	ナデハナ	ナデ	内面工具痕
	645	11B SK505	灰土土器	甗	237+α③ (68)	細砂粒及び極めて微細な金雲母を含む	真	内・褐色7.5YR7/6・外・黄褐色10YR6/3	1ノギキ	無ナデ	内面工具痕
	646	11B SK505	灰土土器	甗	1198③ 52+α	砂粒及び微細な金雲母を多く含む	真	内・黄褐色2.5YR6/3・外・黄褐色10YR3/1	1ノギキ	器押さえ後ナデ	
	647	11B SK505	灰土土器	甗	1184③ 56+α	精細	真	内・黄い黄褐色10YR6/3・外・黄褐色10YR6/2	1ノギキ	ナデ	摩り
	648	11B SK505	灰土土器	甗	274+α	細砂粒及び細石炭粒を含む	真	内・褐色7.5YR7/6・外・黄褐色5YR4/4	1ノギキ	1ノギキ・丁寧ナデ	
	649	11B SK505	灰土土器	甗	296+α	精細	真	内・黄い黄褐色10YR7/2・外・黄褐色10YR4/4	1ノギキ	ナデ	内面工具痕・外面ナデ
	650	11D SK534	灰土土器	甗	228+α	石英粒を含む	真	内・黄い黄褐色10YR5/3・外・褐色7.5YR6/6	器面見れにより調整不明	丁寧ナデ	

国番号	産地・産種	種類	岩種	法量 (mm ³) [1] 1.0 ⁺ 2.0 ⁺ 3.0 ⁺	鉱土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
107	11D SK54	吹来土器	灰	②40+α	石英粒及び金雲母を含む	真	内：浅灰色25Y7/3・外：灰黄色10YR5/2	ハケ仕上げ	磨押し		
	11D SK54	吹来土器	灰	②24+α	精瓦	真	内：橙色7.5YR7/6	ハケ目	磨押し		
	11D SK54	吹来土器	灰	②67+α	石英粒及び金雲母を含む	真	内：浅灰色25YR/4・外：灰黄色25Y6/2	ハケ目	粗仕上げ	磨目染着	
	11D SK34	吹来土器	磁	②34+α	精瓦	真	内：黄褐色5YR7/6	ナデ	ナデ		
	11D SK54	吹来土器	灰	[1] ①10 [2] 60+α	細砂粒及び細石炭粒を多く含む	真	内：灰色5YR6/6	丁寧なゴコナデ	丁寧な粗ナデ		
	11D SK30	吹来土器	灰	②16+α	細砂粒及び極めて微細な金雲母を含む	真	内：灰色5YR6/6	ゴコナデ	ゴコナデ		
	11D SK30	吹来土器	灰	②19+α	石英粒及び金雲母を含む	真	内外：黄褐色10YR7/3	ナデ	ナデ		
	11D SK30	吹来土器	灰	②30+α	精瓦	真	内外：黄褐色7.5YR7/4	丁寧な粗ナデ	ナデ	内面工具痕	
	11D SK30	吹来土器	黄緑	②30+α	石英粒及び金雲母を含む	真	内：黄灰色25Y5/1・外：黄褐色25Y5/3	ナデ	ナデ		
	11D SK30	吹来土器	磁	②38+α	精瓦	真	内：黄褐色10YR7/3・外：橙褐色7.5YR7/6	丁寧な粗ナデ	磨押し		
109	11E SK32	吹来土器	磁	②70+α	石英粒を含む	真	内外：黄褐色7.5YR6/4	丁寧なナデ	磨押し		
	11E SK32	吹来土器	磁	②68+α	極めて微細な細砂粒及び炭粒をわずかに含む	真	内：黄褐色7.5YR7/4・外：黄褐色10YR7/7	丁寧なナデ	ナデ	磨目目	
	11E SK32	吹来土器	磁	②28+α [2] (124)	細砂粒を含む	真	内：黄褐色7.5YR7/4・外：黄褐色25Y4/3	丁寧な粗ナデ	磨押し		
	11E SK32	石器	湖岸石	[1] 塊径3.35 + α 最大幅 1.83 最大厚 0.51 重量36							黒曜石
110	11G SK59	吹来土器	灰	②37+α	石英粒及び砂粒を多く含む	真	内外：橙褐色25YR6/8	丁寧なハナ	粗ナデ		
	11G SK59	吹来土器	灰	②30+α	石英粒を多く含む	真	内外：橙褐色5YR6/8	ハケ目?	磨押し		
	11G SK59	吹来土器	灰	②53+α	石英粒を多く含む	真	内外：黄褐色7.5YR7/3	ハケ目?	ハケ目?		
	11G SK59	吹来土器	灰	[1] ②80 [2] 66+α	砂粒を多く含む	真	内：明灰黄色5YR7/2・外：浅灰黄色10YR8/3	磨滅により調整不明	磨滅により調整不明		
	11G SK59	吹来土器	灰	[1] ②96 [2] 95+α	微細な赤色粒を含む	真	内：灰黄色25Y7/2・外：黄褐色10YR7/3	丁寧なハナ	磨滅により調整不明		
	11G SK59	吹来土器	灰	[1] ③20 [2] 80+α	細砂粒を含む	真	内：黄褐色7.5YR7/4・外：浅灰黄色7.5YR8/4	丁寧なハナ	磨滅により調整不明		
	11G SK59	吹来土器	灰	[1] ③06 [2] 155+α	砂粒及び石英粒をやや多く含む	真	内：灰白色10YR8/2・外：灰白色7.5YR8/2	丁寧なハナ	磨滅により調整不明		
	11G SK59	吹来土器	灰	[1] ②74 [2] 150+α	細砂粒を含む	真	内外：浅黄褐色7.5YR8/3	丁寧なハナ	ナデ		
	11G SK59	吹来土器	灰	②94+α [3] (64)	石英粒を含む	真	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色7.5YR7/4	ハケ目後丁寧なナデ	ナデ	内面擦過痕	
	11G SK59	吹来土器	灰	②307+α [3] (76)	石英粒を含む	真	内外：黄褐色10YR7/3	ハケ目	磨押し	内面擦過痕	
	11G SK59	吹来土器	灰	[1] ②73 [2] 331 前後 [3] 78	砂粒を含む	真	内：黄褐色7.5YR7/4・外：浅黄褐色7.5YR8/3	ハケ目	粗ナデ	内面復元	
	111	11G SK59	吹来土器	磁	[1] ①17 [2] 128 [3] 250	精瓦	真	内：黄褐色10YR6/1・外：黄褐色10YR6/4	ミガキ	ナデ	
		11G SK59	吹来土器	磁	②120+α	細砂粒及び石英粒を多く含む	真	内：灰黄色25YR6/2・外：黄褐色2.5YR6/4	磨滅により調整不明	磨滅により調整不明	
11G SK59		吹来土器	灰	②45+α [3] 75	石英粒を含む	真	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR8/3	丁寧なハナ	磨押し		
11G SK59		吹来土器	灰	②52+α [3] (70)	石英粒を含む	真	内外：黄褐色7.5YR7/4	丁寧なハナ	磨押し		
11G SK59		吹来土器	灰	②60+α [3] (70)	石英粒を多く含む	真	内：黄褐色25YR7/3・外：黄褐色10YR8/4	ハケ目が残る	磨押し		
11G SK59		吹来土器	灰	②72+α [3] 68	石英粒を多く含む	真	内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR6/2	ハケ目	磨押し		
11G SK59		吹来土器	灰	②72+α [3] 70	石英粒を多く含む	真	内：黄褐色25YR7/4・外：黄褐色2.5YR6/4	ハケ目が残る	磨押し		
11G SK59		吹来土器	灰	②63+α [3] (100)	微細な白色粒を多く含む	真	内外：灰白色7.5YR8/2	丁寧なハナ	ナデ		
11G SK59		吹来土器	灰	②85+α [3] 101	細砂粒をわずかに含む・微細な白色粒を多く含む	真	内：黄褐色7.5YR6/1・外：灰白色7.5YR8/2	ハケ目粗ナデ	磨押し		
11G SK59		吹来土器	灰	②140+α [3] 68	微細な砂粒を含む	真	内：灰白色10YR8/2・外：浅黄褐色7.5YR8/4	丁寧なハナ	磨滅により調整不明		
11G SK59		吹来土器	磁	②47+α [3] (100)	石英粒及び炭母を含む	真	内：黄褐色10YR5/1・外：黄褐色10YR6/3	ハケ目粗ナデ	磨押し		
11G SK59		吹来土器	磁	②43+α [3] (134)	石英粒を多く含む	真	内外：灰白色10YR8/2	磨目ゴコナデ	磨押し		
11G SK59		吹来土器	磁	②83+α [3] 68	砂粒及び微細な白色粒を含む	真	内：黄褐色7.5YR6/4・外：黄褐色7.5YR7/4	ナデ	磨押し		
111	11G SK59	石器	石斧丁	[1] 塊径7.8 + α 最大幅 3.93 最大厚 0.43 重量21.9							黒曜石
	11G SK59	吹来土器	黄緑	[1] 000 [2] 588+α	細砂粒・微細な炭母を含む	良好	内：浅黄褐色7.5YR6/3・黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR8/6	丁寧なナデ	ハケ目粗ナデ		

図番 番号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm・g) [1] 口径・高さ [2] 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
RI15	691	SI02	赤土土器	横楕	① 0.88× 7.7±α	細砂粒・微細雲母含む	良好	内：橙色5YR7-6/6・外： 橙色5YR7-6/6-橙色7.5YR7/6	丁寧なナデ	ハケ目ナデ		
	692	SI03	赤土土器	横楕	① 4.0±α③ 15.7	2mm砂粒をやや多く含む	良好	内：浅黄褐色7.5YR6/6・ 外：橙褐色5YR6-6/6	ハケ目後ナデ	ナデ		
RI18	693	56-GI SH1001	赤土土器	壺	② 4.5±α	砂粒をわずかに含む	良	内：黄い青褐色10YR7/3・ 外：黄い橙褐色5YR7/4	器面荒れにより調整 不明	器面荒れにより 調整不明		
	694	56-GI SH1001	赤土土器	壺	② 1.3±α	細砂粒及び石英粒をやや含 む	良	内外：黄い橙褐色5YR6/4	ヨコナデ	器成により調 整不明		
	695	56-GI SH1001	赤土土器	壺	② 1.6±α	砂粒及び微細な白色粒を含 む	良	内外：橙褐色5Y7-6	ヨコナデ	ヨコナデ		
	696	56-GI SH1001	赤土土器	壺	① 1.54± 3.5±α	白色粒を極わずかに含む	良	内：明黄褐色10YR 7/6・ 外：黄い青褐色10YR7/3	器成により調整不明	器成により調 整不明		
	697	56-GI SH1001	赤土土器	壺	② 2.30±α	細砂粒をやや含む	良	内外：浅黄褐色10YR8/4	器面荒れにより調整 不明	ハケ目	外面打がかる	
	698	56-GI SH1001	赤土土器	壺	② 2.35±α③ (80)	微細な白色粒及び石英粒を わずかに含む	良	内：黄い青褐色10YR6/4・ 外：黄い橙褐色5YR6/4	器成により調整不明	器成により調 整不明		
	699	56-GI SH1001	石器	砥石	① 横径長10.3 +α全長最大幅 8.6・最大厚 8.3(重量96)							石英製
	RI20	700	56-GI SH1002	赤土土器	壺	② 2.4±α	砂粒を含む	良	内：橙褐色5YR6-6・外：橙 褐色5Y7-6	ナデ	器押さえ	
		701	56-GI SH1002	赤土土器	壺	② 4.5±α	細砂粒を含む	良	内：黄い橙褐色5YR7/4・ 外：橙褐色7.5YR7/6	器成により調整不明	器成により調 整不明	
702		56-GI SH1002	赤土土器	横楕	② 2.7±α	砂粒を含む	良	内外：黄い橙褐色5YR7/4	ナデ	ナデ		
703		56-GI SH1002	赤土土器	不明	② 2.55±α③ (72)	砂粒を含む	良	内：黄い青褐色10YR7/3・ 外：黄い橙褐色5YR6-4	器成により調整不明	ナデ		
704		56-GI SH1002	赤土土器	不明	② 2.0±α	砂粒を含む	良	内：黄い橙褐色7.5YR7/3・ 外：黄い橙褐色5YR7/4	ナデ	ナデ		
705		56-GI SH1002	赤土土器	不明	② 3.2±α	細砂粒を含む	良	内：黄い橙褐色7.5YR6/4・ 外：橙褐色5YR7-6	器成により調整不明	ナデ		
706		56-GI SH1003	赤土土器	壺	② 2.18±α	大粒の砂粒及び白色粒を多 く含む	良	内外：黄い青褐色10YR7/4	器成により調整不明	器成により調 整不明		
RI22	707	56-GI SH1003	赤土土器	壺	② 2.4±α	わずかに石英粒を含む	良	内外：橙褐色5YR7-6	ヨコナデ	ハケ目ナデ		
	708	56-GI SH1003	赤土土器	壺	② 2.35±α③ (88)	微細な石英粒及び細砂粒を 含む	良	内：灰青褐色10YR 4/2・ 外：明黄褐色7.5YR5/8	ナデハナ	ナデ		
	709	56-GI SH1003	赤土土器	壺	② 2.37±α③ (80)	大粒の砂粒及び白色・赤色 粒をやや多く含む	良	内：浅黄褐色10YR8-3-黄 褐色2.5Y4/1・外：赤褐色 10YR8/8	器成により調整不明	器成により調 整不明	断面は三色	
	710	56-GI SH1003	赤土土器	壺	② 2.53±α③ (92)	白色砂粒及び石英粒をわず かに含む	良	内：黄い青褐色10YR7/3・ 外：黄い橙褐色5YR7/4	ナデハナがかる	器成により調 整不明		
	711	7G SH220	赤土土器	壺	② 2.88±α	細砂粒及び白色粒を多く含 む	良	内：灰白色5Y8-1・外：灰 白色10YR8-2	器成により調整不明	器成により調 整不明		
	712	7G SH220	赤土土器	壺	② 2.84±α	微細な砂粒を極わずかに含む	精良	内：黄い橙褐色7.5YR6-4・ 外：黄い青褐色10YR8-3	ナデハナ	ヨコナデ	断面文の割れ目	
	713	7G SH220	赤土土器	壺	② 2.60±α③ (90)	砂粒を多く含む	良	内：灰青褐色10YR6-2・ 外：灰白色10YR8/2-黄い 青褐色10YR7/2	器成により調整不明	器押さえ後ナ デ		
714	7G SH220	赤土土器	脚楕	② 2.14±α③ (80)	砂粒を多く含む	良	内：浅黄褐色10YR8/3・ 外：黄褐色2.5Y7/2	ハケ目後ナデ消し	器押さえ後ハ ケ目			
RI26	715	6G SH221	赤土土器	横楕	① 30.8/2.960	細砂粒及び微細な黒石粒を わずかに含む	良	内：黄い橙褐色5YR 7/4・ 外：黄い青褐色10YR8/3	黄いナデハケ	黄いナデハケ	蓋みが滑しい、期 目不明	
	716	6G SH221	赤土土器	壺	② 1.8±α	細砂粒を含む	良	内外：橙褐色5YR6-6	調整不明	ナデ		
RI28	717	6G SH221	赤土土器	横ナ	② 1.8±α	砂粒及び微細な白色粒を わずかに含む	不良	内：明黄褐色10YR 7/6・ 外：明黄褐色10YR6-6	ヨコナデ	器面荒れによ り調整不明		
	718	6G SH221	赤土土器	壺	② 2.37±α	細砂粒及び微細な白色粒を 含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
	719	6G SH221	赤土土器	横楕	② 2.7±α	細砂粒を含む	良	内：黄い橙褐色5YR 4/6・ 外：明赤褐色2.5YR5-6	シガキ	ナデ	内外面打がかる	
	720	6G SH221	赤土土器	壺	② 2.28±α	細砂粒を含む	良	内：橙褐色7.5YR7-6・外： 橙褐色7.5YR6-6	ナデ	ナデ		
	721	6G SH221	赤土土器	壺	② 2.35±α③ (72)	砂粒を多く含む	良	内：栗褐色5YR2-1・外： 橙褐色5YR6-6	ナデハナ	ナデ	外底面粘土剥目跡	
	722	6G SH221	赤土土器	壺	② 2.33±α③ (86)	細砂粒を多く含む	良	内外：黄い褐色7.5YR5/4	ハケ目	ナデ		
	723	6G SH221	赤土土器	壺	② 2.25±α③ (120)	細砂粒及び微細な白色粒を 多量に含む	良	内：灰白色10YR8/2・外： 黄い青褐色10YR7/3	器面荒れにより調整 不明	器面荒れによ り調整不明		
RI30	724	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.54 (2) 7.5±α	砂粒を多く含む	軟頁	内：灰白色10YR8-2・外： 浅黄褐色10YR8/3	ハケ目ナデ	ハケ目後ナデ		
	725	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.86 (1) 9.2±α	微細な白色粒・金雲母・黒 石粒をわずかに含む	良	内：灰青褐色2.5YR8-2・外： 灰白色2.5Y8/2	ハケ目	ハケ目		
	726	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.83 (3) 8.8±α	砂粒を多く含む	不良	内：浅黄褐色7.5YR7/3・ 外：浅黄褐色10YR8/3	器面荒れにより調整 不明	ハケ目		
	727	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.06 (2) 11.0±α	砂粒を多く含む	良	内外：灰白色2.5Y8-2	ヨコナデ	ハケ目がかる	口縁部断面割れ目	
	728	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.13±α	細砂粒を多く含む	二次 構成	内：黄い青褐色10YR7/3・ 外：黄褐色10YR6/1	ヨコナデ	ナデ		
	729	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.04 (2) 6.3±α	微細な白色粒を多く含む	二次 構成	内：浅黄褐色10YR8/3・ 外：灰白色10YR8/2	器成により調整不明	器成により調 整不明		
	730	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.18 (2) 8.0±α	大粒の砂粒を含む	二次 構成	内：灰白色7.5YR8/2・外： 黄い橙褐色7.5YR7/3	ハケ目	ハケ目		
	731	7H SH218	赤土土器	壺	① 2.23 (3) 5.6±α	微細な白色粒を多く含む	良	内：灰白色10YR8/2・外： 黄い青褐色10YR7/3	ハケ目がかる	器成により調 整不明	外面一部工具痕	

図番 番号	通称 番号	出土地・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm) ① 口径② 高さ③ 底径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考	
R131	732	7H	SR218	弥生土器	甕	① 227.2 ② 60+α	細砂粒を含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/4	ハケ後ナテ消し	ナテハケ後ナテ	外面土層目録記載
	733	7H	SR218	弥生土器	甕	① 250.0 ② 107+α	微細な白色粒を多く含む	真	内: 灰褐色5YR5/2・外: 黒灰色5YR1/1	ナテハケ後ナテ消し	磨りきえ後ナ テ消し	工具痕
	734	7H	SR218	弥生土器	甕	① 250.0 ② 108+α	大粒の砂粒を多く含む	軟真	内外: 灰白色10YR8/2	ハケ後ナテ	磨面荒れにより調整不明	
	735	7H	SR218	弥生土器	甕	① 286.0 ② 145+α	砂粒を多く含む	不真	内外: 灰白色10YR8/2	ハケ目が残る	ハケ目	
	736	7H	SR218	弥生土器	甕	① 302.2 ② 94+α	黒石黄粒及び黒鉄石粒を多く含む	真	内: 灰黄褐色10YR5/2・外: 鈍い黄褐色10YR7/3	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	
	737	7H	SR218	弥生土器	甕	① 286.0 ② 92+α	微細な白色粒を多く含む	真	内: 黄褐色5YR5/2・外: 鈍い褐色10YR7/2	磨面荒れにより調整不明	ハケ後ナテ	
	738	7H	SR218	弥生土器	甕	287+α	微細な白色粒を多く含む	軟真	内: 鈍い褐色5YR6/3・外: 鈍い褐色2YR7/4	ナテハケが残る	一部残ナテ	
	739	7H	SR218	弥生土器	甕	① 280.0 ② 105+α	黒石黄粒及び黒鉄石粒を多く含む	軟真	内: 灰白色10YR8/2・外: 灰白色10YR8/1	磨滅により調整不明	ハケ目	
	740	7H	SR218	弥生土器	甕	① 281.0 ② 93+α	砂粒を多く含む	不真	内: 灰白色10YR8/2・外: 鈍い黄褐色10YR8/4	磨面荒れにより調整不明	磨面荒れにより調整不明	
	741	7H	SR218	弥生土器	甕	① 286.0 ② 385.7+α	細砂粒及び赤色粒を含む	真	内: 鈍い黄褐色10YR7/3・外: 黄褐色10YR8/4	ナテハケが残る	ハケ目が残る	底面に穿孔
	742	7H	SR218	弥生土器	甕	① 208.8 ② 85+α	大粒の砂粒を多く含む	不真	内: 灰白色10YR8/2・外: 鈍い黄褐色10YR7/2	ハケ目が残る	ハケ後ナテ	
	743	7H	SR218	弥生土器	甕	265+α	細砂粒を多く含む	真	内: 灰白色25YR7/2・外: 鈍い黄褐色10YR7/2	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	
	744	7H	SR218	弥生土器	甕合口 杯蓋	① 188.8 ② 105+α	微細な白色粒を多く含む	真	内: 浅黄褐色10YR8/3・外: 鈍い黄褐色10YR7/2	ナテハケ後ナテ消し	ハケ後ナテ	
	745	7H	SR218	弥生土器	底部	214.4+α	大粒の砂粒を多く含む	二次焼成	内: 灰白色5YR8/2・外: 鈍い褐色10YR7/4	ハケ目	磨面荒れにより調整不明	内底面工具痕
746	7H	SR218	弥生土器	底部	270+α	砂粒を多く含む	不真	内: 明赤褐色5YR5/8・外: 褐色5YR7/6	ハケ目	磨りきえ後ナテ		
747	7H	SR218	弥生土器	底部	290+α	細砂粒を含む	軟真	内: 灰白色25Y7/1・外: 灰白色25Y8/1	ハケ後ナテ消し	ハケ後ナテ		
R132	748	7H	SR218	弥生土器	甕	217+α	細砂粒及び鉄石粒を多く含む	真	内外: 灰黄褐色10YR6/2	ハケ目	ハケ目	胴目黄変帯
	749	7H	SR218	弥生土器	甕合口 杯蓋	215.4+α	微細な白色粒及び茶色粒を多く含む	真	内外: 灰白色25Y8/2	軟ナテ	ハケ後ヨコナテ	胴目黄変帯
	750	7H	SR218	弥生土器	甕	① 265.0 ② 206+α	細砂粒を多く含む	不真	内: 浅黄褐色10YR8/3・外: 灰白色10YR8/2	ハケ目	ハケ目	胴目黄変帯
	751	7H	SR218	弥生土器	甕	① 110.7286 ② 3.66	微細な白色粒及び砂粒を多く含む	真	内: 黄灰色25Y6/1・外: 褐色5YR6/8	一部ハケ目が残る	ナテ	
	752	7H	SR218	弥生土器	甕	285+α	細砂粒を多く含む	軟真	内: 鈍い褐色5YR7/4・外: 鈍い褐色2YR6/3	ケズリノ後ナテ	磨りきえ後ナテ	内面工具痕
	753	7H	SR218	弥生土器	甕掛	① 418.0 ② 250+α ③ 263+α	細砂粒及び微細な白色粒を含む	真	内: 灰黄褐色10YR6/2・外: 灰白色25Y7/2	ハケ目	ハケ目	
	754	7H	SR218	弥生土器	甕	① 100.0 ② 45	黒石黄粒及び石黄粒を含む	軟真	内: 鈍い黄褐色10YR7/4・外: 鈍い褐色2YR7/3	磨りきえ後残ナテ	残ナテ	
R133	755	7H	SR218	弥生土器	小形甕	263+α③ (68)	黒石黄粒及び石黄粒を多く含む	軟真	内: 灰黄色25Y7/2・外: 鈍い黄褐色10YR7/2	ナテ	磨りきえ後ナテ	
	756	7H	SR218	弥生土器	甕掛	248+α③ (138)	細砂粒を含む	軟真	内: 灰オリーブ褐色5Y5/2・外: 黄褐色5Y6/3	残ナテ	ハケ目	
	757	7H	SR218	弥生土器	赤帯灰 脚	① 赤帯厚8.5 ② 11.53 ③ 10.1	細砂粒を多く含む	軟真	内外: 褐色5YR6/6	磨面荒れにより調整不明	ナテ	
	758	7H	SR218	弥生土器	赤帯灰 脚	① 赤帯厚9.5 ② 11.53 ③ 11.6	砂粒を含む	不真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/2	ハケ後ナテ	ハケ目後ナテ	
	759	7H	SR218	弥生土器	甕付	2159+α③ (158)	黒石黄粒及び石黄粒を多く含む	軟真	内外: 褐色5YR7/6	ハケ目が残る	磨り荒	
	760	7H	SR218	鉄器	鐵矢	① 最大長25 ② 最大幅4.2 ③ 最大厚0.3 ④ 重量10.2						
	761	7H	SR218	鉄器	鐵透儀	① 最大長17.7 ② 最大幅4.5 ③ 3.3-9.2(3) ④ 最大厚(1.1) ⑤ 重量90.6						
762	7H	SR218	鉄器	棒状鐵製品	① 最大長 156 ② 最大幅 9.9 ③ 最大厚 1.2 ④ 重量 144.5							
R135	763	7H	SR219	弥生土器	甕	220+α	細砂粒及び石黄粒を多く含む	真	内外: 鈍い褐色5YR6/4	ヨコナテ	ヨコナテ	磨滅帯
	764	7H	SR219	弥生土器	甕	227+α③ (62)	細砂粒を多く含む	真	内外: 褐色5YR6/6	磨滅により調整不明	磨滅により調整不明	
R137	765	7G	SR236 (A)	弥生土器	甕	225+α	大粒の砂粒を多く含む	真	内: 浅黄褐色5YR8/4・外: 褐色5YR7/8	磨面荒れにより調整不明	ナテ	
	766	7G	SR236 (A)	弥生土器	小形甕	268+α	細砂粒を多く含む	真	内: 鈍い褐色25Y7/4・外: 鈍い黄褐色10YR7/4	ハケ後ナテ消し	ケズリノ後ナテ	内面工具痕
	767	7G	SR236 (A)	弥生土器	鉢	① 152.2 ② 7.93 ③ 5.0	黒石黄粒及び鉄石粒を含む	真	内: 灰褐色10YR5/1・外: 鈍い黄褐色10YR7/3	不定方向のハケ目	ミガキが残る	
	768	7G	SR236 (A)	弥生土器	甕	225+α③ (76)	砂粒を含む	軟真	内: 灰褐色5YR5/2・外: 鈍い黄褐色10YR6/3	縦方向の調整帯が残る	磨面荒れにより調整不明	
	769	7G	SR236 (A)	弥生土器	甕	212.3+α③ (80)	砂粒を多く含む	真	内: 灰褐色10YR4/1・外: 鈍い黄褐色10YR6/3	ハケ目	ハケ目	

図番 遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm-g) ① 口径・高さ ② 底径 ③ 重量	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考		
IR130	770	6G	SK215	弥生土器	甕	① 20.4 ② 6.5 10.5+α	石炭灰及び鉄石粒をやや含む	真	内外: 褐色25YR6-6	丁寧なナデ	ナデ	
	771	6G	SK215	弥生土器	甕	① 23.0 ② 10.5+α	砂粒を多く含む	真	内外: 褐色5YR7/6・外 褐色25YR7-6	ハケ目	粗ナデ	内面工具痕
	772	6G	SK215	弥生土器	甕	① 25.4 ② 15.3 13.0B	砂粒をやや含む	真	内外: 褐色5YR7-6	丁寧なナデ	ナデ	内面工具痕
	773	6G	SK215	弥生土器	甕	① 31.0 ② 10.5+α	細砂粒を多く含む	真	内外: 褐色5YR7/6・外: 褐色5YR6-6	ハケ目後ナデ	粗ナデ	
	774	6G	SK215	弥生土器	甕	① 31.0 ② 10.0+α	顔石炭灰及び鉄石粒を含む	真	内外: 褐色7.5YR7-6・外: 褐色7.5YR6/4	丁寧ナデ	ヨコナデ	内外縁磨削
	775	6G	SK215	弥生土器	甕	① 32.0 ② 8.7+α	大粒の砂粒及び石炭灰を含む	真	内外: 褐色7.5YR6/4	丁寧ナデ	ヨコナデ	
	776	6G	SK215	弥生土器	甕	① 34.4 ② 12.2+α	砂粒を含む	真	内外: 浅黄褐色7.5YR6/4・ 外: 褐色7.5YR6-6	丁寧ナデ	ナデ	
	777	6G	SK215	弥生土器	甕	① 26.0 ② 3.8+α	精質	真	内外: 浅黄褐色7.5YR6/3	ミガキ	ナデ	内面丹が残る
	778	6G	SK215	弥生土器	高坏	① 33.3+α	細砂粒を含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR6/4	器面荒れにより調整不 明	器面荒れにより 調整不明	
	779	6G	SK215	弥生土器	鉢	① 12.6 ② 7.7③ 17.0	細砂粒及び微細な白色胎土 を多く含む	真	内外: 明赤褐色5YR5-5	器面荒れにより調整不 明	器面荒れにより 調整不明	
780	6G	SK215	弥生土器	甕	① 26.4+α③ (11.6)	細砂粒を多く含む	真	内外: 明赤褐色5YR5-6・外: 褐色5YR6-6	ハケ目後ナデ	器面荒れにより 調整不明		
781	6G	SK215	弥生土器	高坏	① 26.7+α③ (2.6)	細砂粒及び金雲母を含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR5-4・ 外: 鈍い黄褐色10YR6/4	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ		
IR141	782	7G	SK208	弥生土器	高坏	① 24.7+α						
	783	7G	SK208	弥生土器	支脚	① 1.5 (8.2) ② 14.0 ③ 8.8)	砂粒を多く含む	真	内外: 明褐色7.5YR5-5	指押さえ後ナデ	指押さえ	
IR144	784	13B SB423	弥生土器	甕	① 32.0 ② 13.0+α	大粒の砂粒を多く含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR6/4・ 外: 褐色7.5YR4/1	丁寧ナデ	粗ナデ	内面磨削	
	785	13B SB423	弥生土器	甕	① 28.8+α	砂粒を含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/3・ 外: 鈍い黄褐色10YR5-3	ナデ	ナデ		
	786	13B SB423	弥生土器	甕	① 30.0+α	砂粒を含む	真	内外: 鈍い褐色7.5YR7/3・ 外: 鈍い褐色2.5YR7/4	指押さえ後ナデ	磨滅により調 整不明		
	787	13B SB423	弥生土器	甕	① 25.0+α	砂粒をやや含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/4	丁寧ナデ後丁寧ナデ	ナデ		
	788	12H SK446	弥生土器	甕	① 30.0+α	大粒の砂粒を含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/4	磨滅により調整不明	磨滅により調 整不明	口縁上面丹が残る	
IR145	789	12H SK446	弥生土器	甕	① 24.4+α③ 7.2	石炭灰を多く含む	真	内外: 褐色5YR7/6・外: 褐色 5YR6-6	ハケ目後ナデ	ナデ		
	790	12H SK446	弥生土器	甕	① 24.5+α	微細な白色胎土及び雲母を多 く含む	真	内外: 褐色5YR6-6	磨滅により調整不明	磨滅により調 整不明		
	791	12H SK446	弥生土器	甕	① 23.0+α	砂粒及び微細な雲母を含む	真	内外: 褐色5YR6-6	ハケ後ナデ前シ	ナデ	口縁上面丹の磨削	
	792	12H SK446	弥生土器	甕	① 22.4+α③ (6.2)	細砂粒を含む	真	内外: 灰黄色2.5Y7/2・外: 鈍い黄褐色10YR 7/4	器面荒れにより調整不 明	器面荒れにより 調整不明		
	793	12H SK446	弥生土器	甕	① 28.8+α	石炭灰を含む	真	内外: 浅黄褐色10YR8/4・外: 赤褐色2.5YR4-8	ミガキ	指押さえ	外面丹磨り	
	794	12H SK449	弥生土器	甕	① 29.8 ② 5.3+α	極めて微細な砂粒をわずかに 含む	真	内外: 褐色7.5YR7/6・外: 鈍い黄褐色10YR6/4	丁寧ナデ	指押さえ後ナデ		
IR147	795	12H SK449	弥生土器	甕	① 32.4 ② 3.5+α	砂粒及び石炭灰を含む	真	内外: 褐色5YR6-6	丁寧ナデ	指押さえ後ナデ		
	796	12H SK449	弥生土器	甕	① 30.0 ② 6.8+α	砂粒を多く含む	真	内外: 褐色5YR6-6	丁寧ナデ	指押さえ	内面工具痕	
	797	12H SK449	弥生土器	甕	① 29.4 ② 11.9+α	極めて微細な雲母及び白色 胎土・砂粒を多く含む	真	内外: 褐色7.5YR7/6・外: 褐色5YR6-6	丁寧ナデ	粗ナデ		
	798	12H SK449	弥生土器	甕	① 30.0 ② 13.7+α	細砂粒を多く含む	真	内外: 浅黄褐色10YR6/3	ハケ後ナデ	指押さえ後 ヨコナデ		
	799	12H SK449	弥生土器	甕	① 29.2 ② 19.5+α	極めて微細な砂粒を多く含 む	真	内外: 浅黄褐色10YR6/3・ 外: 褐色7.5YR6-6	丁寧ナデ	器面荒れにより 調整不明		
	800	12H SK449	弥生土器	甕	① 27.4+α	砂粒を含む	真	内外: 鈍い褐色5YR7/3・外: 褐色5YR6-6	ナデ	ヨコナデ		
	801	12H SK449	弥生土器	甕	① 26.0+α	細砂粒及び白色胎土をわずかに 含む	真	内外: 鈍い褐色7.5YR6/4	磨滅により調整不明	磨滅により調 整不明		
	802	12H SK449	弥生土器	甕	① 23.3+α③ 7.3	細砂粒を極わずかに含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/3・ 外: 鈍い褐色2.5YR6/4	丁寧ナデ	まで	内面工具痕	
	803	12H SK449	弥生土器	甕	① 26.8+α③ (8.4)	細砂粒を多く含む	真	内外: 灰黄色10YR4/2・ 外: 褐色2.5YR6-6	丁寧ナデ	指押さえ後ナデ	内面工具痕	
	804	12H SK449	弥生土器	甕	① 11.7+α③ 8.3	砂粒を多く含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/3・ 外: 褐色2.5YR6-6	丁寧ナデ	指押さえ後ナデ	内面工具痕	
IR148	805	13B SK449	弥生土器	甕	① 12.5 ② 5.1+α	砂粒を多く含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/3	粗ナデ	指押さえ後ナデ	内面工具痕	
	806	13B SK449	弥生土器	短頸甕	① 23.5+α	大粒の砂粒をわずかに含む	真	内外: 褐色5YR7/6	ワウナデ	ヨコナデ	口縁上面丹孔	
	807	12H SK449	弥生土器	甕	① 26.2+α	顔石炭灰を多く含む	真	内外: 褐色5YR7/6・外: 赤褐色2.5YR5-8	ハケミガキ	磨滅により調 整不明	外面丹磨り	
	808	13B SK449	弥生土器	甕	① 28.3+α③ 7.8	極めて微細な雲母・石炭 灰及び鉄石粒を含む	真	内外: 鈍い黄褐色10YR7/2・ 外: 鈍い黄褐色10YR7/4	ミガキ	指押さえ	内面工具痕	
	809	13B SK449	弥生土器	高坏	① 25.2 ② 2.2+α	細砂粒を含む	真	内外: 明赤褐色5YR5-8	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面丹が残る 内面工具痕	
	810	13B SK449	弥生土器	高坏	① 28.8 ② 8.3+α	微細な雲母及び鉄石粒・石 炭灰を多く含む	真好	内外: 褐色7.5YR7-6	磨滅により調整不明	指押さえ後ナデ	口縁上面丹が残る	
	811	12H SK449	弥生土器	甕	① 25.8+α	大粒の鉄石粒及び石炭灰を 多く含む	真好	内外: 褐色7.5YR6-6・外: 褐色7.5YR7/6	ハケ	ヨコナデ		

図号 番号	地味 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量 (cm/g) 1/100分率の高 さ或重量	出土 状況	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考		
1F150	812	12H SK449	依布土器	器台	①4・ α	細砂粒を含む	真	内：黄い棕色75YR7/4・ 外：黄い黄棕色10YR7/4			指押さえ状ナ ズ		
	813	12H SK450	依布土器	甕	①(38.6) ② 2.6+ α	石英粒及び灰石粒を含む	真	内：棕色5YR7/8	磨滅により調整不明		磨滅により調 整不明		
	814	12H SK450	依布土器	甕	②80+ α	微細な砂粒を多く含む	不真	内外：明黄棕色10YR7/6	器面荒れにより調整不明		器面荒れにより 調整不明		
	815	12H SK450	依布土器	甕	①38.4② 126+ α	石英粒及び灰石粒をやや含む	真	内外：棕色5YR6/6	チタハク後ナズ	ナズ		内面工具痕	
	816	12H SK450	依布土器	甕	②52+ α	砂粒をわずかに含む	不真	内外：淡黄棕色25YR-3		磨滅により調整不明		ヨコナズ	
	817	12H SK450	依布土器	甕	②28+ α ③ (7.4)	石英粒及び灰石粒を含む	真	内外：棕色75YR7/6	チタハク			指押さえ ナズ	
	818	12H SK450	依布土器	甕	②33+ α ③ (60)	砂粒及び石英粒を含む	真	内：棕色5YR6/6・外： 棕色75YR6/6		磨滅により調整不明		指押さえ状ナ ズ	
	819	12H SK450	依布土器	器台	②60+ α	微細な砂粒及び赤色粒を含む	真	内外：棕色75YR7/6				磨滅により調 整不明	
	1F152	820	13H SK451	依布土器	甕	①(29.4) ② 11.3+ α	微細な赤色粒を含む	真	内：灰白色10YR8/2・外： 淡黄棕色75YR8/3		磨滅により調整不明		磨滅により調 整不明
		821	13H SK451	依布土器	甕	①(31.7) ② 139+ α	精煎	不真	内：灰白色10YR8/2・外： 淡黄棕色75YR8/3		磨滅により調整不明		磨滅により調 整不明
822		13H SK451	依布土器	甕	③13.8+ α	大粒の砂粒を含む	真	内外：棕色25YR6/8		ハケが残る		指押さえ状ナ ズ	
823		13H SK451	依布土器	甕	②85+ α ③ (60)	砂粒を含む	良好	内：灰白色75YR5/1・外： 黄75YR7/6	瓶ナズ			指押さえ状ナ ズ	
824		13H SK451	依布土器	甕	②103+ α ③ (75)	砂粒を含む	真	内：淡黄棕色10YR8/3・外： 淡黄棕色10YR8/4	一部ハケが見える		器面荒れにより調整不明	底部穿孔	
825		13H SK451	依布土器	甕	②185+ α	砂粒を含む	真	内：棕色75YR6/6・外： 淡黄棕色75YR8/4		磨滅により調整不明		一部ハケが 残る	
826		13H SK451	依布土器	甕	②218+ α ③ (76)	砂粒を含む	真	内：黄い棕色25YR6/4・外： 明赤棕色25YR5/6	チタハク後ナズ				内面工具痕
827		13H SK452	依布土器	甕	①(29.0) ② 6.0+ α	砂粒を多く含む	真	内外：黄い黄棕色10YR7/4	器面磨滅により調整不明			磨滅により調 整不明	
828		13H SK452	依布土器	甕	①(33.4) ② 7.3+ α	細砂粒及び微細な白色粒を含む	真	内：棕色5YR6/6・外： 棕色5YR6/8	チタハク	ナズ			
1F154		829	11F SD404	依布土器	短瓶	①(16.0) ② 2.2+ α	精煎	真	内外：淡黄棕色75YR6/6	瓶ナズ			口縁部穿孔
	830	11F SD404	依布土器	高杯	②20+ α	砂粒を多く含む	真	内外：棕色5YR6/6		磨滅により調整不明		内面外角が残る	
	831	11F SD404	依布土器	陶製器 台座又は 土器底 部	②30+ α	砂粒を含む	真	内：黄い棕色5YR6/6・外： 棕色5YR6/4	ナズ		ナズ		
	832	11F SD404	依布土器	甕	②32+ α ③ 100	石英粒を含む	真	内外：棕色5YR6/6	ヨコナズ			内面磨過痕	
	833	11F SD404	依布土器	①ニ テ、 α ナ リ ②ナ リ ③ナ リ ④ナ リ ⑤ナ リ	②20+ α	砂粒を含む	真	内：黄い黄棕色10YR7/2・ 外：灰黄棕色10YR5/2				指押さえ	
	834	11F SD404	依布土器	①ニ テ、 α ナ リ ②ナ リ ③ナ リ ④ナ リ ⑤ナ リ	②32+ α ③ 20	砂粒を含む	真	内：灰白色10YR5/2・外： 黒黒棕色5YR3/1	ナズ		ナズ		
	835	11F SD404	依布土器	甕	①(14.0) ② 5.8+ α	砂粒を含む	真	内：棕色5YR7/6・外： 棕色5YR6/8	ナズ			指押さえ	
	836	11F SD404	依布土器	丸底甕	①30.8②138	精煎	真	内外：黄い黄棕色10YR7/3	ハケ目			ハケ目	
	837	11F SD404	依布土器	丸底甕	①(52.7) ② 167	石英粒及び灰石粒を含む	真	内：棕色75YR7/6・外： 黄い棕色75YR7/4	ミガキ			指押さえ状ナ ズ	
	838	11F SD404	依布土器	甕	①(10.4) ② 6.6+ α	細砂粒を含む	真	内外：灰白色10YR8/2		磨滅により調整不明		一部ヨコナズ が残る	
839	11F SD404	依布土器	高杯	①28.8②197 ③15.8	精煎	真	内：灰白色10YR8/2・外： 淡黄棕色10YR8/3	ミガキ			ミガキ		
840	11F SD404	依布土器	甕	②77+ α ③ (140)	細砂粒をわずかに含む	真	内外：黄い黄棕色10YR7/3	ハケ目			ハケ目		
841	11F SD404	依布土器	器台	②60+ α ③ (96)	細砂粒及び細石英粒を多く含む	真	内外：棕色25YR8/6	チタハク	ナズ		ナズ		
842	11F SD404	依布土器	支脚	②53+ α ③ (90)	砂粒をわずかに含む	真	内：黄い黄棕色10YR7/3・ 外：黄い黄棕色10YR7/4	ナズ			一部ナズ		
843	11F SD404	石器	石砥石	①幅5.8 ②最大幅 4.2③最大厚 0.6④重量100									
844	11F SD404	石器	石砥石	①幅5.6 ②最大幅 4.2③最大厚 0.7④重量106							頁岩		
1F155	845	11F SD404	依布土器	甕	①(14.6) ② 8.3+ α	極めて微細な赤部母及び細 砂粒を含む	真	内：黄灰色25Y 4/1・外： 黄い棕色75YR7/4	チタハク			瓶ナズ	
	846	11F SD404	依布土器	甕	②7.5+ α	細砂粒をわずかに含む	真	内：灰白色25YR8/2・外： 灰白色10YR8/2	チタハク			ナズ	
	847	11F SD404	依布土器	甕	②7.4+ α	細砂粒を多く含む・石英及 び器面をわずかに含む	真	内外：灰白色25YR8/1	ハケ目			ハケ目	
	848	11F SD404	依布土器	甕	①(11.0) ② 130	細砂粒を含む	真	内：黄い黄棕色10YR7/3・外： 淡黄棕色10YR8/3	ナズ			指押さえ状ナ ズ	
	849	11F SD404	依布土器	甕	①(19.0) ② 229③(120)	石英粒を多く含む	真	内：淡黄棕色25YR-3・外： 黄い黄棕色10YR8/3	ハケ目			ハケ目	

図番号	遺物番号	出土地点・遺構等	種類	器種	法量 (mm ³) [1] 浮子器高 ② 底径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
	850	11F SD404	依生土器	甕	① (26.8) ② 7.2+α	金雲母及び細砂を多く含む	真	内外：黄褐色10YR7/6・外：黄褐色10YR6/3	ナメハナ	捺押さえ後ナデ	
	851	11F SD404	依生土器	甕	②4+α	砂粒を含む	真	内外：赤褐色5YR 4 6 内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR7/3	ナメハナ	ナデ	
	852	11F SD404	依生土器	甕	②20+α	精真	真	内外：赤褐色5YR 4 6	捺文風のミヤキ	ヨコナデ	内外丹塗り、口縁部縮み目
	853	11F SD404	依生土器	甕	②50+α	細砂粒を含む	真	内外：褐色5YR6/6	ヨコナデ	ヨコナデ	内外丹が残る
	854	11F SD404	依生土器	甕	②5.3+α	微細な金雲母及び細砂粒・黒石炭粒を含む	真	内：黄褐色10YR6/4・外：黄褐色10YR6/3	ナメハナ	捺押さえ後ナデ	
	855	11F SD404	依生土器	甕	②30+α	砂粒を含む	真	内：黄褐色10YR6/4・外：黄褐色10YR7/2	ナデ	捺押さえ	
	856	11F SD404	依生土器	甕	②54+α	砂粒を含む	真	内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR8/3	ナデ	ナデ	
	857	11F SD404	依生土器	甕	②56+α	細砂粒及び石英粒を含む	真	内：灰白色10YR8/2・外：黄褐色10YR8/3	ハナ目?	ハナ目	
	858	11F SD404	依生土器	甕	②3.2+α③ (6.8)	細砂粒を含む	軟真	内：灰白色2.5YR 3・外：黄褐色10YR8/3	ナメハナ	捺押さえ後ナデ	器面荒れに2年調整不明
	859	11F SD404	依生土器	甕	②2.5+α③ 7.3	極めて微細な白色粒をわずかに含む	真	内：黄褐色10YR6/4・外：褐色2.5YR7/2	ナメハナ	捺押さえ後ナデ	
	860	11F SD404	依生土器	甕	②50+α③ (10.2)	細砂粒及び石英粒を含む	真	内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR7/3	ナメハナ	捺文ナデ	内面工具痕、外面一部丹塗り
	861	11F SD404	依生土器	甕	②2.4+α	石英粒を多く含む	真	内：浅黄褐色10YR8/3・外：黄褐色10YR7/3	捺押さえ後ナデ	捺押さえ	
	862	11F SD404	依生土器	甕	②4.2+α③ (8.8)	細砂粒を含む	真	内：黄褐色10YR7/2・外：黄褐色10YR7/3	ハナ目	ナデ	
	863	11F SD404	依生土器	甕	②62+α	細砂粒を多く含む	真	内：黄褐色10YR7/3・外：黄褐色10YR8/2	ナメハナ	ハナ後ナデ	
11I50	864	11F SD404	依生土器	甕	① (17.6) ② 25.0	細砂粒及び器母をわずかに含む	真	内：黄褐色10YR6/4・外：黄褐色10YR7/4	横いタナキ	横いハナ目	胴土整合
	865	11F SD404	依生土器	甕	①18.0②25.3	石英粒を多く含む	真	内：灰白色10YR8/2・外：灰白色2.5Y7/2	ナメキ?	横いタナキ	
	866	11F SD404	依生土器	甕	① (21.4) ② 28.9	精真	真	内：黄褐色10YR6/4・外：黄褐色10YR6/3	ハナ目	ハナ目	
	867	11F SD404	依生土器	甕	① (18.0) ② 27.5	細砂粒をわずかに含む	真	内：黄褐色10YR6/4・外：黄褐色10YR7/2	ナメキ?	ハナ目	
	868	11F SD404	依生土器	甕	①15.4②31.8	砂粒及び石英粒を含む	真	内：黄褐色10YR7/6・外：黄褐色10YR7/8	ハナ目	ハナ目	
11I57	869	11F SD404	依生土器	甕	① (24.2) ② 31.7	石英粒を多く含む	真	内：黄褐色10YR6/4・外：黄褐色10YR7/3	ハナ目	ハナ目	
	870	11F SD404	依生土器	甕	①28.7②31.4	砂粒及び石英粒を多く含む	真	内：黄褐色10YR7/6・外：黄褐色10YR7/8	ハナ目	ハナ目	
11I58	871	SI316	土製品	磨製土製品	①6.6+α② 4.96+α③ 6.64E29	精真	良好	黄褐色	ナメミヤキ	ナデ	外面丹塗
	872	SI316	土製品	紡錘車	①19.35-36 2-φ10.5② 最大部1.45③ 重量21		良好	淡褐色	ナデ	濃度	
	873	SI316	土製品	夜舟	①4.8②5.0③ (9.3)④40g		真			面取り後ナデ	
	874	SI316	石器	住民内 房石斧	①残存長4.1 +α②最大幅 1.8③最大厚 3.0④						両面
	875	SI316	石器	北船 房石斧	①残存長9.9 +α②最大幅 1.8③最大厚 3.4						カンラン石華網織 石玉武磨
	876	SI316	石器	北船 房石斧	①残存長6.1 +α②最大幅 1.7③最大厚 1.5						カンラン石華網織 石玉武磨
	877	SI316	石器	磨製石 剣	①残存長3.9 +α②最大幅 2.5③最大厚 0.7						片岩
	878	SI316	石器	磨製石 剣	①残存長5.5 +α②最大幅 3.3③最大厚 1.6						片岩
	879	SI316	石器	磨製石 剣	①残存長8.0 +α②最大幅 2.8③最大厚 1.6④重量 35.75						粘板岩
	880	SI316	石器	磨製石 剣	①残存長3.5 +α②最大幅 3.7③最大厚 0.8④重量 35.75						頁岩
	881	SI316	石器	石戈	①残存長15.7 +α③最大厚 1.8④重量 129.1						絹状頁岩
11I59	882	SI316	石器	石龜丁	①残存長9.3 +α②最大幅 4.7③最大厚 0.6④50.9						赤褐色泥岩(笠岩)

図番 号	遺物 番号	出土地点・ 遺構等	種類	器種	法量(m ²) [1.1]埋込高 ・3底径	粘土	構成	色調	調整(外面)	調整(内面)	備考
	883	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長6.2 + α 土最大幅 3.8) 最大厚 0.6(19.2)						赤紫色泥岩(立 岩)
	884	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長8.85 + α 土最大幅 4.25) 最大厚 0.7(32.2)						玄武岩質安山岩
	885	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長6.5 + α 土最大幅 3.8) 最大厚 0.75(29.4)						黒青石ホルンフ ムス
	886	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長6.6 + α 土最大幅 3.8) 最大厚 0.6(23.1)						赤紫色泥岩(立 岩)
	887	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長5.1 + α 土最大幅 4.6) 最大厚 0.6(25.0)						玄武岩質安山岩 等孔部で中止し たくはみあり
	888	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長7.96 + α 土最大幅 4.9) 最大厚 0.6(34.5)						赤紫色泥岩(立 岩)
	889	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長11.2 + α 土最大幅 4.4) 最大厚 0.6(53.0)						黒青石ホルンフ ムス
	890	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長4.3 + α 土最大幅 5.4) 最大厚 0.75(33.2)						砂岩
	891	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長5.0 + α 土最大幅 5.0) 最大厚 0.6(29.2)						粘板岩(片岩質)
	892	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長3.9 + α 土最大幅 4.4) 最大厚 0.6(19.5)						粘板岩
	893	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長3.1 + α 土最大幅 3.6) 最大厚 0.8(44.1)						凝灰質泥岩
	894	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長3.7 + α 土最大幅 5.1) 最大厚 0.75(29.2)						黒青石ホルンフ ムス、凝灰岩
	895	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長6.2 + α 土最大幅 3.8) 最大厚 0.7(30.3)						黒青石ホルンフ ムス
	896	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長3.1 + α 土最大幅 5.0) 最大厚 0.75(15.0)						黒青石ホルンフ ムス
	897	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長3.5 + α 土最大幅 3.5) 最大厚 0.4(8.7)						粘板岩
図160	898	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長9.65 + α 土最大幅 5.6) 最大厚 0.8(77.4)						黒青石ホルンフ ムス
	899	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長5.6 + α 土最大幅 3.4) 最大厚 0.7(20.3)						赤紫色泥岩(立 岩)
	900	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長6.7 + α 土最大幅 5.6) 最大厚 0.6(39.0)						黒青石ホルンフ ムス
	901	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長3.8 + α 土最大幅 3.8) 最大厚 0.6(19.9)						凝灰質砂岩
	902	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長3.5 + α 土最大幅 4.4) 最大厚 0.6(27.0)						粘板岩
	903	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長7.5 + α 土最大幅 4.4) 最大厚 0.95(36.35)						赤紫色泥岩(立 岩)
	904	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長6.2 + α 土最大幅 4.2) 最大厚 0.9(33.6)						片麻岩
	905	SD016	石器	石瓦丁	1.埋存長7.7 + α 土最大幅 4.8) 最大厚 0.6(32.45)						凝灰質泥岩

図番 号	遺物 番号	出土地点・ 遺積等	種類	器種	法量 (cm・g) [1] 長さ・幅・高 ・重 [2] 口径	胎土	構成	色調	調整 (外面)	調整 (内面)	備考
	906	SD316	石器	石瓦丁	[1] 残存長4.6 + α 主最大幅 4.8 [主最大厚 0.55] 重量15.4						頁岩
	907	SD316	石器	石瓦丁	[1] 残存長4.1 + α 主最大幅 2.6 [主最大幅 0.3] 重量5.5						葉青石・ホルンフェ ルス
	908	SD316	青銅器	鍬先	[1] 残存長5.9 + α 主刃部幅 6.3 + α 主刃 部最大厚1.2						
	909	SD316	青銅器	鍬先	[1] 残存長5.5 + α 主刃部幅 3.5 + α 主刃 部最大厚1.2						
00161	910	8B SD101	石器	石矢	[1] 残存長7.2 主最大幅7.1 [主最大厚1.2] 重量68.1						片岩
	911	10F SX303	石器	網叉頭 型	[1] 残存長11.5 + α 主最大幅 10.0 [主最大厚 2.2] 重量47.0						石英質岩類
	912	8C SD109	青銅器	鍬先	[1] 全長残存長 11.3 [主刃部幅 3.0] 主刃部最 大厚1.15						
00162	913	エリアII 3-4H/1区 番箱	石器	巴形鋼 器頭型	[1] 残存長12.9 + α 主最大幅 6.9						石英質岩類
	914	エリアII 7 H区セプト	石器	石瓦丁	[1] 残存長6.5 + α 主最大幅 4.1 [主最大厚 0.6] 重量19.2						
	915	エリアII 6 N区 SX303C	石器	石瓦丁	[1] 全長11.7 [主 最大幅2.5] [主 最大厚0.65] 重 量14.92						粘板岩
	916	エリアII 6 N区 SX303C	石器	石瓦丁	[1] 全長12.3 [主 最大幅4.6] [主 最大厚0.7] 重 量23.6						粘板岩?
	917	エリアIV 11P 区 SD518	石器	磨製石 剣	[1] 残存長 12.75 [主最大 幅2.7] 主最大 厚0.7 [主重量 2.99						葉青石



1 8B区SK101 遺物出土状況（1979年度調査・南西から）



2 8B区SK101 遺構全景（1985年度調査・南西から）



3 10/11E区 SK425遺物出土状況（北東から）



4 10F区 SK431遺物出土状況（南東から）



5 11C区 SJ502甕棺墓 (北から)



6 11C区 SJ503甕棺墓 (北から)



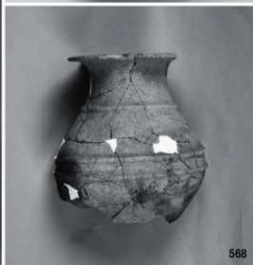
7 7G区SB220(手前)とSB221(奥)遺物出土状況(西から)



8 7H区SB218遺物出土状況(東から)



9 8B区SK101出土土器



10 8B区SK101, 10C区SK408出土土器



11 11C区 SJ502出土宴棺



12 6·7G区 SB221出土宴棺



13 その他の出土遺物（石器・石製鋳型・青銅器・鉄器）

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうだいがくちくしきやんばすいせきぐん（こくでんいせき）そうかつほうこくしょ1-じょうもん・やよいじだいへんー							
書名	九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書1－縄文・弥生時代編－							
副書名								
シリーズ名	九州大学埋蔵文化財調査室報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	石川 健（編）・足立達朗・田尻義了・中野伸彦・小山内康人・岩永省三・森貴教・宮本一夫							
編集機関	九州大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒816-8580 福岡県春日市春日公園6丁目1							
発行年月日	2020年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
九州大学筑紫 キャンパス遺跡群 （御供田遺跡）	春日市春日公園 6丁目	40218 40219		33° 31′ 24″	130° 28′ 37″	1978.11.27 ～ 1998.9.		キャンパス 新営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
九州大学筑紫 キャンパス遺跡群 （御供田遺跡）	集落跡	弥生時代	住居跡・土坑・ 甕棺墓	弥生土器、石 器、青銅器鋳 型	大形祭祀土坑を発見			
要約	1978年から1998年まで九州大学筑紫キャンパス用地における建物新営などの施設整備のため発掘調査を行った。その結果、縄文時代から中世までの遺構を検出した。また縄文土器、弥生土器の他、須恵器や瓦器等が出土している。このうち縄文時代と弥生時代の遺構・遺物については、縄文時代の溝状遺構、弥生時代の住居跡、土坑、甕棺墓、溝などを検出した。遺物は縄文時代は後期中葉から晩期にかけての土器がまとまって出土した。弥生時代については中期および後期の土器が多量に出土したとともに、青銅製鋤先、鉄器、青銅器鋳型等も出土した。とくに巴形銅器鋳型は製品との対応関係が最近になって明らかにされた稀有な資料である。また、キャンパス用地という広い範囲を調査対象としたことにより、本遺跡群がその一部を構成する御供田遺跡内における弥生時代中期から後期の集落の様相の一端が明らかとなった。集落内は中期に複数の居住単位が存在しており、少なくともその一部は墓域を包摂する単位であった可能性がある。遺跡内には大形の祭祀土坑も発見されており、集落内での位置づけあるいは居住集団との関係の解明がもたれる。							

九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）

総括報告書1 — 縄文・弥生時代編 —

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第3集

2020(令和2)年3月30日

発行 九州大学埋蔵文化財調査室
春日市春日公園6丁目1

印刷 有限会社 九州コンピュータ印刷

